

インフィニット・フレームアームズ～俺アームズでブツド～

たちゅや

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

フレームアームズが好きすぎる少年は己の手と助けによって、ISを用い、再現してしまった。

世界中がこぞってその力を欲するが、彼は自分を最も安全な場所に身を寄せる。

それはIS学園。

だが、最も安全な場所と想っていた所でも色々なトラブルに遭遇するはめに。

さてさて、どんな物語になるやら……

◇2017 1/21 全話数の表記を訂正

# 目次

設定など

キャラ設定・企業設定

本編

一話	7
二話	11
三話	15
四話	21
五話	29
六話	33
七話	38
八話	44
九話	48
十話	51
十一話	58
十二話	62
十三話	67
十四話	69
十五話	73
十六話	77
十七話	84
十八話	88
十九話	96
二十話	101
二十一話	105

四十六話	四十五話	四十四話	四十三話	四十二話	四十一話	四十話	三十九話	三十八話	三十七話	三十六話	三十五話	三十四話	三十三話	三十二話	三十一話	三十話	二十九話	二十八話	二十七話	二十六話	二十五話	二十四話	二十三話	二十二話
245	241	232	226	219	214	206	200	194	189	185	180	175	171	167	161	155	150	143	136	130	122	117	111	109

五十六話	五十五話	五十四話	五十三話	五十二話	五十一話	五十話	四十九話	四十八話	四十七話
297	292	288	283	279	274	266	261	256	252

## 設定など

### キャラ設定・企業設定

〈人物設定〉

名前：秋野 龍也（あきの たつや）

年齢：17歳

身長：176cm

体重：68kg

主人公。

決してイケメンではないが、体格は良い。幼い頃から剣術や体術を学び、実戦を経験する。

秋野家は特殊な能力を持つ家系であり、彼も「何かしら」能力を持っている。

それもあり、各国政府から依頼を受け果たす、という『何でも屋』的な仕事を父親が行っており、龍也も引き継いでいる。

性格は熱しやすく冷めやすい。自分が毛嫌いする人物にはとてつもなく酷い態度をとる。

仕事時はキツイ性格になる。

正義感は強いが、人を頼るのは苦手。自分の意見ははっきりと言う。

趣味は模型製作。特にフレームアームズとガンダムDXをこよなく愛し、多々買いに明け暮れている。

とある事柄をきっかけにブキヤにてフレームアームズの開発を行い、バーゼラルドを完成させ、起動させる。

様々なM・S・GをIS用の武器として再現し、自分好みのフレームアームズに日々調整している。

IS学園入学時は、婚約者である更識 楯無（刀奈）と同じ部屋になっている。

〈龍也の使用するFA型IS〉

※FA型IS：フレームアームズをISで再現した機体

機体名：バーゼラルド

武装：ブレード、ユナイトソード、ビームソード、セグメントライフル、アサルトライフル、リボルビングバスターキャノン、インパクトナックル（バンカー）

機体特徴：装甲は薄いですが、全身に設けられたフォトンブラスターにより高機動での戦闘を得意とする。

機体名：ゼルフィカール

武装：上記、バーゼラルドと同じ

機体特徴：バーゼラルドに強化装甲であるエクステンドアームズ02を取り付けた、弱点である装甲の薄さをカバーしつつも、機動性を失わない機体となっている。

一つ、欠点を上げるとすれば製造コストが高すぎる、という点だけはISでの再現でも変わっていない。

〈俺アームズ〉

※龍也が自機を好きなようにカスタマイズしたもの。

単純な武装追加だけには留まらず、他のロボットをあえて、フレームアームズで再現する、という事も行う。

機体名：ゼルフィカール・DB（きつともう本編には……）

武装：ベルングルスト、ヘルライネ、レムリア・インパクト、アトランテイス・ストライク

機体特徴：龍也が好きなメカである、デモンベインの能力をゼルフィカールで再現した機体。

背部ユニット、シヤンタクの再現はバルチャーの翼（脚部）を転用している。

エネルギーとしてはSE以外の——『○○の心臓』を密かに再現、内蔵している。

この事は、龍也以外に知る者はいない。ISの規格から外れている為、IS学園では使用していない。

機体名：ゼルフィカール／NE・X

ナイトエッジ・エックス

武装：T—LINKスライダー、T—LINKセイバー、ブラツク

ホールバスターキャノン、試作型光波射出機、攻性防盾システム

機体特徴：龍也がゼルファイカールを／NE仕様<sup>ナイトエッジ</sup>に強化し、更に○○○○の武装を装備した状態。

また、上記のDBで用いているパーツも同時に装着出来る。

まさに龍也が、自身の欲求を満たす為に作成した特機である。

機体名：ゼルファイカール・DBX

機体特徴：俺アームズであるDBとNE・Xを同時展開したてんこ盛り状態である。

ただ、龍也が実際に使用した際にはベルングルスト、ヘルライネは実装されておらず、代わりにとういうか、バルザイの偃月刀、クトウグア・イタクアの開発が間に合っている。

さすがに、あの時計は実装されては……

機体名：バーゼラルド・リヴェンジャー（38話以降登場）

武装：スラッシュエッジ、ハイドシース・カノン、4連装ニードルガン、ビームソード、セグメントライフル

機体特徴：バーゼラルドにエクステンドアームズ01を装着する事で、高機動格闘戦をより強化した機体となっている。

エクステンドアームズ02を修理している期間、この状態で運用している。

機体名：轟雷・龍也スペシャル

武装：グレイヴアームズ、ライドカノン、アーミナイフ、バイオレンスラム、滑空砲

機体特徴：重装甲、高火力をコンセプトに榴雷・改の盾を大型化した物を肩に装備。漸雷強襲装備型のようにエクステンドブースターを脚部に装備した機体。

注目すべきは、グライドブーストと呼ばれる高速移動から繰り出されるブーストチャージ。

〈人物設定〉

名前：月宮 飛鳥（つきみや あすか）

年齢：22歳



身長：165cm

体重：●●kg

龍也が一番信頼する部下。

刀奈とは何度か会っており、面識がある。

ブキヤ所属のテストパイロット。元日本代表である。

政府からは専用機を支給される予定だったが、それに使うコアを龍也に提供することを決めた為、自身は専用にチューンされた打鉄を使用していた。

好んで使用するのは剣類。打鉄にも大量の剣を装備させていた。

月宮家が秋野家に仕える家系であった為、龍也の仕事を共に果たすことが多かった。

彼が彼女と婚約するまでは、飛鳥がパートナーであった。

その時、肉体関係も持つており、後にそれを知った刀奈から龍也は厳しい問い詰めを受けている。

気前の良いお姉さんであるが、未だに龍也への想いは残っており、ちよくちよく彼に手を出し、刀奈の敵意を買っている。

龍也同様、ISが無い方が強い人種であるが、ブライアンがコアを解析した結果、専用機であるバルチャーが製造される。

彼女が選んだ理由は、『鳥』型の高速移動形態になるから。

が、まだ変形機構は採用されていないので、しょんぼりとするのも。

〈飛鳥の使用するFA型IS〉

機体名：バルチャー

武装：ベリルベーン、狗式鋼爪、金色剣（カスタマイズされたユニットソード）

機体特徴：防御力を削り、近接戦闘に重きをおいている。軍用ISとして造られている為、強い（え

機体名：●●―●●・月光

武装：●●●―●●の武装一式 月光砲 金色剣

機体特徴：バルチャーの改良型なのだが……

〈日本代表時代のIS〉

機体名：打鉄・月天

武装：大刀・月牙、大刀・天牙

機体特徴：ブースターをブキヤが製造しているエクシードバインダーに変更している。大型・高出力のブースターで、瞬時加速を伴えば一瞬で相手の懐に入り込み、斬り伏せる。武装は二本の大刀のみ。

〈企業設定など〉

【総合企業ブキヤ】

当初はIAIという名前の総合企業であった。

起業後に起きた多くの事件を経て、現在は主に玩具メーカーとしてのブキヤとIS用の武装や機体を研究・製造・販売するようになっていた。

玩具メーカーとしてはマイナーな部類に入り、メインコンテンツはフレームアームズと呼ばれるプラスチックキットである。

コアなファンに愛されており、長続きしている。

IS関係でいえば、高性能とメンテナンスがしやすい、という理由で多くの国で使われている。パイロットからも癖が少なく扱いやすいという声が上がっている。

【ブキヤ社員】

名前：佐山 御言

役職：社長

ブキヤ社長。愛すべき変態である。

ただの変態ではなく、過去には多くの仲間と共に全竜交渉という大仕事を成し遂げた人物(詳しい事は元ネタの【終わりのクロニクル】を読もうね！)。

龍也とは全竜交渉関係で出会い、意気投合する。

名前：佐山 運切(旧姓：新庄)

役職：副社長

ブキヤ副社長——というのは名ばかりで、実際は社長である佐山の

ツツコミ係である。

佐山と共に全竜交渉に携わっていた（佐山との馴れ初めは【終わりのクロニクル】を読もうね！）。

龍也の事は可愛い弟のように思っている。

名前：アーキテクト・カークマン

愛称：アキさん

役職：開発主任

ブキヤのIS部門開発主任。

無類のロボット物の作品好きで、ストーリーよりもメカに注目し、ISに転用できないか日夜研究・開発に励んでいる。

が、それでも龍也が持ち込んでくる案件には頭を悩ませる日々である。

名前：ブライアン・フィンチ

愛称：ブライアン

役職：米国支部開発主任

ブキヤ米国支部のIS部門開発主任。

元々はFBIで働いていたのだが、とある案件を龍也と共に解決し、彼から気に入られた為に一緒に働かないかと誘われブキヤに入社する事になる。

全く畑違いの仕事ではあるが、ブライアン自身の天才的な頭脳で瞬く間に仕事を覚えていき、現在の開発主任の地位につく。

所属は米国支部ではあるが、日本にある本社に顔を出すことが多い。それもこれも龍也からの無理難題で呼ばれるのが常ではあるのだが。

（元ネタはドラマ【リミットレス】の主人公ブライアン・フィンチ）

## 本編

### 一話

とある玩具メーカーがあった。

彼はそこから出ているプラモデルを好んで購入していた。

『フレームアームズ』

フレームアームズという素体に装甲と武装を付けていく形で作られるプラモデルだ。

品種も多く、ヒロイックな物から可変機といった物もある。作る際には多少、関節の軸を太らせる等、手を加えてあげないといけないこともあるが、基本的には組み立ては容易で、プラモデル初心者から楽しむことのできるシリーズだ。

今日も彼はお気に入りフレームアームズのF Aを組み立て、自分好みにカスタマイズしていた。

「……完成した。俺だけのF A」

机の上には赤と白に、黄色が差し色として塗装された二体の機体が立っていた。

一体はヒロイックな機体で、増加装甲をつけ赤い刀身の太剣を担いでいた。

隣に立つ機体は鳥形に変形する可変機で、翼からは二門のバズーカがその姿を見せており、両の腰には刀のような武器が取り付けられてあった。

製作期間にして、半年をかけた機体の完成に思わず顔がほころびる。

しばらく鑑賞にふけり、椅子から立ち上がる。

「次は、お前だな」

彼の目の前にはさつきまで組んでいたF Aをそのまま大きくしたものが鎮座していた。

「インフィニット・ストラトスでF Aを再現する。よくもまあ、こんな計画にこの会社も賛同してくれたもんだ」

そう、彼が見ていたのはISだったのだ。

突如、世界に登場したIS。宇宙空間での活動を行うために作られたパワードスーツ。実際はその力を兵器として扱われるようになり残念だが、現存する兵器を超える力を持っていたのだから致し方無いのかも知れない。

ただ、女性にしか扱うことができないのが唯一の欠点ではあった。それによって女尊男卑の傾向が強くなっていったのだが、その話は置いておこう。

ともかく、今、彼はFAが好きすぎるあまり、ISで再現してしまっただのだ。

YSX―24 バーゼラルド。

彼が最も好むFA。これをISとして再現した。

世代的には第三世代モデル。日本の一企業であるブキヤが出資をし、完成させた。

完成、と言ったが正確には違う。

まだ、火を入れていないのだ。

なんせ、ISは女性にしか扱えないのだ。

だから、どれだけFAを再現したくて頑張っても男の自分では扱うことができない。

これからはせいぜい機体を修理、改修くらいしかしてあげられないのだ。

自然と手に力が入る。

悔しいな。せっかく作った機体を、自分で操縦できないなんて。なんて焦らしプレイなんだ。

ポンツとバーゼラルドに右手を置いた。バーゼラルドの完成にまであった様々な事が思い出された。

かなり強引な手段で貴重なISCコアを日本政府から入手し、出資をしてくれる会社まで見つけ、優秀なスタッフに囲まれながらの製作は非常に楽しかった。

「……どうして、お前は男には反応してくれないんだろうか」

思わず口からこぼれていた。

この世界の男性が誰でも思うことを、こんなに強く思うことはなかった。

ああ、どうしてなんだろうか。

ああ、どうしてこの機体を駆るのが自分ではないのか。

きっと今の自分は嫌な顔をしているのだろう。心を落ち着かせるために目を閉じた。

だから、気づけなかった。ほんの些細な現象に気づけなかったのだ。

バーゼラルドの瞳に光が宿ったことに。

ISのコアには意思があると言われている。実証されたわけではないが、生みの親がそう言っていたらしい。

そして、バーゼラルドに使われたコアに確かに意思はあった。

生まれてからこの瞬間まで彼を見ていた。

ひたむきに夢を再現する彼を見ていた。

彼なら良いか、と思った。白も操縦者として男を選んだのだ。だったら、自分も良いだろう、と。

そう思ったから応えたのだ。彼に。

自分を作ってくれた彼、秋野 龍也に。

龍也はバーゼラルドに触れている右手に熱を感じた。

何だ？と疑問に思ったときには、全てが終わっていた。

頭に流れ込んでくる膨大な情報量。あまりの情報量に酔いそうになるが、すぐに落ち着く。

どうしてか分らないが、彼はひとまず歓喜した。

だって、望んだことが現実になったのだから。

「コイツが応えてくれたとしか思えないな……。ありがとう——これから頼むぞ相棒」  
バーゼラルド

かくして世界で二番目の男性操縦者はまた日本から誕生したのだった。

●  
二カ月。

これは龍也が二番目の男性操縦者として発表され、IS学園入学ま

での間の時間だ。

毎日毎日、マスコミの取材をくぐり抜け、出資してくれた企業――ブキヤのテストパイロットとしてバーゼラルドの稼働とテストをこなし、勉強の方もこなすというハードスケジュールにさらされ、あつと言う間に過ぎ去った。

そして、今日。

彼はIS学園にいた。久しぶりの学校生活の始まりであった。

## 二話

龍也にとって高校生活は初めてだ。中学も二年から家業の為に通えず、三年ぶりの学生生活なのだった。ちなみに高校受験も初だった。合格は裏で完全に決まっていたのだが、IS学園の入学はちゃんとペーパー試験も受け合格している。

手続きも終えて、今は教室で机に向かっていた。

周りからの好奇の視線は感じるが、見た目はフツメンな為にどちらかというともう一人の男性、席が左隣の世界初の男性操縦者である織斑一夏を見る者たちの方が多し事に気づく。

爽やか好青年という印象がある彼の方がやはり注目度は高いか。まあ、その方が自分への注目度が下がるので好都合。悪いね、織斑君。内心は悪い顔でニヤニヤしているが、表情はあくまでポーカーフェイスだ。

そうしていると、扉が開き豊かな胸をもつ山田真耶先生が入ってきた。二人の男性操縦者の試験官が彼女だったので、知っている人がいるというのは妙な安心感を抱かせる。

「みなさん、おはようございます。このクラスの副担任の山田真耶です。担任である織斑先生が会議の為、HRは私が担当させてもらいますね。では、まずは自己紹介からですね」

というわけで自己紹介が始まっていく。あ行なのですぐに龍也の番が来た。

「秋野龍也です。皆さんとは一つ年上ですが、気にせずに話しかけてもらえると思います。ニュースでも言われているので知っていると思いますが、一応ブキヤという企業のテストパイロットをしています。趣味は私が使うISの元になっているFA等の模型製作と旅行です、一年間よろしく願います」

こんなもんだろ、と話し終え席に着く。周りの反応も好印象な感じがある。

自己紹介はそのまま順調に進んだが、織斑一夏の番の時に一騒動が起きた。



「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

緊張しているのか、次の言葉が彼からは出てこない。顔色はどんどん蒼くなっているが……、

「……以上です」

短い。とにかく短い。そうじゃないだろ、女性陣の視線がもつと話せ、と語っている。

半ば呆れた表情で龍也も彼を見るが、助け舟をだすことは出来なかった。

織斑が喋り始めた時点で織斑千冬先生が教室に入ってきていたのだ。龍也と山田先生以外は彼がどんな事を話すのか、神経をそちらに注いでおり気づいていなかった。

そして、話し終えた時点で織斑先生は手に持っていた出席簿を彼の頭に振りかぶっていた。

穏やかじゃないな、と龍也は思いスツ、と左手を伸ばしタイミングよく出席簿を掴んだ。

「実の姉とはいえ、ツツコミに出席簿はダメだと思います。もつと柔らかい物でやって下さい。それなら、痛いけどダメージは少な目ですから」

「ほう……」

織斑先生の目は獲物を見つけた狩人のようだったが、その実は新しい玩具を見つけたような視線も含まれていた。

それを感じ取り、まずいと彼は手を放した。

この目と同じものを龍也は仕事中に幾度も感じたことがあり、その都度、厄介ごとに巻き込まれるのだった。なので、今回もそうに違いないと確信した。数時間以内にこの予感は的中するのであった。

「まあいい。織斑、もう少しまともな自己紹介もできるのか」

「は？ち、千冬姉……？」

織斑は驚いた顔をしていた。あれ？実の姉が教師としてここにいる事を知らなかったのだろうか、と龍也は感じた。

「ここでは織斑先生だ。さ、諸君。私がこの一年一組の担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる為に育てるのが私の仕事だ。

私が話すことをよく聞き、理解しろ。出来ないなら、出来るまで指導をするので安心したまえ。逆らうのは一向にかまわんが、そのあとどうなるか、分らんぞ」

そんな無茶苦茶な、と思うかもしれないが、このクラスの生徒はそんなことはお構いなしだ。

何せ、織斑千冬と言えばブリュンヒルデの称号で呼ばれるほどの凄腕I Sパイロットで、多くの女性からは神格化されていた。それは、ここでも変わらないようだ。

「きゃあああああ、本物の千冬様よ!!」

「逆らったらどんなことされちゃうの?! いいですか、逆らってもいいですか!？」

等々、黄色い歓声が飛び交い始めた。

「騒ぐな! 全く、毎年毎年、変わらん」

織斑先生の叱責で静まり返った。

「静かになったな。山田先生、HRを押し付けてしまい申し訳ない」「いえ、こういう時の副担任ですので。もう会議の方はよろしかったですか?」

「ああ。では、ここからは私が行っていく」

そうして、朝のHRは過ぎていった。



HRが終わると、すぐに織斑が話しかけてきた。

「えっと、秋野さんでしたね。同じ男がいて助かります。一年間よろしくお願ひします」

「ああ、よろしく。それと、龍也と呼んでくれて構わないよ」

「だったら、俺のことも一夏でいいですよ」

「そうかい? なら一夏と呼ばせてもらうよ」

すると一夏は安堵の表情を浮かべた。同時に先ほどまで緊張していたのか、一気に脱力した。

その姿に龍也はふっと笑った。あれだけの視線を受ければ緊張も

するだろうし、姉が担任というのもプレッシャーを感じるのだろう。

対して一夏は彼がさほど緊張していないことや、姉である織斑先生の出席簿アタックを止めたことについて驚いていたので疑問を口に出した。

「なあ、龍也は緊張していなかったのか？それと、よく千冬姉の動きについていけたな」

「緊張？全くしてないわけじゃないけど、大半の視線は一夏に注がれていたからな。楽な気分だったよ。で、織斑先生のだけど、幼少期から剣術を父親から教わっていたから、あのくらいだったら簡単に止めるよ」

と、話をしていると一夏に一人の女生徒が近づいてきた。

雰囲気から彼女は一夏を知っているようだ。確か、名前は……、

「うん？一夏、篠ノ之さんが用事があるみたいだよ」

「あ、ああ。すまない。少し一夏を借りる」

篠ノ之箒は龍也にそう応えてから、一夏を連れて教室を出て行った。

ああ、青春ってあんな感じなんだろうな、と彼と彼女を見ながら思う龍也であったが、一人になったのでスマートフォンを取り出し、お気に入りの玩具サイトを見ながら次に組み立てるFAのことを考えることにした。

だが、この非常に楽しい時間を潰されるとは思いもしなかった。むしろ、ここからが厄介ごとの本当の始まりでもあった。

### 三話

一夏が篠ノ之と出て行った後、龍也はお気に入り玩具サイトを見て今後のFAの改造プランを考えていた。

この改造が実は彼のISにはとつても大事なことなのだ。何せ、FAを元にして生まれたのが彼の専用機なわけだから、プラモデルのFAを改造したネタは実際に再現される可能性があるのだ。

むしろ、既にいくつかの改造プランがISの専用パックとして現在、ブキヤの方で開発が進行している最中だ。

お、ドウルガーIIやマガツキが再販か。それなら、こいつらの武装を再現して装備させるか。

と、考えていると目の前に人の気配がしたので目線を上げる。

そこにいたのは鮮やかな金色をした地毛を持つ少女だった。ああ、と龍也は思う。彼女とは一年前に会っていた、と。だから、彼女が声を出す前に話した。

「オルコット嬢ですね、一年ぶりですが覚えておられますか？」

「ハア……セシリアで良いと言ってますのに、まだ呼んで下されないのですね。お久しぶりです、龍也さん。あなたのことを忘れるなんて、そんなことありえませんか」

クスツと笑みを浮かべながら話す彼女を見て、周りの少女たちの反応がざわついていた。

オルコットさんと秋野君の間に一体何が!?

むしろ、話す機会を取られたんですけど!?

一年前って言うてるけど、誰か裏を取れる人いないの?!明日までにお願いしたいんだけど!!

などと、盛り上がっている声もバツチリ聞こえているわけで、彼女と彼女はまったく、と呆れていたが、久方ぶりの再会に花が咲かない訳がなかった。

「驚きましたわ。まさか、一年前にわたくしをはじめとした代表や候補生を狙ったテロ事件を解決したあなたがこうしてIS操縦者として入学してくるなんて……」

そう、ちょうど一年前。イギリスで代表や代表候補生を狙った女尊男卑を嫌う集団のテロ事件があったのだ。いくらISを使えるからといっても、纏っていないければただの女生なのだ。そういう所を不意打ちでもされればどうなるか。だが、既にテロが起こる情報がイギリス政府には知られており、エージェントを配置することで代表や候補生はもちろんのことだが、犯人すら傷つけることなく事件を解決したのだ。

その中に龍也もいたのだ。これはイギリス政府の打診を受け日本政府が恩を売っておくために派遣したのだが、その際にオルコットと知り合うことになった。

「こちら驚きですよ。オルコット嬢が入学してくるのは存じておりましたが、同じクラスになるとまでは思ってもいませんでしたので」「ええ、光栄に思ってくださいいな。良ければISの訓練など、お付き合いますわよ。……それ以外もお願いしたいんですけどね」

最後の方を恥じらいながら言うのは年相応の少女、という感じがしてグツと来たが龍也はそれに一切表に出さず、

「ISの訓練は助かります。代表候補生ともなればその卓越した操縦を生で見れますからね」

彼女が最後に言った言葉には返答せずに終わる。

彼の反応が分り切っていたのか、オルコットはため息を一つこぼし、

「分り切ってましたのでそこまでショックを受けませんが、まあいいでしょう。ところで、せっかくの同じ学生という身分ですので堅苦しい言葉は抜きにしませんこと?」

「いいですね。では……。そうさせてもらうよ、オルコット嬢。一年間よろしく」

「ええ、こちらこそよろしくお願いしますわ」

飛びっきりの笑顔を見せてオルコットは席に戻っていった。同時にチャイムがなり、授業開始を知らせた。すると一夏と篠ノ之が慌てて戻ってきた。

若干、篠ノ之の機嫌が良いように見えるが何かあったのだろうか。

そう思いながらも、織斑先生と山田先生が入室してきたので思考を授業に集中する。

●  
今回の授業ではISの基礎の基礎の説明が中心だった。

機動力、攻撃力に制圧力。どれもが既存の兵器とは一線を画している。なので、正しい知識と訓練を受けなければ、大きな過ちを生むこともある、そんな説明だった。

龍也はある程度、予習をしているので問題なくついていくことができている。周囲の生徒も問題がないようだった。たった一人を残してではあったが。

隣の席の一夏だけは青ざめた顔で黒板と自分の教科書、ノートを見返していた。

みんなこんな内容理解しているのか!?理解できない単語が多すぎるんだが……。

もう一人の男に一夏は視線を向けるが、龍也はこの程度は理解できるだろう?と視線で返す。

そんなやり取りに気づいたのか、山田先生が一夏に話しかけた。

「織斑君、どこか分らないところがありますか?」

「え、えーと……全部分りません」

思わず山田先生がえっ、と漏らす。同時に織斑先生も鋭い眼で一夏に言い放つ。

「織斑、入学前に渡された参考書は読んだか。必読と書いてあっただろ」

「……古い電話帳と間違って捨てました」

この一言に織斑先生は呆れてしまったのか持っていた出席簿で一夏の頭を叩く。

パァンツ!とかなりいい音が教室に響いたが、さすがに龍也も一夏の発言を聞いての織斑先生の行動に止める気も起きなく、哀れな視線だけを送った。

必読とでかでか書かれた参考書を捨てるとか、ありえん。一夏つてもしかして少しおバカさん？

と、思わずにはいられなかった。

「はあ、再発行してやるから一週間で覚えろ」

「い、一週間!?無理だつて千冬姉!」

スパンツ!と再び出席簿アタックが一夏を襲う。

「織斑先生、だ。一週間で覚えろ」

無理と言わせないその気迫に一夏もタジタジになり、

「……はい、やります」

理不尽だ、と心の中でこぼす。望んできたわけではない。たまたま、ISを動かしてしまっただけだからここに入れられただけなのにな。

そう思わずにはいられなかった。

彼の心情を見抜いたのか、織斑先生が言葉を続けた。

「貴様、自分は望んできたわけではない、などと思っているな?・秋野、お前はどうか?」

「私ですか?望む望まないにしろ、ISを動かした以上はしょうがない、とは思いますが、ここにいれば無駄な国同士の争いなどから保護されるので、助かっていますけどね」

一夏は未だどの国の所属とも決まっていない故に、他国は自国に引き込もうと躍起になっている。

対して、龍也は日本所属とはつきりしているが、その専用機故に色々な厄介ごとに巻き込まれかけたのだ。

IS操縦者と発表されてからの二か月間で女尊男卑の集団から抗議を受け、ブキヤのサイトがハックされISのデータが抜かれかけたこともあった。

一夏にそれが無かったのは、ひとえにブリュンヒルデの弟、という価値があっただからだろう。

家業のおかげで日本政府から少しの後ろ盾もあったが、せいぜい実害を出さないようにするくらいしかできなかった。何せ、政府と龍也が繋がっているのが知られると、色々マズイこともあるからだ。そんな訳で、どの国や企業も簡単に手出しが出来ないIS学園は丁度良い

保護施設なのである。

彼の発言に織斑先生は相槌を打っていた。それを見た一夏は言葉の真意を探っていた。

現実を見る、は分る。保護、という点を考えると——もし、俺が入学を拒否していたら、もしかすると……とんでも無い事が起きていた？

そう思うと、入学したのが良かったのか、と思えてくる。

「え、ええと、織斑君。分らないところは放課後なら教えますので……頑張りましょうね」

一連のやり取りを見ていた山田先生が両手を握りしめ、彼に詰め寄っていった。教壇からの故にその双丘が眼前に迫ってきた。

「はい、お願いします」

目のやり場に困りながら、一言を発するだけで精いっぱいだった。

その後、放課後で教師と生徒の二人つきりというシチュエーションを妄想しだし身悶える山田先生を、織斑先生が抑えるという光景になったが、授業は続けられた。



そして、本日不安に思っていたことが現実に起きた。

クラス代表を決める必要がある、と織斑先生が言った一言が原因だ。

その名の通りIS学園で行われる定期行事に代表として参加することになるのだが、自薦他薦を問わないとも言ったのも更なる要因の一つだ。

周囲の生徒は一夏と龍也を他薦してきたのだ。

これには面白半分と恥をかかせてやろう、という目論見も含まれていた。

「そんなの俺はやらないぞ!」

と一夏は言うが、自薦他薦も問わないと言っただろ?と織斑先生に言われる始末。



対して龍也は、俺は構わないけどね」と涼しい顔をしていた。

そうなれば面白く思わないのはオルコットだった。入学入試では首席で、イギリスの代表候補生である自分が他薦されないことに不愉快を示したのだ。

「不愉快ですわ、このイギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットが他薦されないのは！」

「自薦は問わないと、先ほど言ったが？」

「なら、わたくしも立候補しますわ!!龍也さんならともかく、参考書を間違つてするような人がクラス代表なんて、耐えられませんわ!!」

俺ならいいのかよ、とツツコミかける龍也だが、一夏がその前に声を発した。

「ちよつと待てよ！なんだよそれ。間違つて捨てたくらいでとやかく言われたくないな！」

そこからは火に油を注ぐように出るわ出るわ、互いに暴言を吐きまくるのだった。

さすがに聞いてられなくなり、龍也が止めに入る。

パチンツと手を叩き周囲の注目を集める。

「はい、ストップ。一夏もオルコット嬢もお互いに言い過ぎだ。落ち着きなさい。……さて、織斑先生。一つ提案何ですが、勝ち抜き戦でクラス代表を決めるのはいかがでしょうか？」

「……そうだな、来週の月曜日ならアリーナも空いてるな。では、織斑、秋野、オルコットによる勝ち抜き戦で一番勝ち星が多い者をクラス代表とする。いいな？」

有無を言わさない迫力に先ほどまで言い争っていた一夏もオルコットもコクン、と頷き答えた。

「話が纏まったな。各人、準備を怠るなよ?それでは授業を始める」

## 四話

放課後。

一日の授業が終わり龍也は寮の自室でベッドに座りぐつと背を伸ばし、体をほぐした。

本来なら予定のない男性の入寮は、部屋の準備に時間がかかると聞いていたが政府から貴重な男性操縦者の保護を急ぐ旨を受け、学園が強引に用意したのだった。

基本的に相部屋なので龍也は一夏と同室と思ったのだが、山田先生から渡された鍵の番号は彼とは違っていた。

違う番号なら一人部屋として使えるのか？一瞬、そう思ったが、現実とは違っていた。

一夏の部屋は龍也の部屋から二つ右にいった所なのだが、一夏が部屋に入った瞬間、悲鳴が聞こえた。

ああ、一夏よ。ノックぐらいしなよ……。

どうやら彼の同居人は篠ノ之らしい。ドアからは木刀が突き出ており、彼女が相当な腕力（え）を持っていることを示していた。

後に聞いた話だが、剣道に通じていたようで実力もそこそこらしい。

この騒動で、周囲の部屋の女性たちに彼らの部屋が知れてしまうのだが、これも今後、問題にならないよう祈るばかりであった。

さて、そんなところで龍也の同居人は、

「で、どうして俺の同居人が——君なんだ？」

目線を下に落とす。

人の膝を枕にし、機嫌良くしているのはこの学園の生徒会長である更識楯無、彼女であった。

「まあまあいいじゃない。一応、あなたの警護、という意味で同居させてもらってるんだから」

警護ねえ。どうせ生徒会長の権力を使ってねじ込んだんだろうな。

俺は一向に構わんがな!!

そもそも秋野家と更識家は古い付き合いだ。もちろん裏の世界で

の話だが。過去には敵対することもあったが、現在では良好な関係を築いていた。

きっかけを作ったのは龍也と楯無だった。

たまたま同じ任務を二人で行うことがあり、その時に「何か」があり両家は関係を改めるのだった。

更には二人を婚約させる、という暴挙にまで発展していた。本人たちはその気なので問題はないのだが、婿養子なのか嫁にくるかで揉めるという比較的規模の小さい争いが裏で行われているのだった。

……本当に良好なのか、とたまに疑うこともあるが。

「そう言えば二人きりの時は呼んでもいいんだったよな？」

彼女は視線をこちらに合わせて応えた。

「……刀奈」

「なあに、龍也」

彼女の甘い匂いにだんだんと脳がやられてくる。

きつと狙ってやっているんだろうな、と思いながらもゆっくりと顔を近づけていく。

その後は――。



何やかんやがあった後。

時刻は21時を指していた。妙に顔がツヤツヤしている刀奈が上機嫌に龍也にくっついていた。

「ところで、来週おもしろい事するらしいわね？」

「クラス代表決定戦の話か。学園中に知れ渡っているな……」

「私は見に行けないけど、あとで映像見させてもらうからね。頑張つてね」

「頑張るもなにも決着はもう見えてるんだけどな」

龍也は断言する。既にこの結果は見えていると。

そう言う彼の顔はとても楽しそうだった、と彼女は後に語った。

「それはそうと、刀奈さんや。お願いがあるんだがいいかな？」

「なにかしら？お姉さん、何でも聞いちゃうわよ」

学年で言うとな彼女が二年生なので上だが、年齢は同じ年なのに。

しかし、「何でも」と彼女はおっしゃりましたね。フヒヒヒ……。

彼はニヤツと笑みを浮かべ、

「実はこれからなんだけど、バーゼラルドの稼働データから更なる発展機を開発する予定があつてね。そのテストパイロットをお願いしたいんだ。良いかな？」

そうね、と彼女が少し考えるが、どこからともなく了承と書かれた扇子を目の前で開くのであつた。

「ありがとう!!まあ、既にロシア政府には交渉してあるから刀奈の返事待ちだつただけだね!」

「え〜……。仮に私が断っていたらどうしたの？」

「うん、凄い事しようと思っていた」

真顔でそういう彼に彼女も呆けるのであつた。

たまに私も考えちゃうのよね、彼のどこを好きになつたんだろうって……。



それからあつという間に一週間が過ぎクラス代表決定戦当日となつた。

ISの訓練もしたかったのだが、残念な事にアリーナが使えず訓練できないまま当日を迎えてしまうのだつた。

龍也は入学前にみっちり訓練をしていたのでマシだが、一夏が可哀想で仕方なかつた。訓練用のISである打鉄も予約で一杯、アリーナも使えない。

それで、彼がどうしていたのか、と聞くと、篠ノ之によって剣道の指導を受けていたそうで。

確かに修行も大事だが、ISを使つての訓練が出来なかつたのは痛手だろう。しかも、彼にも専用機が用意される話だったが、未だに間に合っていない。どうやら渋滞に巻き込まれ遅れているようだ。

したがって、試合はまず龍也とオルコットからになった。

龍也がバーゼラルドを纏う。全身装甲で頭部まで覆われ表情は見えない。装甲の色は白と赤。全身にフォトンブースターを配置した高機動型だ。

ゲートが開き、ゆつくりと歩いていく。足取りはしつかりとしており、堂々とした登場に観客席にいる観衆たちも歓声をあげる。

てつきりオルコット嬢を待たせていると思っていたが、こちらの用意が早かったか。

そう思っていると、対面のゲートから青い光が飛び出してきた。空に舞い上がった光は空中で静止し、こちらを見下ろした。

「お待たせしましたわ」

「いや、女性は色々準備があるからね」

「感謝しますわ。でも、試合は全力でお願いしますね？」

オルコットは右手に大型のレーザー銃器——スターライトMkIIIを構え戦闘態勢をとった。

「ああ、もちろん。こちらにも楽しみにさせてもらおうよ、候補生の実力をね」

二人が準備できたことを確認し、織斑先生が試合開始を告げるように山田先生に指示をした。

それに応え、試合開始のゴングを彼女は鳴らした。

開幕直後、彼女のスターライトMkIIIが火を噴いた。正確な狙いの一撃が龍也を襲う。

ハイパーセンサーはアラートを鳴らしたが、それよりも早く彼は体を横にずらし回避した。オルコットも避けられると思っていたのか、既に二射目、三射目を放っていた。

実に正確な狙い。故に避けるのもたやすい。

動く。前に、時には円運動で回避。

オルコットは彼の動きに焦らず実直にトリガーを引く。彼がIS初心者だからといって慢心はしない。きつと、過去の自分なら、男性を卑下していた自分なら違う思いでここにいたと思う。

しかし、今は違う。

私は彼の生身の實力を知っている。だから、油断も慢心もしない。最初から、全力全開で戦う。一切の手は抜かない。

「とてもISに乗りたての人の動きとは思えませんわね！」

「そちらも正確な狙いで素晴らしいよ。でも、これだけじゃないんだろ？見せてくれ、ブルー・ティアーズの力を！」

龍也は両手にバーゼラルドの固有武装、セグメントライフルを呼び出した。

上空を向き、オルコットを注視する。全身装甲で彼の表情は見えないが、彼女は全身を射抜かれるような強烈な視線を感じる。

今、この瞬間だけは彼は私を見ている、と思うと気持ちが昂ってくる。

テンションは最高潮に達し、彼女は次の攻撃に移る。

「行きなさい！ブルー・ティアーズ!!」

機体の名の由来にもなったフィン状のBT兵器が攻撃を開始した。四基のブルー・ティアーズは互いの射線を確保しながらこちらを捉えてくる。

全方位からの攻撃、避けにくいようご丁寧に死角を狙ってくる。同時にオルコットもスターライトMkIIIで攻撃してきていた。

一年前の彼女ならBT兵器を操っている間は、そちらに集中し自身で攻撃することは出来ない弱点を抱えていたが、どうやら克服しているようだ。

なので、ISでの稼働時間が圧倒的に足りない龍也には少々厄介だ。バーゼラルドもフィッツティングは終わっているのだが、まだまだ機体には改良の余地があり最適化されおらず、龍也の動きに着いてきていない場合があるのだ。

いつそのこと生身で戦いたいなあ。それなら余裕なのに。

と、まだまだこんな事を考える余裕はあるのだから、大丈夫か。

思考はクリアーだ。オルコットの攻撃も全て視えている。こちらの射撃は避けられてはいるが、問題はない。

そろそろ転じよう。射撃はあまり得意じゃないしな。

「オルコット嬢！俺もそろそろ本気で行かせてもらおうぞ!!」

その言葉に観客たちは驚いた。

IS 初心者が代表候補生と十二分に渡り合っているのを見て、きつと全力なんだろう、と思っていたからだ。

当の彼女はようやくか、と、

「ええ、いいですともー!」

ブルー・ティアーズとスターライト Mk III の波状攻撃を回避しながら、セグメントライフルを量子空間に収納、次に取り出す武器は、「ブレード!?!」

観客の一人が声をあげる。

そう、彼が取り出す武器は刀。身の丈はあろう、という日本刀だ。腰のハードポイントに装着し、柄に手をやる。

次の瞬間。彼の姿は地上から消えていた。

どこに行った、そう考える前にオルコットは全力で後方に退いた。同時に爆発が起きた。

周囲にあったブルー・ティアーズが四基とも斬られ、バーゼラルドが目の前にいたのだ。

これに彼女と観客も唾然とした。

あの時、退かなければわたくしも斬られていましたわ……。

オルコットは冷や汗をかき、距離を取る。

管制室にいる教師陣も驚いていた。

「せ、先輩。 秋野君って……」

「……彼の動きは初心者レベルなんて生易しい物じゃない。代表レベルと言っても……」

政府から来ている報告書は事実なのか？

手元にある秋野のデータを確認する。たった二カ月。時間にしては二百時間にも及ばない稼働時間。

機体のバーゼラルドは高機動型の IS。全身のブースターを使えば瞬時加速を使ったかのような動きはできる、と報告書には書いてあったが、まさか彼がそれに加えて瞬時加速を使えるとは思わなかった。

圧倒的な加速力と機動力。しかも、直線方向に加速するのではな

く、各ブースターの出力をマニュアルで調整し、横方向にも同様に加速、連続で一連の動作を行い、一気にブルー・ティアーズに接近。

あとは刀を抜き斬るだけ。それを四回行って見せたのだ。

秋野、あとでたつぷりと話を聞かせてもらおうか。

鋭い視線をアリーナに向ける織斑千冬。それに龍也は気づくことは無かった。

「くっ、瞬時加速……ですわね。しかも連続使用で」

「ご名答！これでオルコット嬢の戦力はその銃だけだな！」

地上に着地し、刀の切っ先を彼女に向ける。

そうしながら内心はやりすぎた、と考えていた。

バーゼラルドに無茶をさせ過ぎたのだ。瞬時加速の連続使用で、各部の関節は悲鳴をあげていた。

目に見えるモニターにはレッドアラートが幾つか見えていた。また、思った以上に瞬時加速にエネルギーを消費したのか、半分以下になっていた。

この辺りは今後の宿題として、次で決めるに行く。

大地を蹴り、空中に身を飛ばす。瞬時加速ではないが、各部のブースターの出力を調整しながら、速度をあげて彼女に迫る。

オルコットもじっとしているわけではない。スターライトMkⅢは龍也に向けながらも、動き続ける。

アリーナは広いのだ。広さを活かさないのは愚直だ。決して自分に近づかせてはいけない。止まってもいけないし、停止位置を予測させるわけにもいかない。だから、動き続けた。

狙いは多少、荒くなるがスターライトMkⅢでの牽制も忘れない。SEに余力のない龍也には牽制とはいえ十分に脅威ではあった。

龍也は接近するためにアサルトライフルを呼び出し、弾幕を張る。目的は相手の動きを制限させる為だ。

そこはさすがの代表候補生。目論見はバレバレで、スターライトMkⅢでうまく逃げ道を作り、回避していく。

一進一退の攻防は続いたが、決着は着くものだ。その時はきた。幾度目かのスターライトMkⅢのレーザーを左に避けた時だ。



「なっ!?!」

左脚部の関節が爆ぜた。ついに関節が耐えれなくなったのだ。右足と各部のブースターの制御で転倒しないまでも、体制は崩れた。絶好のチャンス。

オルコットは体制の崩れた龍也に隠し玉をぶつけた。

「今です!頂きますわ!」

ブルー・ティアーズの腰部からパーツが外れ、ミサイル型のビットが二基発射される。

とつさにバーゼラルドの胸部に配置されている防御フィールドを展開するが、しまった、と舌打ちをした。

FAのバーゼラルドをよく知っている人なら、あの防御フィールドを展開すればどうなるか、分るであろう。

そう、エネルギー消費がとんでもないのだ。

防御フィールドによって攻撃は防げたのだが……。

『試合終了!勝者、セシリア・オルコット!』

残っていたエネルギー全てが消費されてしまったのだ。

何ともお粗末な結果になってしまった。

## 五話

一夏は龍也とオルコットの戦いを管制室のモニターで見ていた。隣には篠ノ之もいたが、彼女も同様に釘付けになっていた。

あれが、彼の戦い方なのか、と。

代表候補生からの正確な射撃を躲し続ける集中力。機体に振り回されず、使いこなす操縦力。

とてもじゃないが、IS初心者とは思えなかった。

「……なあ、箒。俺、龍也にも勝てる気がしないんだが」

この程度の障害、軽く乗り越えて……欲しいと彼女は思ってしまったが、口にすることは出来ないでいた。

一体、どれだけの訓練をしたらあの動きができるのか、想像が出来なかった。

連続で使用していた瞬時加速。そこからの抜刀、ブルー・ティアーズの破壊。

刀の構え方から何かしらの剣術をやっていたのであろう、と推測できたが流派までは判らなかった。

「と、ともかく！やるしかないのだ！男なら、全力でぶつかって来い！！」

「ハア……そうだな、それしかないよな……」  
がくつと俯いてしまうが、気持ちは切り替えなければならない。

その時、勝敗の決着が着いたのか、

『勝者！セシリア・オルコット！』

「はっ？」

アナウンスに二人同時に驚いてしまった。

「龍也は負けたのか？」

「……そのようだな。しかし、敗因は何だったんだ？」

モニターでは確かにバーゼラルドがブルー・ティアーズのミサイル型ビットの攻撃を防いでいたはずだった。

なのに、負けた。

どうしてなのか？

それは、戦っていたオルコットも気になったのか地上に降り、彼に尋ねていた。

龍也はバーゼラルドを待機状態にし、説明をした。

「ミサイルを防いだ防御フィールドは恐ろしく燃費が悪いんだよ。すつかりそのことが抜け落ちていたよ。それで、攻撃は防いだけど、エネルギーがゼロになって終了ってわけさ」

やれやれ、という仕草をし、彼は入場してきたハッチへと向かっていった。

「……まあ、勝つても負けてもいいんだけどね」

ボソツと呟いた彼の言葉は誰にも聞こえていなかった。

彼がアリーナから去っていく姿をモニターで見っていた一夏に織斑先生が声をかけた。

「織斑、お前の機体が届いた。フォーマットとフィッティングは試合をしながら行え」

え？としか言いようがなかった。

通常、ISのフォーマットとフィッティングにはそれなりの時間が必要なのだ。それを実戦で行え、というのは彼にとっては無謀としか思えなかった。恐らく、彼と同じ立場になる者がいれば多くの者は同様の気持ちになるだろう。

だが、彼女は、

「アリーナを使える時間は限られている。早くいけ」

「ちよ、千冬姉、無理だつて！」

「織斑先生、だ。――逝け」

出席簿で叩くのを忘れずに行い、一夏を急かした。

行け、と言われたが逝け、と聞こえ彼は内心、鬼め！と叫ぶのであった。

ピット搬入口にISがあった。

一夏の第一印象は白い鎧だった。全体的にシンプルな形状のそれを眺め、そつと触れた。同時に頭に膨大な情報が流れ込んでくる。情報処理が追いつかないが、本能が悟る。『ゴイツ』は俺の為に用意されたんだ、と。

——大丈夫。

そう聞こえたような気がした。だから、身をゆだねた。

無垢なる白を纏い一夏は己を確認する。

各種センサー正常、各部異常なし。視界の隅にはフォーマットとフイツティングにかかる時間が表示されていた。

三十分。短いと見るか、長いと見るかは人それぞれだが、まずはこの時間を耐えなければならない。

眼を閉じこの一週間の剣道の特訓を思い出す。怠けていた体はようやく武の動きを思い出した。だが、それだけ。かつて剣道をやってきた動きすら再現できない。

辛いな。

判っていたことだ。だったら、これから巻き返していくしかない。

まずは、ここから。

カツと眼を開き、織斑先生を見た。

「千冬姉、行ってくるぜー」

「ああ、行ってこい」

おっと、思わず千冬姉と言ったが怒られなかった。心配してくれていたんだろうか。

そうなら頑張らないとな、と自分に言い聞かせ、アリーナへ向けて足を進めた。



オルコットは自機の補給を済ませ、既にアリーナにいた。

目を閉じ先ほどの戦闘を思考していた。自分に何ができていて、何ができていなかったのか。龍也の戦い方を参考にできることはあったのか、否か。

最初の感想はやられた、だ。バーゼラルドの武装は開示されていたので知っていた。対応もできたつもりだ。でも、BT兵器を簡単に避けられ破壊されたのは悔しかった。

この悔しさをバネに成長しなければならぬ。

もつと強くなりたい。

だから、わたくしはこの戦いでも手は抜きませんわ。

そう心に決めると、アリーナに誰かが入ってきた感じがした。

一夏が現れたか、と目を開き見据えた。

「……緊張なさっていますか？」

一夏は右手をあげ問題ないという仕草をしながら、

「ほどよくな。否、どっちかというと早く戦いたくて昂っているかもな？」

「そうですか。では、始めましょうか」

先ほどの試合で昂つたのは自分もそうだ、と彼女は眩き、ライフルの銃口を一夏に向け戦闘態勢をとった。

対する彼はブレードを展開した。ここに来るまでに武装の確認をしたが、このブレード一本しか搭載されていなかったのだ。

「俺の唯一の武装だ。龍也のようにやれるか判らないが、やらせてもらうぜ！」

「一撃で終わらないでくださいませね！」

試合のゴングが鳴った。

## 六話

一夏とオルコットの試合は結果だけを見れば、オルコットの勝利で終わった。

当然、という結果ではあるが一夏もフォーマットとフィッティングの時間を稼ぐだけの動きはでき、素人ながら喰いつくガッツは見せてくれた。

しかし、彼のISである白式の単一仕様能力がいけなかった。

零落白夜。

自身のSEを消費してのSE無効化攻撃。これを使ったせいで残り少なかったSEが枯渇し、負けてしまったのだ。

何とも言えない負け方に彼自身も納得はいつていなかった。

この試合を見ていた龍也もこれは仕方ない、といった顔をしていた。

初見で把握するのは彼には難しいだろう、と。

とはいえ、自分ならそんなミスをするのは致命的でマズイと考えていた。

では、オルコットとの試合はどうだったのか？

答えは簡単だ。元より負けるつもりだったのだ。

クラス代表なんて面倒な仕事をしたくなかったし、表に出過ぎると素性がバレることになる。そうなると仕事がいなくなるため、体のいい理由をつけて避けるつもりだったのだ。

今回はたまたまバーゼラルドの欠陥を利用でき、周囲にももつともらしい感じにはなっただろ。

仮に勝利していたらどうだったか？

連続使用した瞬時加速で関節が限界で次の試合はできません、と言うつもりであった。

実際、その後も予定されていた試合に関してはこの言い訳で通させてもらっていた。

さて、そんな龍也だが今は生徒指導室に連れて来られ着席させられていた。目の前には織斑先生が腕を組みながら座っていた。

「言いたいことは判るな?」

視線は鋭く、隣にいる山田先生がオロオロとするほどの雰囲気だ。でも、彼は平然とこう答えた。

「いいえ、何のことやら……さっぱり判りません」

「ほう……。ならば言つてやろう。お前は何者だ?」

「何者、とですか。はて、日本政府とブキヤから報告書が出ていると思えますが?」

「あくまでとぼけるつもりか」

彼女の言いたいことは判る。IS操縦時間があまりにも短すぎるのに、戦い慣れしていることや高度な操縦テクニックが気になるのであろう。

どう答えるべきか。IS操縦なんかは普段の戦闘の延長で動いたら、自由自在に動けてブキヤスタッフも驚いた、なんて素直に言えないし。悩みますな。

「とぼけると言われましたも。実際にIS操縦時間は二百時間には満たしていませんよ。まあ、武術には精通していますので戦闘の練度は高いとは思いますが……」

当たり障りのない回答でお茶を濁したいが、織斑先生は納得してはいないご様子。

ひしひしと冷たい視線を感じるが、本職について話すことは出来ない。織斑先生が日本政府と深い繋がりなら答えてもいいのだが、そうではない。余計な事を知り、突っ込まれるのは鬱陶しいことこの上ない。ブキヤにもこの事は徹底して漏らすな、と言つてあるし大丈夫だとは思うが。

「うーん、納得できないという感じですね。では、織斑先生はどうしたんですか?」

「私たち教師にはこの学園の平和を守る義務がある。そこに不安要素があるわけにはいかない」

単刀直入であった。

ふむ、どうしようかな。平穩に学園生活を送って俺のISの情報を狙う輩から避けたいのに。超ピンチじゃないか。しようがない

か……？

龍也はハア、とため息を一つこぼし胸ポケットからスマートフォンを取り出した。

電話帳を開き、目当ての相手に電話をかける。織斑先生が何か言いたそうにしたが、右手で制止する。

三コールで相手が電話に出てくれた。

「……どうも龍也です。突然すみませんが、今、お話ししていても大丈夫ですか？……ありがとうございます。実は折り入ってご相談があります。ええ、ご理解が早くて助かります。では、電話を代わりますのでお願いします」

龍也が織斑先生にスマートフォンを差し出した。

「織斑先生。この電話の方と話をお願いします。そうすれば、あなたの不安要素が少しは改善されるはずです」

彼女は無造作に彼からスマートフォンを取り、話をした。

「お電話を代りました、織斑です。……」

一瞬、驚愕の顔をしたが、すぐに冷静な表情で話を続けた。

数分もしない内に電話が終わり、彼女は疲れた顔をしていた。

こちらにスマートフォンを返すと、

「……事情は判ったが、誰が相手かくらいは話せ」

「まあまあ。それよりも、私の事については納得していただけましたか？」

「ああ、まったく。今年は大変な一年になりそうだ。あまり私に負担をかけさせないでくれないか？」

善処します、と言いながら彼は席を立ち部屋から出て行った。

そのタイミングで今まで話をしてなかった山田先生が織斑先生に尋ねた。

「先輩、一体、秋野君は誰に電話をしたんですか？」

その問いに数拍の間をあけてから答えた。

「山田君。君は口が堅い方だから話すが、これから話すことは他言無用で願いたい」

彼女はコクリと頷き、話を促した。



「電話の相手はこの国の総理大臣だ」

え？と彼女は驚くが、構わず話を続けた。

『彼は信頼に値する男だ。我々も度々力を貸してもらっている。安心できるかはこれから判断してみてくれないだろうか？』と言われたよ」

つまるところ、政府からの命令だ。彼について詮索するな、という。困ったような顔をしながら、山田先生が呟く。

「今年、一年は本当に大変そうですね」

全くだ、と織斑先生は俯いた。

●  
龍也は学園と寮の間にある庭園にいた。

先ほどの戦闘で破損したバーゼラルドについてブキヤに報告をしていた。

「いや〜アキさん、すいません！バゼちゃんの関節逝ってしまいました！」

アキさんはブキヤのIS開発部門の主任だ。ロマン溢れる男性で、ノリの良い人物だ。

『はあ？ たつちゃん、もしかして連続で瞬時加速とかしちやったのか？』

「……アキさん、勘が良すぎるのは命を短くしますよ」

『当たりかよ。瞬時加速ですらまだ使わないでね、と念を押してあったらうに。まあいいや。修理はたつちゃんできるよな？』

当然、と返すと、

『そしたら、修理部品一式と開発が完了したM・S・Gを送るわ』

「あ、提案してあったM・S・G完成したんですか!？」

M・S・G。モデリングサポートグッズのことだ。実際にプラモデルでもある追加武装のシリーズなのだが、それをIS用に再現しよう！と幾つか龍也が提案をしてあったのだ。

それが完成したのか、と喜ぶ。

『そう。って、言っても再現しやすい物からしか造れなかったけどな』  
「いえ、十分ですよ。楽しみにしてます！」

『おう、そうしてくれ。急いで準備させて明日の朝には学園に届くようにするから』

了解、と言って通話を切る。

一体、どのM・S・Gが完成したのか楽しみで仕方なかった。

一方、オルコットに負けた一夏君は。

「うぐう……」

道場で篠ノ之に鍛えられ力尽きていた。

## 七話

朝四時。

外はまだ暗く日の登りを待っていた。だが、この街には暗闇に乗じて行動している者がいた。

闇を疾走するのは四人の男性。手にはアサルトライフルを持ち、一台の車を追っていた。

対象の車は追われていることなど知らず、IS学園へと向けて走っていた。

荷台に載せているのはバーゼラルドの修理部品と完成したM・S・Gだ。

彼らが狙うのはこの荷物だ。

ただでさえ日本政府とブキヤはバーゼラルドの基本スペック以外は公表していない。少しでも情報が欲しい各国は龍也にも迫ったが、うまくあしらわれ引き出せずにいた。

そうとなれば多少は非合法な手段を取っても情報を得たい、と思うのは仕方がないのかもしれない。

彼らはそんな国から雇われた傭兵達だ。荷物を奪い、国へ渡す。得るのは多額の報酬金。

『そろそろ仕掛けるぞ』

リーダーの男がインカムでゴーサインを出した。

四人が立ち止まり、その内の二人が銃口を車のタイヤに向けた。

そして、リーダーが撃て、と指示を出そうとした時、戦場での勘が彼に違う指示を出させた。

『！ 退避!!』

四人が今、いた位置から後ろに三歩ほど下がった。同時に、先ほどいた場所には弾痕が四つできていた。

音はしなかったのでサイレンサーが着いていたのだろう。

『敵襲だ。相手はこちららの位置を把握している』

そうリーダーが言った瞬間だった。

一陣の風が自分達の間をすり抜けていった。

生暖かい、どこか血の匂いのする風だった。

何だ？と思考するが、考えがまとまらない。それどころか気が遠くなっていく。このままではダメだ、と思うが為すがまま、倒れてしまった。

四人ともが同じように倒れたのだ。よく見ると、全員が首を斬られていた。とてもキレイで美しい切り口だった。

そんな彼らを眺めるのは一組の男女だった。

一人は刀を、もう一人は槍を持っていた。得物からは彼らの血を拭き取り、刀は鞘に納め、槍は背中に差した。

「……全く、どこの国かしらね」

「さあね、金で雇われた傭兵達だからな。それよりも、コレを処分しないとな」

男はトランシーバーでどこかに連絡をした。

「ああ、四人だった。後処理を頼む」

用件だけ告げて話を終えた。

なんせ、こんな日も登らないうちから仕事をさせられるのは嫌いだからだ。早く布団に入って寝たい。

だから、全てを無駄なく効率よくこなした。

ふう、と息を吐き女に帰るぞ、と声をかけその場を後にした。



朝七時。朝陽が眩しく部屋を照らしていた。

龍也は既に起きていたが、眠い目をこすりながら身支度を整えていた。

同室の刀奈も同じように制服に着替えており、時折、見る？という意味深な文字が書かれた扇子を見せてきたが、無視した。

二人とも用意ができ、朝食を食べに行く。

IS学園は様々な国の生徒が来ることから食事の内容も驚くほど整えられていた。

和洋折衷なんでもありだ。

さて、本日は何にしようか、と考えていると後ろから来ていた一夏から声をかけられた。

「おはよう、龍也！もう何を食べるのか決めたのか？」

「ああ、おはよう一夏。そうだな、焼き鮭定食にするか」

刀奈はどうするか、と視線を動かすと彼女は既に他の者と食べ始めていた。

どうやら一夏に接触するタイミングは今、ではないようだった。

——今日に限らず、入学してからずっと刀奈は一夏と接触しないように動いていたのだ。

彼女にも色々な思惑があるようで、彼は何も言わずやりたいうようにやらせていた。

食券を買い料理をもらい、空いてる席に座る。自然と隣に一夏が座り、食事を始めた。

さて、食事を始めたのはいいが、周りは女性だらけ。集まる視線に慣れてきたとはいえ、食にくさを感じる。

最初の頃は一夏だけに集中していたのが、だんだんとこちらにも声がかかったり、視線を感じるようになって来たりで。

はあ、全部一夏に集中してしまえよ……と悪態をつく。

「そーいや、龍也。お前のISっていつ直るんだ？」

「バーゼラルドか？今日、修理部品が届くから、今日中には直せる予定だがどうかしたか？」

「いや、俺が上達するにはISの稼働時間を増やすしかないからさ。訓練に付き合っほしくて」

それを聞いて龍也は、一夏なりに上達しようと考えてるんだな、と感心し少し考えた。

「そうだな。今日は修理に時間かかると思うから、明日から一緒に訓練しようか」

さあ、今、一緒に訓練しよう、という言葉聞いて反応した女生徒諸君。そわそわするな。私も一緒にできないかな!?とか言っていないで、声をかけにくればよからうに。

などと、周囲がざわついているのにも気づかない一夏を見ながら、

ふといつの間にか近くにあった篠ノ之とオルコットが話しかけてきた。

「ほ、放課後に練習するなら私も付き合おうぞ、一夏」

「龍也さんの訓練でしたら気になりますわ、ご一緒させて頂いてもよろしいですか？」

「ああ、いいぞ！な、龍也！」

構わない、と答えて、ちなみにと、先ほど一夏に伝えたことを彼女達にも話した。

「だから、やるなら明日からにしよう」

それに三人が賛成し、食事に戻った。



朝のHR。今日は昨日行われた、クラス代表決定戦で決まった代表の発表が行われた。

戦績は、龍也がオルコットに一敗しその後棄権。

オルコットは龍也と一夏に勝利し、二勝。

一夏はオルコットに一敗だ。龍也が一試合目以外参加できていないので、勝利数だけでは何とも言えないが、実力を加味するとオルコットが代表か、と考える面々もいたが、織斑先生は、

「二年一組の代表は、織斑一夏だ。せいぜい、精進し結果を残せよ！」

「一繋がりで良いですよね」

山田先生も笑顔でそう言うが、当の本人は驚き返答した。

「いやいや、俺は負けたんですけど!?!」

それに対してはオルコットが返答する。

「わたくしが辞退したんですわ」

席から立ち、オルコットは一夏を見る。

「まずは一週間前の非礼をお詫びしますわ。熱くなりすぎて、自分を見失っていました。そして、一夏さん。あなたと戦って、あなたに可能性を感じましたわ。IS稼働時間が一時間にも満たないにも関わらず、代表候補生に喰らいついた動きは感心しましてよ。そして、クラス代表になれば戦闘経験も多く積めます。きつと、良い糧になります」

すわ」

などと申ししておりますが、一夏本人は面倒な、という表情でオルコットを見ていた。

「ま、頑張れ一夏よ」

龍也が彼の肩を叩く。

「だったら、龍也がやってくれよ！」

「悪いね、俺は生徒会に入るつもりだから無理」

思わず語尾に（笑）とでもつけたいが、それはやめておいた。

「それに周りの反応を見るんだな」

「ふふ、織斑君が代表になって強くなれば、私達もおいしい思いができ、他のクラスにも情報を売れる。良いことづくめね」

「いやアーセシリアは分ってるね」

「やっぱり男性操縦者がいるんだから、この特権は使わざるおえないでしょう!!」

うん、龍也に言われて周りの反応を見たけど、俺は商品か!?

再び彼は一夏の肩を叩き、諦めて覚悟を決めろ、と呟くのだった。

こうしてこのクラスの代表は織斑一夏に決まった。

「静まれ！騒がしいぞ。オルコットもいい加減に座れ。……では、山田先生。HRの続きをお願いします」

一通り騒がせてから止める織斑先生。一夏はもつと早く止めてくれ、と思ったがパシン、と出席簿で叩かれていた。

とりあえず、一夏にとっての受難はこれからのようだ。

●  
一日の授業が終わり、龍也は整備室でバーゼラルドを展開し修理をしていた。

破損、もしくは傷んでいる各関節パーツと交換用のパーツを入れ替えていく。自身で設計し開発にも携わっているため、バーゼラルド限定で言えば一人での修理は造作もないのだ。

小一時間で修理を終え、機体を磨く。ついでに、一緒に届けられた

M・S・Gも確認し量子化させておく。

明日からの一夏の訓練で使うか。うん、そうしよう。

決めてしまえば、あとは訓練メニューを考えてしまうか。

「明日からは楽しみだなー」



## 八話

修理が終わったバーゼラルドを纏い龍也はアリーナにいた。

アリーナの使用許可を申請しておいて良かった、と思いながら新たな武装を実体化させる。

両手に現れるは片刃の大剣。

軽く振り、重さを確かめた。

軽いな。もう少し重さがあってもいいんだが。

そう思いながらバーゼラルドのインターフェイスを操作し、視覚に仮想敵を出現させた。

これはブキヤで訓練するのによく使っていたVRをISに搭載し、訓練に使えるようになったものだ。今、龍也の目の前には仮想敵としてフレズヴェルクがいた。しかも、アーテルだ。

これも彼の趣味だ。

バーゼラルドの訓練をするなら、想定する敵はやはりコイツだな。くく、と喉を鳴らしながら訓練開始のボタンを押し、戦闘態勢を取った。

目の前にいるアーテルも大型の鎌ベリルスマッシャーを構えた。

カウントがスタートした。

三、二、一……GO！

最初に動いたのは龍也だ。

初撃は右の大剣で斬り込む。

アーテルは左のベリルスマッシャーで受け止め、逆の手のベリルスマッシャーを胴めがけて振る。彼は左の大剣でそれを防ぎ、一旦距離を開けるべく後退する。

だが、アーテルは前進しすぐに距離を詰めてくる。

ベリルスマッシャーの形態を変え、アックスにし振りかざした。右の大剣で受けるが一撃が重かった。

片手で凌ぐのは中々骨があるな！

このVR訓練で凄いのは、攻撃の重みを感じ取ることができるところだ。より実践に近い状態で訓練ができるので、非常に有益なのだ。

だから、IS学園に入学するまでの間はこのVR訓練が日課だったのだ。

さて、大剣のままでは威力は出ても小回りが利かない。

ならば、と龍也は左の大剣を腰のハードポイントに付け、右手の大剣を解体した。

そう、今回使っている大剣は幾つかの武器が合体した武器なのだ。なので組合せを変えることで様々な武器に変化する。

右手にはショートソード、左手にはナイフを握り立ち向かう。

相手のベリルスマツシャーも形態変更ができるが、どれも大型に変わりが無い。だから、懐に入ってしまったえば対応がしやすい。

だが、このアーテルは近接に特化したバリエーション機。その程度はすぐに対応されてしまう。

ベリルスマツシャーをグレイヴにし、突きと斬りの交互で攻めてきた。

両手の武器で受け流しながら、こちらも速度を活かし連続で斬りつける。

互いに斬撃に斬撃を重ねる。

速い。

誰か見ている者がいれば眩くだろう。

どちらも高速戦闘をする機体だ。まだ速度は上がる。

龍也は瞬時加速で後退し、大きく距離をとる。

今までは正面からの攻めばかり。この武器もようやく馴染んできた。ならば、もつと速度を上げていく！

全身のブースターで一気に機体を前に押し出した。

これは瞬時加速ではないが、速度的には同等の速さが出ている。アーテルの目の前まで迫る。向こうは左右のグレイヴで突きを放った。

ここで！

速度を変えないまま機体を右に動かし、側面に周りショートソードで斬りかかる。

アーテルの目が不気味に輝き、その場から消え去る。

「上か！」

フレズヴェルク。

この機体の厄介な所は変形することだ。サイドワインダーと呼ばれる飛行形態で並みの機体では追いつけないのだ。

「でもな、このバーゼラルドは!!！」

再びフォトンブースターを吹かし、空へと飛びあがる。

「対フレズヴェルク用のF A——今はI S——の力を見せてやる!!！」

分解してあった武器を元の大剣に戻し、もう一本の大剣と組み合わせた。

これぞ、この大剣の神髄。

「ユナイトソードの力で叩き斬る！」

高速で飛翔し、突撃してくるアーテルに対しユナイトソードを上段に構えながら追いかける。

伊達に多数のブースターを付けているわけではない。アーテルに追いつがり、攻撃をする。

振りかざした一撃を軽々避けながら、アーテルは飛行形態から人型に変形し、鎌形態のベリルスマツシャーで交互に斬りつける。

ユナイトソードの腹で受けながら、押し返し吹き飛ばす。

しかし、さすが空戦にも強いアーテル。態勢はすぐに整えられる。「よし、そろそろ次で決めるぞ！」

正眼の構えでアーテルを迎え撃つことにした龍也。

そんな気も知らず、向こうは最高速で突っ込んできた。

瞬時加速のような速さ。攻撃も速さを乗せたままのアックスに変形させたベリルスマツシャーの一撃が来る。

ここで、ユナイトソードの力を更に使おう！

ユナイトソードでアーテルの攻撃を薙ぎ払う。

少し確認をしようか。実際のユナイトソードにはブースターが付いていることを覚えているだろうか。

実は今、彼が使っているユナイトソードもそれも再現している。

一本のユナイトソードに二つのブースター。

更に合体させたユナイトソードなら四つのブースターが付いている。

それじゃあ、もしこのブースターの出力を改造し、バーゼラルドのフォトンブースターと同程度にしてあったとしたら。

四つ同時に吹かしてみたらどうなるのか。

やってみましょう。

龍也はユナイトソードのブースターを吹かし、薙ぎ払った態勢から機体を回転させる。この回転で生まれた速さで更にアーテルに斬りつけた。

さすがのアーテルも二つのベリルスマツシャーでこれを受け止めるが、

「全ブースター！一斉噴射っ！」

勢いで剣を思いつき振り切り、アーテルを地上へ叩きつけた。

叩きつけられたアーテルはポリゴンの塊になり霧散していった。

設定されていた数値を削り切ったのだ。

龍也はふう、と息を吐き地上に降りた。

「いやあ、ユナイトソードはやっぱりこの二剣を合体させた状態が良いな！それに、この関節パーツも強化してくれてあったから、これだけ速度を上げたのに負荷の掛かり方が違う。ブキヤのスタツフには感謝だな」

ユナイトソードを格納し、バーゼラルドも待機状態にする。

時間にして三十分だったが、汗がびっしょりだった。

「はあ、汗が気持ち悪いな。さつきとシャワーを浴びて休むか」

龍也はさつきとアリーナから出ていく。

その光景をこっそりと覗いていた少女がいた。

「……一体、龍也さんは何と戦っていたんでしようか」

彼女には龍也が一人で動いている様しか見えなかった。

VR訓練。

それはこのシステムを搭載した機体でなければできない訓練方法。故に、第三者が見れば一人でチャンバラをやってるようにしか見えない、虚しいシステムなのであった。

## 九話

四月中旬。

クラス代表決定戦や一夏クラス代表就任パーティーなど、最初から一年一組にはイベントが盛りだくさんだったが、授業の方もISを使つての実技が始まつていた。

今は武装展開の実技中だ。

熟練の操縦者は0.5秒で展開できるらしいが、まだまだ彼らはその域までは達していない。

龍也は特に考える事もなく、いつもの愛刀である日本刀を右手に抜刀して展開。

オルコットも銃口を前方に向け、セフティを解除し構え即座に射撃体勢に移れる状態で展開していた。

「秋野もオルコットも一秒か。これからの訓練でまだまだ早くなるな。——織斑、早く武装を展開しろ」

そんな中で一夏だけは時間がかかつていた。

自由自在に展開できるようにはなっていたが、イメージを構築するのに時間がかかっているのだ。

まあ、日常生活で手に剣が現れるようなイメージは普通の人ならしないだろう。

集中。突き出した右手には物を斬る刃が。そう、鋭い刃を備えた一刀にして最強の武器。

光の奔流が走り、手の中には雪片二型が握られていた。

「遅い。二人を見習い精進しろ」

はは、厳しいなあ千冬姉は。褒めてくれてもいいのに。

「織斑、褒められたかつたらもつと成果を出せるようにしろ」

「……了解です」

心さえ読むんですか、千冬姉。

そんな光景を微笑ましく見ているのは龍也だった。

バーゼラルドは全身装甲で頭部まで装甲で覆われているので、彼の表情は皆には分らないので知られることは無いが。

身内だから褒めるのも難しいんだよな。

瞬間、右手の刀で防御態勢を取った。

来るのは金属と金属がぶつかる音と衝撃。

「……秋野、今、私に対して失礼な事を考えなかったか？」

織斑先生がIS用の剣をいつの間にか持つており、こちらに振つていたのだ。

「……いえ、そんなことは考えてないんですが。むしろ、織斑先生。いつの間に武器を持つていたんですか」

手に感じた衝撃はIS同士での模擬戦でのものだった。

さすがはブリュンヒルデ——なのだろうか。ここの教員が全員この人レベルなら恐ろしい。

●  
というような授業が毎日行われている中、転校生がやってくる噂話が最近よく聞かれていた。

中国、フランス、ロシア、アメリカ等々。一夏と龍也という男性操縦者が現れたことにより、様々なデータが欲しくて、各国が動き出していたのだ。

放課後の食堂で優雅にお茶をしながら龍也とオルコット、一夏に篠ノ之がこの話題で話していた。

「ふうん、どの国も俺たちのデータが欲しくて躍起になっているんだな。オルコット嬢も政府からはそういう話はあるのかい？」

「ええ、隙あらばと言われていますわ。ま、わたくしはそんな事するつもりはありませんが」

一夏がジュースを一口付けて、

「セシリアさ、そういう事を言っても大丈夫なのか？」

「大丈夫ですわ。一夏さんのデータだけお渡ししますのです」

がくつ、と態勢を崩す一夏。

「セシリア！一夏は良いとはどういうことだ!？」

何故か篠ノ之が怒っているが、オルコットは涼しい顔で答える。

「う・そ・ですわ。そんな事してはあの時、助けて頂いた恩を仇で返すことになりますわ。政府もその事は分っていますので、無茶をいうのは女性権利団体だけです」

あの時、というの是一年前に起きたテロ事件の事だろう。

「でも、俺も一夏も気を付けないといけない。これからはハニートラップも増えてくるだろうし」

まさか、と一夏は笑っているが、篠ノ之の表情が強張っていた。

「どうした篠ノ之、気分が悪いのか？」

「……龍也の話を聞いてて思ったんだが、最近、一夏の周りに上級生達が寄ってくるのが多くなってきていた。まさか……」

「ああ、だとしたらその可能性はありますわね」

そう言うオルコットは篠ノ之に小声で、あなたが頑張って守ってあげて下さいませね。と囁いていた。

「な、な、何を言うか!?!」

顔をリングゴのように真っ赤にする篠ノ之に、男二人は?を浮かべていた。



同時刻、IS学園正門。

ポストンバックを持った小柄な少女が佇んでいた。

「ここがIS学園かぁ……」

黒髪を左右の高い位置で結んだ彼女は一体、どの国からの刺客なのだろうか。

## 十話

早朝。

肌寒さを感じながら龍也は寮の外にいた。手には木刀を持ち、服装は動きやすいジャージだった。首からはバーゼラルドの待機状態である剣の形をしたアクセサリーをしていた。

周囲に誰もいないことを確認し、木刀を構え精神を集中する。

思い描くのは最強の自分。相対するのも最強の自分。常に自分自身が最強の敵であり続ける。

強いイメージは時として幻想を生み出す。

今、彼の目の前にはもう一人の彼が同じ姿で立っていた。にらみ合いながら相対が続く。

傍から見れば何もしていないように見えるが、彼らの間では既に何百という打ち込み合いが交わされていた。

とはいえ、あくまでこれもイメージによる訓練である。

それなりに結果は得てきた方法なので、日課として行っているのだ。

数十分ほど続けて終了し、部屋に戻る龍也。

時刻は六時を過ぎたばかりだった。同居の刀奈はロシアに代表としての仕事があるとかでしばらく留守にしている。

いつもいる人がいないのは、寂しさを覚えるが我慢すればするほど燃える、と彼らは言っている。

さて、朝食の時間になったので食堂へと足を向けた。

既に何人かが食事をしていたので、いつもより騒がしく見えた。

こっそりと気配を消して入口に近いテーブル席にいる二人組に近づいていくと、

「ねえねえ聞いた？今日、中国からの転校生が来るんだって！」

「聞いた聞いた。でも、こんな時期に何でだろうね？」

「決まっているじゃない！織斑君がいるからだよ！」  
なるほどね。

男性操縦者が見つかり、IS学園に入学。報道されるタイミングが



遅かったために、各国からの刺客がようやくやってくるのか。

転入させられてくる者も大変だろうな。

きつと国からはハニートラップでも何でもしていいから国に連れて帰れや情報を送れ、等と言われていているのだろう。

これから色々な国からの接触があるんだろうな。

一人納得した龍也はそつと二人から離れ、食券を買い早々に朝食を済ませるのだった。



食事を終え、自室で制服に着替えているとスマートフォンからコール音がした。

着信音は登録してある人、それぞれで設定するのが彼の趣味なのが、今鳴っている音はブキヤのアキさんのものだった。

こんな朝早くから？と電話に出ると、

『龍也くん。朝早くからすまない』

アキさんが丁寧の名前を呼んだ。この人の癖で丁寧に名前を呼ぶときは大体、悪い知らせがある時だった。

「いえ、でもアキさんどうしたんですか？」

『……申し訳ない。本社が何者かに襲撃を受けた』

その言葉に龍也は正直、あまり驚いてはいない。男性操縦者が所属しているというだけで、データを強引に奪い取ろうとする輩はいるし、物理的にも接触してくる可能性はあるだろう、と何度もブキヤや政府とも話をしてきたからだ。

現実には起きた場合に対応する為に、色々な措置もしてきたつもりだった。

だから、まずは被害を尋ねる。

「被害状況と襲撃者は？」

『襲撃方法がブキヤのメインコンピュータへのハッキングだったために怪我人などは出ていない。ただ、開発中のISのデータが盗まれた。申し訳ない』

電話口の向こうで深々と頭を下げているアキさんの姿が想像できた。

そして、幸いな事に怪我人がいない事にホッとした。

「でも、怪我人がいなくてよかったですよ。で、どの機体のデータが盗まれたんですか？」

バーゼラルド以外にも現在、何機かのFAタイプのISの開発が行っている中でどのデータが盗まれたのか。

『ヴァイスハイトだ……』

ヴァイスハイト。コボルドとシユトラウスという二体のFAが合体して生まれる機体だ。

重装甲に重火力をコンセプトにした機体だが、すぐにフレズヴェルクが登場し姿を消した、という設定だ。

「うーん、ヴァイスハイトですか。武装データは既存のISの物で作成してましたし、機体出力もラファール程度で抑えてあったと思うんですが……でも、メインコンピュータの障壁システムは結構、分厚かったですよね」

『ああ。こちらからも反撃を試みたが相手の特定もできなかったよ。だから、物理的にシステムを落として対応になったよ。はあ、頭が痛いよ』

「……アキさん、次もあるかもしれないので開発データはネットワークから隔離しておく方がいいかもしれませんね」

『そうなんだよ。今、スタッフ総出でやっているところだよ。だから、たっちちゃん。少しの間だけ諸々の開発が遅れるが了承しておいてくれ』

「ええ、もちろん。こちらでも外出届が受理されたらブキヤに顔を出しますよ」

『いやー助かるよーそれじゃ、また！』

電話を切り、思い起こす。

ISを開発している会社からデータが盗まれるとあらば、大きな損失であり失態である。だが、バーゼラルドを発表してから何度もブキヤにはハッキングされてきた痕跡が残っていた。そのどれもがファ

イヤールウォールに阻まれ功を為すことはなかったが、今回はそれすら突破された。

さて、誰がやったのか。よほどの腕前を持っている者というのは分るが、そんなのは世の中を探せば何人も出てくるだろう。

特定の方はアキさんたちに任せるとして、盗まれたのはヴァイスハイトのデータか。

良かった、と内心思っている。アレを再現するにはISコアを二つ用いるように設計をしているからだ。だから、他社が盗んだとしても再現するには相応の覚悟が必要だ。

加えて、出力はラファール程度に抑えてあるので、昨今の機体よりも弱めである。これも、もしかしたらの保険だ。

「しかし、嫌な予感がするな。そうだなあ、風が泣いている……とでも言っておくか」



その後、教室に入ると食堂で話題になっていた転校生の少女が織斑の前にいた。

中国の代表候補生である風 鈴音だ。

龍也も映像データで何度かは見たことがあった。話を聞いていると一夏とは何かあるようだが、時間の方が猶予を許さなかった。

スツと織斑先生が現れたのだ。

「おーい、一夏と少女よ。HRの時間だぞー。先生たちも来てるぞー」  
一応、助け舟は出しておく。織斑先生、チツと言いながらこつちを睨み付けないでください。死んでしまいます。主に俺の精神的苦勞で。

風は慌てて教室から出ていく。どうやら同じクラスではないようだ。一夏には後でゆっくり聞くとしよう。

そう思っていたが、トラブルが起きた。

時刻はお昼。昼食の時間だが、龍也は午前中の授業で疑問に思った

ことがあり、織斑先生と山田先生に質問をしており食事の時間が遅れていた。

慌てて食堂にやってくると、一夏と凰が何だか言い争っていた。穏やかな感じではなかったので何があったのか聞こうと話せる人を探した。

ちょうどオルコットが目に残り、彼女も手招きでこちらを呼んだ。

「オルコット嬢、一夏と凰さんは何で言い争ってるんだ？」

「どうやら一夏さんと凰さんは幼馴染みたいなんですけど、約束が云々と言ってますの。きつと、一夏さんが約束した内容をちゃんと覚えてないみたいなんですの」

ああ、何となく分る。

「そつか。それじゃあ落ち着いて食事をしたいから別の場所で食べるか。オルコット嬢はもう食べ終わった？」

「ええ、食後のティータイムですよ。時間もあまりありませんので、急いの方がいいですよ」

言われて時間を確認すると残りの時間は少なかった。

「ゲツ、本当だ！ありがとう、オルコット嬢！」

脱兎の如く静かに食事をできるところを求めて龍也は駆けて行った。



更に時間は経ち、放課後になった。アリーナには龍也と一夏に篠ノ之、オルコットが揃っていた。

それぞれがISを纏い、模擬戦による訓練を行っていた。

龍也と一夏、篠ノ之にオルコットが相對している。

龍也はバーゼラルドの装備を刀一本に限定し、近接での戦い方を一夏に体を持って覚えさせていた。

「どうした一夏！そこで踏み込まなければ一太刀すら入れられないぞ！！」

「くう、そんな事を言われて、も、な！」

一夏は龍也の攻撃の速さに着いていくのでやっとなった。白式には慣れてきたが、如何せん動きに若干のラグを感じる。自分の思った通りに動かないもどかしさがまだまだあった。

「うおおおおおっ!!」

雪片二型を強く握り、思いつきり前に出て袈裟懸けに斬る。

思い描くのは姉の剣。辿り着き超えていくべき剣の型だ。黙って何度も見た映像を脳裏に思い起こし、再現すべく動く。

まだ教わってもいない瞬時加速ができていた。きつとこうすれば、こうなるんじゃないのか、と考え行ったら出来た。

きつと、一夏は理論よりも感覚で覚える方が性に合っているようだった。

本当は理論を理解し、至るべき工程を経ての方が良いのだが、それはこれからだろう。

龍也は正面から受け止め、拮抗させる。

その動きは現状の一夏なら及第点の物だった。力と速さ、タイミング。入学したての、しかもISにまともに触れた経験がゼロの人間からすれば上出来だった。

でも、少々力み過ぎている。だから、こうなるんだよ！

龍也は一瞬、全身の力を抜きながら右に移動した。拮抗していた状態で相手が力を抜けばどうなるか、想像に難しくない。

一夏はずつと力を入れ過ぎていた。故に、対応できず前のめりに体勢を崩した。

しまった、と一夏が思った時には龍也は行動を終えていた。

右足で背中を押し地面に叩きつけ、首筋に刀を添えられていたのだ。

「ま、参りました」

「うむ。でも、今さっきの一太刀は良かったよ」

龍也が刀を納刀し、一夏を起こした。

悔しそうな顔をしている一夏に彼が告げる。

「さて、一夏。もう一戦やってから次はオルコット嬢とやってくれ」

「おうさ！次はもう少し喰らいついてやるからな！」

## 十一話

アリーナの空をバーゼラルドが駆ける。

後ろからは打鉄を纏った篠ノ之がアサルトライフル『焰備』の銃口を空に向けていた。

トリガーに指をかけ、狙いを定めるがそう易々と当たってはくれない。

何とか自分の距離に捉えたいが、龍也は自由自在に緩急をつけながら空を舞い、篠ノ之から逃げ続けている。

戦って感じるのは龍也の操縦テクニックが優れ過ぎているということだ。

どうにもIS操縦時間が二百時間に満たないというのは嘘にしか聞こえず、ずつと前から操縦していたのではないかと考えてしまう。

何よりも戦闘の間を取るのが巧すぎるのだ。

緩急の付け方、攻守のバランス、どれもがプロの動きに感じた。

自身も剣の道に通じているため、特に剣技に関してはよく判る。レベルが違い過ぎる、と。

くつ、追いつけない苛立ちでどうにかなりそうだ。

先ほどから龍也が避けてばかりで遊ばれている感じがし、篠ノ之はイラついていた。

対して彼は涼しい顔をしていたが、フルフェイスで表情は伝わっていない。

「どうした篠ノ之！ そんな速度と攻撃ではこちらは止まらないぞ!!」

「

くそつ、と苦虫を噛み潰したような顔で彼を注視する。突破口が思いつかない。

「そっちこそ逃げてばかりでは、私は倒れんぞ!!」

「そうだな。でも、もう少しだけ俺は逃げるから、どうにかして接近戦に持ち込めるように考えるんだな！」

「き、貴様あッ!!」

怒りが頂点に達したのか、焰備をしまい刀装備である『葵』を取り出し猛スピードで攻めてきた。

思わず良いスピードだなあ、と感心してしまったがこちらも刀を握り相対する。

放たれる一閃を受け止め、流す。

怒りに支配はされているが流石は剣の道を進んでいる者らしく、太刀筋はとても良い。

だが、それだけ。確固とした意志の力がない。信念が感じられないのだ。

「はあああああつー！」

右からの袈裟切りを避け、こちらが逆袈裟で応対しながら思考する。

一体、彼女はもうしたいんだろうか、と。

ひとまず龍也が篠ノ之に抱く印象を話そうか。

一つ、一夏限定で怒りやすい。

一つ、普通に怒りやすい。

一つ、気持ちが剣に現れやすい。

一つ、自分の置かれた環境を姉のせいになっている。

こんな所だろうか。

しかし、思えばたかだか年齢が一つだけ上というだけで、人を導けるような指導力があるわけでもない。

ただ、普通の人が経験しないようなことをしていただけである。

そこまで考えて龍也は思考を止めた。

柄にも無い事をするんじゃない、と。

今の自分はいくまで級友なのだ。彼女が困ったら少し手を貸すことにしよう。なので、

「今はこの訓練に全力を注ぐか……」

前に踏み込む。空中にいるが、まるで大地を駆けているように足に力が入った。

これも重力制御の賜物である。

踏み込んだと同時に唐竹割りを放つ。



対して、篠ノ之は右からの薙ぎ払いで彼の攻撃を防いだ。くっ、弾けると思ったが受け止めるだけで精一杯か！しかし！

篠ノ之は思い切った行動にでた。すっ、と全身の力を抜き龍也の刀を軸にし、全身を半回転させた。するとどうだろうか。丁度、彼女が太陽を背負っている形になったのだ。

龍也は自然と視線を上げてしまったため、逆光で目が眩んだ。そして彼女はそのまま唐竹割りを放った。

「これで決めてやるッ!!」

この一撃、かわせはしないだろう！

彼にとつては逆風の太刀が襲ってきたわけだが、あいにく培ってきた経験値はまだまだ上である。

目を瞑ったまま薙ぎ払いで篠ノ之の太刀を止め弾いたのだ。

「なっ!!」

驚く彼女を尻目に、龍也は止まらない。

「必殺の一撃を止められたくらいで動きを止めるな！ 格好の的だぞ！」

言葉の通り動きを止めた彼女は良い的だった。

刀を手放し素早く近づき、彼女の刀を持つ右腕を左腕で抑え込む。

更に自身の右手にはユニイトソードを分解したショートナイフを展開し、首筋にあてた。

この一連の動きは目にも止まらない速さで行われており、アリーナの隅で見えていた一夏とオルコットを驚かせた。

最も一番驚いているのは彼女本人であろうが。

「チェックメイト、だね。篠ノ之さん」

「……本当にISの稼働時間は二百時間に満たないのか？嘘にしか聞こえないんだが」

半目でこちらを睨みながら問いかけて来るが、彼の答えはすぐに返ってきた。

「いやいや。もう今月で二百時間に達したよ」

「そうではなくてだな！」

「まあまあ、いいじゃないか。とりあえず訓練はこれで終了。一夏達の所に行こうよ」

そう言いながら彼は武装を解除し、まっすぐ大地へ向かい、降り立った。

釈然としないまま彼女も納刀し、龍也に続いた。



訓練を終え、一夏達と合流し今日の総評を行った。

「一夏はもつと近接での基本を詰めていくのがいいと思う。もちろん、白式には慣れてね。次にオルコツト嬢。近接での対応力強化と戦いの間の取り方を。戦場を支配出来るようになる事が目標だね。戦場を支配する、ということに関して言えば、一夏も篠ノ之も一緒だけどね。自分の優位なスタイルで戦えるように持っていきたいね。で、篠ノ之さん。剣道をやっているだけあって、太刀筋は良い。でも、自分が思っていないなかった状態になると止まってしまう事があるから、そこだけ注意。と、まあ好きに言わせてもらったけど、良かったか?」

「ああ、いいぜ。だって龍也に頼んだのは俺達だしな」

「そうですね。できれば、この後は個人的に……」

「それはともかく。秋野、本当にIS初心者なのか? セシリアの試合もそうだったが、どう考えても初心者には見えないんだが」

ふむ、と腕を組み一拍空けてから彼が答える。

「秘密だ!!」

## 十二話

ブキヤ研究室。

ここでは龍也が考案したフレームアームズのIS化について開発と研究が行われていた。

今日も幾人かのスタッフが彼から送られてきたバーゼラルドのデータを見ながら解析作業や新しい兵装の開発を行っていた。

「あー龍也君ってさ、被弾率少ないのにゼルファイカールのような強化装甲を欲しがるよね」

「いやいや男ならあのギミックは欲しいだろ。俺も実際にプラモデルのゼルファイカールを組んだけど、あれは良いっ！」

「プラスチックルドだっけ？ 浪漫とか言ってたなあ。俺はどっちかというどドリルに憧れるんだが……」

「天元突破でもしたいのか？ 一応、M・S・Gにはドリルがあつてだな。それも彼からは実用化の打診を受けているよ。ね、アキさん！」

「ああ、そうだ。こっちで今、データを作成中だ。それより、お前たちは新しい機体の調整をやれて言っただろ。どうなつてんだ？」

二人のスタッフのPCには一機のISのデータが表示されていた。そう、これがフレームアームズIS化の第二弾となる機体。

その名は。

フレームアームズガール フレズヴェルク。

フレームアームズガールだつて正しくフレームアームズの製品だ。

考えてもみたまえ。これもISだ、と知らない人間に聞けば信じるだろう。無茶苦茶？ 道理は捻じ曲げて通す。

と、まあ戯言はほどほどに。

「バッチリですよアキさん。龍也君の伝手で代表クラスのIS操縦者が付き合ってくれましたからね。ただ、サイドワインダーは必要なのか、と問われましたね」

「……そうだな、でも、アレは必要だ。彼の話だどこの先、ISを使っ

た戦闘も増えてくるだろうしな」

アキは龍也とIS学園入学前にした会話を思い出していた。

龍也はバーゼラルドを眺めながらアキさんと話をしていた。

「アキさん、篠ノ之 東はISをどうして本来の目的に使わないんでしょうね」

本来の目的。

当初、彼女は宇宙空間での活動を想定して作っていた。

だが、白騎士事件によって兵器としての価値が見出され各国はそれにしか目が行かなくなってしまった。同時に、彼女もコアの製造を打ち切り表舞台から姿を消した。

「龍也君はどうして、そんな事を考えるんだい？」

「だって、彼女はISを兵器として扱って欲しいとは思っていないですよ。周囲の人々は違う面ばかり気がいつている。もし、俺が生みの親なら認めたくないし、一人でも本来の目的を達成させようと思うと思います。だから、思うんですよ。間違った使い方をしている世界を放置している訳を。正しく扱って欲しいように導かないのか、と」

では、龍也はどうなのか。

ISを兵器としか見ていないのではないか。

否。違う。

「まあ、バーゼラルドっていう兵器を再現したくてISを用いた俺が言えることではありませんけどね」

「ふむ。でも、君はそれだけではないんだろ？」

アキは続きを促した。

「さあ、どうでしょう？ どうなってもISは武力として使われてしまいます。それを解放してやるには、彼女自身が動かなければならない、とは思いますが」

「そうか……」

「きつと、彼女は動くと思います。それがどんな方法かは分かりませんが」

ただ、武力での実力行使という手段で無い事を願うばかりです、と

彼は最後に言っていた。

この言葉と先日のハッキング事件。繋げたくはないが勘ぐってしまふ。

アキはPCの隣に置いてあるタブレットを取りデータを見る。情報元は不明だが、亡霊機業が水面下で動いている、という物だ。噂くらは龍也から聞いたことのある組織名だった。何十年も活動しており、いつから存在するのか、その目的は、誰が所属しているのか、謎である。

しかし、政府は知っており、龍也に調査を依頼しており、現在もその任務を遂行中である、という事をブキヤに所属する際に聞いている。

勿論、この事を口外するならどうなっても知らない、という規約を結んでの話だが。

この組織と篠ノ之博士が繋がっているとしたらとんでもない事になってしまふ。

「杞憂ですめばいいんだがな……さ、お仕事お仕事。俺も新しいM.S.Gの承認とバーゼラルドの強化プランについて、上層部との交渉に行ってくるから、お前たちは調整の方を続けてやっておいてくれよ？」

「了解っ!!！」



同時刻。IS学園では龍也達の訓練が終わった頃であった。

解散の流れだった時に、観客席から声がかかった。

「へー、あんたって結構、強いんだね」

それが誰に向けての言葉かすぐに判った。

龍也は声のする方に目をやり、応答した。

「いやいや、日頃の鍛練の賜物さ、嵐さん」

彼女はふーん、と言いながら言葉を続けた。

「いやね、政府から言われてんのよ。一夏と秋野の強さを見てこいっ

てね。特に、秋野。あんたには稽古もつけてもらって来い、って言われてんのよ」

その言葉に龍也以外が驚いていた。

「おい、龍也。お前」

「一夏、それ以上は聞かないでくれ。俺は頭が痛い」

こめかみを抑えながら龍也は唸りだした。

中国政府め、やってくれたな。次に仕事の依頼が来たら倍額請求だっ。

これも彼がやってきた仕事の結果であつた。

一夏は単純に凄いなあ、としか思っていないが、篠ノ之とオルコツトは違つた。

やはり秋野はただ者ではない。きっと何か秘密があるな。

さすがは龍也さん。既に中国政府からも実力を認められているなんて。これは早くイギリス政府に打診しなくては。

「ところで、鈴。そんな事を俺達に言っても大丈夫なのか？」

「はあ、いいのいいの。私はそういう政治的な事って苦手だしね。もっと物事は単純明快がいいわ」

「ふーん、だつてさ龍也。どうするんだ？」

一夏は未だに唸っている龍也に声をかける。

「どうってなあ……。鳳さんはこんな実力も分らない輩に稽古とかいう話はどう思つたんだい？」

そんなの決まつてるでしょ？ とやれやれ、といった身振りをしてから、

「正直、あり得ないわね。だつて、あんたはまだ稼働時間が二百時間にも達してない。私は代表候補生よ？ ISでの実力というなら私の方が上なのよ？」

そう言つてから彼女の目が変わつた。

先ほどもまでは、こちらを伺う様な物だったが、獲物を見つけた狩人の眼になっていた。

あ、やばい。絶対、次の言葉は聞きたくない。

耳をとつさに塞ごうとするが遅かつた。

「でも、今の訓練を見ててあんたと戦ってみたくなくなったわ」

## 十三話

彼女は喜々としながら端末を操作していた。

目の前には幾つものディスプレイが存在し、そこには幾多のISのデータが表示されていた。

日本の打鉄から始まり、世界の各国の機体データまでであった。未公開の機体のデータすら表示されていた。

セキュリティが厳しいはずのデータをこうも易々と抜かれては意味を成していない。

しかも、各国の製造会社は気づいていないのだ。

そんな事をできる人間は限られている。

では、どんな手段でデータを抜いたのか？ こればかりは彼女にしか分らない方法だった。

その彼女は各国のデータを見ながら思考を続けた。

中でも面白かったのは日本のブキヤのISだった。

玩具を再現する、という思考が不思議なのだ。

他の会社はより強大な兵器を造ろうとしているが、ここだけは違った。ブキヤだけは、その考えが希薄なのだ。

確かにM・S・Gという武装は造っているが、これも玩具の再現なのだ。

「フレームアームズ……ねえ」

クリック一つで目の前の画面にバーゼラルドのステータスを表示させ眺める。

「おつかしいなあ。見る限りは他の子と変わらないのに、どうしてアレに反応したのかな」

「いっくんにだけは反応してもおかしくないんだけど。訳が分からない。」

「はあ、この束さんにも分らないことがあるなんて」

ニヤリと笑みを浮かべながらアイツ——秋野 龍也のパーソナルデータを出す。

名前、身長体重、年齢、趣味や学歴などが項目としてあるが、一見



すると普通に見える。だが、よく見るとおかしいのだ。

よくよく見ると辻褄が合わない箇所が出てくる。

さらっと流すと何も思わないのだが、よく見ると分るのだ。まあ、こういうデータを見慣れていないと分らない情報なのだが。

彼女はこの手の情報も見慣れており、すぐに気づくのだった。だから、調べてみたいと思ったのだ。

何せ、日本政府のデータには彼に関して一切のデータが無いのだ。今、出しているのはブキヤがIS学園に提出したものだ。

「改竄されている。パーソナルデータに、政府には情報なし。でも、各国との繋がりがある人物。コイツ、何者？ 調べたいなあ……あの子と一緒に」

バーゼラルドのコアはどうしてコイツに反応したのか、捕まえて調べよう、いや、絶対に調べる！

心に決め、すぐに行動に移した。

丁度良い機会だ、アレを送り込もう。

「ふふ……おもしろくなりそうだな」

後ろを振り返るとそこには一機のISがあった。

黒一色の装甲にフルフェイスタイプ。第一世代のISに酷似しているが、胸部装甲はまだ取り付けられておらず、コアもまだ装填されていないかった。

けれど、その機体の前にはコアが二つあった。

「この機体もおもしろいよね、コアを二つ使うなんて。どうなっちゃうんだらう。楽しみ！ きつとちーちゃんやいつくんも喜んでくれるよね？」

待っててね。

## 十四話

龍也は鳳の『戦いたい』という声にすぐに応えた。

「嫌だ」

拒否の一声に鳳は強張った表情を浮かべたが、彼はすぐに言葉を続けた。

「クラス対抗戦が近いのに他クラスの代表の実力を知るのは卑怯だと思うんだ。俺が鳳さんと戦って得た情報を一夏に伝えれば、こちらはかなり有利になるし対応もしやすくなるしね。だから、対抗戦が終わった後でなら良いよ」

今しがた行っていた訓練で一夏の実力は知られたが、クラス対抗戦までにもっと力を伸ばすことはしてやれる。最も、IS初心者という事には変わらないので、こちらは何も傷まない。

だが、鳳は違う。彼女は代表候補生なのだ。今の一夏が戦ったなら、勝負にもならないだろう。龍也なら五分の勝負をするかも知れない。そうすると、鳳のISの特性や武装の情報を隅々まで理解できる。

それはあまりにも有利過ぎて面白みに欠けてしまうのだ。と、あくまでこれは龍也の個人的な考えである。

一組としてはこんな美味しい情報を頂ける勝負を捨てるのは、非常に勿体無い。

鳳は彼の言った言葉に納得したのか、

「……それもそうね。アンタの言う通りだね。じゃあ、クラス対抗戦が終わったら戦ってもらおうからね」

そう言い観客席を後にした。

「はあ、面倒な約束をしちやっとな。ま、とりあえずは一夏の訓練が最優先だな」

「いやいや。それよりもこっちはお前が何者なのか気になって仕方ないわ」

一夏の言葉に篠ノ之もオルコットもうんうん、と頷くのであった。

あのなあ、と龍也はため息をついた。

「とりあえず着替えて夕飯にしよう」  
三人ともそれに賛同しアリーナから出て行った。

元々IS学園は女子高のような物だったので、男性用の更衣室というのは無かった。

急場で作られた更衣室はあまり広いとは言えなかったが、男二人が使うには丁度良い広さだった。

小さいがシャワー室もあった。

「一夏、シャワー使うか？」

「いや俺は部屋で浴び……先に使わせてもらいます」

篠ノ之と同室の一夏は二人で決めたルールで、先にシャワーを使うのは篠ノ之という事を思い出し、先に使わせてもらうことにした。

龍也はそれじゃ、どうぞ、と譲りISスーツを着たままで待つことにした。

さすがに部屋まで汗臭いままで行きたくないしなく。刀奈がいるならまた別だけど……。

などと考えていると更衣室の扉を叩く音が聞こえた。

「ん〜どちら様？」

「篠ノ之だ。私たちは先に食堂に行っているぞ」

「了解。席を取っておいてくれると助かる」

「分かった。あまり遅くなるなよ」

「はいはい。お嬢さん方を長く待たせないようにはするさ」

足音が遠くなったのを確認し、一夏はまだか、と思っていると再度、扉を叩く音が聞こえた。

だが、先ほどよりも軽い音だったので篠ノ之ではない事は分かった。

「どちら様？」

「凰よ。一夏はまだいる？」

「まだシャワー中だよ。急用か？」

「ううん、だったらまた後でいいや。じゃあね」

そう言い彼女はそそくさと去っていった。

ふむ、と考えるような仕草をする。

あれか。彼女も幼馴染とか聞いたが……。一夏はフラグをよく建てるなあ。これは篠ノ之さんも大変だな……。頑張れ！

心の中で彼女にエールを送る龍也であった。

そうしているとシャワー室から一夏が出てきた。

「ふう……。さっぱりしたぜ」

「お、では俺も浴びて来るかな。あ、一夏。二人とも先に食堂に行ってるってさ。俺はすぐに行くからさ、先に食堂に行ってくれよ」

「おう、龍也も早く来てくれよな。男一人だとあの周囲の視線に耐えられないから……」

「……了解だ」

哀愁漂う一夏の背を見送りながらシャワー室へと入っていく龍也。

一方、一夏が更衣室から出るとそこには先ほど来た嵐が再びいた。

「あれ？ 鈴、どうしたんだ？」

「あ……い、一夏に聞きたい事があって……」

待ってた、と小さく呟く彼女は小柄な背も相まって愛らしく見えた。

うつ、と一夏も一瞬、なんだこの小動物は、とたじろいでしまった。

「え、えーと、聞きたい事って何だよ？」

「え、いや、その……。む、昔した約束って……。覚えてる？」

ん？ と首を捻る一夏。

約束……。約束……。？ えっと、なんだっけ？ 何かの罰ゲームの奴だっけ。違うな。

鈴はちらつ、ちらつとこちらの表情を伺っていた。

うーん、鈴の様子からすると大事な約束だよな。思い出せ、思い出すんだ俺！

「もしかして、覚えてない？」

不安げな様子で一夏を見る鈴。

その時、あ、と思い出した。

「あ、あれか。鈴の料理の腕が——」

一夏の発言に鈴がそうそう！ と反応した時だ。

更衣室のドアが開き、

「何だ一夏、まだいたのか？ 先に行っててくれて言ったのに」  
すっかり爽やかになった龍也が出てきたのだ。

一夏が振り返り、

「おお、龍也か。いや、ちよつと鈴と話をしていたんだ」

すると彼は怪訝な顔で、

「え？ 一夏さ、お前一人しかいないよ？」

「はは、そんな馬鹿な」

一夏がもう一度、鈴に視線をやると、彼女はいなくなっていた。

……いつの間になくなったんだ。

## 十五話

食堂に着くとオルコットと篠ノ之が席を取り、二人が来るのを待っていた。

「悪い、待たせたかな二人とも」

龍也が手を振り、一夏も待たせたな、と声をかけた。

「いえ、箒さんとお話ししながらでしたので、あまり待った気はしませんが、では、メニューを決めに行きましょう」

オルコットが立ち上がり、食券を買いに向かう。三人もそれに続いた。

時刻は十八時半を過ぎ、他にも夕食を食べている生徒はいたが数は少なかった。

だが、もう少しすれば込み合ってくるため早々にメニューを決める事にした。

たくさんメニューがあったが、割と早くにそれぞれが料理を頼み再び席に着き食事を始めた。

「いつも思うんだけど、ココって食材にも金をかけすぎだよな」

「一夏もそう思うか？ 凄いやなあ。オルコット嬢はこの食事ってどうなの？」

「そうですね。色々な国の方々が来られますがそれらの人の舌を満足させていますからね、感心しますわ。もちろん、ワタクシも十分満足しておりますわ」

「うむ。作ってくれた人達に感謝しながら食べないといけないな」

箒の意見に頷き、食事を続ける三人。

楽しい食事の内容はだんだんと今日の訓練の話に代わっていった。

「さて、一夏君。君には明日から我がクラスに勝利もたらず為に特別内容を実施しようと思う」

急に龍也がキリツと硬い口調で話すのに一夏はえっ、という顔をするが言われた内容を認識すると驚き慌てた。

「ちよ、ちよつと待ってくれ。龍也、特別内容って何だよ!!」

「……なあセシリア。クラス対抗戦って勝つと何かあるのか？」

「えーと、確か食堂のデザート一年間無料券が貰えるとか……」  
「そう！ デザート一年間無料券の為に！ 一夏よ、お前は勝たねばならんのだ！」

妙に龍也がイキイキと話すので三人はこんなキャラか？ と疑いたくなるくらいだった。

「ふふふ、実は俺は甘い物に目がなくてな。既にこの食堂のデザートはコンプリート済みだ……。そして、ここのは何度食べても飽きない。素晴らしいっ」

両手を天に掲げ、彼は一人熱烈に語り始めた。

もはや三人はついていけず、しばらく語るままに任せた。

……数十分が経過した後、ようやく落ち着いたのでかふう、と一息つき話を続けた。

「と、まあとにかく一夏は明日から俺の扱きに耐え成長してもらおうぞ」  
少なくとも俺とフルタイムの試合をして生き残れるくらいには、と付け加えた事に一夏は絶句した。

今日までの訓練で一夏が龍也と戦ってもった時間は十分強。

フルタイムの試合ともなれば、その倍以上はあるわけだが……。

えーと、確か今日やった俺と龍也の訓練内容は……。ひたすら俺が全力の実戦方式を数本。

しかも、数分で叩きのめされる、という悲しい現実しかなかった。それをフルタイムの試合で生き残れるくらいになるまで、と言われるとどんな内容になるのか想像するだけで青ざめてきた。

「お、おい大丈夫か一夏 ？！ 顔色が悪いぞ！」

対面にいた篠ノ之が一夏に近づき様子を伺った。

オルコットも龍也の訓練内容を思い起こしてみたが、実戦での教導だったので辛さはよく分かった。それでも、本国での訓練よりも濃い内容だったので本心としては良かったと考えている。

ですが、あれは候補生のワタクシでも少々きつい内容でしたのに……。アレよりも濃いものになるとは、ご愁傷さまです。

「大丈夫だ、一夏。何もお前一人だけじゃない。篠ノ之もオルコット嬢にも同じメニューをこなしてもらおうから」

龍也の一言に篠ノ之もオルコットも氷のように固まった。

「ん？ まさか自分たちは関係ないと思った？ 残念。二人とももつと強くなつてもらおうぞ」

その表情はとても悪い顔をしていた。三人とも表情が青ざめたままだった。

中でも一番回復が早かったのがオルコットだった。

「え、えつと龍也さん、今は一夏さんを中心に訓練なさる方が良いんじゃないんでしょうか。ほら、もうクラス対抗戦まであまり時間もありませんし」

それに続けて篠ノ之が回復したのか追従する。

「ま、まあ私たちも秋野の訓練は為になるから受けたいが、まずは一夏に勝つてもらわなくてはならないからな。そういうことだから一夏だけ”にした方がいいと言うセシリアに賛成だ！」

二人とも冷や汗をかきながら、龍也を説得しようとするが、生憎と彼には見え透いた嘘と悟られていた。

「ほう……二人とも殊勝な心掛けだと思うが、一つ考えてみてくれ。俺は明日から一夏に相当な訓練を施す。少なくとも、クラス対抗戦の頃にはこの学年にいる代表候補生並みには強くなるんじゃないか？ 否、必ず強くする。そうなると、どうだ？ お前たちは一夏に後れを取るようになるぞ」

簡単に言う俺の訓練を受けた一夏はお前たちよりも強くなつちやうけどいいんだよな？

ということだった。

そう聞くと彼女達も顔色が変わる。

龍也さんの訓練を受けた一夏さんがワタクシと同じかそれよりも強くなる。

一夏が秋野の訓練を受ければ、私よりもセシリアよりも強くなる。龍也の事を二人はIS初心者等とは思っていない。代表並みの実力者と認識していた。

ならば、と。

「や、やっぱりそのお話し、受けさせていただきますわ。ね、箒さん」



「ああ、セシリアと同じだ。秋野——いや、龍也。お前の訓練、受けて立とう」

二人の眼は燃え上がっていた。龍也はそれを見て、ニヤリと笑い、「よく言った！ おい、一夏、良かったな。彼女達も一緒にやってくれらるって！ 張り合いが出てくるだろう？」

一夏の背中をバシバシと叩きながら彼は笑っていた。代わりに一夏は正気を取り戻し、強くなれるのはいいが、とんでもない奴に頼んだ、と若干の後悔をするのであった。

## 十六話

龍也は自室で明日から行う超強化訓練のセッティングを作成していた。

今まで行っていた訓練でも当面は良いが、より短期間での成長を狙いたい。だが、放課後のアリーナも長時間使用することは出来ない。では、どうするか。

だから龍也は一考し、結論を出した。それが目の前にあるヘッドディスプレイ搭載型のVRデバイスだった。これは、彼にIS適性が見つかったからブキヤでの実機以外での訓練に用いたものだ。

後に、バーゼラルドに組み込まれたがそれ以前はこのようなデバイスで行ったりしていた。

このVRデバイスは意識を仮想空間に送り、そこに生成された場所でデータ化されたISを纏い訓練を行うというものだ。

仮想空間では時間の流れが違い、現実時間の三分の一に設定される。なので、通常の三倍の訓練をしても大丈夫なのだ（その理論はおかしい）。

訓練相手にはデータさえ入力すれば架空の存在ですら相手にすることが出来る。

龍也はこの機能のおかげで様々な強豪と戦い、実力をつけたのだ。「さて、俺が訓練時に使っていたデータは抜き終わったから明日は各自のISにインストールすればOKだな」

既に関係各所には許可をもらってある。勝手に専用機を弄るのはダメだからね。もつとも、是非ともやってくれ！ という声をもらったのだがね。

篠ノ之だけ専用機が無く打鉄もずっと借りることは出来ない為、このVRデバイスを使ってもらおう。

さあ、もう少しだけメンテナンスをしておこう。

ついでに訓練相手には……この辺りとあの辺りを……。

デバイスに繋いだキーボードを叩きながら思いつく限りの仮想敵のデータを入力していく。

入力しているデータを見てるとついニヤニヤしてしまう。  
ふふふ、明日はあの三人、絶対に泣くな。うん、おもしろそうだ。

翌日の放課後。いつもならアリーナでの訓練だが、VR訓練を行う  
為に今日は整備室にいた。

一夏とオルコット嬢には待機状態のISに昨晚、作成したデータ等  
をインストールしていく。篠ノ之には龍也がかつて使用していたV  
Rデバイスを貸し、設定をし直してもらっていた。

「どんな訓練になるんだろうな」

「そうですね。龍也さんが行っていた訓練ですから厳しそうな感じ  
ですわ」

数分もすれば作業が終わり、説明が始まる。

「それじゃあVR訓練の説明を行うぞ。篠ノ之はそのVRデバイスを  
着けてくれ。さ、一夏とオルコット嬢はISを展開して、コマンドV  
Rを起動してみてください。篠ノ之は画面に説明が出ているな？」

言われたとおりに二人はISを展開し、新しく追加されたVRを起  
動させた。

「お。龍也、フィールドの選択と敵機の戦闘タイプが表示されたぞ」

「ああ、フィールドは好きなのを選ぶといい。戦闘タイプは、一夏は  
オールラウンドを。オルコット嬢と篠ノ之は中距離タイプをそれぞ  
れ選んでくれ」

三人が選択したのを確認してから更に続ける。

「ようし、そうしたら訓練スタートというアイコンが目の前に出てい  
るな？ おっと、まだ押すなよ？ そのアイコンを押すと三人の意識  
は仮想空間に生成されたフィールドに飛ぶ。そこでは先ほど選択し  
たタイプの敵がお前たちを襲ってくるから、頑張って倒してくれ」

「なあ、これ俺達は自分のISを装着した状態で戦うんだよな？」

「そうだ。篠ノ之は俺が訓練に使っていた時の機体で設定してある。  
あと、三人の状況はモニターで確認してるから、問題があればこちら

からログアウトさせるので存分に訓練に集中してくれ」

問題があれば、という事に酷く不安になる三人だがなる様になれ！と訓練をスタートさせた。

龍也が手元のモニターで三人の状況を見ていく。

「うん、問題なく始まったな。さあ、ここからが地獄の始まりだぞ」ニヤニヤしながらまずは一夏から見ていくか。

一夏は広大な砂漠で佇んでいた。

V R系のゲームは多少やったことがあったので違和感はありませんでしたが、気温や湿度、体にかかる重力。白式を動かす、という感覚は実機と変わらないことに驚いていた。

凄いなあ……。でも、どんなISが相手なんだろうな。

オールラウンドタイプのISって言えば何があるんだろう。やば、もっと勉強しておけばよかったか？

などと彼は考えていたがこれは杞憂に終わる。

訓練が終わってから抗議を入れたが、龍也は『誰もISが相手なんて言っていないだろ？』とケロッとした顔で言うのだった。

その時、目の前に轟音が響き、砂煙が起った。

何か上空から着地したようだ。ハイパーセンサーでは熱量のある物体がいる、というのが分り、臨戦態勢を取る。

砂煙が晴れ、眼前に現れた敵を見てハア？ となった。

鋼の体にエメラルドグリーンに煌めくセンサーパーツ。

半身をマントのような物で覆ったソイツは右手に連結式のバズーカを持っていた。両肩にはブースターのような物が見て取れ、高機動型のような気がした。

はい、そうです。一夏の相手はISではなく、FAだったので。

「ちよ、完全に龍也の趣味じゃねえか！」

思わず叫ぶ一夏に、敵FA——三三式伍型 漸雷強襲装備型、以降、漸雷が反応し右手のライドカノンを放つ。

すぐさま回避するが漸雷は既に第二射、第三射を放っていた。

距離を取るべきか、詰めるべきか。一瞬の思考。

一夏は詰める方を選んだ。雪片を構え直し、漸雷へと向かう。

現世代の中でもトップクラスの速度を持つ白式であれば、相手の懐に飛び込むことなど造作も無い事である。

ただし、担い手が熟練者であればこそだが。

一夏は瞬時加速で一気に詰め寄るが、漸雷も両肩のエクステンダーブラスターを吹かし瞬時加速並みの速度で後退。ついでにライドカノンを放つという徹底ぶりだ。

遠距離戦になると分が悪くなるのが白式の難点である。拡張領域のソースが零落白夜によつて潰されており、追加武装ができず雪片二型だけなのが辛い所だ。

龍也ならきつとこの武装だけでも十二分に戦い勝利するんだろうなッ！ 悔しいがそこまでの力量は俺にはない。だったら、どうすればこいつの懐に潜りこんで斬れる ！！

前進すればその分、下がられる。相手はこちらの苦手な遠距離が得意な機体。どう攻略すべきか思考する。

ライドカノンから放たれる攻撃を龍也がしていた避け方を思い出しながら、円運動で避け、左右に動き射線をずらす。仮想空間だと、VRだと思っていたが白式は現実と同じように反応してくれていた。

それでも被弾することはあったが、致命傷には至っていない。まだまだSEもある。

単純に考えるなら、下がられる分さえも詰めるくらいに速度を上げて接近し叩き斬れば終わりだ。

「瞬時加速だけじゃ足りないっ！ もうあと一手、足りない！」

何度も瞬時加速を行ってはいるが、漸雷も負けずに同様の速さで下がり一定の距離をとるのだ。

このままでは、いずれ瞬時加速だけで自身のSEが枯渇して負けてしまう。そんな負け方をした日には龍也に何を言われるか分らない。ええい、ブラスターが一杯あるなら同じ数だけ加速出来たらいいのに！

ふと、そんな考えがよぎるが、龍也も瞬時加速を連続でやっていたことを思い出した。あの時は凄すぎてよく分からなかったが、今なら

少しだけ分る気がする。

「もしかして、龍也はブースターを個別に操作していた？」

だとすれば、まだまだ至らない自分にも同じことは出来るかもしれない。とにかく、試そう、と一夏は白式のブースターに注意を向けた。

あれ？ 白式つてブースターが二つしかない？ うーん、まあ物は試しにやるか！

漸雷の攻撃を避けながら、マニュアル操作で片方のブースターを止める。さてさて、どうなるか。賢明などというよりは、普通気づくのだが、二つのブースターでバランスを取り、前面に押ししていたのだからどうなるか、一目瞭然である。

「いっくぜええっ!!… って、うおおおおおっ!!」

思いつきりバランスを崩し、地面に激突であった。

体勢を崩した白式に狙い目だと判断した漸雷が全速力でライドカノンを放ちながら接近する。

崩れたままの一夏は体を起こそうとするが、ライドカノンの集中砲火を受け倒れたままだった。

立ち上がれない白式に近づき砲撃をやめる漸雷。白式は未だに立ち上がらない。

チャンスと左手に大型のナイフ、タクティカルナイフを握り、とどめを刺すべく振りかぶった。

その瞬間だ。

「うおおおおおおおっりやあああああっ!!」

一夏が咆哮をあげながら立ち上がり、零落白夜を発動させた雪片二型で漸雷を突き刺した。

胴体を貫かれた漸雷は痛みを訴えるかのようにセンサーパーツが点滅を繰り返す。

「はあああ、詰めれないなら、そつちから来てもらう方が好都合……と  
いうのは、怪我の功名かな？ ともかく、射程に捉えたぜ！」

今度はこちらが反撃だ、と雪片二型を漸雷から抜き、続けざまに袈裟切り、返す刃でさらに斬撃を放つ。

しかし、刺されたとはいえ未だに戦えるのか、ライドカノンをパー

ジシ、タクテイカルナイフを右手にも持ち左右のナイフで器用に白式の攻撃を受け流す。

「接近戦もできるか!」

オールラウンドタイプという設定でこの漸雷が現れたことを考えれば、できて当然と言えるか。となると、さっきの一撃で決めれなかったのは悔しいな。

渾身の一撃だった為にショックは大きいがその前にもっと気づくべきことが一夏にはあった。

ただでさえ、瞬時加速という移動方法はSEを消費する。それを何度使用したか。加えて、ライドカノンの集中砲火を受け、あまつさえ零落白夜まで使った。

さー、白式の残りSEはいくつかな?

まだまだその辺の管理は一夏にはちゃんとできていないのであった。

エネルギー管理ができていない彼は再び零落白夜を使おうとし、SEが切れて訓練終了の文字が表示された。

「……またやってしまったか」

エネルギー管理が難しい白式を扱うには、どの手段も突き詰めていかないが無駄に消費するだけになってしまう。

それが大きな課題でもあるのだが。

しかし、まだ仮想空間からログアウトすることはなかった。

「あれ?龍也、これで訓練は終わりじゃないのか?」

そう問いかけるが、返される答えは非情であった。

『一戦目はね。すぐさまに修理も終わりSEは補給されるし、相手の損傷も回復と今の訓練のデータを元に行動パターンが少し変わって、二戦目が始まるぜ』

「はー」

『とりあえず、今日は漸雷の耐久力を半分以下にしような。ちなみに、さっきのでまだ四分の一減っただけだからな! 頑張ってくれよ』

えー……と、確かに今、エネルギー容量を見ると満タンになっているし、何だか目の前には10カウントが始まっていた。

あれだけ苦勞してダメージを与えたと思ったらまだ四分の一だけとか。

そして、今日のクリア条件が半分以下。相手は戦う度に行動パターンが変わる？ これって、どんな無理ゲー？



ふふ、一夏君の絶望が見て取れるではないか。

龍也はモニターを見ながら至極悦に浸っていた。

このVR訓練の恐ろしさは、戦えば戦うほど相手がこちらの行動パターンを学習し、強くなっていくことだ。

何度、自分もこの訓練で泣いたことか。

一度有効だった戦術が次には崩され役に立たない。だから、常に新しい戦術が必要になってくる。どちらかというと、自分の中にどれだけ戦う為の手札が多いかが問題だ。

つまり、幾つもある攻め方や防御方法、戦術の型など、己がどれだけ理解し体現できるか、というわけだ。

少し前の事を思い出しながら、再び始まった一夏の様子を見始めた。

ま、精神が擦り切れる前にはログアウトさせてやらんとな。



## 十七話

織斑一夏は壁にもたれ疲れ果てていた。

隣には同じく憔悴しきった篠ノ之箒にセシリア・オルコットがいた。

三人は先ほどまで秋野龍也が提案したVR訓練を行い、とんでもない目に遭っていたのだ。

何度も繰り返される戦闘訓練。

敵はこちらの攻撃パターンを学習し、一枚も二枚も上の技術でこちらをねじ伏せにかかってくる。

対して、こちらはそれに対抗する手段の構築と実践を行わねばならない。

瞬時に判断をし、行動し続けるのはとても辛いことであった。

更に言えば、一つの戦闘訓練が終わるとすぐさま、両方の機体のエネルギーは補充され再開されるといふ鬼畜仕様。

そんな訓練をみっちり二時間ほど行っただから、例えVRでデータ上ではあったが疲れ果てるのも無理はなかった。

龍也は倒れている三人にタオルとぬるめのドリンクを渡しながら、今日の訓練の感想を聞いていた。

「龍也の趣味が全開だったけど、俺は瞬時加速の使い所がポイントかなあ、と思った」

「そうだな。あと、零落白夜も燃費が悪いからエネルギー管理をもっとできるようならう」

続けてオルコットが告げた。

「わたくしは、接近戦に持ち込ませない戦術をもう少し練らないといけませんわね……。早く偏向射撃を習得しなくては……」

「オルコット嬢はどっちかというところ、色んなタイプの敵との経験値を積み、戦術の幅が広がると思うけど。偏向射撃については、アドバイスがしにくいなー。適性はあるんだから、あとはきつかけ次第なんだらうけど。篠ノ之はどうだった？」

「……龍也、一体何なのだ。あのバイクのような形に変形する機体は」

「アレがそいつのウリなんだよ。中々楽しかっただろ？」

篠ノ之は複雑な表情のまままで続きを言った。

「中距離タイプという話だから、どんな相手かと思えばあんな変わり者とは思わなかったぞ。動きは速い。武器はマチェットだが、まさか指が武器になっているとは……。こちらも不慣れな機体だったので対応しにくかった」

そうか、と答えると一夏が篠ノ之に訊ねた。

「不慣れな機体って等はどうなISを使ってたんだ？」

「言ってもいいのか龍也？」

「いいさ、俺が説明する。今回、篠ノ之に使ってもらったのは現在、俺がブキヤで開発している機体の試作機だ。『轟雷』っていう機体なんだが、これが中々良いフレームアームズなんだよ」

強力な装甲を持ち、装備交換率も良く整備もしやすい。派生機もたくさん出たというフレームアームズ界ではとつても大切な存在なのだ。

一応、言っておくと篠ノ之が装着したのはガールの方の轟雷である。

「まあ、打鉄によく似てるな、と感じたが動かすとやはり違うものだな」

「だが、良い機体だったろ？」

うむ、と頷く篠ノ之に、思わず笑顔になる。

「……さて、強化訓練一日目が終了したわけだが、来週行われる対抗戦の前日まで実機とVR訓練をバランスよく行っていくぞ！」

一夏達はマジか……とぼやくのであった。



その後、龍也は自室で今日の訓練内容を纏めていた。

正直な意見を言うのと、思った以上に一夏は動けていたと考える。

やはり、問題は経験の無さだ。エネルギー管理にしろ、瞬時加速の使用にしろ、戦闘における場数が少ないので、切れるカードが少な

すぎる。

この辺りを強化してあげるだけで一皮むける気がするのだ。  
一つ気になることがあるとすれば、自分もそうだが妙にISとの  
マッチングが良いのだ。

ISの方がこちらに合わせてくれているように思えることもしば  
しば。

こう考えると、ISのコアが気になって仕方がない。

どうにかして、コアを一つ手に入れて解体したいな……。

そんなことを考えていると、突然、大きな声と騒音が聞こえた。  
おいおい、どこの部屋からだ？

慌てて部屋から出ると、一夏の部屋から嵐が飛び出してくるのが見  
えた。走り去っていく彼女の背を見ながら、後から出てきた一夏を捕  
まえ、事情を聞くことにした。

話を聞いていくと、呆れてしまった。

簡単にまとめるとこうだ。

一夏が昔、嵐と交わした約束があったのだが、どうやら彼と彼女で  
認識の齟齬があったようだ。

嵐の料理スキルがあがったら毎日、酢豚をおごってくれる、と一夏  
は覚えていたのだが、どう考えても日本で言う味噌汁を毎日のくんだり  
だ。

当然、嵐としては覚えてもらっていないことに関して、怒りがわく。  
怒った嵐と口喧嘩が始まり、一夏はうかつにも身体的な特徴の事で  
反撃をしてしまったのだ。

言われた嵐はバカ、一夏！ と叫び部屋から飛び出していった、と  
いう話だった。

「あのなあ、一夏さんや。どう考えてもお前が悪いぞ？」

約束に関しては嵐も回りくどくて悪いとは思いますが、一夏が言った言  
葉は決して口に出して良い物ではない。

そこは分っているのか、

「……あとで謝りに行ってくるよ。でも、約束に関してはちゃんと覚  
えてたつもりだったんだけどな」

この男、どうしてくれようか。

と、龍也は思うがここで自分が答えを言うのは、筋違いである。願わくば、一夏本人が気づくか、凰本人から改めて言うべき内容だ。

「そうだな、まずは謝って来い」

一夏の背中をポン、と押し凰が去った方に押しやってやった。

「ああ！ 行ってくる！」

そう言いながら駆けていく一夏を見届けると、龍也はやれやれ、と部屋に戻った。

しかし、次の日になって更に彼と彼女の仲が悪くなっているのを見て驚くのであった。

## 十八話

一夏強化訓練が始まってはや五日目。  
もうすぐクラス対抗戦の日がやってくる、という事で訓練にも熱が入っていた。

今はアリーナで実機での戦闘訓練が行われていた。この訓練が始まる前に龍也が言っていたフルタイムの試合で一夏が倒れずにいられるか、を見ていた。

バーゼラルドと白式は互いの攻撃範囲で攻め合っていた。

勿論、幾分か龍也は手を抜いているが、それでも一夏は彼の攻撃に対応できるようにできてきた。

相手をよく観察し、何をするか予測、対応手段の思考及び実行する能力が上がってきているのだ。

これも実機の訓練に合わせて行っていたVR訓練の賜物であった。

彼の成長に手ごたえを感じた龍也は笑みを浮かべた。

「なかなか良くなってきたじゃないか！」

「おかげさまで、なっ！」

一夏が斬撃を雪片二型で受け止めいなし、左の蹴りを放ちながら彼の言葉に返す。

バーゼラルドは後方に飛び下がり、体制を整えながら白式を見据えた。

あと、彼に必要なのは一つの事だった。

「二夏、あとお前に必要なのは『必殺の一撃』だ。ここで、という時に放つ己の持つ最高の技が欲しい」

つまり、こういうことだ、と龍也はバーゼラルドの兵装を一旦解除し、新たな武装を取り出した。

否、取り出したのではなく放出させた、という方が正確だろうか。

左右の手で剣指を造り、五芒星を描いた。胸部ユニットからは光が溢れる。

溢れる光を右手で掬い取ると、光は手に収束し熱量が増していく。そして、バーゼラルドが白式に向かって突貫した。

「はあああああつー！」

輝きを増した黄金の右手が白式に迫った。

まずい、どうすればいい！　そうか、あれがエネルギーの塊の攻撃なら。

一夏はとつさに零落白夜を発動させ、その右手の攻撃にカウンターを当てようとしたが、バーゼラルドが放つ必殺の一撃の前に雪片二型が碎け散った。

ダメか　!?

バーゼラルドの掌底が白式の胸部に叩きこまれる。

収束した熱量の籠った一撃は白式に残っていたシールドエネルギーの全てを奪い尽くす。

また、攻撃の衝撃は絶対防御でも吸収しきれず、一夏は後方に吹っ飛び、アリーナの壁に叩きつけられた。

かろうじて意識は保っていたが、白式はエネルギー切れで解除された。

その場で倒れ込んだ一夏に、バーゼラルドが手を貸し立たせる。

「これが、俺が作ったバーゼラルドの『必殺の一撃』だ」

「いててて……、強すぎだろ。六割残ってたシールドエネルギーが一撃で持っていかれたぞ？」

バーゼラルドを待機状態に戻し、説明をし始めた。

「アレは俺が好きゲームの主役機の必殺技を真似た物だ。無限の熱量を相手に叩きつけて、昇華させる、というのを、バーゼラルドのシールドエネルギーを任意の値で熱エネルギーに変換して叩きつける仕様にしたものだ。今のでこちらは八割弱を使ったよ」

これを聞いた一夏は、

「だけどき、零落白夜はシールドエネルギーを無効化するんだぜ？」

龍也のその攻撃も無効化できるんじゃないのか？」

「熱に変換して、掌底破を放つただけだから問題ないんじゃないかな？」

「えー……なんだよそれは」

ま、それは置いておいてと。

「龍也には必殺の一撃があるっていうのは分ったけど、俺には零落白

夜があるぜ？」

「確かに必殺技とは言えるかもしれないが、一夏はそれを使いこなせていない。だから、必殺の一撃にならないよ」

龍也は真剣な口調に一夏は身を強張らせた。

「織斑先生の様子にこそぞ、という時に零落白夜を使用し敵を倒す。それも一瞬のインパクトの瞬間に発動させるなどして、デメリットの自身のエネルギー消費を最小限に抑えるなどの制御が今のお前にはできない」

そう、確かに零落白夜は強力な単一能力だが、当てられなければ何の障害にもならない。

ましてIS初心者で、戦術に関しても最近ようやくマシになってきた一夏の攻撃など、タイマンであるなら、熟練の担い手にとってはさほど脅威にもならない。

それは一夏自身も痛感していた。

VR訓練の時でも相対するFAに零落白夜を当てたのは初日だけ。二日目からは完全に対応され、せいぜい十回に一回は擦れば良い程度。

「だから、一夏。一つ、俺が必殺技を享受しよう。付け焼刃になるが前のこれからのヒントにはなるだろう」



時間は過ぎ、ついにクラス対抗戦当日になった。

昨日までみっちり訓練を行った為、一夏は入学して一か月近くとは思えない動きができるようになった。

また、龍也から一つの技を授かり、何かしらの光明が見えたようだった。

そして、今から第一試合が始まろうとしていた。

観客席は生徒達の熱気に包まれていた。

「ねえ、龍也。一体どんな訓練をしていたの？」

そう尋ねるのは暫くの間、代表としての仕事で学園を留守にしてい

た刀奈だ。

?と書かれた扇子を広げながらこちらを見つめていた。

「うん? 俺がブキヤでやっていたV R訓練だよ。楯無も見たことあっただろ?」

「ああ……。あれね。龍也の事だから、対戦相手はF Aだったんでしょ?」

当たり前だろ? と返す隣でオルコットがジト目で彼を眺めていた。さらに隣では篠ノ之がオルコットを抑えるかのように座っていた。

「あ、あのお龍也さん。お隣の方はどなたでしようか?」

オルコットが刀奈に視線を向けながら、龍也に説明を求めている。

彼はああ、と彼女たちに紹介をした。

「彼女は二年生の更識楯無。この学園の生徒会長にして」

楯無は生徒会長と書かれた扇子を皆に見せ、彼の説明を奪った。

「生徒会長にして、龍也の婚約者よ」

彼女達ははあ? と感情を思いつきり現し、すぐに驚愕の声を上げていた。

特にオルコットは酷く、ショックのあまり白目をむき気絶していた。

「お、おいセシリア大丈夫か!!」

「あらあら。大変大変」

刀奈は驚愕! と書いた扇子で口元を隠しながら、心配そうな発言をするが、どう見てもニヤツと笑みを浮かべているようだった。

あなたが龍也に好意を寄せているのは知っているけど、この人は私の物だもんね。

ふふ、と笑う刀奈を尻目に龍也はやれやれ、と、これから始まる一戦目に目を移していた。

アリーナでは一夏と凰が対峙し睨みあっていた。

先日の言い合いでお互いにギクシャクしていたが、今はお互いに闘志に満ちた表情でいた。

「……鈴、全力で行くからな!」



「ええ、来なさい一夏！」

二人が声を上げたと同時に試合開始のゴングが鳴った。

『それでは両者、試合を開始してください!!』

アナウンスが聞こえたと同時に一夏は危険を感じ、雪片二型を構え防御態勢を取った。

来るのは衝撃、既に目の前には両方に刃が付いている青竜刀を持った凰がいた。

「へー……初撃をちゃんと防ぐなんてやるわね」

ぐぐつ、と押してくる凰に、負けじと雪片二型に力を込める。

「そりゃあ、この一週間みっちり鍛えられたからなっ！ まだまだ、これからだぜ！」

押し返し、素早く袈裟切りを放つが、凰もバトンのように青竜刀を振り回し斬撃を弾いていく。

「そうそう、一夏。知ってると思うけどISの絶対防御って完璧じゃないからね？」

「……知っているさ！ シールドエネルギーを突破する攻撃は本体にもダメージが行く、だろ！」

弾かれながらも態勢は崩さず、すぐに次の攻撃に移りながら、言葉を紡いだ。

この世の中にはシールドエネルギーを突破し、操縦者本人にダメージを与える装備もある、という事を龍也から教わっていたのだ。

困みにVR訓練ではブキヤが作ったという、その類の武器を見せてもらった。

それを見た一夏は彼に絶対、使わないでくれと泣いて嘆願したのは訓練が始まって三日目の事であった。

鈴がそんな事を言う、という事はアイツのIS『甲龍』にある、と思っっている。両肩にある非固定浮遊部位が怪しいか？

肩のスパイクも痛そうだが、気になる部位に注意をしながらも自分の戦術を脳内で組み立てていく。思考しながらも、凰がどんな攻撃、どんなスタイルなのか観察も欠かさない。

思考と行動、両方をこなしながら凰の攻撃をさばっていく。

VR訓練で色々なパターンの相手をしたのが実を結んだのか、しっかりと目で攻撃も追えている。

「どうした鈴！ 遠慮はいらないぜ！」

「っ！ ちよつとやれるからって調子に乗らないでよね！」

そう言うと、甲龍の肩がスライドし、球体パーツが露出する。

一夏は距離を取るために後退し、ついに来たか！ と攻撃に身構えたが、次の瞬間には機体に衝撃が走り、吹っ飛んだ。

「ぐっ！！」

吹っ飛ばせられながらも、スラスタをうまく使いすぐに体勢を整える。視線は甲龍を捉えたままだが、先ほどの攻撃は何か、と注視する。

危険に思っていた部位ではあったが、対応が出来なかった事に悔しさを覚えた。

だが、攻撃の正体はたった今の一撃で理解した。



観客席の篠ノ之が甲龍の攻撃に疑問を抱き、口に出していた。

「今のは肩のユニットからの攻撃なのか？」

「そう、衝撃砲だ。空間自体に圧力をかけ砲身を生成し、余剰で生じる衝撃自体を砲弾とする、第三世代型兵装だ」

一夏が体勢を整え、二撃、三撃目の衝撃砲を避けるのを見ながら龍也が応えていた。

「ち、ちなみに直線にしか飛ばせませんが、全方位に射撃可能ですわ！」

オルコットがようやく復帰したのか、彼の説明に付け加えていた。「ふむ……。そうなるに対応はどうするのがベストなのだろうか」

射角は全方位。どの位置にいても撃たれる可能性があるわけだが、それに刀奈が簡単よ、と答える。

「箒ちゃん、鈴ちゃんが衝撃砲を撃つときにどうしてるか、よく観察してみてください」

箒ちゃん、と呼ばれた事に少し気恥ずかしさを覚えながらも、注視してみる。

オルコットも同じように注意して見てみるが、すぐにその理由に気づいた。

戦場にいる一夏は衝撃砲を紙一重で躲し続けていた。

凰は致命的なダメージを与えられないことにイライラしており、若干、動きが荒くなっていた。

「よくもまあ、甲龍の龍咆を躲してくれるわね。砲弾も砲身も見えないのが特徴なの！」

怒気を孕んだ声だったが、一夏は何も言わず次から次へとくる衝撃砲をハイパーセンサーのアラートと同時に避け続け、勝機を得るべく思考していた。

幾ら砲身も砲弾も見えなからうが、視線を飛ばした先にしか撃てないなら、避けるのなんて容易いさ。

そう、必ず凰が視線を向けた先に衝撃砲が放たれていたのだ。

これに気づけたのは相手から目を離さず観察する、という事を忘れてなかったからだ。一夏はこの戦いが始まってからずっと凰を見ていた。

いやあ、鍛えられて良かったぜ。等と彼は考えているが、防御は完璧にできても攻撃を当てられなければ、いずれこちらの体力が切れて終わりだ。故に、そろそろ攻めに転じたかった。

やはりアレかな？

ここぞ、という時に使えと龍也と姉から言われた瞬時加速を用い、零落白夜の一撃をぶつける戦術。

加えて龍也から授かった技を出せれば、代表候補生にも勝てるはず、と考えていた。

自分と凰との実力の違いは戦う前から分かっている。だが、最後に差を無くすのは己の意思の強さである。勝つ、諦めない、という強い気持ちは時として奇跡を起こす。

やってやるぜ、と雪片二型を構え直し凰を見据えた。

視線は鋭く、闘志は未だに果てず、それを受けた彼女は思わずたじ

ろいだ。

う、今の一夏の眼、すごく……良い。  
等と思っているのだろうか。

「鈴っ！」

突然、名前を呼ばれドキツとする。

「勝ちに行かせてもらうぞっ!!」

彼の気概に圧倒されそうになるが、こちらも負けてはいられない。

「何言ってるの？ 勝つのはあたしよ！」

青竜刀を構え直し、迎え撃つ準備をした凰。

両者、一触即発といった場面となったが、突然、ハイパーセンサーが頭上からのアラートを告げた。

二人が同時に上を向いた時には、アリーナ全体に衝撃が走り、砂塵が舞った。

観客席にも轟音が鳴り、生徒たちはシートにしがみついて悲鳴をあげていた。

何があつたのか、二人は緊張を保ったままにする。

ハイパーセンサーは二つの熱源が目の前にいる、と二人に教えていたが、砂塵が晴れた先に見えたのは、二体の黒いISだった。

それを見た龍也は思わず席から立ち、自分の目を疑った。

二体のISの内、片方はよく知っている機体だったからだ。

「ヴァイスハイト……」

## 十九話

龍也は現れた二機のIS——特にヴァイスハイトに目を奪われていた。

オリジナルを再現し、尚且つ盗まれても良いようにとダミーの情報で作ってあった物ではなく、ベリルショットライフルを装備した強化型で再現されていたからだ。

原作設定ではT結晶という高エネルギー結晶体を用いたベリルウエポンの一つで、非常に強力な武装なのだ。

当然、現実世界にはそのような物は無いので、単純な高火力兵器としての運用なのだろうが、どれほどの威力を持っているのかは判断が付かない。

どうするべきか。

そんな事を考えるが、もう答えは決まっていた。

今の所、ISでフレームームズを再現しているのなんて、日本のブキヤしか無い訳である。それで、こんな物騒な事が起これば企業の責任問題になりかねない。

だから、彼はこう考えた。

さっさと叩き潰してコアから開発した奴のデータを見てやろう、と。

彼は隣にいる刀奈と視線を一度だけ合わせ、すぐに跳躍。空中でバーゼラルドを展開した。すると、情報パネルに一つの文章が映されていた。

文章を読み終えた龍也は驚いたが、気を引き締め直し一気に加速し、ヴァイスハイトらが突き破ったシールドの穴に飛び込んだ。

刀奈はやっぱり男の子よねえ……と呟きながら、アリーナの生徒達の安全を確保するために生徒会長として行動を始めるのだった。

中に飛び込んだバーゼラルドは上空で一度止まり、スラストシールドにセグメントライフル二丁を合体させ、胸部パーツに接続する。

更に、サイドとリアにプロペラントタンクを合計四基接続。IS一機分のエネルギーをセグメントライフルに高速充填させていく。

能力が何となく分るヴァイスハイトはバーゼラルドなら十分に対応が可能だが、その隣にいる異形のISは未知数すぎる。全力で行かせてもらおうか！

地上でまだ戸惑っている一夏と凰にプライベートチャネルですぐに離れるように伝える。

『一夏！ 凰！ 今すぐに離れる！ 上空からちよつと強めの砲撃を行おうっ！』

はっ、と二人は上空を見上げ、溜まりに溜め、今か今かと放たれるのを待っているバーゼラルドを認識した。

『は っ!! ちよ、ちよつと待て龍也！ お前、いつの間につ』  
『それに何よその反応！ 絶対やばいでしょ っ!!』

慌てながらも言われたとおりに、二人は二機のISからすぐさま離れる。

二機のISもバーゼラルドの熱源に気づいたのか、上を見るが同時に龍也は砲撃を放った。

「セグメントライフル、フルバーストオオオオオオツ !!」  
極太のビームが二機のISを丸々と飲み込み、砂塵が舞う。

数十秒の間、放射は続いたがプロペラントタンク四基分使い果たした所で砲撃は終わり、バーゼラルドからタンクがパージされた。

セグメントライフルも二丁ともこのフルバーストの為に改良されたのだが、砲身は焼けただれていた。

龍也は武装を量子空間に収納し、両手に巨大な手——インパクトナツクルを装備し、砂が晴れるのを待ちながらハイパーセンサーと目視からの情報を分析する。が、彼はすぐさま左に大きく移動した。

砂塵を吹き飛ばしながら、ヴァイスハイトが両手のライフルを放ちながら突っ込んできたのだ。

もう一機の方は粉々に砕けていたが、ヴァイスハイトの方はさすが重装甲型だけはあるのか、致命的なダメージは入っていなかった。「おいおい、強化されすぎじゃないか？ 今の砲撃に耐えるとは思いませんかったよ !!」

間違いなく従来のISなら破壊可能な攻撃だったのに、と苦笑する

龍也。

『秋野っ！貴様、何をしている !! 今の砲撃、軍用のIS並みだったぞ！ どういうつもりだ！』

ヴァイスハイトと対峙している中で、織斑先生からプライベートチャンネルで叱責が飛ぶ。

同時に山田先生からお叱りの声が上がっていた。

『秋野君っ！ 操縦者にも重傷を負わせるような攻撃でしたよ !! あんな攻撃、認められませんよ！』

二人の叱責は最もなのだが、それよりも龍也がアリーナ内に侵入した事に関してはお咎めが無いようであった。

『大丈夫ですよ、織斑先生に山田先生。こいつら、無人機ですから』  
そう、こいつらは無人機なのだ。バーゼラルドを展開した時に、コアから提示された文章が『人は乗ってませんよ。だから、一発でかいのをドーンと行きましょう！』という物だった。

……物騒なコアだなあ。とは、口が裂けても言えなかった。

『無人機……だと？ 秋野、このことは』

『先生たち限定のチャンネルで話してますし、他の人達は知らないのご安心を。では、引き続き俺はヴァイスハイトをぶっ壊しにかかりますので！』

まだ織斑先生は何か言いたそうだったが、通信関係は全てオフにし、未だに空で相対するヴァイスハイトを注視する。

さてさて。どう攻めますかね。

高火力のベリルショットライフル。重装甲のボディに機動力もある。

思考しながらも、相手の攻撃は雨の様に降り注ぐが、針を縫うように避けていく。

「——決めたぞ、今日はこのインパクトナックルで！ヴァイスハイトが鳴くまで殴るのをやめないっ !!」

全身のブースターを巧みに吹かし、緩急のつけた加速で詰め寄っていく。

ヴァイスハイトのAIも遠距離より近距離戦を好むのか、射撃をや

めてベリルショットライフルの下部についているブレードでの斬撃攻撃に切り替えてきた。

無人機特有の無機質な攻撃は必ず倒す、殺すことに特化していた為に非常に読みやすかった。

「悪いな、ヴァイスハイト。今度はちゃんと俺達の手で作ってやるからな」

彼は今、自分が抱いている感情を拳に籠め、固く握り、右のストレートを相手の武装を破壊しながらボディに叩き込んだ。

バーゼラルドが装備しているインパクトナックルだがオリジナルを再現する事に飽き足らず、バッテリーを内蔵させ、そこから特殊な力場を発生させるようにさせていたのだ。

言うなれば、オリジナルのベリルウエポンのような特性を持たせたのだ。

さらに、バーゼラルドの腕部にもブースターがあり、その加速もプラスされ恐ろしい勢いがあったのだ。

思わぬ威力にヴァイスハイトのセンサーが点滅する。まるで、人が泣くような印象であった。

だが、もう龍也は止まらなかつた。すう、と息を吸い吐くと同時に左のストレートを叩きこむ。相手が防御の態勢を取ろうとするが、その上から崩し、ひしやげていくヴァイスハイトの装甲。

次から次に繰り出されていくパンチのラッシュ。

だんだんと速度が上がっていき、ついには視認するのも難しいほどになっていた。

「うおおおおおっ！」

もはやヴァイスハイトはサンドバックのような的でしかなかった。

そして、最後の一撃が放たれる。

「これでええっ、ラストッ！ 喰らえよっ！ パイルバンカー !!」

右手のインパクトナックルから拳部分のパーツを杭型の部品に換装し、人でいう心臓部分に叩きつけ、杭を打ち込んだ。

打ち込まれた杭はヴァイスハイトの内部で爆発し、機体を四散させた。とっさにコアの一つを掠め取り即座に量子空間に収納する。



「すまないな。このコア、独自に調べさせてもらう」  
最後に残ったのは地上へとバラバラと降下していく金属と残った  
コアのみだった。

## 二十話

龍也がバーゼラルドを纏い飛び立ったのを見、刀奈は己の役目を全うすることにした。

生徒会長として、生徒の安全をまずは第一に。安全を揺るがすものは何人たりとも許さない。

その信条を胸に管制室にいる教師陣に状況を確認した。

『織斑先生、状況は？』

『更識か……。すまんが、システムがハッキングされ各ブロックの出入口の隔壁も閉められてしまっている。破壊してもかまわんから、他の教師陣と連携して避難誘導に当たってほしい』

『了解です。そちらはどうするつもりですか？』

『こっちはシステムの奪還を試みる』

幸いにも管制室にいる教師の中にはこの手に明るいのもおり、既に戦闘中だった。

刀奈は了解、と返しオルコット達に振り返り避難誘導を手伝ってもらえるよう協力を仰いだ。

「いいですね。これも淑女の務めです」

「ありがとうございます、セシリアちゃん。隔壁は壊しても良いからね♪」

承諾してくれたオルコットには近くの避難路に向かってもらおう、指示をした。

「箒ちゃんもお願いできるかしら？」

「私か？ 私には専用機も無いし何もできないと思いますが……」

「ううん。他の先生たちと一緒に誘導してくれるだけでいいのよ。私の名前を先生たちに言ってくれば分ってくれるわ」

そうは言うが、どうも彼女は一夏の事が気になるのか、そちらをチラリと見ていた。

なるほどねえ。彼を助けたいわけか。

「一夏の事が気になるのかしら？」

「え……」

「大丈夫よ。龍也が向かったし。それに見て」

刀奈が指さす光景を見た筈は愕然とした。

バーゼラルドが放った砲撃が、二機のISを飲み込んでいた。

ああ、そう言えば彼は規格外だったな、と。自分もISがあれば、彼のように助けにいけないだろうか……。

等と思いはするが、刀奈が言葉を続けた。

「ね？ あの人に任せておけば大丈夫だから。今は、あなたが出来る事を、ね？」

「……はい。分りました。私も手伝います」

「よろしい。じゃあ、行きましようか？」

そう言い、刀奈は篠ノ之を伴い避難誘導に向かった。

管制室では圧倒的な破壊力でISを破壊し、今もヴァイスハイトと交戦するバーゼラルドに織斑先生が頭を悩ませていた。隣にいる山田先生も苦虫を噛んだ様な顔だった。

軍用IS並みの破壊力。

乱入ISは無人機。

上にどう報告すればいいのか、と思い悩む傍らで、決着が着いていた。

パイルバンカーで爆発四散するヴァイスハイト。

「あのバカが……」

どう見ても競技用ISの持つ武装ではない。

幸いなのは、来賓客のいないイベントだった、という事だろうか。もしも、ここに学園外の人々がいたとしたら——。彼を欲する事は間違いないだろう。

「……詳しく聞かせてもらわなければな」

爆発四散するヴァイスハイト。

地上では一夏と凰がその光景に驚愕していた。

「す、すげえ……」

「何なのよ、アイツ……。おかしいわよ……」

だが、彼女は政府から言われていた事に内心、納得していた。彼に稽古をつけてもらえ、という指令に。

武装が強力なのはすぐ分るが、あまりにも早く戦闘が終わったのは彼自身の実力が高いからだ。

同時に一体、政府はどうして彼の存在を知っていたのか。一夏と同時期に発見された男性操縦者なのだ。

そんな二人の前にバーゼラルドがゆっくりと降り立った。龍也はバーゼラルドを待機状態にし、声をかけた。

「大丈夫そうだな」

二人ともI Sを待機状態にし、

「いやいや、お前が強すぎるんだよ」

「そうよ。何よあの武装は。最後のパイルバンカーなんか酷すぎでしょ」

「ふふん。良いだろ？」

ドヤ顔をする龍也。

「まあ、とりあえずアリーナから出ようかお二人さん。どうやら織斑先生から呼び出しがかかったみたいだしな」



管制室に集められたのは龍也に刀奈、一夏に凰だった。

織斑先生からは殺気が龍也に向けられているが、彼と刀奈は涼しい顔をしていた。代わりに周りの人間が震えていた。

山田先生が、おろおろとしながらも織斑先生に話を促した。

「……さて、まずは秋野。お前はどのようにして飛び込んだ」

「どうして、か？ 織斑先生、ここからの話はオフレコで構いませんか」

「構わない。更識に織斑、凰もいいな？」

三人が頷いて答えるのを見て、龍也は話し始めるのだった。

## 二十一話

龍也は全員が領いたことを確認してから説明口調で話し始めた。

「まず私はブキヤのテストパイロットです。社員でもあります」

これは確認事項だ。

「そして、最近、ブキヤのメインコンピュータがハッキングされることがありました。幸いにも、用意してあったダミーのFAのデータが盗まれただけで済みましたが、今回現れたヴァイスハイトはこのデータを用いて造られた可能性が高いです」

さて、と彼は一息を置いた。

「問題は、今回現れた乱入者の一機がヴァイスハイトだったことです」

そう言うと、一夏以外は気づいたのか表情が変わる。

「一夏以外は勘がよろしいようで。そう、責任問題になりかねない内容でした。ですので、ブキヤ社員としまして、問題の解決の為にバーゼラルドをまとい戦闘での処理を行った、という訳でございます」

ここまで言っても何が責任問題になるんだ、と一夏は頭にクエスチョンマークを出していたので、さらに補足をいれる。

「うーん、一夏はまだ分らないか？ 要するにIS学園としてブキヤに抗議を入れられると、企業として責任が発生するんだよ。だから、学園に被害が出る前に俺が即座に鎮圧したってわけだ」

「ああ……なるほど。ようやく分かったぜ」

「と、言っても学園に迷惑はかけたわけだから、企業としては結局、謝罪することにはなるんだがな」

被害としては、アリーナのシールドバリアを破ったのと、避難の際に破壊した隔壁の修理代程度で済んだわけだが、混乱を招いた、という意味では謝罪が必要にはなる。

その辺は、既に龍也からブキヤに連絡が入っており、後日、代表からの謝罪と修理をする、という話で学園長には伝わっている。

それでも、まだ織斑先生の眼はこちらを睨んでいた。

「……そういう事にしておこう。織斑と凰は部屋に戻って待機していろ」

二人はえっ、と口からこぼれた。

「いやいや、千冬姉。俺たちはまだ」

彼は聞きたいことがあったのだ。あのISの正体を。でも、彼女は許さなかった。

「聞こえなかったのか。部屋に戻って待機している」

つまり、ここからは聞くな、と言う事だ。

「……行こう、一夏。これ以上は聞けないみたいだし、ね」

「……く、分かったよ、出ていくよ」

一夏は納得しておらず、部屋に留まろうとしたが、凰が彼を連れ出した。

二人が出ていくのを見届けてから、織斑先生が言葉を紡いだ。

「……理由は分かったが、お前のバーゼラルドは危険すぎる」

ほう。と龍也は彼女の言いたいことを察する。

「ああ、あの別のISを破壊したセグメントライフルの威力についてでしょうか？ それともヴァイスハイトを四散させたパイルバンカーでしょうか？」

「両方だ。どちらも確実に軍用IS並みの攻撃だった。あんなものを使われては——」

「そりゃあ、競技用のISに使う攻撃じゃありませんし。無人機と分つていなければ使うことはありませんよ」

「当たり前だっ !! 直撃したISの残骸を見たか？ 装甲はひしゃげ、溶解し原型を留めていなかったんだぞ！ まともに残っていたのはコアだけだ。ヴァイスハイトとかいうISも、無事なのはコアだけだったんだぞ」

彼女の激高した声が部屋に響いた。山田先生はびくつ、としていたが同様の事を思っているのか龍也を見る目には非難の意思があった。確かに、現状の法律では軍用の開発は禁止されていたような気がするが、そんなものは建前に過ぎない。

実際は各国ともにISを軍用にし、兵装も作っているのだ。

「……それもこちらから言えば、当たり前なんですよ。だいたい、競技用も軍用も差はリミッターが付いているか否かだけじゃないですか。

競技用といえど、扱いを間違えれば人を殺めますよ」

競技用と言われる武装も、生身の人間に使えば殺める事が出来るものだ。だから、彼には彼女達の言葉は届かない。

「それに、こちらにも怒ってるんですよ。俺たちのFA型ISを！  
こんなふざけた事に使われたのがつ　!!」

今度は彼の怒気のこもった言葉が部屋を支配する。

「戦って分りましたけど、あのヴァイスハイトはダミーのデータよりもずっと高性能だった。武装も、できる限り再現されていた。こんな事ができるのは世界で一人しかない」

彼は確信していたのだ。この元凶を。

「だから、俺は抗議の意を込め、武装のリミッターを解除しました。  
……これでは納得されませんか？」

彼の回答に織斑先生と山田先生は答えなかった。

やりすぎだ、というのが彼女たちの思いだが、彼の怒りを肌を受け答えられなかったのだ。

大切な物を汚された、という彼の気持ちを理解した故に。

「……ところで、先生方。残骸から回収されたコアはどうされたんですか？」

「ここで今まで黙っていた刀奈が口を開いた。

「あれは……未登録のコアでした。今は、織斑先生と共にある場所に厳重に保管してあります」

「未登録のコア……。ますます元凶はあの天災、と考えるのが妥当の線ですね」

「……その事は秘匿事項だからな。お前たちは決して口外しないように。それから、秋野。分っているとは思うが」

「大丈夫です。通常の試合ではちゃんとリミッター解除はしませんから」

何なら誓約書を書いても良いですよ、と彼は付け加えた。

そして、彼女もこれ以上、追及することをやめ、

「……分かった。話は以上だ。部屋に戻れ。あとで、この件に関して学園側としての回答を全員に出す」



「了解しました。では、失礼します」

二人が出ていくのを見送り、山田先生が声をかける。

「……先輩、龍也君が取ったと思われるコアについては聞かなくて良かったんですか？」

彼女はヴァイスハイトの残骸を回収した時に気づいたのだ。これはコアが二つ搭載されていた形跡を発見したのだ。ただ、残骸に残されたのは一つだけだったので、彼が取ったのではないか、と思っていたのだ。

「……山田君。確証が無い事を聞いても、あいつは何も答えないさ。それに、政府から圧力がかかるだけだ」

今回の件に関してもそうだ。ブキヤからの回答の前に日本政府から圧力がかかったのだ。彼に自由にさせろ、と。

全く、政府は何を考えているんだ？ どうして秋野に自由にさせる？ 彼には何があるんだ？

彼女たちの疑問は募るばかりだった。

「……この一か月で私の心労は限界を迎えそうだ」

入学式が終わり、こんな濃密な一か月も現役時代に体験した記憶は彼女にはなかった。

山田先生も、

「そうですね……。私もダメかもしれません……」

生徒の前では気丈に振る舞ってはいるが、今年は各国からの男性操縦者についての情報をまわせやら、引き抜き、IS委員会との話し合い等々、表には出ない所での職務がありすぎたのだ。

そこにこの事件。

もう、彼女たちのストレスは溜まる一方だった。

はあ、とため息をつく山田先生を見ながら、織斑先生は内心、天災に向けて愚痴を放っていた。

……東、お前はとんでもない奴を敵にしたぞ。そのせいで、私もお前を恨んでしまいそうだ。

## 二十二話

篠ノ之束はモニターの前で唸っていた。

自身がこしらえた二体のIS。一体はゴーレムと名付け、一夏の成長を促すためにぶつけるつもりでいた。

もう一体はブキヤから抜き取ったデータから、FAを調べ改良したヴァイスハイト。コアも二個使う特別仕様で龍也を拉致する為に送り出したが、あっけなく撃墜されてしまった。

しかも、圧倒的な火力で、だ。

リアルタイムで見えていたが、最初の一撃。

「シールドエネルギー含め機体を動かすためのエネルギー、しかも一体分丸々をライフルにチャージし放つ……か。無茶苦茶だねえ。撃つした後、砲身は使い物にならなくなってるじゃない」

でも、まさかあの一撃でゴーレムがやられるとは思わなかったな。おかげで、いっくんには何もできなかったし。

「ヴァイスハイトだっけ。あれは耐えたわけだから、今後はFAを参考にしようかな」

装甲材に使ったのはゴーレムと同じだったが、コアを二個使ったことが幸いした。共振し、相乗効果が生まれバリア強度が上がったのだ。これは想定していた内容ではなかったので、思いもしない誤算だった。

「コアを二個使うことで相乗効果が生まれるのは分ったのは大きいけど、コアの製造は面倒だしな」

椅子に座りながら伸びをし、次の攻撃を見直した。

フレームアームズを調べていた際に、武装についても幾つか調べた。その中で興味を惹かれたのが『ベリルウエポン』と呼ばれるものだった。

さすがに全く同一のものを再現する事はできなかったが、それでも既存の武装よりも強力な武器に仕上がったはずだった。

それすらも、彼とバーゼラルドには届くことがなかった。

「コイツ……ちーちゃん並みに動くなあ」

続けてバーゼラルドが巨大な腕を用いてのラッシュユ。

「えーと、インパクトナツクルだっけか。ただの腕パーツだと思っただけど、おもしろいなー」

さらにハンドパーツを替えてのパイルバンカー。叩きつけ、爆発する仕様に彼女は興奮していた。

「ホント、容赦がないねえ」

喜々とした表情で一部始終を見終えた彼女は、改めて思った。

「欲しいなあ……」

彼とその愛機を。

圧倒的な力を手にすれば、自身の目的を叶える手段になるやもしれないから。

そんな彼女を眺める存在がいた。

あの束に存在を気付かせずに、周囲の空気に完全に溶け込み観察するかのように、彼女の様子を見ているだけ。

やはり、束博士は彼を欲するようになるか。いやー彼も面倒な存在に目を付けられましたね。

しばらくの間、それは彼女を見た後に忽然と姿を消した。

## 二十三話

ブキヤ地下アリーナ。ブキヤ所属のパイロットの訓練に、武装のテストがされるこの場所で今、二人の男が戦っていた。

別室では刀奈に篠ノ之、オルコット、凰が食い入るように見ていた。その後ろでは多数の機器を用い、データを取っているアキ達があった。

たくさんの人々が見守る中で、秋野龍也はスラスタ―内蔵の増加装甲を付けた新たなバーゼラルドを纏っていた。

織斑一夏は白式を使ってはいるのだが、両の腰にはバーゼラルドが使用していたプロペラントタンクを装備していた。

彼のISには後付け装備すらつけるスペースが無かったのだが、他の武装でも許可を出せば使用可能、という仕様を用いてプロペラントタンクを使っている。

二人は互いの獲物を持ち、広いアリーナ内を縦横無尽に駆け巡りながら斬り合っていた。

増加装甲をつけ重くなった、であろうバーゼラルドだが速さが更に上がっていた。

白式もプロペラントタンクをつけていることで、エネルギー管理能力に乏しい一夏でも、気にせずに瞬時加速を使いまくることが出来ていた。

さて、どうして二人が戦うことになったのか、それは数日前までさかのぼる。



龍也と刀奈が千冬達と別れて部屋に戻ってからすぐの事だった。

戸を叩く音がした為、誰が来たのか、と尋ねると一夏達だった。全員が真剣な眼差しでこちらをみていた。

何事だ、と龍也は思いながら声をかける。

「一夏に篠ノ之さん、凰さんにオルコット嬢か。お揃いでどうしたん

だ？」

「龍也。少し、中で話させてもらってもいいか」

そう言う彼の声は少々強張っていた。

ふむ、と龍也は全員を部屋に招き入れた。

中では刀奈が既に全員分の飲み物を用意し待っていた。

用意が早いな、と思いつながら椅子の数が足りないのので、ベッドに座ってもらったりし話を聞くことにした。

だが、その前に一夏は刀奈と初対面だったので紹介した。

「そうだ、一夏。話の前に楯無を紹介しておくよ。俺の同居人で、嫁になる予定の更識楯無だ」

「もう、龍也。嫁になる予定じゃなくて、嫁になるんです！ っと、IS学園の生徒会長もやっている更識楯無よ。もし、何か困ったことがあったら言って来てね、織斑君」

こう紹介するとひどく驚いていた。一体、どこに驚く要素があったのか分らない龍也だったが、周囲の人間はダメだ、コイツ、と脳内ツッコミを入れていた。

「で、一夏。話って何だ？」

「あのアリーナに乱入してきたISについてだ」

彼には十分な話が聞かされなかった。あの時も不満があった。納得できたわけではないのだ。だから、龍也に訊ねてきたのだ。

なるほど、自分だけ聞かされなかったのが不満だったのか。分からないことはない。

だが、知ってどうしたいんだろうな。

「一夏や皆もそうだが、それを知ってどうしたいんだ？」

「俺は……ISに触れてまだ少しだが、あいつ等が危険な存在だというのは分る。だから、巻き込まれただけで終わりたくないんだ。次に同じことが起きたら、誰かを護れるように、龍也の様にすぐに行動したいんだ」

一夏の言葉に皆が私たちも同じだ、と答えた。

刀奈は複雑な顔で彼らを見、龍也の服を引っ張った。

『どう答えるの？ この子達、かなり真剣よ』

そう言っているかのような眼で訴えるが、彼はにこやかな顔で応え、彼らに話し始めた。

「お前達の意味は分った。でも、まだ足りない」

足りない。彼はそう言ったのだ。

何が足りないのか。

「俺と同じように動きたい？ 力のないお前たちに何ができるんだ？」

言葉に伴う力が彼らにはまだ無い。まだまだ未熟なのだ。

「……確かに、俺にはまだお前のような力は持っていない未熟者だ。だけどっ！」

一夏の言葉と姿勢から彼は少なからずの意地と覚悟を感じ取った。単に不満だけがあるのなら言わないでおこう、と思っただが……今の段階なら及第点と言えるか？

しかし、一夏はヒーロー気質というか熱血漢というか。よし、もっと鍛えてやろう。

などと思いながら、

「ふっ……。及第点かな。良いだろう、教えてやるよ。あのISの正体を」

その言葉に一夏が喜び、先を促した。

「……初めに言っておくが、聞いたことは他言無用だぞ？ 他に漏らしたら……命は無いと思え」

一言脅しだけ入れておき続きを話す。

「さて、あのIS達は無人機だ。使われていたコアも未登録の物だったよ」

「無人機って……。ISは人が乗らないと動かないんだろ？」

続けてオルコット嬢が、

「使われたコアも未登録と言う事は、まさか……」

「そうね、あたしたちはISの全てを理解している訳じゃないし。そんな事ができるとすれば」

凰がオルコットの言葉に付け加え、最後に篠ノ之が言葉を紡いだ。

「……姉さんがこの事件を仕掛けた？」

そうだとすれば、と思うとあのアホ姉さんめ……と篠ノ之は唸っていた。

「だから、他言無用な」

龍也は用意してくれた飲み物に一口つけてから、念を押すように言った。

聞いてしまえばあつけない事実だが、内容は衝撃的なのだ。

無人で動くIS。それを製造できる篠ノ乃束。さすが天災というべきなのだろうか。

一夏も事実を知ることが出来、満足していた。

それを感じ、龍也が話を収束させるのに、

「と、いうわけでこの話はここまでな」

そう言うと、凰が一番に訊ねた。

「はいはい、最後に聞きたいんだけど、あんたのバーゼラルドが使ってた武装なんだけど、あれなによ？」

「あれは武装のリミッターを解除しただけだぞ。お前たちのISは知らないけど、俺のフレームアームズ型ISは基本、軍用と思ってもらっていいからな。普段はリミッターをつけて競技用の出力まで落としてる」

「……初耳なんですけども。龍也さん、それって大丈夫なんですの？」

オルコット嬢が言う意味はIS委員会等から法律違反云々とかで何か言われないのか、また各国から突かれなのか、という点である。

彼はふふ、と笑った。

「大丈夫だよ、オルコット嬢。その為にIS学園に来たんだよ」

どういう意味だろうか、とは訊ねなかった。

彼が続けて話してくれたからだ。

「IS学園にいれば各国からの干渉は避けることが出来る。IS委員会については……、まあ言ってしまうてもいいか。日本政府から圧力をかけてもらっている。俺の邪魔をするな、てな」

どうもこの発言はいけなかったのか、彼らは啞然としてしまってい

た。

ただ、オルコットと凰は龍也が政府と関係しているのを知っているので普通だったが。

「こら、龍也。あなたのそういう身分はおいそれと人に言うもんじやなかったでしょ？」

「そうは言うがな。こつちも説明するのつて面倒なんだよ、楯無さんや？ ま、俺はただの学生でもブキヤのテストパイロットだけでもない、という事。もちろん、この事も他言無用でお願いするよ」

刀奈に窘められるが、彼は気にせず少しの事実だけを伝え濁した。

「さ、本当に話は終わりね！」

パンツと手を叩き、完全に話を収束させ、別の話題を龍也は提供した。

「ところで、クラス対抗戦でゴールデンウィークのずれた休みが明後日から始まるけど、みんなは予定とか決まってるのかな？」

「俺は特に予定がないかな」

「私も無いな」

「ワタクシもないですわ」

「あたしもないわー」

一夏に篠ノ之、オルコット、凰が順番に予定がないと答えた。

すると、刀奈が、

「もしかして龍也、この子達も一緒に連れて行く気なのかしら？」

「ああ、そのつもりだ」

「……まああなたが良いって言うならいいけど」

彼女は呆れたように言うが、ぼそぼそと二人きりの時間が減っていく、と言っているのを龍也は聞いたが、埋め合わせはまたするから、というのを本当に小さな声で伝えた。

刀奈はしっかりと聞いたのか満足気な表情をした。

「そうか、予定は無しか。もし、なんだが良かったらブキヤと一緒に来ないか？」

え？ という顔をする面々に彼は、

「実はバーゼラルドの新武装の受領とテストがあるんだが、みんなに



手伝ってほしくてね。それに、ISを造ってる企業の見学って中々出来ないとと思うんだ。良い機会と思わないか？」

「まあ、確かにそうだな。でも、テストに付き合うつて何をすればいいんだ？」

一夏の問いに龍也は笑顔で言う。

「簡単だよ、俺と模擬戦してくればいいだけだから」

## 二十四話

遅れた休みの初日。本日は金曜日でIS学園の生徒以外は平日なので通常業務中だった。

ここブキヤも変わらず平常運転中だ。

ただ、一部社員だけが忙しく様々な機器を運んだりとしていた。その社員らを指揮していたのはアキであった。

「もうちよつとしたら龍也達が来るぞ！早く実験室に機材を持ち込めよつ！そこ、飛鳥ちゃん！テスト用の武装とバーゼラルドの新武装はどうなってる？！」

飛鳥と呼ばれた長い金髪の女性が台車に積まれた部品を運びながら応える。

「武装一式は地下アリーナに運んでありますよつ！アキ主任も早く運んでくださいね、龍也が模擬戦するって言ってるんですから！」

分かっているよ、とアキが返し運ぶべき機材を動かし始めた。

しかし、アイツも学園の同級生を連れてくるって言ってたが、自分の彼女であるロシア代表の楯無ちゃん、織斑君に篠ノ之博士の妹、イギリスと中国の代表候補生とか重要案件すぎるだろ。どうしてこつちに相談しないかなあ……。社長も胃が痛いから対応は全部こつちに振るし。

「あ~~~~~……胃が痛い」

腹をさすりながら運搬用のエレベーターのボタンを押すのであった。



IS学園正門前。

既にメンバーは揃っており(服装は制服)、そろそろ出発しようかと話していた所であった。

「そういや龍也。ここからブキヤまでは遠いのか？」

「そうだな、モノレールで街まで出て、そこから電車を乗り継ぐから一時間はかかるかな。でも、今日は迎えを呼んであるんだ」

迎え、という単語に刀奈がガタガタと体を震わせ始めた。

彼女の変化に一夏らは何事かと思ひ、声をかけるが彼女はマダシニタクナイ、マダシニタクナイ、ドレスキテカラシニタイ等と呟くだけだった。

「おい、秋野。楯無さんの様子がおかしいぞ ！！」

「……よっぽどあの迎えがトラウマになっているのか。我慢してくれ、楯無」

ナムーと言う彼の背後から轟音が近づいてきた。

「お、迎えが来たぞ」

彼が指差す方を見ると、リムジンが猛スピードで迫ってきていた。

「危ないですわ !!」

オルコットがどう見てもそのスピードではこちらにぶつかると思ひ叫ぶ。

が、龍也は大丈夫、と声をかけるとリムジンはドリフトをしながら、軽快にピタリと彼らの目の前に駐車した。

両サイドにはブキヤ、と大きく緑の文字で描かれ印象に残りやすかった。

運転席からは無精髭の体格の良いアメリカ人がスーツを靡かせながら降りてきた。

彼を見た瞬間、刀奈はこの世の終わりのような顔で龍也の袖にしがみついた。龍也はやれやれ、と思ひながら、彼を皆に紹介した。

「みんな、紹介するよ。この人はブキヤの研究スタッフでジェーンさんだ」

「やあ、IS学園の生徒諸君、おはよう。ジェーンって気軽に呼んでくれ。今日は僕がみんなを会社まで送らせてもらおうよ」

気さくな感じのするジェーンに一夏達は安堵感を覚えるが、刀奈の態度がどうして変貌したのか分らずじまだった。

尋ねようにも龍也が乗った乗った、と急かした為に誰も聞けずじまだった。

車内は小さいがさすがリムジンといった所でシートの座り心地は最高だった。

ジェーンが運転席から龍也の左右には楯無とオルコット、一夏の左右には篠ノ之と凰が座ったことを確認し、

「よし、じゃあ出発するぞ」

そう言った彼の言葉を最後に車内は静けさが支配した。

ジェーン。本名、パトリック・ジェーンは気さくな男性なのだが、残念な所が一つある。

猛烈に車の運転が危ないのだ。どう危ないのかと言えば、スピードが速すぎるのだ。カーブですら減速はギリギリの、さながらF1のよくな走りを公道でやってしまうのだ。

龍也は古くからジェーンと付き合い合っていたので慣れているが、刀奈は付き合いが浅い為、慣れていないのだ。

どうも自分がそういう運転をするならいいのだが、乗せてもらう立場になるとダメなのだ。

当然、一夏達は予想もしない運転に完全にグロッキー状態になり、ブキヤに着いた頃には真っ青な顔をしていたのであった。

運よく警察にも捕まらず、ブキヤに到着した一向。ジェーンは正面玄関で全員を降ろし、車を地下駐車場にまわしていた。

「みんな大丈夫か？」

龍也が真っ青な顔をしている面々を心配する。

が、誰もが大丈夫そうでは無かったので、一旦、ブキヤ社内の休憩スペースに案内することにした。

社内に入ると受付嬢がおり、本来なら必要な手続きがあるのだが龍也は社員で、事前に一夏達が来ることは知らせてあった為、早々に休憩スペースに着くことが出来た。

各フロアに休憩スペースがあるのだが、どこも広くスペースがとられており、各種ドリンクがサービスで飲めるようになっていた。

ひとまず全員をソファアに座らせ、龍也が水を用意し配るのであった。

「す、すまん龍也……」

「はは、ジエーンさんの運転はかなり荒いからなあ」

一夏は荒いってもんじゃないだろ、と愚痴をこぼす。

「まあまあ。とりあえずさ、みんなはここで休憩しててくれよ。俺は先にバーゼラルドを預けて戻ってくるからさ」

そう言う龍也に各々が了解、と返事をした。

返答を聞いた彼は休憩スペースを後にするのだった。



彼は建屋の三階にいた。ここがブキヤのIS部門の専用ルームである。

一つの階、全てがIS部門にあてがわれているのだ。

彼はアキを探し、見つけると挨拶にいった。アキの隣にはもう一人、見知った顔の社員もいるのだった。

「お疲れ様です、アキさん。ブライアンも来てたのか、約束の時間よりかなり早いな」

「イエーイ、タツヤツ！ アンタの頼みと聞いちゃ、居ても立っても居られなくてな。三時間も早く着いちゃったぜ」

「ホント、ブライアンの到着が早くてな。大急ぎで準備してる所に来るから邪魔で仕方なかったぜ !!」

「オイオイ、アキさんよ、そりゃあないぜ……」

オーバーアクションで残念がるブライアン。

彼は龍也の友人でブライアン・フィンチ。ブキヤ米国支部の開発主任である。

二十代後半ではあるが、米国支部での実質トップで、自他ともに認める天才なのだ。

また、奇抜な発想をする人間なのだが、彼がいなければバーゼラルドの完成は無かったであろう、と龍也に言わしめた人物なのだ。

「もうブライアンが来ているんだったら話が早いな。すまないが、コイツの解析をお願いしたい」

龍也はバーゼラルドを部分展開し、量子空間から一つの物を取り出

しブライアンに手渡した。

彼とアキは驚き、二度見し、

「オイオイ、タツヤさんや。コイツア、ISのコアじゃないか」

「そう。ネットワーク未登録のコアだ。完全に解体しちゃってもいいから、解析をお願いしたい」

「……使い物にならなくなっても良いってことだな？」

「おう。どうせ未登録のコアだ。本来なら存在しないものさ。好きにやってくれ」

「OK。それじゃ俺はコイツの解析作業を早速始めるぜ。いつもの部屋を借りるぜ、アキ！」

ひゃっほーい、と軽快に陽気なステップでブライアンがこちらに来た時に使う、専用の部屋に入っていくのであった。

彼が部屋に入っていく中、アキは龍也に尋ねていた。

「大丈夫なのか？」

「良いんですよ。既に報告してありましたけど、偶然、手に入れた物ですし。ブライアンなら解体まですればブラックボックスの部分も解析できるでしょう」

貴重なISコア。

今までも解析をしようとした企業はあるだろうが、如何せん、各国に配られたコアの数は決まっている為、おいそれと徹底的にやる、という行為はできないのであった。

篠ノ之束にしか分らないブラックボックス部分も、本気で、壊しても良い勢いでやれば、彼女ほど天才でなくても中身が分るかも知れない。

繰り返しになるが、各国に配られたコアの数は決まっている。だから、壊したりはできないのだ。

だが、龍也が持ってきたのは未登録のコア。どう扱ってもいいわけだ。

そういう訳で、彼はブライアンを米国支部から呼んで、完全解体を念頭に置いたコアの解析を依頼したのだった。

## 二十五話

龍也はアキと共に部屋を後にし、一夏達を迎えに行った。

彼らはようやく気分が良くなったのか、顔色が良くなっていた。

「お、気分は良くなったか皆の衆」

「おう、ようやくだぜ……。で、龍也、隣にいる人は？」

「ああ、こちらはアキさん。ブキヤ日本支部の開発主任だ」

龍也の紹介の後にアキさんが一歩前に出て彼らに挨拶をする。

「どうも、アキだ」

そう言われ、彼らは龍也がよくアキさん、と言っていた人物と知った。

ただ、刀奈だけは何度も会っているのであった。

「アキさん、一月振りですね。以前に使わせてもらったISは順調ですか？」

「ああ、君がデータ取りに参加してくれたおかげで開発のペースも進んだよ。あと二カ月ほどすれば完成できるんじゃないかな？」

ま、龍也がもつと頑張ってくれたら早いんだけどな、と彼の方を見るが、龍也はそしらぬ顔で流す。

彼とて今は学生の身なので時間があまり取れないのと、バーゼラルドの強化を優先している為に手がまわらないのだった。

「……まあ、いいか。さて、今日、君たちは我が社のIS部門の見学をするんだったね」

アキの声に一夏達はよろしくお願ひします、と揃って挨拶をし、一人ずつ自己紹介をしていった。

全員の紹介が終わってから、

「じゃあ、ルートとしては三階の研究室見て、製造の順番でいいか。龍也はどうするんだ？」

「俺はバーゼラルドの調整をやりたいから、先に地下に行くよ」

そう言い、龍也は一人地下へと向かっていった。

地下のアーリーナ横にある整備室に到着すると、既に飛鳥ら幾人かのスタッフが彼の到着を待っていた。

「お、飛鳥か。もう今日使う武装一式が搬入してあるんだな」

広々とした整備室には本日、バーゼラルドがテストする武装一式が運び込まれ鎮座していた。

リボルバー式の巨大キャノン、リボルビングバスターキャノン。

砲身部のユニットを取り換える事で様々な形態をとれる、セレクターライフル。

ベリルウエポンの再現はされていないが、ドウルガーIIというFAの武装である大型両刃剣ベルングルスと盾のヘルライネ。

そして、真ん中に展開されているバーゼラルドの左右に置かれた巨大な盾のブラストシールド。

用意されている武装を見て龍也は感嘆の声を上げていた。

「そりゃあ、スタッフ一同あなたのわがままを再現させてもらったんだから、それくらいは当然よね」

飛鳥を筆頭にスタッフ一同がうんうん、と頷いていた。

龍也は改めてブキヤのスタッフの優秀さと手際の良さを思い直し、作業に移ることにした。

「よしっ！一夏達が見学を終えてこっちに来るまでに、各武装のインストール作業を終わらせるぞ！」

彼の声を合図とし、各スタッフが待つてました、と作業を開始した。武装一式を量子化しISが使えるようにデータを入力してあげるにも、それなりの時間はかかるのだ。

今回、テストする武装の一部は特殊な運用もある為、そちらのデータも入力する必要がある非常に時間がかかる予定であった。

龍也もスタッフに交じり作業を始めた。



所変わって、見学をしている一夏達はブキヤが今後展開するFA型ISの研究室を見せてもらっていた。

その一室にはつい先日まで篠ノ之がVR訓練で使わせてもらっていたFA轟雷が鎮座していた。



「これは轟雷だったか……？」

彼女の誰に言った訳でもない独り言をアキが聞いたのか、

「お、箒ちゃんはよく知っているね。そう、これは轟雷だよ。今はFAの轟雷だけど、その内、プレミアムアームズガールFA Gの轟雷に変更予定なんだ」

FA Gとは、FAを美少女化したシリーズのことで、全身装甲のタイプではなく現在主流のISに近い見た目であった。

彼女達はこの見学が始まってすぐに模型の方で説明を受けていたので、どんな容姿になるのかは想像できた。

「これはISの世代で言うと、何世代目にあたるんですの？」

オルコットがアキに問いかけた。

「そうだねえ。一応は第三世代かな？　ただ武装の方がまだまだ開発中でね。今、必死になつてゐる所さ」

第三世代のISは操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵装を搭載することを想定した物となっているが、ブキヤはこの辺りの開発にてこずっていたのだ。

この点はバーゼラルド開発時にも問題になっていおり、現在は未搭載である。

「でも、そんな内部事情を部外者のあたしたちに言ってもいいわけ？」

鈴のもつともらしい意見にアキは苦笑するが、すぐに応える。

「まあ、このくらいは公に公開している情報だしね。本当にマズイ物は見せてないよ」

「そう。それならいいけど。あとで変な誓約書とか書かせないですよ」

「大丈夫、大丈夫。そんな事したら、アイツにどやされるよ」

アキはそう言いながら、次の場所へと彼らを案内していった。

案内されたのは、見学者用のルートであった。通路には大きなガラス窓があり、そこからはIS用の武装が製造されているのが見えた。

ブキヤが製造する武装類は特注品のパーツが多く、作業員が手作業で作成、組み立てをしていた。

一夏も食い入るように見ながら、アキに所々で質問をしていた。

「アキさん、ブキヤではIS自体の量産はしてないんですか？」

「そうだね。造っていないわけではないけど、量産となるとまだだね。近々、轟雷の量産が始まる予定だからそこからだね」

「へえ。FA型っていう特異なISを造ってるんだから、てっきり量産もしてるもんだと思ってました」

一夏が言うのも最もな話なのだ。

このブキヤという企業だが、販売しているIS用の武装が変態じみているのだ。巨大なドリル、三つ爪の削岩機のような物や龍也がよく使う合体する剣、ユナイトソードなど男ならロマン溢れる数々なのだが、如何せん、女性には不人気なのだ。

それでも、アサルトライフルなどは取り回しが良いように設計され、威力も非常に安定した性能ということで重宝されているのだ。

例えば、オルコットのISであるブルーティアーズに使われているスナイパーライフルは、ブキヤ製のスナイパーライフルを改造して搭載されているのだ。

他国の専用機にもブキヤの武装が支給されていることから、実はブキヤという社名は武器屋が正しいのでは？ と囁かれるほどである。

ただし、業界内だけでの話ではあるが。



その後、アキは一夏達を地下アリーナに案内した。

いよいよ本日のメインイベントであるバーゼラルドの武装テストの時間がやってきたのだ。

彼らが案内されたのは地下アリーナ横の整備室だ。

既に、龍也達は準備を整えており、彼らを待っていた。

「ん、見学は終わったのか」

「ああ！ 幾つか武装も見せてもらったけど、使ってみたいのがあったぜー！」

少々、興奮気味な一夏だが、自身のISである白式には拡張領域のスペースが空いておらず、後付装備ができない為に使えないと嘆いて

いた。

そこにアキが救いの手とも言える一言を放った。

「なんだ一夏君は知らないのかい？ ？ 他のISの武装も操縦者が許可を出せば使用はできるんだよ？ ？ この武装なら開発者権限で許可を出せるから使ってみるか？ ？」

一夏はな、なんだと……驚きのリアクションを取り、次の瞬間には、  
「ぜひっ、ぜひとも !!」

前のめりにアキに迫る。思わず後退する彼だが、龍也が興奮するなと彼を制した。

「分かった分かった。俺の武装テストに付き合ってくれた礼に後で何でも使わせてやるよ」

そう言う彼に約束したぞ、と強調する一夏。

はいはい、とあしらいながら龍也は、

「じゃあ、早速、一夏と模擬戦形式でテストを始めるか」

「よし、やってやるぜっー！」

二人は揃って整備室を出て行き、アリーナへと入場していった。

「あくあ、勝手に話を進めて……まったく。それじゃあ、データ取りを開始するぞ〜」

どうも最近是自己という存在を抜いて、話を進めるなくとアキは感じながら周囲のスタッフ達にデータ取りの準備をさせた。

刀奈達も男達がすぐに熱くなって私達をおいてけぼりにする、とある意味でアキと同じことを考えていた。

「……完全に私達の事を忘れてなかったかしら、あの二人」

「楯無さんに同意です。まったく、一夏の奴は」

「まあまあ、しようがないよ。龍也も今日の武装テストを楽しみにしていたからね」

そんな彼女達に飛鳥が声をかけながら近づいていた。

「あ、自己紹介がまだだったわね。私は月宮飛鳥。龍也と同じブキヤのテストパイロットよ」

彼女の名前を聞き、オルコットと凰、篠ノ之が反応し応えた。

「えつとまさか、あなたは」

「元日本代表の月宮飛鳥……なの？」

「まさかこんな所で……」

三人の問いに飛鳥はそうよ、と返した。

そう、何を隠そう彼女は一年前までは日本代表としてISを駆っていたのだ。当時は織斑千冬の次に刀や剣を使わせたら右に出る者はいない、と言わしめられていた。だが、理由を話すこともなく突如として代表を降り、表舞台からは姿を消していた彼女とここで会えるとは思ってもしなかったのだ。

「しかし、こんな所で元でも代表の方とお会いできるとは思いもしませんでしたわ。大抵は国が抱える施設やIS学園のような所での教導でしか会えないものとはばかり」

「いやあ、色々とおあってね」

色々、と言う飛鳥にむすつとした楯無が呟く。

「色々って、龍也の事だけじゃない」

「あら、刀奈ちゃん。決して龍也の為に代表を辞めたわけじゃないわよ？」

いじわるな笑みを浮かべながら、彼女は楯無を刀奈と呼んだ。

当然、篠ノ之達は？ とした表情をしていた。

「あつ！ ちよつと飛鳥、その呼び方はやめてって言ってるじゃないっ！」

「あら、ごめんね。まあ、良いじゃないの。気にしない気にしない。それよりも、龍也達の模擬戦が始まりそうよ」

言葉では謝っているが、悪びれる様子もなく彼女はさつきと整備室にある巨大モニターに注視する。

刀奈は肩を落しながら篠ノ之達に、あとで説明するわ、と語りモニターに視線を移した。

彼女達は、はあ……と二人に倣いモニターを見る。

既に彼らは準備万端でISを展開していた。

ただ、龍也のIS、バーゼラルドの姿が違っていた。



一夏は彼の I S の姿が変わっている事に驚いていた。

「龍也、その姿は……」

「フフ……これこそがバーゼラルドの真の姿と言っても過言ではない。その名も、ゼルファイカールツ !!」

全身に装甲兼推進器を内蔵したスラストアーマーの改良型を装着した、バーゼラルドの長所である高機動に、短所であった装甲の薄さを同時に強化する事のできる専用装備を装着した形態であった。

一夏はその見た目から、ロボット物でよくある強化合体を連想し羨ましく思った。それは顔に現れていたのか、龍也から羨ましいかっ！と言われる。

「当たり前じゃないかっ！ めちゃくちゃカッコイイじゃないかっ！」

「そうだろ、そうだろう。男ならそういう反応しないと困るな」

「何だよお前だけパワーアップしてて良いなあ」

「そう言うな。お前には『コレ』を貸すからさ」

龍也は両手にプロペラントタンクを量子空間から取り出し、一夏に近づいた。

彼はそれが以前に龍也が放ったセグメントライフルの攻撃に使われたユニットという事に気づく。

「龍也、それって」

「これはプロペラントタンク。これ一基で I S 一機分のエネルギーを補うくらいはある。二基、お前に貸すよ」

彼は装備の使用許可を出し、白式の両サイドにプロペラントタンクをセットした。

白式は使用許可を受けたそれを認識し、一夏にデータを表示させた。

龍也が言うように一基で一機分のエネルギーがあるのか、白式の S E は三倍に増えていた。

「良いのか？」

「ああ。それだけあればゼルファイカールのテストには十分だろ」

つまるところ、それだけ無いとテストにならない、と彼は言っているのだ。一夏も今の発言の意味は理解したのか、少しカチンときた。「ほほう……。まあ、これだけあれば零落白夜も使い放題だし、すぐにお前を倒せるな」

「ならやってみてくれ。お前の今持てる全てを見せろっ！」

龍也が挑発しながらバックステップで距離を取った。

そして、互いに愛用の刀と雪片二型を構え戦闘態勢を取る。

「行くぞ、一夏っ！」

「ああ、来い龍也っ！」

こうして二人の戦いは始まったのだ。

## 二十六話

対峙するゼルフィカールと白式。

真つ先に動いたのは龍也だ。

「ゼルフィカールッ !! お前の力を示せっ !!」

全身のスラスターを吹かし、勢いよく前に出た。その速さは既にバーゼラルドを超えており、瞬く間に龍也は詰めていた。

一夏はその速さに驚きながらも、眼の前に振りかかる刃を雪片二型で受け止めた。

速さが乗った一太刀の重さに彼は歯を食いしぼる。

速いし、重すぎるっ。

そう思う彼だが、訓練の賜物か次の動きは早かった。

受け流しながら自身は龍也から見て左を抜けるように移動、雪片二型を左片手だけで握り、左から振り向きざまに彼の背中を斬ろうと攻撃をしかける。

龍也は前方に跳躍し、彼の攻撃を避け着地と同時に方向転換。一夏を見据え、次の手を繰り出す。

放つは自身が最も得意とする技。

すっ、と左手を腰に当てると刀の鞘が出現する。素早く納刀し同時に突貫する。

「抜刀術……。龍也は少し本気みたいね」

モニターで観戦している刀奈が言う。飛鳥もそうだね、と頷いていた。

対する一夏はその技を訓練中に何度も受けていた為、動きを見ただけで一瞬、体が硬直した。

だが、すぐに体に鞭を打ち自身も同じように抜刀術の構えを取る。

雪片二型には鞘がないので左手で刃を握ってだが。

あの技は龍也の十八番。今度こそ、止めて見せるっ。

一夏は訓練中にこの技を止めることが出来ず、いつも吹っ飛ばされていた。

きつと、一夏は今度こそ、とか思っているんだろうが甘いぞ。

龍也は瞬時加速で更にスピードをあげ、射程距離に一夏を捉えようと  
思いつき右足で地を踏み込み、抜刀する。

秋野流剣技の壱の型である抜刀術・一閃だ。見る人によっては雷光  
のようだった、と称される技だ。

「……だああっ !!」

一夏が咆哮の如く叫びながら、抜刀する。

龍也の方が攻撃速度は速かったが、何とかタイミングを合わせるこ  
とができたのか、重い金属音が響きつばぜり合いになった。

内心、龍也は感心していた。

「……よくタイミングを合わせたな一夏」

「お前に厳しく鍛えられたからな、これくらいはそろそろできない  
とっ」

巧くいったことに笑みを浮かべながら一夏がそう言う。

「ま、その抜刀の仕方を教えたのは俺だけだね」

ISを駆る時の一夏には幾つか欠点がある。それはまだ経験不足  
故の欠点がほとんどだが、龍也が一番気にした点は必殺技だった。

「……ここぞ、という時の技。」

必ずしもではないが、熟練のIS操縦者は最も自信とする技（とい  
うべきか、テクニク）を持っている。

一夏を鍛え上げていた時に、この点を指摘し一つの技を与えたの  
だ。

それが、鞘のない雪片二型での抜刀術。

雪片二型の根元を左手で掴み、ひっかけるような形で抜刀。ISの  
パワーアシストを利用してはいるが、目にも止まらない速さで放つこ  
とが出来、教えた龍也からも才能がある、と太鼓判を押された技であ  
る。

……しかし、これが俺の好きなライトノベルの主人公の技というの  
は、口が裂けても言えないな。

フルフェイスの中で龍也は苦笑していた。

そう、彼が使う剣技には架空の作品の技も幾つか再現したものがあ  
るのだ。父親から継いだ剣技もあるが……。まあ、この話はまたどこ



かで。

龍也は表情を改め、このつばぜり合いを終わらせる為に動く。

「一夏、ついて来いよっー！」

左右の腕部ブラスターを吹かし、一夏の剣を弾きながら左足で白式を蹴り飛ばす。

一夏はとつさに自ら後ろに飛びダメージは軽減させたが、反撃を行おうと体勢を整えた先には彼の姿が消えていた。

モニターしている者たちも龍也が消えた事に驚いていた。

「画面から見えなくなったぞ？」

篠ノ之の言葉にオルコットや嵐も同様の事を話す。

「一夏さんに蹴りを入れた瞬間に消えたような……」

「ええ。蹴って後ろに飛んだ様な気もしたけど……」

「消えたんじゃないかって、あのアリーナ内を縦横無尽に飛び交っているんだよ」

そう言うのはアキさんだ。

彼はスタッフに超スローカメラの映像を出すように指示を出した。

大画面の一部にワイプで超スローカメラの映像が映し出される。

場面はゼルファイカールが白式に蹴りを放った後だ。命中したと同時に、全身のスラスター及びブラスターが点火し物凄いスピードで飛び上がったのだ。

次にアリーナ全体を俯瞰している映像に切り替わったが、何やら一夏の周囲を高速で動き回っているのか、残像のような物が映っていた。

「アレが増加装甲のスラスターのリミッターを外したゼルファイカールの速度だよ。一夏君はハイパーセンサーでギリギリ追いかけるんじゃないかな？」

語るアキさんの表情は不機嫌そうだった。

刀奈が彼の表情に疑問を持ち、尋ねる。

「アキさん、何だか機嫌が悪いようだけど何か？」

「ん……いやあね、楯無ちゃん。アイツ、ゼルファイカールに使ってる増加装甲が試作機だったこと忘れてるんだよ。リミッター解除しての

運用なんて考えてないから、その内、爆散すると思う」

だが、誰も爆散することには不安を感じず、ただスタッフ一同が頷き嘆く。

「あのアーマー作るの手間なんですよね……試作機だから製造ラインの確保もしてないし……」

「使ってるスラスタもワンオフ品だからなあ。アレ造ってる職人さん、今は他を造ってるから次の注文まで何か月か待ちかな……」

等と不満を口々にする中で誰一人として龍也本人の心配をしない彼らだった。

刀奈達も聞けば必ず、

『だって、龍也だしなあ。死にはしないだろう』

と返すだろう。それだけ彼は別格なのであった。

——そんな事は置いておき、一夏はハイパーセンサーによる視覚強化で何とか龍也を捉えていた。

「ついて来いってこういう事がよっー！」

縦横無尽に駆け回るゼルファイカールを何とか視界におさめるべく、瞬時加速で追いつがろうとするが直線的な動きでしかない動きでは、高速でターンし動き続ける彼に追いつけない。

技術として、瞬時加速によるターンはあるがマスターしている人物は指で数える方が早い。

龍也がいともたやすくやっているのは、全身の増加装甲部のスラスタがフレキシブルに動き、オートで各出力を調整しているからだ。

さてさて、一夏よ。どうするかな？

こういう状況での仮想訓練は彼に施してきた。

だから、一夏はこうすることにした。

縦横無尽に動く龍也に対して彼が取った行動は……。

追いつけないなら、向こうの攻撃の瞬間を狙うっ。

一夏はいつでも零落白夜を発動できるように、ハイパーセンサーで彼の動きを追い続ける。

龍也は待ちの戦法に移ったことを評価した。

「そう、むやみに動く必要は無い。エネルギーがあるからと瞬時加速

の多様をすれば、ここぞという時に決定打を打てなくなる。だから、向こうが来るのを待てばいい」

高速で移動しながら、彼の呟きは一夏にしか聞こえていない。

「ああ、あの漸雷との訓練で得た俺の戦い方だ」

「俺もゼルファイカールの限界スピードを体感できたし、仕掛けさせてもらうぞ」

龍也は刀を収納し、大型両刃剣ベルングルストを持ち一夏を討つべく動きを変えた。

彼の周囲を、円を描くように移動していたが一夏の真上に飛び上がり、剣を上段に構える。

「上からー！」

一夏は視線を上げ、剣を下段に構える。

同時に零落白夜を発動。雪片二型の刀身が展開しまばゆい白の輝きが刃を形成する。

「はああああああっ！ 一刀おおおっ両断うっ！！」

龍也が全てのスラストを上に向け一気に噴射し、地上へと高速で落下していく。

「うおおおおおっー！」

落下してくる龍也の刃に合わせるべく、剣を振り上げる。

重なり合う刃と刃。

ぶつかり合う金属音がアリーナを支配する。

だが、僅かに均衡したかに思えたそれも、零落白夜の刃がベルングルストの刃を砕いていく。

砕かれていく刃を見て一夏は勝てる、と思ったが、

「浮かれるなよ一夏っ！！」

砕かれた刀身だが、このベルングルスト。ユナイトソードを元に開発されている。

だから、当然ギミックもあるのだが、これを知るのは彼とスタッフのみ。故に、一夏は斬られた。

「えっ……」

龍也が地上に着いたと同時に、胸部と腹部をX字に斬られ、絶対防

御が発動しSEが一気に減少。その事実を受け止められず、一夏は龍也の手に持つ武器を二度見した。

彼が両手に握っていたのはベルングルストを分解した細剣リハル。

「……相手の獲物が一つとは思わないことだ。こんなギミックを隠し持ってるかもしれないしな」

最後に覚えておけよ、と言いながら返す刃で更に攻撃し白式の大量にあったエネルギーを尽かせた。

「……く、分かったよ」

悔し気な顔をする一夏だが、自身の負けを認めて白式を解除した。

「勝ったと思っただけどなあゝ」

「良い筋にはなってきたよ。あと一年、ちゃんと訓練すればもっと強くなれるさ」

そう語る龍也もゼルフィカールを解除し笑っていた。

## 二十七話

模擬戦を終えた二人だが、何故か正座をさせられていた。

「え、えーと……楯無さん。一体これは……」

笑顔なのだが妙な威圧感を出す彼女に龍也は押されていた。

一夏も篠ノ之と凰の威圧にたじたじとしていた。

そんな彼女を見る周りの人達は悲哀の情を示していた。

「うん？ 言いたいことは分らないかしら？」

いや、そう言われても思い当たる節が無いんだが……。

「い、いや……本当に分らないんだが……」

「ふうん、そんな事を言っちゃうんだ」

刀奈は目を細める。

思わず彼はビクツとしてしまう。同時に危険信号を感じ取った。

やばい。刀奈が超怒ってる。俺は何をやったんだ？

思考を活性化させるが思い当たる節が無く、気ばかりが焦ってしま  
う。

そんな彼に彼女は、

「……本当に分らないのね。龍也って時々そういう事あるわよねえ」

「も、申し訳ない」

「まったく。あのね、私たちの事を放っておいて勝手に模擬戦始めた  
でしょ？」

「あ……」

それに篠ノ之と凰もうんうん、と頷いていた。

「……なあ、龍也。これ、俺達どうなるんだ？」

「……一夏さんや。俺にはいい案が浮かばない」

最早、彼らには彼女達を鎮める方法を思いつくことは出来なかつ  
た。

「だから、ね。龍也、ちよっと私たちに付き合ってもらえる？」

「……はい」

有無を言わせない雰囲気肯定の返事しか出来なかった。

「右に避ける一夏っ！」

龍也の声に反応し、一夏は白式のスラストスターをフル稼働させ右に体を飛ばす。先ほどまでいた場所には衝撃音と共に床が黒くにじんでいた。

「チツ、避けられたか」

篠ノ之が悔しそうに呟くが、手に持っている獲物を再び構え狙いを一夏につけ直す。

「あ、危なかったっ。助かったぜ、龍也」

「言っている間に二射目と他の攻撃が来るぞ、足を止めるなっ！」

二人はアリーナ内を逃げ続けた。どうしてこうなかったのか、模擬戦をやっているのは彼女達の申し出であったのだが、彼らに許されたのは防御と回避のみだった。

……断るなんてできなかったもんな。

龍也はバーゼラルドのフォトンブースターを出力調整しながら、アリーナ内を動き続けていた。

さすがに先ほどの模擬戦でゼルファイカールパーツは限界だった為に、今回は装備できなかつた。

一夏も彼の言葉通りに動き続けた。

「箒ちゃんはそのままセレクターライフルの各種テストをお願いね。鈴ちゃんは龍砲で追撃ね。セシリアちゃん、どんどん撃っちゃっていわよ」

刀奈の指示に篠ノ之は了解、と答えハウザーモードのセレクターライフルを一夏に向けて放つ。

「さあ、一夏！喰らいなさいっ！」

凰も龍砲による追撃を一夏に放ちながら、手には双天牙月を握り近距離戦に持ち込もうと移動していた。

オルコットも両手でリボルビングバスターキャノンをしつかり保持し、狙いをつけながらトリガーを弾く。

想像以上に反動が少ない事に驚きながらも、弾道はまっすぐ龍也を

捉えていた。

彼は避けるつもりでいたが、その行動は他者によって阻まれた。

「避けるなんてさせてあげないからね♪」

リボルビングバスターキャノンの攻撃に合わせるかのように、刀奈がミステリアス・レイディのランス型武装である蒼流旋で回避行動を邪魔してきた。

高速で放たれる突きに右手に展開したユナイトソードで防御をするが足止めをくらい、バスターキャノンの攻撃にも防御の一手をとらざるを得なかった。

「ヘルライネツ ー！」

致し方なく龍也は大盾を展開。左手に持ちバスターキャノンの攻撃を受ける。重い衝撃が左腕に伝わるがヘルライネには傷一つついていなかった。

「まだまだですわっ ー！行きなさい、ブルー・ティアーズ ー！」

四基のティアーズが龍也を討つべく宙を舞う。それだけにはとどまらず、

「続けてこちらも行きますわ」

自動でリボルバーが回転し次弾の装填が終わっていたバスターキャノンの引き金を弾く。

今度は連続射撃、三発で彼を狙い撃った。

「く、連続で受けるのはキツイツ ー！！」

いくら頑丈に造ってある盾といえども、連続で同じ場所に受けるのは良くない。

多少の無理はしてでも避ける。

後方に瞬時加速で下がりつつ、ブルー・ティアーズの攻撃は最小限で避ける、もしくはユナイトソードで受けるなどして、ダメージは最小限に留める。が、そんな動きをしながらも厄介な刀奈に対してはヘルライネを向け、何と飛ばしたのだ。

「盾を飛ばした ー!？」

彼女は蒼流旋で盾を弾こうとするが、それは悪手になった。

飛んできたヘルライネの先端がクロー状に展開し、蒼流旋を掴んだ

のだ。

まさか、盾にそんなギミックがあるとは思ってもいなかった。

「盾すら武器にするなんて！　ねえ、龍也これもF Aの再現なのよね！」

クローが蒼流旋に深く食い込んでいた為、刀奈は武器を捨て後ろに下がる。

「攻防一体の盾、それがヘルライネ！　そう、これも再現武器だ！」

一応、盾による防御行為という力技で刀奈の武器を破壊したが、状況は芳しくなかった。

……俺の前方には刀奈とオルコット嬢。右の方では篠ノ之と凰が一夏を廻り続けているか。……バーゼラルドのS Eはまだ七割残っているが、このまま防御ばかりの戦いは辛いぞ。

その後、数十分後に白式のS Eが。そこから更に数十分経った後によくやくバーゼラルドのS Eが無くなり模擬戦は終了するのであった。

戦い終わった後の彼女達の表情は妙にすつきりとしていた。

代わりに男二人は疲れ切って倒れるのみであった。



そんな彼らの模擬戦をみていたアキや飛鳥であったが、途中で社長からの呼び出しを受け、社長室に来ていた。

室内では高そうな椅子と机に向かい、大量に積まれた書類に目を通しつつ、重要案件のメールに返信作業をしている白髪に一房だけ黒が混じった若い男性がいた。

隣にはスーツ姿の黒髪ロングの女性が、頑張れ、頑張れと何故かエールを送りながら佇んでいた。

「……社長の仕事量は良いとして、奥様——副社長の頑張れエールは何とかならないんでしょうか」

飛鳥が呆れてアキに言うが、



「もはやブキヤ名物だからなあ。佐山社長と運切きだきり副社長のアレは。諦めよう」

彼が応えると、佐山は二人に話しかけた。

「……アキ君に飛鳥君。この運切君の頑張れエールを邪険にはしていないよ。私はこれが無いとやれない性分だね。まあ、それは置いておいてだ。二人には少し相談事があってね」

佐山は山積みになっていた書類の中から一枚の紙を取り出し、二人に渡すように運切に言う。

「はい、アキさんに飛鳥さん。これを読んでどう思ったか、まずは率直な感想を言って欲しいんだ」

そう言われ書類に目を通すが、二人は内容に眩暈をした。

「あの、社長。これは……無理です」

「いやあ、これはさすがに受けられないですね」

「そうだな。そう言うのが普通の感覚だ」

二人が否定の意見をするのは最もだった。

どんな内容か簡単に言うと、フランスのデユノア社からでFA型ISの生産ラインを提供する代わりに技術提供を求める、という内容であった。

デユノア社と言えば、量産型ISでは世界第三位のシェアを誇る企業である。そのIS、ラファール・リヴァイヴは第二世代型であるにもかかわらず、第三世代に引けをとらない優秀な能力を秘めたものだ。扱いやすく、多くの国で採用されているISでもある。

だが、最近業績が落ちてきており、第三世代の開発も遅れている事で陰りも見えている所であった。

そんな所からこんな内容を貰っても、こちらは何にも得にならない。

ブキヤ自体はもうすぐFA型IS轟雷の生産ラインが整いつつあり、他のFA型ISの製造についても話が進んでいる段階であったからだ。

また、何よりも向こうが欲しいのはこちらのFA型ISの稼働データだけであることは容易に想像ができていた。

しかし、佐山の表情は真剣な物であった。

「だが、これは訳ありだね。もう一枚、コレを見てくれないか」  
追加でもう一枚の書類を彼らに見せる佐山。

それは写真だった。鮮明ではなく、少しモザイクがかかっていた。  
目を凝らして見ると、映っているのは漆黒のISだった。両肩に  
キャノン砲を携え、多数のラファールを屠っていた。

うーん、と唸りながらアキがにらめっこしていると、急に彼の顔色  
が悪くなった。

「……社長、この機体もしかして」

「さすがは開発主任のアキ君だ。気づいてくれて何よりだ」

「えーと、すみません。私には黒いISとしか認識できないんですが」  
「飛鳥さん、そのISをよく見てください。見たことありませんか  
？」

運切に言われ再度、眼をこらす飛鳥。

うーん、そう言われてもなあ。何となく両肩のキャノンがM・S・  
Gのフリースタイル・バズーカに似てなくもないけど……。あとは、  
やたらブースターのようなが見えるなあ。

そこまで思考してからあれ？ と彼女は首をかしげた。

「……あの、これってもしかしてバーゼラルドですか？」

彼女の行きついた答えに三人は肯定の相槌をした。

「バーゼラルド砲撃戦仕様。両肩にイオンレーザーカノンを装着した  
タイプだ。でも、これはまだペーパープランで製造なんてしていない  
んだが」

神妙な顔つきで喋るアキだが、佐山が訳ありと言った事とコレが関  
係しているのか、と思うと頭が痛くなっていた。

「社長、もしかしてデユノア社は」

「ああ、我が社が行った事だとして言ってきたら」

「やっぱり……。厄介な問題が舞い込んできましたね」

「そこで、だ。アキ君には内外で情報の漏えいがあったのか確認して  
くれ。飛鳥君はフランス現地に飛んで事実確認をお願いしたい」

「分かりました。ちょうど、ブライアンも来ているので彼にも手伝って

もらいます」

「私の方も了解しました。現地ではバックアップしてくれる人は誰かいるんですか？」

「問題ない。現地には君もよく知っている者がバックアップしてくれる。すまないが、今から飛んでくれないだろうか」

佐山の問いに飛鳥は了解です、と応えるのであった。

さて、一体この件はどうなっていくのだろうか。

## 二十八話

模擬戦を終えた六人が整備室に戻ると、アキと飛鳥がいないう事に気づく。

どこに行つたかを龍也がスタッフに尋ねた。

「なあ、アキさんと飛鳥はどこに行つたんだ？」

彼の問いに応えたのは、白髪のメガネをかけたスタッフだ。

「少し前に社長から呼び出しがあつて行つちやつたよ」

「佐山社長の所か」

アキさんだけでなく、飛鳥も呼び出して言う事は、重要案件の可能性が高い。一体、何があつた。最悪、俺も動く必要が出てくるか……。

ふむ、と一人考え込む彼だが、今は少し頭の隅の方に置いておくことにした。

「……そうか。ありがとう。武装テストの方はどうだった、良いデータは取れたかな？」

「良いデータが取れましたよ。セレクターライフルもリボルビングバスターキャノンも期待値通りでした。でも、一般用でのデータですからね。バーゼラルドに制式採用するには専用チューンが必要です」

「まあ、こつちへの受領はまだ先でいいから、今日の結果を元に綿密なチューンを施そう」

それから、と彼は、

「俺が提案してあるバーゼラルドの改造だけど、どれくらいかかりそうだ？」

「ああ、アレ」の再現以外ならあと二カ月ちよつとで完成しますよ」

「お、意外と早いね。それじゃあ、完成したら連絡をよろしく」

それを聞く外野は、あれ以上強化したらもう龍也に敵いないんじゃない？ という思いで一致していた。

むしろ、まだ強化するのか、であつた。

彼らの驚きも龍也は一向に気にせず、

「さて、皆の衆。模擬戦によるデータ採取、助かつたよ」

「いや、俺の方こそ良い経験ができたよ。……ただ、さっきの罰ゲームは勘弁だったけどな」

一夏のどこか遠い所を見るような眼に、彼は苦笑いで返す。  
対して女性陣はというと。

「さすが龍也よね。全力を出してないとはいえ、四人がかりの総攻撃でも中々落ちないんだもの」

刀奈は強敵、と書いた扇子を広げながら話す。

続けて篠ノ之らが、

「うむ、今回も轟雷を使わせてもらったが中々しつくり来るものがあった。射撃も武装の方で自動修正が入り扱いやすかった。……それでも、龍也にはほとんど当てられなかったが」

「そうですね。一夏さんは直線的な動きが多いので当てやすかったですけど、龍也さんは変則的な動きもされるので当てにくかったですわね。でも、わたくしにはあのリボルビングバスターキャノンも重すぎでした。箒さんが使われたセレクターライフルの方が相性は良かったですわ」

「あたしはどっちも苦手かな。もう少し小型で取り回しの良いのがいいわね。そういう武装はないのかしら？」

ふむ。小型で取り回しの良い射撃武器か。開発中のマルチキャリバーは希望の品だろうか。または、連装砲もいいな。

龍也は幾つかピックアップし、風に見せてみた。

「へえ……腕部に固定できそうな連装砲が良いかもね。あるの？」

「まだペーパープラン。販売の際は是非ともブキヤから購入をよろしくお願いしますね」

などと、軽い営業スマイルで宣伝をしてから、

「言い忘れてたけど楯無に一夏、セシリアに鈴と箒には今回テストに協力してくれたということで、報酬が支払われるのでよろしくっ」

彼の発言に刀奈以外の女性陣はおっ、と驚きの表情を浮かべた。

理由は初めて名前と呼ばれた事、または報酬が支払われる事になるか、はたまた両方なのか。

「あら、龍也にしては珍しく早いわね。私と飛鳥以外の女性を名前で

呼ぶなんて」

「ん……そろそろ自分の中で良いかな、と思つてな。嫌だったか？」  
刀奈の珍しい物を見るような視線を受け流しながら、箒や鈴、セシリアを見る。

「まあ、私は名前で呼んでももらえる方が良い。というか、最初の方に言つてたような……」

「あたしもそつちの方が良いわね。苗字で呼ばれるとむず痒くて」

「ああ……ようやくセシリアと呼んでくださいましたね。長かったですわ……」

セシリアだけが一年以上かけてようやく名前で呼ばれた為に感慨にふけていた。

ちなみに刀奈に関して言えば、出会つて速攻、名前呼びでした。理由は、まあおいおい話すでしょう。

「……龍也ちよつといいか？ その報酬つてというのが気になるんだが」

女性陣とは打つて変わつて、一夏はどうして報酬に関して問うてきた。

微妙に困惑しているのか、不安げな声だった。

「そうか、一夏はこういうのは初めてだもんな。困惑するのは分らないことはない。説明するとだな、今回はブキヤから各専用機の所有国にお願いをしたんだよ。武装テストに協力してください、つてな。もちろん、専用機のデータは秘匿とされる物だから、テストデータ以外の削除はするし、協力の対価としての報酬も支払う、という内容で契約してたんだよ」

ちなみに各ISに戦闘データとして残る武装テストのデータに関しては削除してもらっている。

「それだと私は関係ないな」

専用機持ちでも無い箒は、自分は関係無い、と言うが、

「いや、箒にもちゃんと支払うよ。一夏にも払うんだから、貰つておいてくれ」

そう言う龍也の眼は真剣だった。彼曰く、こういう所はちゃんとし

ておかないと企業として恥ずかしいとの事だった。

そこまで言われると受け取らない訳にはいけないので、渋々箒も受け取るのであった。

一夏にも絶対受け取れ、と念を押して渡すのであった。



その後、場所を変えて一階の休憩スペースに移動した一行だったが、案の定、龍也は佐山社長から呼び出しを受け、社長室に来ていた。「友人との語らい中に申し訳なかったな、龍也」

佐山はソファアに座る様に促し、龍也は彼の対面に座った。

当然、佐山の隣には運切が座っている。

「いえ、アキさんと飛鳥が呼ばれたと聞きましたので私も呼ばれるかと思っていました」

「ふ……そうか。では、早速だがデユノア社は知っているな？」

彼の問いに頷き答えると、佐山は話を続けた。

「そのデユノア社からこのような文面が届いた」

一枚の書類と写真を机の上に置く佐山。内容はアキ達に見せたものと同一であった。

簡単に目を通す龍也は啞然とした。

「……面倒な案件ですね」

「ああ、今しがた飛鳥君には現地調査をお願いした所だ。そこで真意が分ればいいのだがね」

「それでね、龍也君にもお願いがあるんだ」

「実はフランスの代表候補生がIS学園に転入してくるようだ。ただし、所属がデユノア社になっている」

佐山の言葉に龍也は疑惑の念しか浮かばなかった。

どうしてこの時期に転入なのか、と。まるで、狙ったかのような……。

難しい顔をする龍也に佐山は、

「君が思っている疑問を私達も考えていてね。しかも、男性操縦者

“だそうだ”

「はあ ？」

思わず声を上げてしまったが、咳払い一つしてから、

「し、失礼しました。ええと、私がやるのは学園に転入してくる “男性操縦者” の調査及び監視といった所でしようか」

龍也の発言に佐山はその通りだ、と返す。

「こちらも最大限のバックアップはするつもりだ。必要な事は連絡をくれればいい」

「了解です。頼りにさせてもらいます」

「さて、話は変わるがISコアを一つ奪取して解体しているそうじゃないか」

ニヤリ、と佐山は意味深な表情を浮かべていた。

「ええ、今はブライアンに解析兼解体をしてもらっています」

「へえ、ブライアンが来てるんだ。佐山君、あとで会いに行っても良いかな？」

「そうだね、久しく会っていないし、あとで会うとしようか。——で、龍也君はコアに何が使われていると考えるかね？」

何が使われている、か。龍也は現時点で考えていることを語ることにした。

「……まず気になるのは、コアに意思があると言う事です。意思があるなら、“生きています”と考えています。そうになると、使われる技術には…… “金属が命を持つ概念” が使われてるんじゃないかな、と」

“概念” という発言に二人は言葉を無くしていた。

“概念” とはあらゆる事象に関係する物理法則のようなものだ。

例えば、“文字には力が宿る” という概念が使われるとする。

その概念の力が及ぶ範囲では、文字として書かれた事が現実のものとなるのだ。

単なる木の棒に、“聖剣” と書けば、それは聖剣になる。

“弾が無限になる” とバンドナに書いて巻けば、無限バンドナにもなるのだ。

と、まあ概念について説明するとキリがないのだが、かつてこの世



界の裏では概念戦争と呼ばれるものがあり、この時の残留物が未だに残っていたりする。

龍也が考えるのは、その時の残留物、特定概念を封じた「賢石」をたまたま篠ノ之博士が発見し、ISのコアにしたのではないか、というものだ。

「……可能性の話だね？」

「ええ。仮にそうだったとすれば、篠ノ之博士には警告をしようと思っっています」

「そうだね。アレはもつとゆつくりと世界に馴染んでいってもらいたいものだ。お手柔らかに頼むよ」

「龍也君は佐山君と一緒に少しやりすぎる傾向があるから、注意してね？」

「フフ、運切君は手厳しいね。では随時、報告の方をよろしく頼むよ」  
「了解しました。では、失礼します」

龍也は席を立ち、一礼してから部屋を去っていく。

残った二人は少し感慨にふけていた。

「……佐山君、大丈夫かな？」

「どうだろうね。彼の考えが正解だとすれば、私達も動く必要があるが、まずは報告を待とうじゃないか」

「……うん、そうだね」

佐山は彼女を安心させるように頭を撫でる。

少しくすぐったいようだったが、運切は気持ちよさそうな顔をしていた。



佐山達と話を終えた龍也は刀奈達と合流した。

「龍也、社長さんのお話は終わったの？」

「ああ、終わったよ。よし、それじゃあ最後はここの食堂でご飯食べて帰ろうぜ !! ブキヤの食堂は物凄く美味しいから期待してくれていいぜ」

それに反応するのは一夏だった。

「お、それは期待しちゃうぞ。できれば、真似できるように研究もしたいな……」

料理好きの彼にとっては美味しい食事というのは最高の教材なのであった。

そうして、一行はブキヤ食堂に移動し、どう考えても企業の食堂で出されるはずのないレベルの食事に舌鼓を打つのであった。

## 二十九話

武装テストの二日後。

シャルル・ド・ゴール空港。

パリの空の入口と言われるここに彼女はいた。

髪の色は美しいブロンド、背丈も高くすらつとした体型に誰もが魅了されていた。ただ、少し残念だったのは背負っているリュックサックが羽つきという点だけだろうか。

後に、彼女と出会った人は某ゲームのキャラクターによく似ていた、と語っている。

そう、彼——リロイ・ハロルドもその一人だった。

リロイ・ハロルド。

フレームアームズという作品内でも同姓同名のキャラクターがおり、優秀なパイロットとして知られている。

ここにいる彼はあくまで同姓同名の人物でしかないが、凄腕の傭兵ではある。

彼は彼女——月宮飛鳥を見つけると、手をあげ招いた。

彼女とは過去に幾つかの仕事をしたことがあり、今回は久しぶりにタッグを組むことになった。

「よう、飛鳥。どうだった飛行機の旅は？」

飛鳥は笑顔で応えた。

「久しぶり、リロイ。ずっと座ってて退屈だったわ」

「そうかい。じゃあ、また座つての移動になるが我慢してくれよ」

リロイは停めてあった高級セダン車を指した。

飛鳥ははあ、とため息をつき、

「そうね、よろしくお願いするわ」

車に乗り込みリロイが発進させる。

「へえ、結構、このエンジン音良いわね。日本には無いのかしら？」

「残念、これはこっちだけの特別仕様なんだよ」

「あら、残念。で、どうなの？」

リロイは後部座席から一冊のファイルを取り手渡した。

ファイルを受け取り、流し読みをしていく飛鳥。

書かれているのはデユノア社とフランス軍によるISの演習中に突如、黒いFA型と思われるISが現れ演習中のISに攻撃し、大破させ去っていったということだ。

これは飛鳥も知っている内容である。

問題はここからだ。

「……ちよつと、亡国企業が絡んできるとか本当なの？」

「可能性がある、と言う話だ。最近、デユノア社の社長含む幹部クラスの間が、亡国企業の人間と会っているのを確認した」

「リロイが確認したの？」

「そうだ、と頷き話を続ける。」

「バーゼラルド完成あたりに龍也から頼まれたんだよ。亡国企業もFA型ISを狙うかもしれない、ってね。まあ、それ以外にも厄介な問題が起こってね」

「厄介？」

「ああ。どうやらお前と龍也にとって厄介な相手が組織にいるらしい」

「そう言われ彼女の頭に浮かび上がったのは一人の男だった。」



時間は戻り武装テストの夜。IS学園の寮にて。

時刻は深夜二時。龍也は眠りから目覚めた。隣には刀奈が心地よい寝息を立てていた。

「愛くるしい彼女を軽く撫でてから、」

「……少し出て来るよ」

囁くように呟き彼は起き上がり、音を立てないように服を着替えた。

だが、いつもの服装とは違う。

白を基調とし、黒のラインが入った戦闘服だった。かつて、彼が概念戦争の後に起こった全竜交渉という戦闘で使っていた装備だった。

手に持つのは機殻剣。

「久しぶりに頼むぞ、相棒」

背中に機殻剣を固定し、静かに部屋を出ていく。

その背中を狸寝入りしていた刀奈が黙って見送った。

……あんな装備見たことない。どこへ？ 追うべきかしら。追うべきよね。よしっ。

意気込んで起き上がろうとした時、メールの着信音が鳴った。

「こんな時間に……」

メールの差出人と内容を見て安堵の顔をする。

『すまないな刀奈。明日の昼には帰るから、一緒にランチにいこう』

「……まだまだ私も甘いわね。じゃあ、おとなしく待ちましよう」

でも、いつまでもおとなしく待つ私じゃないわよ。

密かな闘志を胸に、今は眠ることにした。

一方、龍也は学園裏の海岸にいた。もちろん、外出許可もとっていないので誰にもバレないようにだ。

さて、バーゼラルドに着けた追加オプションを使うか。

バーゼラルド展開と同時に追加したステルスシステムをオンにし、P I Cを切り海底に沈んでいく。

スラストを吹かせば熱源反応で学園には気づかれてしまうし、お目当ての相手にもバレてしまう。

だから、海底を走ることにした。

普通、P I Cを切った状態でI Sを動かすとなれば重すぎて、動かすのは非常に苦勞する。さらに、海底を走るなんてできるわけがない。歩くのも無理かもしれぬ。

だが、ここにいるのは身体能力すらはつきりと知られていない男。知っているのは世界でも数人のみ。

彼が超のつく規格外の人間である事を。

爆走とまではいれないが、ゆっくりとした走りでも海底を目的地まで向かっていった。

向かうのは太平洋にある孤島。

走り出して二時間経った後、目的地に近づいたのでI Sを解除しそ

ここからは泳ぎに変えた。

……ガードマシンに学園に乱入させたゴーレムを使用か。

目視で確認するだけでも海岸には、侵入者対策の赤外線トラップやゴーレム型ISが見えた。

だったら、相棒の出番だ、と再度バーゼラルドを展開し派手に挨拶をすることにした。

「行くぞ、バーゼラルドッ !! 博士に挨拶に行こうぜっ !!」

両手にセグメントライフルを展開し、侵入者に気づいたゴーレム型IS八体に向かって銃弾を叩きこんでいく。

重厚な装甲をいともたやすく貫く弾丸。それは、ISの試合では決して使うことのできない銃弾であった。

つまり、今のバーゼラルドはリミッターを排除した完全戦闘仕様。もちろん、武装もだ。

これでサイズこそはISだが、フレームアームズのバーゼラルドとして能力を解放していた。

八体いたゴーレムは数十秒で破壊され、続けて地表がせり上がりゴーレムが出て来るが、難なく破壊していく。

とうに彼女は気が付いているだろうが、逃げはしないだろう。何せ、彼女こそがこちらを欲しているだろうから。

ゴーレムを破壊し、手近な進入口としてせり上がりゴーレムが出てきた場所から侵入する事にした。

学園のアリーナの半分ほどの広さの空間があり、そこには数十体のゴーレム達が龍也を待ち構えていた。

「……篠ノ之博士、この程度の数じゃ準備運動にもならないよ !!」  
オーブン回線で高らかに宣言し、全てを破壊していく。

セグメントライフル、ブレード、インパクトナックル。  
三種の武装に瞬時加速、瞬時転回など持ちうるスキルとテクニク

を駆使し、迫りくるゴーレム達を撃ち、斬り、殴りつぶす。  
当然、篠ノ乃束はこれを地下で見ている。

「アハハ、これじゃあ一方的な蹂躪だねえ」

どこか楽しげな束だが、視線は獲物を狩る者の物だった。

その彼女の隣では、銀髪の少女が不思議そうに眺めていた。  
「パーティーはこれからだよ、二人目くん」

## 三十話

太平洋のとある孤島。

篠ノ之束はここを拠点の一つとし、無人ISであるゴーレムの改良と製造を行っていた。

IS学園に送ったゴーレムは瞬殺されてしまった為に、バーゼラルドの戦闘データを分析し強化していたのだ。

……内心、悔しかったのだ。

FA型ISの方が強かったことに。

それ故に、より強さを、破壊力を求めた。データ上ではバーゼラルドを超えた。

これで、アイツを倒し我が物にできる、と思った。

しかし、現実は違った。

「フッフフ、アーハハハツ !! 楽しませてくれるね二人目君つ !!」

自信作が破壊される事に束は歓喜していた。

憎悪よりも歓喜が勝つたのだ。自分の予想を超える者がいる事だ。

「パーティーはこれからだよ二人目君」

そう、これはパーティーなのだ。

たった二人だけの。

だから、

「私が相手をしてあげる」

彼女は彼の前に光臨した。



目の前にはおよそ四十のゴーレムIIの骸があった。

よくもまあ次から次へと出てきたな、と感心しながら次に進むべき道を探す龍也。

「む……壁ばかりか。何かギミックがあるんだろうが、どうしたものか」



おそらく東は地下にいるだろう、と踏んでいるので下を目指したいのだが。

思案しつつも、半ばセグメントライフルのチャージショットで床をぶち抜こうかと思いい立ったところで、足元から地響きが聞こえてきた。

何かが上にやってくる !!

そう感じた瞬間、後方にバックステップすると床がせり上がり、お立ち台のような物に乗った篠ノ乃東が現れた。

「やつほーみんなのアイドル、東さんだよー」

……ウサ耳に不思議の国のアリスのような服装、本当にそれが私服なんだな。

「やあやあ、二人目君。よくもまあ、派手にやってくれたねえ」

「いえいえ、もう少し派手にやりたかったですけどね。武装の方がどうも地味な物ばかりで」

そう言いながら龍也はバーゼラルドを解除した。

彼はふう、と息を吐き呼吸を整える。

気を充実させ、全身に力を活き巡らせる。

何とも予想外の行動に驚いてはしまったが、この人はこれが普通なんだだろうな。

力が四肢に漲るのを感じながら、龍也は一つ、己がココに来た目的を果たすことに決めた。

東は彼の変化を見ながら、何かがあってもISに使われる防御用のエネルギーシールドを展開する準備をしていた。左手に持つスイッチを押せば、瞬時に展開され彼の攻撃を受け止められる事ができる。

生身の攻撃だろうが、バーゼラルドでの攻撃だろうが関係なく、だ。だが、彼の行動は彼女の常識を覆すものだったのだ。

「……は？」

東は呆けることしかできなかった。

目の前の龍也があまりにもおかしかったからだ。

今の彼は自分の前で“土下座”をしていたのだ。しかもだ。

龍也はこちらにジャンプし宙返り、ローリングしながら頭を床に叩きつけてのダイナミック土下座だったのだ。

「申し訳ないっ！ 博士の宇宙への夢の翼だったISを兵器として使い申し訳なかったっ！！」

まさかの謝罪に思考が追いつかなかった。

一体、こいつは何をしに来たんだ？ 謝罪をするならゴーレムは破壊しなくても良かったんじゃないのか？ 等と考えるが凡人の考える事はよく分からない、と結論する。

時間にして三分ほどだろうか、彼はそのある意味で美しい土下座を続けていた。

「さて、謝罪は終わりにして」

龍也は立ち上がると、先ほどまでは誠心誠意の態度で謝罪をしていたのとは打って変わり、敵意をむき出しにし強い口調で言葉を放った。

「篠ノ之博士、先日のIS学園への無人機襲撃の件は見過ぎすことが出来ないっ！！ ヴァイスハイトを再現したISの製造についても説明を求めろっ！！ なお、納得のいく説明が無い場合、俺はあなたを再起不能にするつもりだ」

彼の言った事は完全な脅しである。

「はあ？ 変な言いがかりはやめてくれないかな？ それに脅しだって無駄だよ。東さんには——」

束はそこで口を閉ざした。なぜなら、眼前には龍也が背負っていた機殻剣を突き付けていたからだ。

視認できない速さでの抜刀。

頭脳だけではなく、身体能力でも束は「天災」クラスなのだが、眼で追いきれなかった。

自分の中でコイツの評価を変える必要があるか、と思案する束。剣先が目のあるが、今の彼女は好奇心が勝るのであった。

そんな彼女に呆れながらも龍也は、

「篠ノ之博士、これは冗談じゃない。俺は納得のいく説明が無いなら、ココであなたを再起不能にする覚悟と力がある」

「へえ……じゃあ、試してもらおうかしら」

ニヤアツと歪な笑みを浮かべ、束の姿が変わった。

龍也は剣を戻し、対象を観察する。

日本武者のような紅い鎧の装甲に身を纏い、背部には二本の刀がマウントされていた。

また、腕部及び脚部の一部には青く輝く結晶体が装着されている事に気づく。

これはどう見ても……。

「君の好きなFAのマガツキ、だっけ？ これを再現してみたよ」

どう、似合う？ 等と抜かす束に龍也はただただ、黙って直視するばかりであった。

月面側勢力にして防御に定評のあるマガツキか。再現度は高い、がTCシールドはT結晶体もしくは類似した技術が無ければ再現はできないだろう。

では、どうするか。

答えは簡単。こちらの力を示すのみだ。決めれば行動は早い。

「もう一度言うよ、篠ノ之博士。納得のいく説明をして欲しい。でなければ——滅するぞ？」

「え〜だから——」

再度、通告したが答えを聞くは無かった。

少しだけ本気を出してやろう。——我が儘ばかりを言う子供を叱り、矯正だ !!

脳内の神経伝達を意図的に操作し、通常なら段階的に上がっていくべき運動速度を初速から最大速度で動くようにして踏み込み、右の袈裟斬りを放つ。

持っている機殻剣には、文字には力が宿る”の概念が付してある。機殻に書かれている文字は【最強の剣】だ。攻撃200になる名前だ。

……それは置いておき、実際の性能はISに使われる装甲材やエネルギーシールドすら叩き斬るくらいの攻撃力を有する物になっていた。実際に、自社で確認済みの性能だ。

龍也の斬撃はマガツキの左肩から胸部装甲を切り裂く。

「なっ ！！」

無意識に束は一步後ろに退いた為に致命傷は避けることが出来たが、まさか破損するとは思っていなかった為に声を上げてしまった。

「……続けるか？」

「アハ、勿論っ ！！ 私も本気になれそうだからねっ ！！」

束は背中中の二刀を握り抜刀と同時に龍也に襲い掛かる。

龍也は返す刃で二刀同時に弾く。重い金属音が響くが、マガツキの二刀は折れてはいない。よほど硬い材質を使っているのか、刃こぼれもしていなかった。

なんと。概念で強化してある剣で斬れない材質……だ、と？

龍也も手に響いた衝撃に驚き、そんな事を考えるが意識は攻撃指示をだしたままだ。故にまだまだ攻撃は続ける。更に一步前に踏み込みながら両手で剣をしつかり握り、唐竹割りを放つ。

束はバックステップで下がりながら、左の刀を振り衝撃波をお見舞する。

な、剣圧で衝撃波を出すだと ！！ ただの科学者じゃないか ！

舌打ちをしながらも、機殻剣の腹で受け両足に力を入れ踏ん張った。

そうか、篠ノ之家は剣術を教えていたんだったか。束博士も習得していると考えるのが妥当だな。なら、その实力を見せてもらおう。

防御態勢の彼に束の攻撃が迫る。

彼女はわずかな間合いを瞬時加速で詰め、左右の刀による連続斬りを繰り出してきた。

交互に繰り出される剣戟に龍也は暫く防御の姿勢を取った。

防御をしたね、それは悪手だよ ♪

束はマガツキの背にヴァイスハイトを再現した際に造った武装、ベリルショットライフルを展開、固定し銃口を龍也に向けるのであった。

彼は銃口を目にしても恐れなかった。

むしろ順当すぎる手段、予測していた行動だった為、自身も対応す

る動きを行った。

それは、彼女がベリルショットライフルを放つのと同時であった。



同時刻、日本国内の某高級ホテル。

スイートルームの一室で「彼」は夜空を眺めていた。

窓は開け放たれており冷たい風が頬を撫でる。空を眺める眼には美しい満月が映っている。

普通なら綺麗だな、等と思うのだが彼の内心は荒れていた。

ああ、どうして自分はこんな所にいるのだろうか。

自分ではどうにもすることのできない事態に巻き込まれ、運命を弄ばれている。

本当なら……あんな所に行きたくも、ISにも関わりたくもなかった。

待機状態のISを握る手には自然と力が込められていた。

しかし、彼——シャルル・デュノアは目的を達するまで帰る事は出来ない……。

### 三十一話

龍也はベリルショットライフルの攻撃に対して、バーゼラルドを展開、防御フィールドを用い防ぐのであった。

「バーゼラルドを使わないなんて言っていないからな」

何食わぬ顔でマガツキを蹴っ飛ばし、機殻剣を量子空間に収納しユナイトソードを両手に展開する。

束は既に体勢を整え、神妙な顔つきでこちらを眺めていた。

「……ISの即時展開時間がこの束さん並に早いなんて。君、どうやったの？」

「訓練の賜物さ」

実際、龍也のISの展開等技術的な事を、ブキヤでのVR訓練等で国家代表以上に仕上げている。

IS学園では能力をセーブしている。……これはこれで面倒なのだが。

そんな事を考えながら龍也は束に接近し、交互に剣を振るう。

一撃一撃に緩急をつけ、速度も徐々に上げていった。

「さあ、篠ノ之博士！……どこまで俺の剣戟について来れるかなっ！」

彼の言葉に束は喜々とし応える。

「何言ってるのかな。この『天災』の束さんに手加減するとかバカじゃないの？——最初から、全力でしょ」

束——マガツキの動きが変わる。

激しい波のように押し寄せる剣戟と銃撃。

バーゼラルドはユナイトソードで受け止めいなし、銃弾は叩き斬るもしくは、回避をする。

それだけに終わらず、返す刃で一太刀入れていくが、マガツキはしっかり反応し防御していく。

二機の攻防は熾烈を極めていき、まるでダンスをしているかのようであった。

「フフ、楽しいねっ！……ここまで私について来れるなんて、ちーちや

んでも出来ないよっ！」

ちーちゃん？ 織斑千冬のことか。

「それは光栄、だ、ね！ で、そろそろ説明してくれる気になったかな？」

「えく、たつくん」が私を倒せたら、ねっ！」

龍也の事をはっきりと勝手な愛称ではあるが、名を呼んだのだ。

これは束を知る者からすれば驚きの出来事だ。彼女は基本的に自分が好きな人物しか興味がなく、名前を呼んだりはしない。それ以外は有象無象の一つとしか見ず、名を呼ぶことなどしないのだ。

その中で、龍也の事を呼んだ、という事は彼女のお気に入りに入ったのだ。

攻防を続けながら、龍也は一度距離を離す為に瞬時加速で下がった。

視線はマガツキをしつかりと捉えながら、バーゼラルドに搭載した必滅兵器を使うか悩んだ。

「その呼び方はどうかと思うが、まあいい」

龍也はバーゼラルドのSEを確認する。

ゴーレムIIとの戦闘で幾らか減り、このマガツキ戦で半分を切っていた。

……プロペラントタンクはまだ二基ある。ここは——切り札を使うべきだなっ。

バーゼラルドはユナイトソードを床に突き刺し、両手で剣指を作る。

「……篠ノ之博士、楽しい時間だったけどこの一撃で終わらせてもらうぞっ！」

残りのSEを一割だけ残し、全てをこの一撃に使うっ。

バーゼラルドの胸部からまばゆい光が溢れる。右手でその光を掬い取り、両手を頭上に掲げ、左右の手に光を纏わせた。

……バーゼラルドのコアから膨大な熱量が溢れていた？ 見たことのない兵器だねえ。どんな攻撃なんだろう。コアネットワークを使って探れないかな。

東はそう考えバーゼラルドのコアにアクセスをしようとするが、出来なかった。

あれ？ アクセスエラー？ バーゼラルドが拒否してるの？

そんな事があり得るのか。ISの生みの親である自分は全てのコアにアクセスする権限を持っている。

故にアクセスできないなんて事は存在してはいけない。

しかし、彼女は知らなかったのだ。そうではない、と。バーゼラルドのコアにアクセスできないのは別の理由があったのだ。

『み……っ……け……た……あき……の……たたたた龍也ッ！！』  
唐突に聞こえる機械音。

その音はマガツキ自身から発せられていた。同時に東は制御系統を乗っ取られ、マガツキから吹っ飛ばされてしまう。

束を排除したマガツキはコアから無数の触手を伸ばし、ゴーレムⅡの残骸を回収し融合を始めた。そして、まるでサナギのように変化させるのであった。

束はまさかの乗っ取られに驚くが、目の前の光景に魅入られてしまう。

名を呼ばれた龍也は訝し気に攻撃態勢を維持し様子を見る。

「融合し、自身を変化させているのか？」

……今、攻撃するのはフラグでしかないが、仕掛ける！

「砕けッ！ 必い殺ッ！ バーゼラルドフィンガガガアアアアアッ！！」

エネルギーを熱に変えた必殺の拳をマガツキに叩きつける。

しかし、やはりというべきか……、

「くっ、やはりこの攻撃も糧にするかッ」

マガツキは攻撃を餌とし、羽化をする。その姿は――。

「来るか、マガツキ・崩天！」

鎧武者に羽織を着せたような装甲を纏った真紅のFA。

右手に持つ大型武装は何者をも砕く長射程、高威力の連装式ベリルショットランチャー【キョウウテン】。



左手に握るは取り回しが悪いキョウウテンの補助を兼ねた、ベリルショットカノン【オオトリ】。

自身が作成したISの変貌に束は目を輝かせ、子供の様にはしゃいだ。

「えー！ えー！ なんてかな、何でかな。セカンドシフトとは違う進化？ いやあ、束さんでも分らないことがあるなんて。——しっかりとデータは取らせてもらうね」

ギラギラとした目つきで施設内のカメラを遠隔操作し、これからの事をしっかりと映像に残すことに彼女は決めるのであった。

真紅の巨人はバーゼラルドを自身の敵とみなし、両手の武装を構え放ち戦闘開始の狼煙をあげた。

「防御型のマガツキの攻撃面を強化した崩天に対応するにはッ」

キョウウテンとオオトリの砲撃を巧みに避けながら、龍也はある物を使用する事を決めた。

「今こそ、【俺アームズ】を使うべき時か。覚悟しろ、マガツキッ！」  
龍也は力強く叫ぶと、拡張領域から【俺アームズ】に必要なオプシオンを取り出し瞬時に装着を果たす。

彼の言う俺アームズ。

すなわち自分だけのフレームアームズ。

龍也は己の愛するロボット作品からそれを模したバーゼラルド用のパーツを誰にも知られないよう隠しながら作成していた。

足首から脚部を覆う様なそれが二つ。まるで巨大な盾だった。

脚部自体の装甲も変更されており、太ももには結晶体のようなパーツが付けられ赤く輝いていた。

「この魔を断つ剣を模したバーゼラルドの初陣、華々しく飾らせてもらおうかっ！」

彼の叫びに呼応するかのように赤く輝く結晶体。

そこから生成されるエネルギーはバーゼラルドの全身を駆け巡る。

「断鎖術式番号ティマイオスッ！ 式号クリティアスッ！」

左右の脚部シールドに内蔵された時空間を歪曲させるシステムを動作させる。

龍也の周辺の空間が歪曲し、その復元力によってバーゼラルドは通常では考えられない機動力を見せる。

マガツキ・崩天の繰り出す砲撃の嵐を、彼は、慣性の法則を完全に無視した動きによって——跳躍して避けた後に、すぐさま空中で別の方向へ跳躍、それを繰り返すことで瞬時に奴との間合いを詰めるのであった。

そして、今、彼が放つのはこの時空間歪曲エネルギーを移動に使うのではなく、直接、相手にぶつける攻撃。

その名も、彼が敬愛するままロボットが使うままの名であるが。

「アトランティス……ストライクツ !!」

叫びと共にマガツキにぶつけられる回し蹴り。

的確にマガツキを蹴り飛ばすが、時空間が元に戻ろうとする復元力はあまりにも強力で、たったの一撃で全壊させてしまっていた。

とてもじゃないが、ISに使うべき武装ではない。

人が乗っていれば、一瞬でただの肉の塊になっていたであろう。

鉄の塊となったマガツキを眺めるバーゼラルドを見る東は、後にこう語っていた。

『あれはISの皮を被った化け物だったね。東さんでもあれはさすがに……』



東は思考を停止させてしまっていた。

……これは夢なのかな。ISはいくら宇宙で活動できるようと、様々な機能をつけたけど、あんな出鱈目な動きはできないもん。それに、あの回し蹴り攻撃。どう見ても現代科学では再現出来そうになかった。

例え、この天災の身であっても基礎理論の構築だけで数年かかり、完成するには十年の単位が必要と思えた。

この時、初めて東は恐怖を覚えた。自分が理解できない現象、物に初めて彼女は出会ったのだ。

だが、不思議と胸が熱くなっていた。この胸の高鳴りは何なのか。彼女は今すぐに答えを出せないでいた。

一方、龍也は破壊したマガツキのなれの果てを調べていた。コアは無傷とは言えないが何とか調べられる程度の物ではあった。

だが、あくまで何とか、という状態だ。

とてもじゃないが、自分では調べられないと思いつぐ傍にいる適任者に任せようかと考えてみる。

一考し、バーゼラルドを待機状態に戻すと龍也は束に近づくのであった。

「……篠ノ之博士、すまないがこのマガツキのコアを調べて欲しいんだが」

「良いよ。私も気になるしね。でも、タダじゃないよ？」

「当然だ。出来る範囲で報酬は支払おう」

確かな返事に束はニヤリ、と口元を歪める。

「それじゃあ、まずはね——」

彼女が続けて言ったセリフに龍也は頭を痛めながらも、これからの事を考えていくのであった。

## 三十二話

五月最終日。

更識楯無こと刀奈は生徒会室のデスクで苛立ちを隠せずにいた。

幸い、誰も部屋に入れておらず近づけてすらいなかった為、一人だったのが良かった。

PCのディスプレイに映るメールの文面を見るだけで、苛立ちは増すばかりだ。

こんな時期に転校生が二人も来るって何よ。しかも、片方はもの凄い爆弾を背負って来てるじゃない !!

シャルル・デュノア 性別：男

添付されてある写真を見る限り、どう見ても女性にしか見えないのだ。

また、デュノア社が提示するプロフィールは嘘の塊でしか無い。

学園を護る立場にある者としては、こんな爆弾を抱えたくはないのだが既に決定されている事項なので最善を尽くすしかない。

だが、彼女には別の不安もあるのだ。

学園に秋野龍也がいないのだ。

彼はあれから一度だけ帰ってきて、彼女と食事を取った後に仕事でしばらく戻ってこれないとの旨を伝え出て行ったきりなのだ。

かれこれ二週間近くはもう顔も声も聞いていない。何度か電話もかけているが、端末の電源を落としているのか、連絡がつかない状態だ。

龍也と一緒にになってから、何度かこういう事はあったがタイミングが悪すぎる。

そんな彼女の前にティーカップが置かれる。

「……お嬢様、そんな顔では龍也様が帰ってこられた時に心配をおかけするだけですよ」

いつの間にか布仏虚がおり、いつものように紅茶を淹れてくれたようだ。

「そうね……ありがと……」

淹れてくれた紅茶を飲み気持ちを落ち着かせる。

「……ありがとう。虚ちゃん」

「いえ、いつものようであれば、龍也様が帰ってきたときに心配されますので。ところで、お嬢様。それとは別件で政府からこんなモノが」

彼女が差し出したのは一枚の写真だった。

写真の風景は至って殺風景。高度の高い所から撮影しており、一面は荒野で中心には大きなクレーターができています。

「……これは、人工的なものよね」

「そのクレーターの右端の方を見てください」

彼女に言われそこをよく見ると、何かがあるのだ。

「何これ？」

「こちらが拡大写真になります」

拡大されたのを見ると、彼女は再び頭痛に襲われるのであった。

そこにいるのはISのようであった。白い鎧に紫の宝飾をあしらった様な全身装甲に、巨大な翼のような物を背負っている。

荒い画像なので細部までは判らないが、両手で抱えて持つような銃器を携えているのが見えた。

「どこの国の新型？」

「それが特定できてないようです。しかも、この写真の場所は……」

虚が淡々と説明をする。

写真は某国某地方。そこには違法な研究をしている施設があったようだ。研究内容は主に遺伝子操作をした超人を作るための研究を中心に、人体実験等が行われていた。

それを更地にしたのが映っているIS、たった一機らしい。

日本政府はとある情報筋からこれ入手し、暗部組織に調べさせてみると同じような事が世界的に起こっていることが分かったのだ。

共通する事項が、違法な研究をしている施設が跡形もなく消されている、という事だ。

「へえ〜それで私達にもこの件を調べろって事なのかしら？」

久しぶりに暗部としての仕事か、と思うと腕が鳴る。

「仰る通りです。ただ、この件に龍也様関わっている可能性があるらしいのです」

「龍也が？」

「どういうこと？ 龍也は仕事って言っていたから、てっきり政府依頼かと思っていたのに。違うっていうなら、一体何をやっているの？」

「……龍也と連絡が取れたらお仕置きが必要なのかもね」



六月一日。

朝のHR前の一年一組では龍也がいない事以外は至って普通の日常を過ごしていた。

彼の事は企業の依頼でしばらく休む、という事になっている。

最初はいない事の違和感があったが、ようやく慣れてきた所だ。だが、やはりいいのは色々困るのである、特に一夏にとっては。

「ハア……早く龍也、戻ってきてくれないかな。男一人って辛いぜ……」

そう、やっぱり男一人って色々辛いのだ。

自分の周囲にいる女性陣達はまだいいのだが、他クラスや上級生の女生徒からは未だに好奇の眼で見られるのだ。

男二人なら耐えられる、と思っていたが一人になると途端に弱気になっっているのだ。

「一夏、朝からだらしないぞ」

「そうは言ってもな、箒さん。これは男にしか分らない気持ちだからな」

ぐったりしている一夏を見ながら箒は、これはダメだな、と諦め龍也が早く戻ってくることを祈るばかりであった。

「おはようございます、朝のHRを始めますよ」

そんな折に山田教諭と織斑教諭が教室に入ってきた。

「さあ、HRを始める前に皆さんに新しいお友達を紹介しますね」

「……二人とも入って来い」

織斑教諭の呼びかけで二人の生徒が入ってくる。

一人は銀髪に小柄な少女、もう一人は、男子生徒の服を着た金髪の男<sup>〃</sup>だった。

それを認識、理解した後にはクラス中が沸き立つのであった。

### 三十三話

フランス某所。セーフハウスにて。

飛鳥とリロイはデュノア社と亡国企業の間連を調べていた。

およそ二週間の調査で幾つかの進展を見せた。

一つ。デュノア社が第三世代のIS開発に遅れが見られ、亡国企業から技術提供を受ける約束をした。

二つ。デュノア社社長夫人が金銭目当てで亡国企業と組んだ。だが、裏がありそう。

三つ。その為に、社長の愛人の娘である、『シャルロット・デュノア』を『シャルル・デュノア』という偽名を用い、性別を偽ってIS学園へと転入させる。

四つ。ブキヤを脅すのもこの約束事に関連しているようだ。

五つ。ブキヤ・フランス支社に亡国企業のスパイがいる。

六つ。デュノア社長はどこかで軟禁されている ↓ 郊外の民家にいる。

さて、彼らの目的は、と推論する。

二人ともその方面に明るい訳ではないのだが、デュノア社は第三世代のIS開発の為に男性操縦者の情報もしくはIS自体を欲しているのではないだろうか、と結論する。

だが、亡国企業が欲するのは何なのか。こればかりは分からないまままだ。

ただし、ブキヤを脅すのは完全な間違いである。

ブキヤの設立に携わっているのは、かつて人知れず世界を救った面々だ。

世界中に色々なコネを持ち合わせており、荒事にも対応する術くらい持っている。

それが、飛鳥やリロイが本来所属する部署なのだ。

表は研究員やテストパイロットだが、裏では会社で仇成す者や企業からの暗躍に應對したり、龍也の様に依頼を受けたりもしている。



そして、二人は武装を纏い準備を整えていた。

「リロイ、【カトラス】の調子はどう？」

「龍也がすっかりバーゼラルドのデータを取ってくれていたから、かなり調子はいいな。このベリルダガーもブライアンのおかげで再現できたしな」

リロイは自身が纏うカトラスの左腕と両足先についている淡い緑色のダガーに注視しながら語る。

カトラス。原典ではバーゼラルドの制式量産型と言われている。見た目はほぼ変わっていないのだが、基本能力はバーゼラルドよりも高い機体となっている。

ベリルウェポンを採用しているのも大きな点ではある。これは、ブライアンがISコアの解析に伴い再現可能になった物で、リロイが使うのは試作品となっている。

で、彼が纏っているのはISのバーゼラルドの稼働データを参考に、武神で再現したものだ。

武神は3rd—G製の八メートル前後の人型機械で搭乗者が機械と同化し操縦する、また遠隔操作などもできる物であるが、彼は同化するタイプを好んでいる。

このカトラスはISくらいのサイズに造られたテストタイプであるが、性能はれつきとした武神なので現行のISでは太刀打ちは出来ないであろう。

「飛鳥も【バルチャー】はどうなんだ？」

「今の段階では非変形だけど、身軽で動きやすいわよ。脹脛のベリルベーンも早く実戦で試してみたいわ」

バルチャー。各部にベリルユニットを用いた本来なら鳥形に変形するFAである。現在、飛鳥が使っているのはISでの再現FAで、変形機構はオミットしている。ちなみに全身装甲。今後の開発によつては、現行のISのような形状になる可能性はある。

所持武装は、脹脛に搭載されている弧形のベリルベーンは展開すれば蹴りで斬撃などを放つことができ、腕にある乾式鋼爪——爪型のベリルユニットを装備している。

また、拡張領域には飛鳥がいつも使う長騎剣とアサルトライフルが格納されている。

「さ、リロイ。まずはデュノア社長の軟禁場所に向かきましょうか」

「そうだな。さっさと救出して全貌を把握しよう。それから、デュノア社は潰そう」

「潰すかどうかは佐山社長達に相談して決めましょうね？」

飛鳥は話しながらバルチャーを空へと舞わせる。

リロイもカトラスのブースターを吹かせながら続いた。

向かうべきは郊外にある何の変哲もない民家。二人は全身装甲の内側でウキウキとしていた。それはもう、良い笑顔で。

何を思い笑顔なのかは置いておき、たった二機での救出作戦が始まるのであった。

「あ、一応、このデータは龍也達にも教えておいてあげようかな」

思い出したかのように飛鳥は龍也と刀奈にこのデータを送る事にした。

龍也はともかくとして、刀奈に送る理由はなんだろうか。言うまでもなく、IS学園に害が及ぶ可能性がある、と考えたからだ。

このデータを貰った刀奈はデュノア社許すまじ、と殺意が芽生えていた。

さて、一時間ほど移動してから目的地付近に到着した。

豊かな自然の中で不自然な屋敷。ここが目的の場所だ。

あまり大きくはないが、警備にラファール二機が正門に配置されているのが見えた。

二人は発見されないように遠くにおり、IS等を解除し、歩きで接近する事にした。

「ラファール二機の警護か。中にもいると考えるか」

「そうねえ……。正直スピード勝負かなと思うわ」

「なら、陽動は俺がしよう。カトラスで一気に攻めるから、飛鳥はその隙に屋敷に潜入、デュノア社長を救出し離脱で」

「いいわ。さあ、久しぶりに暴れるわよっ！」

二人は互いの動きを確認した後、再度、機体を展開し走り出すので

あつた。

### 三十四話

秋野龍也はタイミングを伺っていた。何の、と聞かれれば教室に入るタイミングである。

この男、ようやく任務を終えシャルル・デュノアが転入してくる今日に学園に戻ってくるのが出来たのだ。

忙しかったな、とため息をつきながら同時に朝のHRには遅刻だ、とも焦り教室の前まで来たのだが聞こえてくるのだ。

女生徒の黄色い声が。

思わず耳を塞ぐが、何なの？ と中の様子を伺うとシャルル・デュノアの容姿などに女生徒達がわあわあ、と歓声をあげているようだ。どうやら、転入してきた挨拶の時間のようだ。

「……でもさ、その体のラインを見るとどう見ても女だよ」

事前に分かっているからというわけではなく、どう見ても女にしか彼には見えなかったのだ。

世の中には“男の娘”というジャンルがあるのも理解はしているが、これは該当しないだろう……、と思う龍也であった。

そんな事を考えていると、教室に入れなかったのだ。

「しかし、どうしよう。この中で入るのは勇気がいるな」

うーん、と思考するが良いタイミングが来た。

おや？ もう一人はラウラじゃないですか。いつ見ても小動物ほくて可愛いのお。

「そうか、彼女もやってきたのか」

ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生で軍人だ。少しだがドイツ軍と共に仕事をしたことがあり面識はある。毅然とした態度で一つの部隊を率いている彼女に感心した事を思い出す。

しかし、彼女の表情を見ると芳しくはない。

よく見ると、一夏に対して並々ならぬ敵意を現していたのだ。

あからさまな意思表示に気が付いているのは自分と千冬だけのようには思える。

千冬が彼女に挨拶を促すが、自身の名だけを告げて一夏に近づいて

いく。

お、これは……。

何かやるな、と自分も割って入れるようにドアに手をかけておく。そうしていたのは功をそうした。

一夏は自分に近づいてきた彼女を不審に思ったが、次に取った行動には反応が出来なかった。

「いやいや、転校初日で問題起こすとかやめようなラウラ」

振りかぶった右手は後ろに現れた龍也によって掴まれていた。

「……誰かと思えば龍也か。相変わらず気配を察知させないな」

握られた腕を振りほどきながら、彼女は冷静に龍也を見る。

久しぶりの再会だが、眼は笑っていない。邪魔をされ、苛ついているようだった。

「えつと……ありがとうなのか、龍也？」

一夏はとりあえず礼を言うが状況はよく分かっていない。龍也はにこつ、と笑みを浮かべ、千冬の方を向き事態の終息を促す。

「……お前達、もういいから席につけ。それから、龍也。遅刻だぞ」

千冬はやれやれ、といった態度でそれぞれを席につかせた。

「はーい、遅刻は以後、気を付けます」

さて、ではシャルロットちゃんの出方を見ますかね。



一限目は二組との合同での実技であった為、アリーナに集合だった。

転校生、しかも『三人目の男』の登場に他クラスの生徒達も興奮気味に移動する彼らをつけまわした。

龍也は一夏とシャルルを置いて、一人窓から身を投げ出し、まるで忍者のように壁を走り去っていった。ニンジャ、キタナイ。

なんとか二人も更衣室に辿り着くが、一夏は彼に対して『何か違う』という印象を抱いた。

「なあ、シャルル。何で俺が服を脱ぐ度に悲鳴をあげてるんだ？」

「え？ い、否、ちよつと特殊な環境でそ、育ったからあまり……ね？」

赤い顔をする彼だが、どうも煮え切らない。

だが、今は余計な雑念は捨てざるおえない。次の授業の担任は我が姉であり鬼教師である織斑千冬である。遅れば、何が待っているか分らない。

かつて、授業に遅れた際は実技の訓練だ、と打鉄を纏った姉との十連模擬戦があった。

故に、今思つた印象等は脳内の片隅に置き、さつさとISスーツに着替える。

「ま、いつか。それよりも急ぐぞつ！ 千冬姉は授業に遅刻する者に凄い罰を与えるからなつ！」

「わ、分かつたよつ！ こつち見ないでねつ！」

男の裸なんて好き好んで見たくないつ！ と思うが、一夏は着替えを進めていく。

一般的にISスーツは女性用に造られている為、彼女達にはとても着やすいもの。一方、一夏とシャルルの物は、スキューバダイビングのスーツのように露出している部分は頭と手足のみ。

着るのに手こずるのである。で、あれば最初から制服の下に着ておけばいいのでは？ と考えもする。うん、正解だ。

シャルルは制服の下にISスーツを着ていた為に服を脱げば終了だ。

一夏も次からはそうするか、等と呟きながら着替え終わる。

「よし、急ぐうつ！」

「う、うんっ」

一夏が自然とシャルルの手を取り走り出した。

彼としては二人で遅刻は避けたいという一心から出た行動だったが、シャルル本人はもう顔から火が出るのではないか、というくらい赤くなっていた。

ダメだよお、恥ずかしすぎるよつ。

“彼” いや “彼女” としてはもう男を装うのはとつと辞めてし

まいたいと強く強く思うのであった。

「……うん、ギリギリ間に合ったな。さっさと列に入れ」

何とかギリギリで間に合った二人に千冬は授業を始める為、列に入るよう促した。

間に合った事に安堵しながら、一夏とシャルルは先に来ていた龍也の後ろに並ぶ。彼は遅かったな、と言うが二人はコイツ、何言ってもやがるといった視線で返事をしてやった。

「今日から射撃及び格闘武器の実戦を始めるぞ。まずは早速だがオルコット、凰の二人は前に出てこい」

授業開始のチャイムが鳴り、千冬はセシリアと鈴を前に呼びISを装着させた。

「織斑先生、ISを展開しましたが」

「あたしとセシリアで戦闘による実演を行え、って感じ？」

「そうだ。だが、お前達はペアだ。山田先生っ！」

千冬は隣でニコニコとしている真耶を呼ぶ。

「はい、では……」

彼女は教導用のISを展開する。彼女が纏うのはデュノア社製の『ラファール・リヴァイブ』のように見えるが細部に見たことのないパーツが付いている。

左右の肩には鎧武者の肩部分のようなのが増設されており、脚部にはブキヤが販売するエクステンドブースターを小型化した物がついているカスタムタイプだった。

「えっと、わたくしと鈴さんと山田先生と戦うんですの……？」

セシリアは不安げな声をあげる。鈴も同じことを千冬に言う。

「千冬さ……織斑先生、さすがに専用機持ち二人が相手じゃ」

それに対して千冬は笑みを浮かべ、

「なあに、今のお前達ならすぐに負けるさ」

その言葉に二人は闘志が芽生えたのか、戦闘態勢を取る。

真耶も武装を展開し、千冬の号令を待った。

「ようし、では始めっ

!!」

こうして本日最初の授業が始まったのだった。



## 三十五話

山田真耶。

かつては国家代表を目指し、代表候補生まで昇りつめた事がある。最終的には、代表候補生止まりではあったが、彼女の持つ銃撃スキルは一目置かれるほどだ。

彼女自身はブキヤが販売しているアサルトライフルやスナイパーライフルを好み、カスタマイズして使用している。

今回のラファール・リヴァイブはブキヤから学園側にテスト依頼があり使っているものだ。

コンセプトはエクステンドアームズ（いわゆる強化パーツ）をFA型IS以外にも使えるようにする、という事らしい。

それで、彼女のラファールに取り付けられたのは、肩部に小型の補助エネルギーパックと組み合わせたM・S・G・エネルギーシールドを内蔵させ、防御力の強化を。

脚部には小型のエクステンドブースターを着ける事で機動性と加速性の向上を狙っている。

武装はブキヤから提供された武器で、龍也らもテストに使ったセクターライフルだ。

他にも試作武器を幾つか渡されている。

さて、そんな彼女と代表候補生二人が、空で模擬戦を開始するのが結果は……。

「動きが早いわっ、セシリアっ！ ビットで牽制できない!!」

鈴が双天牙月を構え、接近戦を挑もうとするが高速で移動する真耶に追いつけないでいた。また、彼女はアサルトライフルで弾幕を張り、彼女らを寄せ付けないでいた。

セシリアもティアーズによる連携で足を止めようとするが、ティアーズの攻撃を相殺するかのようにセクターライフルのレーザーショットを正確にぶつけて来られていた。

「正直、キツイですわ！ あんな見事に相殺されてはっ。どうにか虚をつければですが……」

苦虫を噛み潰したような顔で鈴に答えるセシリア。

鈴も衝撃砲に強弱をつけて放ち、ティアーズへの攻撃を邪魔しようとするが、そんな事は真耶にはお見通しで器用に速度差をつけた動きで回避し続ける。

「お二人ともさすがは代表候補生ですね。でも、まだまだですっ！」  
真耶も普段は見せない真剣な表情を見せており、地上で見ている生徒達は驚き魅入っていた。

「良い具合に模擬戦も熱が入っているな。デユノア、山田先生が使っているISの解説はできるか？」

「え？ は、はい。では、山田先生が使っているラファール・リヴァイブはデユノア社が開発した第二世代型のISです。そのスペックは初期第三世代に劣らないものがあります。安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴ですが、カスタマイズされていますね」  
等と、シャルルは解説を続けようとするが、決着が付いた。

そろそろ、決めにしましょうっ！

真耶は手持ち武器の弾幕で二人を誘導し、グレネードを投げる。

投擲されたグレネードは二人の目の前で爆破する。が、それはスモークグレネードだった。

「スモークグレネード？！ 鈴さんっ！」

手っ取り早く煙に対応するのに、鈴はセシリアの声と同時に衝撃砲を撃ちこみ、煙幕を晴らした。

「げっ っ！」

だが、煙の先にいたのは巨大な銃器を両手で構えた真耶だった。既にチャージは完了しており、銃口からはエネルギーの塊が発射を待ち望んでいた。

「これでっ——！」

弾かれるトリガー。

放たれるエネルギーの奔流に二人は成す術も無く飲み込まれ、地に伏すのだった。

「くう〜アレ、リボルビングバスターキャノンよね？ あんなビームみたいなのが出る仕様じゃなかったわよね っ！」

「ええ、わたくしが使わせてもらったのは弾丸でしたし……。あのよ  
うな仕様になつてゐるなんて……」

攻撃の衝撃による痛みには耐えながら、鈴とセシリアはISを解除  
し、真耶を見る。

彼女も地上に降りたち、ISを解除して近づいてきた。

「お二人とも良い動きでしたよ」

「ありがとうございます。で、山田先生。最後に使った武装はリボル  
ビングバスターキャノンだったわよね？」

「ああ、それでしたら、リボルビングバスターキャノンを改造した物み  
たいですよ。何でも弾丸の代わりにエネルギーパックを装填した、  
ビームキャノンのテストだそうです」

「……威力は凄いですけど、ブキヤは魔改造がお好きですね……」

あの会社はやっぱりおかし、と思う彼女らであった。

それはともかくとして、教員の実力とブキヤの武装はおかしい、と  
いう認識が生徒達に植えつけられる。

「よし、これで教員の実力も分かったことだ。分別の着いた態度で接  
するように。では、訓練用の打鉄とラファールを使い訓練を行う。専  
用機持ちを班長とし、各グループになつて行え、それでは、開始っ  
！」

専用機持ちは龍也と一夏にシャルル、セシリアに鈴、ラウラの六名。  
各グループ八人か七人のグループが出来るはずだった。

が、千冬の号令と共に一組と二組の生徒が一夏にシャルルに集まる  
のだった。

多少、龍也の元にも集まるが多くは無い。

うん、俺よりもあの二人の方がイケメンだからね、うん。分つてる。  
グスツ。

心の涙を流す龍也であった。いいもん、俺には刀奈がいるしつ。

だが、そんな現状を千冬が許すはずもなく、すぐさま怒号が飛ぶ。

「この馬鹿共がっ！ 出席番号順に分かれろっ！」

さすがは千冬さん。

その一声で先ほどまで集まっていた生徒が規律正しく、出席番号順

に分かれていくのであった。

できるなら、最初からそうしておいて貰える方が龍也的には、内面のダメージが少なく済んだのだが。

「……できるじゃないか。最初からそうしろ」

そうして、出席番号順に各グループに分かれISを用いての訓練が始まった。



さて、場面は変わってフランスでは、リロイの駆るカトラスが屋敷前のラファール・リヴァイブを相手にし、その隙に飛鳥が内部に侵入していた。

「おいおい、弱すぎるぞっ！」

リロイは飛び道具を一切使わず、カトラスの左腕のデイフェンスローターと脚部に着いているベリルダガーのみでラファール・リヴァイブ二体をいなしていく。

「ど、どうして当たらないのよっ！！」

「アンタ、もつとちゃんと狙ってよっ！！」

二人のパイロットは無我夢中でアサルトライフルを撃つが、左腕のデイフェンスローターで銃弾を防ぎ、ブースターによる加速で一気に近づき連続蹴りでラファール・リヴァイブのSEを削っていく。

「キヤアアアッ！！こ、こいつ強すぎるわよっ」

「動きが速すぎるのよっ。あの姿も、ブキヤのバーゼラルドによく似ているわー！」

ご名答。バーゼラルドの派生のカトラスだからな。ま、元よりISと武神では戦力に差がありすぎるんだがな。それでなくとも、こいつらは実戦経験の無いひよつ子達。弱すぎるっ。

「さっさと倒して飛鳥の様子を見に行くかー！」

リロイはデイフェンスローターを分解しベリルダガーにし、両の手に持ちエネルギーを収束する。

脚部のベリルダガーも同様に収束させていた。

緑色に輝くベリルダガーに恐怖を感じるラファール・リヴァイブのパイロット達。だが、所詮はダガーと高を括ってしまった。それは悪手だ。

このベリルダガーは見た目以上に攻撃範囲が広いのだ。舐めてかかると切り裂かれてしまう。

リロイはカトラスのブースターを吹かし、ISでいう瞬時加速以上の速度を引き出す。

ダガーを逆手に持ち、一気に二人の間を駆け抜ける。

その刹那、数秒で充分だった。

「コンビネーション・アサルト」

斬撃の乱舞をお見舞いするリロイの得意技だ。

乱舞を受けた二人はSEと共に意識も刈り取られ倒れ込んだ。

「……悪いが、拘束させておいてもらうぞ」

リロイはラファールのパイロットを縄で縛りあげ、放置し屋敷内に先行している飛鳥を追った。

屋敷内では飛鳥が地下への道を発見し、進んでいた。

地下は広めに作られており、幾つかの部屋があるようだった。照明は生きているが、隅々まで照らしてはくれない。

飛鳥は手に懐中電灯と愛用のハンドガンを持ち、見えない所を照らしながら各部屋を慎重に調べていく。

……ワインの貯蔵庫が幾つか。ビリヤード台から娯楽設備ねえ。この屋敷は趣味の為の物のようね。

でも、屋敷の外はIS二機だけで、中は監視すらいらないなんて……どうなってるのかしら。

油断はできないわね、と気持ちを引き締めながら進んでいく。

そして、最後の部屋を確認する為に扉を開けた。

そこにいたのは一組の男女だった。

「デュノア夫妻……？」

背中合わせで縛られていたが、確かにデュノア夫妻であった。

## 三十六話

飛鳥はデュノア夫妻の意識を確認する。

二人とも眠っているのか息をする音だけが聞こえた。

……あまり戦闘音はしていないけども、こうもすっかり眠っているのも肝が据わっているというか、何と言うか。

とりあえず二人を連れて出よう、とバルチャーを展開し抱え込んだ。

静かに抱き上げたとはいえ、こうやつても起きないとか薬で眠らさされている？

「考えても仕方ないし、リロイと合流しましょうか」

リロイも屋敷内に入ってきていた為、合流は早くできた。

二人は現状の確認をし、ひとまずはセーフハウスへの帰還を急ぐ。

「……警護が甘すぎだったね。どこかで狙っているかも」

「用心に越したことはない。つと、言っているとやってきたぞ」

リロイが前方を示すと、全身装甲のISが鎮座しこちらを見据えていた。

しかも、見覚えのある外観であり、ふつふつと怒りが込み上げてきた。

目標まで600メートル程の距離で停止した二人。

「リロイ、デュノア夫妻をお願い」

飛鳥はそう言いリロイに二人を渡す。

「ほどほどにしろよ」

彼の問いに頷き応える。

すう、はあく……。飛鳥は呼吸を整えるとバルチャーの四肢に力を込める。

「金色剣っ !!」

量子空間から全てが黄金色の合体大剣、ユナイトソードを展開する。

刀身はベリルウェポンとなっており、その攻撃特性により見た目以上の攻撃範囲を持っている。また、ベリルウェポン化しているのはユ

ナイトソードを構成する全ての刀身部分である、と追記しておく。  
彼女はそれを正眼に構え、敵を睨む。

バーゼラルド砲撃戦仕様。龍也は一応、全FAのデータをブキヤサーバーに保存してある為、どこの支社でも閲覧は可能ではある。が、FA型ISとしての設計図は本社と、龍也が許す人物にしか閲覧許可は出ていない。

とはいえ、姿形を真似て造るだけならIS開発者にとっては簡単な事である。武装も既存の物を組み合わせれば、ある程度の再現は可能だ。

唯一出来ない物があるとすれば、ISコア解析に伴って可能になったベリルウエポンの類だけ。

これに関しては本社とブライアンしかデータを持っていないからだ。

さて、では眼前のバーゼラルドはどうしたものか。

既に敵機は両肩のイオンレーザーカノンの銃口をこちらに向けている。あとはどちらが先に仕掛けるか、という状態だ。

まさかココで会うなんて。フランス支社が造ったのか、デユノア社が関係しているのか。……考えても仕方ないわね。

「ひとまずはアイツをぶっ潰す」

飛鳥は一気に地を駆ける。

バーゼラルドは胸部に備えられた索敵システム及び頭部に増設された補助演算装置で強化された照準システムにより、正確にバルチャーを捉えている。

両肩のイオンレーザーカノンが放たれる。

放たれたレーザー砲を飛鳥は速度を落とさず、ユナイトソードで逸らして見せた。

「はああああつ !!」

ユナイトソードを振り、TCSを伴う斬撃を飛ばす。

バーゼラルドは額のセンサーを赤く点滅させると、フォトンブラスターによる急加速で左に回避し、左のイオンレーザーカノンを撃ちながら新たな武装を右腕に展開する。

それは大型の爪だ。4本の爪が鋭く鈍い輝きを放っている。

「インパクトエッジッ！　それも模倣するの！！」

確かに砲撃戦仕様には基本的に近接武器は搭載されていないが、あえてコレか、と彼女は思った。

飛鳥はレーザーを避けながら、TCSの斬撃を放ち続ける。エネルギー消費は大きいが、ユナイトソードに小型のエネルギーパックを搭載しており、幾分かは持ちが良い。

対するバーゼラルドは両肩の武装を撃ち続けながら、機体のスピードを生かしバルチャーの斬撃を回避していく。

「さすがはバーゼラルドね、速度は一級品だわ」

でもね、と一言おき、私には勝てないと呟いた。

月宮飛鳥。元日本代表のIS操縦者にして、龍也の仕事の元パートナーでもある。当然、IS操縦技術にしても飛びぬけているのだ。

ましてバルチャーは格闘戦に強い機体でもある。

「狙いはその両肩っ」

ユナイトソードを瞬時に分解し、ナイフだけを手に取り両肩のインレーザーカノンに向けて投げつける。

バーゼラルドはレーザーでナイフを破壊しようとするが、TCSを纏っている為に破壊されず逆に切り裂いていく。

再び頭部センサーが赤く光ると両肩のカノンをパージし、左腕にもインパクトエッジを展開しバルチャーに突っ込んできた。

飛鳥は分解したユナイトソードを瞬時に合体させ再び大剣の状態にし、上段に構え相手の攻撃に合わせることにした。

「我が金色の剣に断てぬ物無しッ！！」

どこぞのスーパードロボットのパイロットや、剣士系のキャラが言いそうなセリフを吐きながら、インパクトエッジを突き付けてきたバーゼラルドに唐竹割りを叩きこんだ。

「武装と共に散るがいいっ！！」

まさに一刀両断。インパクトエッジと共にバーゼラルドを真っ二つにした。

両断された機体は機械がみつしりと積み込まれているが、ISコア



は存在しなかった。

「……あくまで無人機での再現、ね。それとコアの代わりに使われていたのは」

彼女は残骸から青い宝石を見つけ、取り上げた。

「賢石をコア代わりにする……と」

賢石をコアにしていると言う事は、このバーゼラルドはISの模倣品であり、概念を使用した概念兵装であった。

「……本当に面倒な事ね。で、リロイ。さつきから私に対して敵意を向けているのはどういうことかしら？」

飛鳥は振り返らないが、後ろではリロイがカトラスを駆り、IR―P13（セグメントライフルの発展型）の銃口を突き付けていた。

### 三十七話

リロイがカトラスを駆り、IR-P13（セグメントライフルの発展型）の銃口をバルチャーに突き付けていた。

背後からの視線には殺意がこもっているのが判る。

さて、と彼女は思考を続ける。ふと思いつくのはFAの方でもあった「黒い森事件」。だが、自分が倒したバーゼラルドは実機だ。これだけは確かだ。

では、と考えるが同時に体も動いていた。

リロイがトリガーを弾くよりも早く、振り向きざまに右足のベリルベーンでIR-P13を切り裂いた。

飛鳥が用いるバルチャーには基本的に近接武装しかない。幾ら利便性のあるベリルウエポンがあるとはいえ、「ただの」IS乗りなら到底扱いきれないピーキーな機体だ。

しかし、ここにいるのは「元」日本代表にして秋野龍也の右腕だ。そこらのIS乗りが束になっても蹴散らしてみせる。

……カトラスのセンサーは異常時に光るレッド。操縦系統が乗っ取られているのね。じゃあ、ごめんねリロイ。

「カトラス、破壊しますっ」

飛鳥は短期決戦で決着を着ける為、瞬時加速で一気に近づく。

相手はISではなく、武神だ。搭載できる武装に限りはあるが、パワーでは遥かにISを超えている。FA型ISでも全力で戦えば歯が立たないのだ。

それ故に、長期戦は不利と判断した。

金色剣は分割し、腰にマウント。両腕の狗式鋼爪での格闘戦にスタイルを切り替えた。

「はあっー！」

右、左と交互に繰り出されるストレートパンチ。カトラスはディフェンスローターで器用に防御する。

飛鳥はベリルベーンを伴う蹴りも織り交ぜながら、攻撃を続ける。

カトラスはそれらを巧みに防御、カウンターとして脚部のベリルダ

ガーを手を持ち斬撃を放ってくる。

お互いの攻撃は、更なる攻撃で防ぐという行為で戦闘が続く。

「はああああっ ー！」

飛鳥は気合を入れ、腰にマウントしてあった金色剣を解体、投擲武器として放つ。

長剣、短剣、放たれた刃をカトラスが弾き続けるが、その間を狙い飛鳥が素早く移動し密着する。

そして、カトラスの胴に掌底を叩き込み、

「仙氣発勁っ ー！」

カトラスの装甲に氣を送り込んだ。

すると、装甲にヒビが入り、表面だけではなく内部装甲までが弾け飛び、合致していたリロイが現れた。

ちなみに、武神の操縦は人が合致する——融合に近い状態で行う為、ダメージのフィードバックがある。よって、リロイは発勁の影響を受け若干、全身血だらけになっていた。

だが、死んではいけない。これが、真仙氣発勁と呼ばれる技だった場合は、彼の内蔵もダメージを受け危なかったであろう。

リロイは倒れ込むようにカトラスから出ると、飛鳥を見て、

「ば、バカ野郎ッ ー！ 殺す気か ！！ もうちよつと止め方考えてくれよ ー！」

「えー……良いじゃない、助かったんだから。気にしないの」

「アホーっ ー！ 駆動部を狙って破壊すれば動きは止まるだろ ー！」

なのに、仙氣発勁なんて使いやがって ー！ とつさにこつちも氣を練ったから、ちよつと血だらけになっただけで済んだだけどき ー！！

等と、不満を述べるが氣を練るとかは普通の人間には出来ない技なのだが。

「まあまあ、で、どうして乗っ取られたの ？」

「……ハア、もういいです……。ふう——、簡単に言うとそのバーゼラルドから電子攻撃を貰って、感染した」

リロイが続けて説明した内容はこうだった。

飛鳥とバーゼラルドが戦闘しているのを眺めていると、突如、カト

ラスが起動。確認してみると、バーゼラルドから武神に対してのみ効果のある電子ウイルスのような物が発せられていた。

このままだと暴走してしまう、と思い慌てて合致し制御を取り戻そうとしたら無理でした、という事だった。

で、彼女が説明を聞いて放った一言が、そのまま暴走させても良かったのに……。

「最終的にどうしようもなかったら私自身の能力で戦うしね？」

「……全く、お前や龍也に限った話じゃないが、固有能力を持つてる連中にとってISや武神は枷でしか無いんじゃないか？」

飛鳥は彼の言う事には応えず、先を急ぐように歩き始めるのだった。

●  
一方、日本、IS学園では龍也が一夏達の訓練の様子を見守っていた。

彼自身は昼間のトラブル（一夏ラヴァーズの面々とシャルルらと食事をしたのだが、セシリアの酷いサンドイッチを食べ、放課後まで倒れていた）により、まだ体調が万全ではなかったからだ。

今は一夏とセシリアの模擬戦中だ。

ティアーズとライフルの射撃を避けながらセシリアに接近戦を挑んでいた。

しかし、彼女の巧みな牽制により未だに間合いには入れていなかった。

「一夏ってISに乗って二、三か月ですよ。それでアレだけ動けるなんて……」

素直に感嘆するのは龍也の隣で訓練を眺めるシャルルだった。

「そうだな。アイツは俺のキツイ訓練にも耐え、技術を吸収しているからな」

「聞いた話だと、VR訓練もやってるんだって？」

「ああ、俺がブキヤで行っていたんだ。それをアイツにもさせている。」

シャルルもやる？ 楽しいよ？」

シャルルは少し考えるような素振りを見せてから答える。

「うん、お願いしようかな」

その答えに龍也はニヤアと汚い笑みを浮かべる。

シャルルは、「あ、選択肢間違えたかな」と思ったが、彼はすぐさま自前の端末から色々データを引っ張り出し、VR訓練のデータを作成し始めており、やっぱりやめる、とは言えない雰囲気であった。

苦笑し、視線を一夏とセシリアの模擬戦に移す。

一夏は龍也から伝授された抜刀術をメインに据えたヒット&アウェイの戦闘スタイルを確立しかけていた。

その結果、彼はSEが三割を切るが、ブルーティアーズのBT兵器を破壊し、SEもあと二割という所まで追い込むことが出来た。

……彼のVR訓練ってそれだけ効果がある、って事なのかな。相手は仮にも代表候補生。それが、要の武装を破壊されて、今は――。

「これで決めるっ――！」

空にいる彼女に瞬時加速で迫り、零落白夜を発動させた一夏の一撃が決まろうとしていた。

セシリアは迫る刃を見ながらも笑みを浮かべた。

不審に思う一夏だが、振り始めた斬撃を止める事は出来ず、振り切った。だが、彼が斬ったのは空だった。

「なっ  
!?」

一瞬で彼女がいなくなった事に驚く彼とは対照的に見学していた者達は、セシリアの動きに見惚れていた。

「一夏さん、足元がお留守でしてよ？」

彼女は斬られる直前に、PICを切り、重力に従い落ちたのだ。そして、再度、PICをONにし、両手にブキヤ製のハンドガンを持ち真下から彼に銃弾を叩き込むのだった。

さすがの一夏もこれには対応出来なかったのか、防御もできず全弾もらいSEが枯渇する。

「ちつくしょーっ !! あと少しだったのにな」

地上に降り立った一夏が悔しさ漏らす。

対して、セシリアは危うさを覚えていた。着実に力をつけてきた一夏と比べて、自分はその内負けるのではないかと。今回は勝てたが、次はどうだろうか。

シャルルは先程まで考えていた事を口に出した。

「代表候補生に迫る……か。そりやあ、データを欲しがるのは無理もないかな」

呟くような小言ではあったが、隣にいた龍也はしっかりと聞いていた。

彼は何も反応せず、訓練を終えた二人に声を掛けに行くのであった。

## 三十八話

龍也は模擬戦を終えた二人に近づき、改善点を述べる。一夏とセシリアは言われる事を、自分の言葉で言い直し消化していく。

その後ろではシャルルが着いて来ており、彼も感想を述べていた。彼が言う事も分りやすく的確な為、一夏はたいそう喜んでいた。

龍也も自分が言いたい事でも、巧く伝えるのが難しいと思っていた面もあったので、助かっていた。

「さて、一夏。当面のお前の課題は？」

「『射撃武器』を理解する事、だな」

そうだ、と龍也は告げる。続けて、シャルルが尋ねる。

「白式って後付武装が無いんだよね？」

「ああ、欠陥機らしい」

残念な事に白式は単一能力発現の為か、後付武装のスペースは無い。が、最初から単一能力、しかも『零落白夜』という、ある意味で最強の能力を持っているのは強みではある。

その点をシャルルは異常事態、前例がない事だよ、と述べていた。「実際に射撃武器を使ってみれば、よく分かると思うんだけど撃ってみる？」

シャルルはラファールの腕を展開し、ハンドガンを準備し一夏に差し出す。

「お、いいの？　じゃあ、撃たせてもらおうか。龍也、的を出せるか？」

以前、ブキヤに行った時に射撃武器を使わせてもらうハズだったのだが、女性陣からの模擬戦のせいで使う機会に恵まれなかったのだ。なので、これは良いチャンスだ、と思ったのだ。

「……よし、出したぞ」

訓練をしているのは自分達だけではない為、彼は周辺を確認してから端末を操作し適当的を出した。

そこからはシャルルがハンドガンの構え方等、細かい点を一夏に説明し始めた。

さて、アイツの事は彼に任ずとして俺は――。

「セシリア」

考え込んでいた彼女だが、呼ばれて龍也を視る。

「なんででしょうか？」

「セシリアも強くなっている。でも、ここからより強くなると思うなら、自分の長所をもっと伸ばすしかないと思うんだ」

言うは易し、と思う彼女ではあるが、反論する前に彼が言葉を紡ぐ。  
「そこで提案なんだが、セシリアのBT適性が高い点を考慮して、こんな武装があるんだが使ってみる気は無いか？」

龍也は端末に「それ」を映し出し見せる。

映るのは四枚羽に鳥の頭、下部にはライフルのような物を接続してあるのが見れる。

サポートユニットのようなものでしょうか。ですが、龍也さんはBT適性とおっしゃってましたし……。もしや……。

「あの龍也さん。これってBT兵器なんですか？」

「その通り。ヘヴィウエポンユニット・キラービークだ。武装はビームライフルのみだが、この武装は変更可能だ。どうだろうか？」

「お誘いは嬉しいんですが、果たして使いこなせるかどうか」

確かに彼女のBT適性は高い。ただ高いだけではない練度もそれなりだ。

龍也もそれを踏まえて勧めたのだ。

「今のセシリアなら二基まで追加しても大丈夫だ。まあ、ものは試しさ。週末、学園に持ってきてくれるから試用してみてくれ」

そこまで言われれば、彼女もやってみようという気になり、

「わかりましたわ。本国にも話しておきますわ」

「ああ、俺からもイギリス政府には話しておくよ」

話を終えると、龍也は箒や鈴にも近づき彼女らがしていた訓練内容について話をしに行く。

しかし、剥き出しの殺気を感じ取り、足を止めて警戒をする。

……ラウラ、か。

遠くでドイツの第三世代型IS——シユヴァルツエア・レーゲンに



ブキヤが提供したリーススタイルバズーカを左肩に装備したカスタム機を展開した彼女を見つけた。

彼女の視線は一夏に向けられており、右肩のレールカノン及び左肩のバズーカは既に攻撃態勢を取っている。

あの馬鹿が。周囲の生徒の安全も顧みずに攻撃をしようとするなんて——軍人の考える事じゃないだろ。

既に周囲の生徒達はラウラの異様な雰囲気にとられており、距離を取っていたのが幸いだった。

龍也はバーゼラルドを展開し、彼女の動きに合わせてられるようにする。

彼の愛機はエクステンドアームズ01と呼ばれるカスタムパーツを装着しており、高機動格闘戦を強化した機体へと調整されており、ゼルファイカールほどではないが、より高速での戦闘ができる仕様へとチューニングされていた。

そして、ラウラがレールカノンを一夏に向けて撃ったのは彼が展開を終えたと同時にであった。

ちいつ、と舌打ちをし、龍也は瞬時加速で一夏の前に立ち、迫る実弾を腰にマウントされているスラッシュエッジを抜剣して叩き斬る。弾は爆発するが一応、訓練用の物だったのか白煙をみせるのみであった。

目の前で突然起こる出来事に一夏は驚くが、隣にいたシャルルはISを展開しておりシールドを構えていた。

ラウラは自身の攻撃を止めた龍也に対して、明らかに敵意を抱いた。

「龍也、なぜ止めるっ——！」

「一夏に対して何を思うのかは自由だが、こんな所でいきなり戦闘を仕掛けるな、馬鹿者がッ！次に同じ事をするなら二度と戦場に立たない体にするぞっ！！」

龍也が今までIS学園の生徒に言った事のないような怒気と内容に彼を知る者達は混乱する。

言われたラウラもこの世の絶望かのように真っ青な顔でガタガタと

震えていた。まるで、彼女が敬愛する織斑千冬に言われたかのように。

「これは脅しじゃないぞ。『大きな力を持つ者』が力を正しく用いれないなら、俺はそれを奪い潰すぞ」

大きな力を持つ者は、正しく行使しなければならぬ。

彼は常々そう考えているし、そうしているつもりだ。以前、ラウラ達と行動をした時にもこの事は口酸っぱく言っていた。彼女も彼の考えには同意していた。

だから、彼は怒りを露わにした。

「分かったなら退け」

反論なんてさせない、と強めに言い放つ彼に、ラウラはこくこくと首を縦に振り、ISを解除しその場を去っていた。

「……ふう、少々言い過ぎたか？」

バーゼラルドを解除した龍也が一夏達を見るが、彼らの表情から言い過ぎたんだな、と察した。

「龍也、雰囲気の違い過ぎるぞ……」

「すまん。次からは気を付けるさ」



その後、龍也は場の空気を悪くしたと言い一人アリーナを出て散歩をしていた。

熱くなりすぎた、と火照った体を冷ましていた。

「……自製の点ではまだまだ訓練の必要がある、な」

実戦経験も豊富ではあるが、まだ十代——未熟者なのだ。

自分も頑張らねば、と思いつながら、少し休む為にベンチに腰を掛ける。

さて、少し考えてみようか。ラウラが一夏に敵意を向ける理由とアイツからの報告内容を。

手元の端末には飛鳥からの報告メールが表示されていた。

『デュノア夫妻を救出。会社は我らが怨敵である『A』に乗っ取られ

ている。FA型ISが疑似的に再現されており、今後、裏の世界で暗躍する可能性があり。早急に対応されたし』

「ラウラの事よりもデュノア社の方を優先する必要があるな」

龍也は目を閉じ、思考の海を泳ぐ事にした。

のだが、左肩に寄り添ってくる者のせいで中止せざる終えなかった。

「刀奈、どうしたんだ？」

「あら？ 彼氏が困った顔をしながら考え込んでいたから、気になつて……ね？」

龍也の肩に頭を乗せて来る彼女だが、今はそれが心地よかった。

「で、あのドイツの娘と何があったの？」

「……ま、ちよつと俺がカツとなつて暴言を吐いた、というだけだよ」「それくらいは私も知ってるわよ。そうじゃなくて、前にも同じ事、あつたんじゃないの？」

彼は少しだけ考える素振りを見せ語りだした。

「何年か前の話だよ。織斑千冬がドイツ軍の教導を終えた後だったかな？ 俺も軍の特殊部隊への教導に行ったんだ」

当時、龍也は自身の「特殊能力」と同様の力を持つ者を探しては鍛えていた。

その時はドイツで一つの部隊が出来ていた為、教導に赴いていたのだ。途中、ラウラが率いる部隊との共同演習があつたのだが、ここで問題が起きる。

概念戦争——その後の全竜交渉後に残った「軍」という組織の残党の襲撃に遭つたのだ。敵は武神二機と概念兵装を持つ数十人の兵士で、戦力的にはドイツ軍側が劣っているように見えた。

とはいえ、ラウラ率いるIS部隊は龍也の適切な助言によって、武神を一機仕留める事に成功した。

また、もう一機は彼が教導していた部隊が撃破するのだが、メンバーの一人が何を勘違いしたのか、己の力に酔つたのか暴走。残る兵士を蹂躪するのだつた。

これに龍也が激怒し、その者を再起不能にし、二度と軍で働くこと

が出来ないようにしたのだ。

この光景を見た者達は彼が見せる「力」に恐怖し、彼が述べた事を心に留めた。

『大きな力を持つ者は、正しく力を使わなければならない。できないのであれば、俺は徹底的に潰す』

龍也は苦笑いしながら、刀奈を見る。

「まあ、あの頃の俺も尖ってたと思うよ？ あー……今も変わらないか」

でも、と彼は続ける。

「あの時も、今も言った事は間違っていないと思う。ISだって、大きな力だ。扱いを間違えれば、不幸を招く」

刀奈はうんうん、と頷く。

「そうねえ、龍也がやったことはやりすぎだけど、言いたい事は間違っていないと思うわ。でも、すぐ熱くなる性格は直してほしいわね」

バサツ、と修正してやる、と書かれた扇子を口元で広げる刀奈。

「ふっ、確かに。これから精進するよ。……でも、今はラウラよりもデュノア社の方が問題だ」

刀奈も事の次第は聞いている為、真剣な眼に変わる。

「刀奈、俺は少しフランスに行き問題の解決に尽力する。また留守にする事になるけど、ごめんな」

「えーつまらないわあ……。せっかくゆっくり龍也で遊ぼう——ゴホン、ゆっくりとしっぽり龍也と一緒にいたかったのに」

うん、何だか言ってる事がおかしい気がするな刀奈さんや。

すっかり出番が無くて出待ちヒロインとなっている刀奈。大丈夫、あの某作品のような魔導書ヒロインのような事にはならないさ。

「まあ明日、出発するから今日はゆっくりするよ」

「そうそう。だから、今日は……寝かさないでね？」

等と仲睦まじくしている二人は自室へと戻っていくのだが、この後に一夏が部屋に駆け込み助けを求められるのであった。

まだまだ受難は続くのであった。

### 三十九話

「で、一夏よ。二人の時間を邪魔してくれるっていう事は、それなりの用件という事だな」

龍也の冷たい声が部屋に響き、一夏は床に座り震えていた。

彼の眼は鋭く、視線だけで殺されてしまう、と感じたからだ。

龍也の隣ではバスローブ姿の刀奈がベッドの上で彼らを眺めている。が、彼同様に笑ってはいなかった。

「え、えーとな……」

突然、訪問した自分が悪いのは分るのだが、二人からの殺意の視線に耐えながら話し始めた。

シャルルが女で、デュノア社の命令で男性操縦者に近づいてきた。あわよくば、白式やバーゼラルドのデータを盗るつもりだった。そして、バレた今、学園を去ると言っている。

話を聞いてて龍也は、女と判明したのが、一夏の不注意でシャルルがシャワーをしている所に入ってしまったから、というラッキースケベだった、という事に頭を抱えた。

一方、話す一夏は二人の反応に驚きを感じられなかったので、もしやと、

「あのさ、もしかして龍也に楯無さんは知ってた……？」

「ああ、俺は会社の方から色々聞いていたよ」

「私もとある情報屋から、ね ♪」

「なんだよく……だったたら、教えてくれてもいいじゃないか」  
がくっ、とうなだれる一夏。

「まあ、お前に問題を解決できるだけの能力があれば教えていたよ」

そう言われると一夏はうつ、と詰まってしまう。初めての男性操縦者、ブリュンヒルデの弟、という点を除けば、単なる学生に過ぎないからだ。

それは彼としても分っている点だった。だから、彼を頼ってやってきたのだ。

「さて、で、一夏はそんな事を言いに来てきたのか？」

「いや、違う。俺はシャルルを助けたい。だけど、方法が分らないんだ」

だから、と口調を強めて彼は請うた。

「どうやったら助けられるのか教えてほしいんだ！」

一夏の強い意志を感じる言葉だった。

龍也は一瞬、刀奈と視線を交わしお互いの意思を確認する。思う所は同じだったのか、彼女は一夏に話すよう促した。

「一夏、彼女を助けたい気持ちは分かった。だが、確認したい事があるからシャルルと話をさせてもらっていいか？」

「あ、ああ、分かった」

携帯を取り出し、シャルルを呼び出す一夏。電話に出たシャルルに事情を説明してから、龍也に渡す。

「やあ、シャルル。なあに、少し聞きたい事があったから話をさせて欲しいんだ。大丈夫かな？」

『……ううん、大丈夫。えっと、何を聞きたいのかな？』

電話越しの彼女の声は、これからの事を考えて不安になっているのか、それとも諦めてしまっているのか、は分らないが弱々しかった。

ならば、ハッキリと意思を示してもらおう、と彼は彼女に問うた。

「シャルル、否、シャルロット・デュノア。君は、どうして欲しい？」

龍也の問いにシャルルは黙ってしまう。

「俺はシャルロットを生かすも殺すこともできる。だが、正直な所、君の意思は確認していない。だから、教えてくれ。君は、どうして欲しい？」

そう伝えるが彼女は正直、困った。彼女は自分の想いを表に出していいのか迷っていたからだ。

自分は妾の子。母が亡くなってからデュノア本家に引き取られたが、そこに己の意思を示す機会はなく、言われるがまま従う生活をしてきた。

今回のIS学園転入もデュノア夫妻からの指示だったので、正体がバレた今、学園を去るしかないと考える。

自分の気持ちは、このまま学園で自由に生活をしたい。だが、指示に従うのであれば、もう任務は遂行できないので学園を去るべきだ。

この二つの想いで迷っている。

龍也は何も言わないシャルロットに優しく語り掛ける。

「シャルロット。胸の想いを信じろ。それを教えてくれればいい」

……良いのかな？ 本当に言ってしまった方がいいのか。

不安に思う彼女に彼は、こう告げた。本当の気持ちを教えてくれたなら、俺達は君をその通りに、想いを叶えられるようにしてあげると。

この言葉を受け、彼女は思いの丈をぶつけるのだった。

●  
フランス、デュノア社前。

秋野龍也は月宮飛鳥と共にそこにいた。

「ねえ、龍也。本当に、本当に正面から行くの？」

「ああ。アイツがいるんだったら、どんな手を使おうが最後は俺との一騎打ちになる。だったら、最初から直接ぶつかれる方が手っ取り早くていい」

笑顔で語る龍也に飛鳥は困り顔になる。

何せ、アイツ、というのが彼にとつての怨敵であり、長い間、死闘を繰り返してきた者だったからだ。その度に、龍也が重傷を負う事が分っているのだ、あまり戦ってほしくないのだ。

自分が変わってあげれば、とは思うが防戦一方になるばかりでお手上げな為、進言する事も出来ないでいた。

「大丈夫だよ、飛鳥。死にはしないからさ」

飛鳥は不安が募るばかりであった。

そんな彼女に龍也は笑みを浮かべてから、社内へと足を進めていく。

ちなみに飛鳥には地下の搜索を託してある。

「さて……と」

中に入ると人は誰もいなかった。気配もせず、本当に誰もいない事が分る。

周囲を確認していると、受付のディスプレイに文字が浮かんでいた。

『社長室で待つ』

「……」招待、ありがとうございます、てね」

文章を確認すると同時に、エレベーターの扉が開く。

龍也は堂々とした態度で乗り込む。扉が閉まると、勝手に動き出し彼を運んでいく。

飛鳥は同時に階段で地下へと進み、奴が何をしていたのか探りに向かった。

「さて、何が見つかるかな」

彼女が赴く場所は隠された場所。普通に行けるのは地下二階までだが、このデユノア社、実は地下は五階まで存在する。

三階以降は研究施設や開発室が存在する。今回目指すのは最下層の五階だ。目を覚ましたデユノア夫妻の話では最下層で奴が「何か」をしていた、との事。

事前に夫妻から三階以降に行くためのカードキーは貰っているが、使えない可能性もあるので彼女はISと専用の戦闘装備を用意していた。

「……こつちも人の気配はしないわね」

階を降りていくが、こちらも人の気配はなくよんだ空気と自身の足音のみが響いていた。

彼女は途中、地下二階でカードキーを使い五階まで降りる為のエレベーターを起動させ降りて行った。

エレベーター内で奇襲でも受けるかと思いき、愛用する武装——金色の刃で形成された長騎剣を構えていた。

「あちゃー某作業員が活躍するゲームだと、クリーチャーが出て来るんだけど、無いか」

何のトラブルも無く到着してしまい、気を張るだけ無駄だったか、



と嘆くが扉が開いたと同時に彼女の口元が上がる。

扉の先からは異臭がする。人が、獣が腐ったような臭いだ。

この鼻を突く臭い、嗅いだ事がある、と飛鳥は記憶から呼び起こす。

ああ、アレか、と、うなずく。かつて、龍也と共に狩った事のある  
“生物”だ。

「……………こののを私は待っていたのよっ」

握っていた剣を振り、キンツと金属音を鳴らし、彼女は戦闘態勢を  
保ちながら先を進むのだった。



龍也はエレベーターが止まった階で降りる。どうやら、降りた先が  
社長室だったようだ。

目の前には己が怨敵であるアイツがこちらを睨んでいた。

その姿は髪と目の色だけが違うだけで、“秋野龍也”にそっくり  
だった。しかし、何とまあ不思議な事に奴の名前も――。

「よお、“竜也”。色々やってくれたみたいだな」

そう、彼もまた字が違うだけだが“竜也”という名なのだ。

彼は視線を外さないまま、右手にどこからともなく刀を取り出し、  
切っ先を向ける。

「全ては……………龍也、貴様を殺す為。デュノアの会社と人を用い、我が力  
を更なる高みに昇らせることが出来た……………」

「それで、人の気配がしなかったのか。……………まあ、お前が何をしようが  
こちらはそれを潰すのみ」

龍也もまた、どこからともなく出した刀を握り、力を込める。

彼にとつて最凶の敵であり、最も嫌悪すべき敵。

それが、彼。

龍也は秋野家本家出身。そして、竜也は分家の一人。

分家の人間にも本家の人間が持つ異能の力は発現する。それでも、  
決して本家の人間に匹敵するほどではない。

だが、竜也は違った。龍也と同程度の力を持っていたのだ。だから

なのか、本家の龍也に成り代わりたいと思うようになり、より強い力を求めるようになっていた。

今回の事もそうだ。彼は何かしらの禁術を用い己の力を高めた。そこから来る余裕が態度に現れていた。

「ハハッ、だったらやってみてくれ。——行くぞ」

龍也は首にかけていた黒曜石を掴み宣言する。

「起動せよっ、我がIS……フレズヴェルク・レイジー！」

赤き光に包まれ、生まれるは黒を基調としクリスタルパーツは紅のフレズヴェルクだった。

両の手にはベリルスマツシャーを、背部にはアームが追加されベリルショット・ライフルを四丁装備した超攻撃型仕様。更に、ブースター類も強化されているようで、オリジナルのフレズヴェルクよりも大型化していた。

「それが、お前が俺達から奪ったデータで造ったISか」

龍也の言葉には静かな怒りが籠められていた。

「そうっ！ 調べたぞ、貴様を使うバーゼラルドはこの魔鳥を狩る為に造られたそうじゃないか。で、あれば我はこの魔鳥フレズヴェルクの力で、貴様の剣バーゼラルドを砕いて見せようぞっ！！」

龍也は雄々しく腕を振り、自信を体現する。

「……ならば、行くぞっ！！ バーゼラルド・リヴェンジャーッ！！」

龍也もバーゼラルドを纏い、武装を展開する。

彼が使うのは大型ビーム兵器であるメガスラッシュユエッジ。これをブラスターモードで両腕部に固定していた。

FA型ISを纏った二人は睨み合い、意識を高揚させていく。

討つべきは己が怨敵。力はこの手に。あとは、振るうだけ。

二人の戦意が高まった今、激しい戦いが始まる。

終わる時は、どちらかが果てる時か、それとも——、両者の死をもつてか。

## 四十話

二機のIS、バーゼラルド・リヴェンジャーのメガスラッシュエツジから放たれるビームと、フレズヴェルク・レイジのベリルスマッシュヤーの斬撃、二つの武器がぶつかり合う度に熱と破壊、衝撃波が生じ、社長室をどんどんと破壊していく。

元より戦う為の部屋ではないし、狭いので龍也はわざと大振りに攻撃をし床を抜き、戦闘エリアを拡大していく。

龍也は彼の意図を理解しているのか、背部アームに着けているベリルショット・ライフルを乱射し、わざと外していく。

そして、およそ二フロアほどぶち抜いた所で、接近戦へと攻撃の手段を変えていく。

龍也は瞬時加速の連続使用を用いながら、両のメガスラッシュエツジをセイバーモードへと変形させ、ビームの刃で斬りかかる。

対して、龍也はベリルスマッシュヤーで防ぎ、逸らしながら背部のベリルショット・ライフルで迎撃する。

高熱を纏った弾丸がバーゼラルドの装甲を掠める度に、SEを削るどころか装甲自体を溶解させていく。

ちっ、やはりバーゼラルドの紙装甲ではアイツの攻撃を受け止めれないなッ！ 地味にSEも削られているし、ブラストシールドの修理が間に合っただけだったな。

せめてゼルファイカールの状態なら、と思わずにはいらなかった。

嘆きながらもフレズヴェルク・レイジから放たれる四つの弾丸を紙一重で躲し続ける。

……やはり、一筋縄ではいかないな。もう少し出力を上げるとしよう。

龍也はセーブしていた出力を引き上げる。ベリルスマッシュヤーの刃や機体のクリスタルが赤色に変化し、見た目で威力が上がった事が分る。

フレズヴェルク・レイジから禍々しきを感じ、龍也は武器を持つ手に力が入る。

アイツの機体に使っているTCSがどこまで再現されているか分らないが、あの禍々しさだけは気持ちが悪い……。早々に決着を着ける方が良さそうだ。

良しつ、と彼はメガスラッシュエッジの出力を最大まで引き上げる。ビームの刃はその輝きを増し、刀身は巨大化する。

龍也は右手を引き、左手を前に、右足は一步引き左足を前に一步踏み出す。

ほう、と竜也は武器を構え直した。

「なんだ、せつかく広くしたのにもう終わりにしたいのか？」

「……ああ。早く終わりにして帰りたくなってね」

「ふむ。まあいいさ——集え我が力、来たれ劫火よ」

ベリルスマッシュヤーに突如、炎が纏わりつく。それは、世界を焼き尽くす炎。赤々と刀身を更に染めていく。

対する龍也は。

「浄化の炎よつ、我が力となれっ」

メガスラッシュエッジの刃に竜也と同様に炎が纏う。

これが彼らの異能の力の一端である。

だが、龍也はFA型ISでの戦いに異能の力を使う気は無かった。この力がどのようにISのコアネットワークに影響するかは分からないからだ。しかし、相手が相手だ。意地を張って、使わないなんてできなかった。

「ぬおおおおおおおっ !!」

二人の叫びと共に機体が動く。

停止状態から一瞬で最高速度を出し、接近。間合いに入れば即、互いの一撃を決め合う。

交差する剣戟に破碎音が重なりながら、二人は立ち位置を入れ替えた。

バーゼラルドは両手のメガスラッシュエッジのビーム刃が砕けるが、代わりに炎が刃を形成し残っていた。

フレズヴェルクも同様に、ベリルスマッシュヤーの刃は砕けるが炎が新たな刃を造っていた。

「竜也、腕を上げたな」

フルフェイスの内側、神妙な顔で龍也は言い放つ。

「貴様もな……。だが、このFA——玩具否、ISか。ではやはり全力は出せんな……。つまらん」

竜也は本当につまらなそうにそう言い、フレズヴェルク・レイジを解除した。

「我々にとっては拘束具だな。貴様はよくもまあ、こんな玩具で遊ぶな」

侮蔑の混じった発言に龍也は苛立ちを覚えたが、表には出さずぐつとこらえた。

玩具とは言うが、その機体の開発にデュノア社を利用したのだ、何か裏がある。あるいは、あくまで自分と同様の力で勝ちたいのか……。。

そこで、ふと彼の両手が震えていることに気づいた。  
なるほど、と思った。

先程の攻撃で奴の両手に思った以上のダメージがあつたのだ。こちらはそんな事は無い。互いの力量は同等。FA型ISの装甲でいえばフレズヴェルクの方が堅いが、おそらく造りの甘さから来るダメージだろう。

「……ふっ、まだまだ造りが甘いな。次はもつと精錬された機体で来い」

「ちっ、やはり貴様に見え透いた嘘はつけんな。——次に会う時はより完成した機体で立ち合おう」

竜也は再びフレズヴェルク・レイジを展開し、天井を突き破り逃走する。

「逃すわけがないだろうっ !!」

龍也はセグメントライフを両手に持ち、狙いをつけるが、さすがは魔鳥。速かった。

消えゆくフレズヴェルクを見ながら、バーゼラルドを解除した。

……やはり、フレズに対抗するにはゼルファイカールクラスが必要だ。

日本に戻ったらブラストシールドの修理を手伝おう、と硬く決意するのであった。

すると、足元から地響きを感じ、身構える。

飛鳥か？ 何と戦っているんだ？

疑問に思うと同時に近くの床を破壊しながら、彼女がデカイ生物を剣で貫きながら現れた。

それはゴリラのような体格だったが、全身の筋肉は異様に膨れ上がっており、肉もただれ落ち骨が見えている所もあった。

また、背中には宝玉の様な球体が嵌め込まれており、飛鳥の攻撃を受けながら点滅を繰り返していた。

しかし、その光は次第に弱くなり、ついには灰色になる。

飛鳥は着地と同時にソレを床に叩きつけながら剣を抜くと、絶命したソレには目もくれず龍也に駆け寄った。

「龍也、無事っ ！！ どこも怪我してないわよねっ ！！」

こちらの無事を確かめたく、彼女は必死の形相で迫り、ぺたぺたと体中を触りまくる。

「お、おいおい、大丈夫だよ」

そうは言うが、彼女は信用ならんという感じで全身くまなく触診をする。

妙に手つきがエロくねっとりしているのだが、気のせいだと思っておく。

「……うん、そうみたいね。はあく良かったあ」

龍也が無事だと確認でき、安堵感を覚えたのか一気に脱力し、床にへたり込む。

「本当に無事で良かったよお。これで何かあったら刀奈ちゃんに怒られちゃうよ」

「ん、そうだな……。いつも刀奈と飛鳥には心配ばかりさせているからな」

いつもありがとう、と言ってから彼は目の前にあるソレについて尋ねる事にした。

「ああ、アレ？ アレはデュノア社の社員達の成れの果てよ。詳細

はコレを」

彼女がこちらの端末に情報を送ってくる。

内容は竜也がISコアの解析から始まり、コアの量産をする為にしていた実験の事について書かれている物だった。

読み進めていくと、だんだんと険しい顔になる龍也。

何故なら、人間の脳を使ってISコアを製造しようとし、失敗した場合は生物兵器への転用実験に社員を使用と書かれているからだ。

飛鳥が戦闘したのはガーディアンクラスと名付けられた物で、ISコアに使うには出力が足りない粗悪品を人体に埋め込み、改造された人間だった。

「……成程、アイツはどうとうここまで堕ちたんだな」

結果的に、竜也はデユノア社を生贄にすることで「疑似ISコア」を完成させる、と締めくくられていた。

「そう。地下にはアレみたいな生物兵器がうようよいたわ——全て滅してきたけどね」

その戦闘中にこの情報を見つけた、と付け加える。

「そして、アイツは亡国企業に身を置いている。場合によっては、俺達がこれから相対するのは疑似コアを使ったISもどきや、今回の生物兵器と、という事になる」

「ええ。必要な場所に連絡を入れて対策を取らないと大変な事にもなるわ」

しかし、だとすればバーゼラルド砲戦仕様を用いた脅迫やシャルロット・デユノアの件は何なのか、真意が分らない。

この辺りはデユノア夫妻からきちんと聞くべきだな。

龍也はひとまずフランス政府に一報を入れることにした。

何せ、企業一つを潰すかもしれない、無茶をする事や人払いをするにも力を借りていたからだ。政府も彼の頼みだから二つ返事で動いてくれている。

「佐山社長や日本政府にも話を通さないでダメだなー。ハア、だんだんと俺とお前だけじゃ対応できない話になってきたねえ……」

龍也は竜也が飛び去った空を見つめ、これから成すべき事について

アレやコレと考え始めるのであった。

●  
一方、龍也が海外で奮戦している間、IS学園でも一悶着が起きていた。

多くの生徒に囲まれているのは一夏とラウラだった。

互いに敵意を剥き出しにしており、今にも飛びかかりそうな勢いでいた。かろうじて行動に移していないのは彼らを箒達が抑えているからだ。

騒動の発端は模擬戦だ。

一夏がいつものメンバーと行っていた時に、ISを纏ったラウラが現れ彼を挑発したのだ。

私と戦え軟弱者、と。

彼も自分が弱い事は自覚しており、あからさまな挑発に乗るつもりは無かったのだが、攻め手を変えてきた。

「ふん、どうせお前程度に付き合うその連中も大した実力は無いのだろうな」

これに一夏はキレた。自分ならまだしも、他者を貶める事には我慢がならなかった。

当の本人達——箒とセシリア、鈴やシャルルは意に介しておらず、怒る必要は無いと言うがもはや耳には届いていない。

ちなみにラウラ自身はセシリア達の練度の高さは知っている。故に、この発言は一夏を怒らせるためだけに放たれた。

「お前、今の発言は取り消してもらおうかつ　!!」

「ならば、力で捻じ伏せるがいいッ　!!」

一夏はならば、と雪片二型を構え直そうとしたが、ふと脳裏に以前の龍也の言葉がよぎる。

「大きな力を持つ者が、力が正しく用いれないなら、俺はそれを奪い潰すぞ。」

……今、俺がここでラウラと戦うのは正しい用い方なのか？



友を蔑まれた事に怒りを持つのはきつと正しい事だと思う。だが、怒りに任せたまま力を行使する事は違うのではないか。

一瞬の思考ではあったが、一夏は武器を収納し代わりにこう言った。

「ラウラ、決着は今度のトーナメント戦で着けようじゃないか。そこでなら、闘ってやるよ」

その眼には制御されない怒りではなく、静かな闘志の孕んだ眼になっっていた。

「……いいだろう。精々、私と果たし合うまでは勝ち残るんだな」

「はん、お前こそ負けるんじゃないぞ」

ラウラはふん、と背を向けアリーナから去っていく。

一夏は白式を解除し、肩の力を抜いた。

「一夏、よく堪えたな」

箒が肩を叩きながら褒める。

一夏自身、龍也の言葉を思い出さなければ闘っていたかもしれない。あの言葉は自分が持つISという力への認識を改めるものだった、と思っっている。

それを皆に伝えると、彼女達も彼の言葉が響いていたようだった。

「しかし、ラウラも運が良かったよ。多分、龍也がいたらボコボコにされてたぜ？」

「そうですわね……。きつとラウラさんは龍也さんがいない事が分っていたから、やって来たんでしょうね」

「そうだろうな。しかし龍也も急に海外とは。ブキヤは中々人の扱いが荒いんだな」

そう、龍也はブキヤ・フランス支社へ出張という形で一週間ほど休むという連絡がHRで千冬からされたばかりであった。

真実を知っているのは千冬含む一部教師陣に、楯無ら生徒会に一夏と当事者のシャルルだ。

「うーん、荒いというよりきつと龍也にしか出来ない事が多いんじゃないかな？ だって、FA型ISの開発者なんだよね。プレゼンとかさせるなら本人にやらせる方が効率も良いと思うんだ」

シャルルの一見、尤もらしい言い方に箒達は納得するが、内心は穏やかじゃない。

彼に自分の想いは伝えた。『救われたい』という願いを。

龍也はシャルルの本音に耳を傾け、こう言ったのだ。

『待っている。必ず救ってやる』

力強い声に期待はするが、一体どんな事をするのか……。

彼女がデユノア社に関するニュースを聞くのは、この次の日であった。

## 四十一話

フランス上空を一機の旅客機が飛んでいた。

乗客はたったの一名。それ以外はパイロットのみである。

ただ機内も特殊であった。座席が数席あるのみで、他は大量のPCやディスプレイが設置されている。ブキヤが所有する特注機だ。

その一つに龍也は座り、ブキヤ本社にいる佐山やアキ達に今回の件について報告をしていた。

龍也はバーゼラルドで録画していた映像と飛鳥が持っていた映像や記録データを提出。

佐山は淡々と情報を処理していく。

アキとブライアンは、フレズヴェルク・レイジの性能とTCS再現に興味をそそられていた。

『なるほど。彼は“人”を糧にしてISコアを造ることが目的だった、と』

「ええ。それを俺に見せる為にわざわざFA型ISを造り、呼び寄せた、と考えるのが今回の件の真相と考えます」

『……デュノア社が使われたのは経営不振、という理由だね』

「加えるなら、大手で人が多い企業、というのもありますね」

『そして、彼を通じて亡国企業はコアの量産ができるようになったか。しかも、こちらが開発しているFA型IS並みの機体を用意できる』

『そこが気に入らないな。俺達は苦勞して完成させた物を再現されるのは癪に障るね』

そう言うのはブライアンだ。

しかし、彼とてスペックがおかしいのだ。オリジナルコア一つを犠牲に今まで世界中の科学者が出来なかつたコアの解析を完了させたのだ。

使われていたのは、金属は命を宿す概念を付与された賢石にFA世界におけるチート物質であるT結晶に酷似したクリスタルだった。もう名前はそのまま“T結晶”と名付けさせてもらった。

ちなみに解析終了後、龍也を介して東とブライアンは会っており、

コアについて話すことやISについて語り合ったそう。ついでにその場で新しいコアを造ったが、その話はまた別の機会。

アキもこれには同意。また、TCSの危険性についても語った。

『TCSの再現にも危機感を覚える。あれは現存するISの兵器では太刀打ちできないぞ』

「ベリルウエポンは強力すぎますからねえ。防御も難しいですし」

TCSを用いた兵装に対抗するには、より強固な装甲で耐えられるようにするか、相手よりも高出力のTCSで対抗するしかない。そうしなければ、ぶつかり合った際に生じる衝撃波だけで大ダメージを受けてしまうのだ。

本当、個人の趣向でFAを再現しまくってるけど、とんでもない兵装まで再現しちゃったなあ。

我ながらよくもまあやったな、と思う龍也。

アキとブライアンは二人でそのままISの話で盛り上がり始めるが、佐山はじつと龍也を見ていた。

「……佐山社長。アイツの事は任せて欲しいんです」

『いや、それは構わないが他にもあるんじゃないのかね？ 話したまえ』

「えつとですね、シャルロット・デュノア——彼女の事です」

佐山は口元を緩めて続きを促す。

「デュノア夫妻から話を聞きました。彼らは“こういう結果になるかも知れない”と考え、IS学園に……というよりは、俺に“預ける”つもりだったようです」

彼らも“秋野龍也”という各国政府が“何故”か重要視する人物ならば、何かあったときはシャルロットを救ってもらえるのではないか、そう考えていたようだ。

「それで彼女の事を預かろうと思います」

とはいえ、具体的な提案が必要だ。続けてそのプランを語っていく。

「もはや自力では再建不可能なデュノア社をブキヤで吸収します。あちらにはラファール・リヴァイブの生産に使っているプラントがある

ので、こちらが製造を開始するF A型I Sの量産を担ってもらいます。シャルロットに関しても、テロから逃れる為に性別を偽って学園に転入させたことにし、脅威が去ったと考え改めて「シャルロット・デュノア」として転入させます」

『ふむ……拙い内容だね。……でも、いいだろう』

佐山は笑みを浮かべて龍也の提案にG Oサインを出した。

龍也は礼を言ってから、I S談義で盛り上がっている二人に声をかけた。

「アキさん、ブラストシールドの修理と量産体制はどうなっている？」

『ん？ 龍也が壊してくれた奴は修理が完了済みだ。量産はこれからだ』

「ブライアン、俺が頼んでいるゼルファイカル用の追加ユニットは？」

『ああ、T 結晶を用いたB T兵器のことだな。開発は順調っ！ あと一月半もあれば完成できるぜ』

「……アキさん、ブラストシールドは帰国次第すぐに取りに行く。ブライアン、開発を急いでほしい。竜也のI Sに対抗するにはどうしても必要な力だ」

彼の声には焦りがあった。

このままでは負けるかも知れない、と。

『龍也、焦るのも分るが今は目の前の事を果たしたまえ』

「……了解です」

佐山の諭しに龍也は応え、まずは目の前の事——学園に戻ってから事に思いを集中するのだった。

ああ、どうやってシャルロットに説明するか考えないとなあ。

数時間後、帰国した龍也はブキヤに寄りブラストシールドを受領。これでゼルファイカル状態での運用を可能にしたが、同時にアキからもう一つ手渡された物があった。

それは、バイザーを模したアクセサリだった。

細かい説明は同時に渡されたデータに書いてあったが、どうやらF

A型IS、初量産シリーズである“三二式一型 轟雷”のようだ。  
『宣伝してきてね〜』

とはブキヤから去る時にかげられた言葉である。

飛行機内で先に説明してくれても、と思うが細かい事は置いておき、とつとと学園に帰ろうと足を速めた。



龍也が帰国した頃、竜也もまた日本にある亡国企業の施設にいた。彼は整備室でフレズヴェルク・レイジを展開し、傷んだ腕部を交換していた。一応、メカニックがいるのだが、あいにくと疑似コアのデータ取りに夢中で自分でやるしかなかった。

……両腕部は丸ごと交換だな。よもやあの一合でフレームに歪みが出るとは思わなかった。あのまま戦闘を続けていれば、“IS”は壊れていたかもしれない。

出力は同程度。

だが、フレームの造り込みに甘さがあった。それは、彼にも指摘を受けた。

やはり材質から見直さないといけないか、と頭を悩ませた。

フレズヴェルクのデータはブキヤにハッキングして抜き取ったものの。

龍也とて、ざっくりとした設計図とデータしか書いてなかったの  
で、参考にはなりにくかった。これを亡国企業のIS開発者と竜也が  
煮詰めて、完成させたのだが……。

「……FAでは龍也の方が上手、か」

しかし、この程度の障害は障害にならない。

この組織には表にいられなくなった開発者達が集まってきている。  
表だっていられない者達とはいえ、技術は折り紙付きだ。むしろ、そ  
の狂人すぎる手腕の為に裏に生きるしかできなくなった者達の集ま  
りだ。

故に、ISの改修などお手の物。

竜也は腕部のフレーム以外にも改善すべき点をまとめたレポートを送信し、自身は体を休めることにした。

「帰っていたのね」

ふと声をかけられ、そちらに振り返る。

「ああ、スコールか。先ほど戻ったばかりだ」

「どうだったの首尾は？ 何だかデュノアは大変だったみたいだけど」

「ふん。どうせもう知っているんだろう。——ISSの疑似コアの作成には成功した。今、研究員がデータ取りをしている」

「その為にデュノア社の社員を犠牲にするなんて、やる事が酷いわね」

「そう言うわりには、貴様は笑顔だな。だが、疑似コアの作成の仕方は開示する気は無い」

これにはスコールも顔をしかめた。

「当たり前だろ？ 我がコアを欲したのは、龍也と勝負をする為だ。貴様達のくだらん企みに付き合う為ではない」

「その為に組織からは莫大な資金を出していたわよね？ だったら、何かしら還元してくれてもいいんじゃないかしら？」

「はっ、例え教えようとも貴様達には『造れない』さ。せいぜいフレズヴェルク・レイジの戦闘データで自身のISSでも強化するんだな」

「……男性操縦者同士の戦いは貴重ね。はあ、しようがない。それで手を打ちましょう」

確かに男性操縦者の戦闘データは貴重な物である。

秋野龍也の物となれば、欲しがる所は山ほどあるだろう。また、ブキヤが公開していないバーゼラルドのデータも手に入るといふ。

こうして亡国企業は龍也の戦闘データを手に入れたのだが、参考にならなかったとぼやくのであった。

## 四十二話

「みんな必死過ぎるよ……」

龍也は現在、学園内を逃げ回りながら呟いていた。

登校した直後、クラスメイトからタッグを組んでくれないか迫られ彼は逃げたのだ。

何やら、学年別トーナメントの仕様が変わり、タッグでないとダメになったらしい。原因は以前の無人機乱入のせいだろう。許すまじ東博士。今度会う時は、何かしてやる、と決意する。

で、一夏はシャルルと組むと宣言したらしく、残りの一年勢は龍也狙いに変更。また一年で最強である龍也と組めれば優勝は間違いないだろう。

そう考える生徒もいれば、何やら他にも目的があるらしい。

そして、今は屋上にいた。

どうやって逃げ切ろうか、と考えた彼は以前、潜入捜査に用いた特殊迷彩スーツをISの拡張領域に入れていたのを思い出し、使用している。

これは彼が好きなゲームの主人公が使っていた物を再現した装備だ。

地面に寝っ転がり、景色と同化し優雅な日向ぼっこタイムを楽しみながら、一年勢をどう対応すべきか思索していた。

「タッグねえ……。どうしようか」

一夏はシャルル。セシリアは鈴と組むらしい。箒はどうか？  
なんと彼女はラウラと組んだと言ってきた。

『一度でいいからお前に勝ってみたい』

剣士としての彼女が闘志を剥き出しにして勝ちを取りに来ていたのだ。

ラウラも龍也に対して積もる思いもあるのか、タッグを組んだと。彼女は軍での経験から、近距離から遠距離は勿論、サポートもやろうと思えばできる万能選手だ。

そこに龍也によって鍛えられている箒が相方であれば、鬼に金棒で



はないだろうか。

恐らく、現時点で脅威なのは箒とラウラ。次点でセシリア、鈴ペアか。でも、シャルルも注意しないとイケない。彼女の得意とする高速切替ラピッド・スイッチは中々できる技術ではない。

「気を抜くことは出来ないな」

しかし、と口から洩れる。

誰を相方にすべきか。問題なのは彼の力なのだ。入学後は実力を抑えていたが、GW明けから彼はセーブしていた力を一部解放し始めていた。

顕著なのは篠ノ乃束との一戦、先日デュノア社で戦った竜也との戦いだ。

「ああ、どうせなら学年関係なしにやってくればいいのに」

そうすれば迷いなく刀奈と組み無双できるのに。

ああ、と嘆くが現実は変わらない。が、はっ、と妙案が浮かぶ。

「そうだ、あの娘がいたじゃないかー！」

善は急げだ。屋上からダッシュで目的の場所に行こうとドアを勢いよく開ける、が、龍也はすぐに足を止めてしまった。

否、止められてしまったのだ。

「……秋野。授業を欠席して屋上で日向ぼっこことは、良いご身分だな」  
眼前に立ち塞がるのは、怒れる獅子だ。いや、元ブリュンヒルデなんだから、怒れる戦乙女と言うべきか？

ビキビキと眉間に皺を寄せている彼女に、龍也は足を止められてしまったのだ。

「い、いやあ織斑先生。どうもどうも。えっと、これには深い事情があります……」

「黙れ小僧が。幾ら貴様が特別な立場だろうが何だろうが、ここでは私の生徒だ。さあ、授業放棄する生徒には指導しないとな」

ニヤアと汚い、とてもじゃないが女性がしてはいけない笑みを浮かべる千冬。

もう彼女の精神はストレスでボロボロなのだった。そして、積みりに積もったこのストレスを発散する方法を模索していた。

その時に丁度いいサンドバックが見つかったのだ。逃すわけがない。

龍也は彼女の表情から今の心理状態を理解してしまい、逃げるに逃げられなくなる。どう考えても原因の一つは自分なのだから。故に――

「はあ……判りましたよ。織斑先生について行きます」

がつくりと肩を落とし諦めた。

「そうだと。さあ、行くぞ」

ああ、最悪だ。と内心ボヤキながら彼は彼女についていくのであった。

時刻はお昼。一夏達は昼食を取りに食堂に来たのだが、着いた直後にある一角に眼がいく。

「……あれは龍也だよな」

一夏が恐る恐る言い、箒達もそうだな、と相槌を打つが近づく気にはなれなかった。

彼らに映る龍也は今まで彼が見せたことが無い状態だったからだ。なんと彼が机に突っ伏して倒れているからだ。それだけでなく呻き声のようなのを放ちながら、異様な雰囲気を作っているからだ。

周りにいる生徒達も「近づいてはいけない」と感じているのか、誰もが一切触れないでいる。

当の本人は先程まで繰り返していた千冬のストレス解消に疲れ切ってしまったのだ。

……くっそお、織斑先生め。打鉄を使うと壊れてしまう、とか言っ  
て俺から轟雷を取り上げるとは。しかも、初めて使うISでバーゼの動きに着いてくるとか、やはり化け物だよ。

そう、アリーナを一カ所使い存分に模擬戦をして彼女はストレスを  
発散させたのだ。千冬は存分に実力が発揮できる龍也に対して一切  
の容赦をせず、だ。

だが、さすがは元ブリュンヒルデと称えるのであった。なんと彼から轟雷を奪い、少し動かしただけで特性を理解してしまう、拡張領域に詰めてあった武装の類にも瞬時に対応する適応力。

手強かった。それが正直な感想だった。

だけど、めっちゃくちや疲れた。おかげで喋るのも億劫で呻き声しかあげれずにいる。

うっすらと開けている視界に一夏達が映るが、今はどうでもいい。俺をゆっくり休ませてくれ、と言わんばかりのオーラを出しつつ体力回復に努める。

「何だかとても疲れてるみたいだから、そっとしておいてあげようか」  
「そうだな……。行くぞ一夏」

一夏は声をかけるつもりだったのか、えっ？ と声を上げながら二人に引つ張られていく。

「ちよ、ちよっと待ってくださいまし」

「ごらー！ あたしを置いていくなー！」

その後をセシリアと鈴が追いかけていく。

だけでも、彼を放っておく訳がない人物がいた。彼女「ら」は彼を見つけるや近寄っていく。

二人は姉妹だ。髪の色や眼の色も同じだが、妹の方は眼鏡型のデバイスを着けているのが特徴だ。

龍也は二人の気配を感じるが、面倒だったので動かなかった。

「ねえ、お姉ちゃん。やめておこうよ」

「嫌よ。龍也がこんなに隙だらけなのよ？ やるなら今しかないじゃない」

待て、やるって何をだ。

「ほらあ、簪ちゃんも。ほらほら」

「ごら楯無さんや。可愛い義妹に何をやらすんだ？ 仕方ない、気力を振り絞ろう。」

「待てい。ごら楯無さんや、可愛い簪に何をさせる気だ」

がばつと勢いよく体を起こし、楯無を睨みつつ、簪を抱き寄せる。

この娘は何としてでも護らねば。主に楯無の悪知恵からなつ、とは

彼の弁である。

「え、ちよつと龍也義兄さん、いきなりは恥ずかしい……」

「あら♪ やつぱり龍也つて大胆よね。あく思い出すわ。あの時も龍也からだったもんね」

「やかましいわ。俺はさつきまで織斑先生との模擬戦をしてて疲れてるの。頼むからゆつくり休ませてくれ……」

「ああ、織斑先生、最近ずっと龍也の事でストレス溜めてたからね。私も幾分かはフォローしてたけど、IS委員会や他国への対応に追われていたしね」

「義兄さんも無茶をやりすぎ」

「……面目ない」

簪の上目遣いにやられ、素直に謝ってしまう。

「で、いつまで簪ちゃんを抱き寄せてるのかしら？」

おっと、そうだった。いつまでも抱いている訳にはいかない。

簪は若干、残念そうな顔をしているが気にしないでおこう。

「で、二人はこれから昼食かな？」

「うん。義兄さんが帰ってきてるって聞いたから。お姉ちゃんと一緒に探してた」

「そうだったか。こつちも丁度良かった。簪に話があつたんだ」

「私に？」

「ああ。月末にある学年別トーナメントの相手になつてもらいたくてさ」

そうきたか、と言うのは楯無だ。

「一夏君達はもうペアを決めてたしね。でも、残念ね龍也」

え？　と言う彼に申し訳なさそうに簪が答える。

「ごめんなさい……。もう本音と組んだあとなんだ」

「な、なんだと……？」

お、俺よりも早く本音が……。くつ、さすがだ。

「……だとすれば、俺は一体どうすればっ」

ベストアンサーを奪われ打ちひしがれるが、楯無の声に更なる現実を突きつけられる。

「というより、龍也は一人で出場よ」

「な、なんですとっ」

「んもう、龍也だって本当は考えていたでしょ？ 『自分と組んだペアは優勝するだろう』って。だから、先生方も熟考した結果、一人で出てもらうことにしたのよ」

本当は出場させない方が、都合が良かったのだがその場合、各国への対応で更なるストレスを抱え込むことになりそうだった千冬や真耶が拒否したのだ。

一人で出しても、彼なら十二分に成果を出すと告げて他の先生方を納得させたのだ。

「な、なんだって……」

「……義兄さん、さつきから同じような事しか言つてない」

いや、微妙に表情を変えているんだぞ。伝わらないだろうがなっ

！

「はあ……だったら、思う存分に暴れさせてもらおうかな」

「やり過ぎないようにしてよね」

楯無が言うのも無理はない。既に国家代表並の実力を見せている彼に対峙する生徒はきつとトラウマを抱くだろう。

「そこは大丈夫。今回はブキヤの方から、バーゼラルドじゃなくて違うF A型I S——新型の轟雷を使うように言われてるから」

「あ、轟雷が完成したんだ」

簪が喜々として反応する。

実は彼女のI S、打鉄式式には一部ではあるがF A型I Sである轟雷のパーツが使われている。元々、倉持技研が打鉄式式の開発を行っていたのだが、日本政府から白式の完成を急がれた為に開発ペースが落ちてしまうことがあった。

これを聞きつけた龍也はブキヤから技術提供と言う形で、轟雷のパーツを提供するのだった。対価として、かなりの金額を吹っ掛けたが、彼らも何としてでも完成させるといいうプライドから契約を結ぶのだった。

おかげで、入学した後にはなったが、五月の終わりには受領を終え

ていた。

「ああ。武装も色々突っ込んであるから、いい宣伝ができそうだよ」  
勿論、龍也が開発に携わっているのだからただ轟雷を再現したわけではない。

先程の千冬との模擬戦でも、彼女はその仕様には驚きを隠せなかった。

故に、見ている観客も良い反応を示してくれるはずなのだ。

「うーん、おねーさんはそれも怖いかな？」

どう考えても対戦相手には悲劇しか待っていない。楯無は彼とぶつかる生徒に哀悼の意を示すのであった。

## 四十三話

「シャルロット・デュノア。君は今日からブキヤ所属のテストパイロットなのでよろしくつ！」

「え？」

あまりにもあっけらかんとした龍也の話にシャルロットは呆けてしまった。

彼からデュノア社の事など話があると云われ、関係者が揃っている学園長室に来てみれば、開口一番がソレだ。呆けない方がおかしい。

だが、同様の態度をとっているのは彼以外の楯無に千冬、学園の長である轡木 十蔵もだ。

「ちよつと龍也。幾ら何でも説明を省略しすぎじゃない」

「……秋野、もう少し説明をしろ」

「ソウデスヨネー」

秋野 龍也——彼もデュノア社での戦闘からまともに休まないまま、ブキヤからISを受領し学園に戻れば追い回され、あげくには千冬の模擬戦ときたもんだ。さすがに疲れたのか説明する気力が出ないのだ。

はあ、と息を吐いてから説明を始めた。

「まず、デュノア社での出来事から——」

自身の怨敵である『秋野 竜也』。亡国企業との関わり、疑似ISコアの作成、弱みに付け込まれたデュノア夫妻。

物凄く簡単に話すが、要点は付いていた。

「で、ブキヤとしてはデュノア社と吸収合併します。その為、シャルロット・デュノアはブキヤ所属のテストパイロットとなるわけです。また、今後もフランスの代表候補生として励んでもらいますので、よろしく願います」

「え、えつと話は分かったんだけど、僕は『男性』として——」

「まあ、再入学すれば問題ないだろう。フランス政府もシャルロットの性別偽りに関与しているし、公にするとややこしい話になるんだよ」

現地にまだいる飛鳥から政府のお偉いさんもコレに参与してたよ  
くの一報を受け、龍也も考えていた案を頭から抹消し、政府にこう言  
うように伝えた。

『面倒ごとにはしかならないから、俺がやった事と相殺な』

これにフランス政府も首を縦に振り、龍也もにつこり。

「とはいえ、各種手続きの問題もあるからタッグトーナメントが終わ  
るまでは、変わらず男性として振る舞って欲しい。それからは、改め  
て女性として転入してもらうから。これでいいですよね、十蔵さん」  
彼に尋ねられ、初めて十蔵は口を開いた。

「……ええ、いいですよ。しかし、龍也君。少し独断過ぎませんか？  
もう少しこちらと連携を取ってもらっても良いんですがね」

「ん〜今回は申し訳ない。次に同じような事があれば、ご相談させて  
もらいます。……次が無い事を願うばかりですがね」

「だといいますがね。では、織斑先生。シャルロットさんに関しては  
今日の話で進めて下さい」

「分かりました。……デュノア、お前も理解したな？」

自分の事とはいえ、急すぎる展開に若干、シャルロットは着いてい  
くので精いっぱい、千冬への返答もただ頷くだけであった。

後に彼女は展開が早すぎて整理するだけで大変だった、と龍也に  
語っていた。

話を終えてシャルロットだけが退室し、三人はまだ話を続けた。お  
題は亡国企業に関してだ。

「……龍也、あなたはアノ組織に対してどこまで知っているの？」

「そうだねえ……。かなり古い組織である事と複雑すぎる体系で全貌  
が把握できない事と、俺の怨敵が所属している事くらいだ」

怨敵、と聞かされた時に楯無の表情は硬くなる。彼女も飛鳥と同様に彼  
への執念と、戦いの結果もよく知っているからだ。

「その敵だが、秋野と同程度の實力を持っていると言うんだな？」

千冬の問いに頷いて答える。彼女は一瞬、目を伏せ模擬戦の内容を  
思い出していた。

「……私とて、現役は引退したが訓練は続けている。『あの大会』で



優勝した時よりも力はあると思っっているが——この私と模擬戦で引き分ける奴は、そうそういない」

そこまで言ってから十蔵が口を挟む。

「厄介な事ですねえ……。日本政府はもう既に？」

「報告は入ってるはずですよ。どう対応するかは政府次第です」

「……正直、難しいでしょうね。どうしても保守的になる国ですからね」

十蔵は深いため息をつき、楯無の方にも同じことを聞いた。

「更識の方では、IS委員会にも組織の手が入っている、という事は分かりました。あとは龍也が言っていた事と同じですね。できれば、少数精鋭で専属の組織が欲しい所です」

亡国企業がどういふ動きをしてくるのか分らない以上、熟練の腕を持つ者で構成された組織が欲しかった。

かつては、そのような組織が日本にもあったが今は解体されており、そのメンバーも全員が揃うことは二度と無いであろう。

「仮にISを用いてのテロ行為があった場合だが、IS委員会は学園側に出撃要請を出してくる可能性が高い」

そう言う千冬の表情は穏やかではなかった。何せ、本当にそのような事を言ってくる可能性があるからだ。

学園としては生徒に実戦をやらせるつもりは毛頭ない。

あくまで正規の訓練を受けた者がやるべきで、学園で命のやり取りの方法を教える事は無いからだ。

だが、IS委員会はそう思っていない。学園で実戦を想定した訓練をする事を強いてくるのだ。おかげで、二年生になってからはより実戦に近い訓練が幾分か増えてくる。

「……そうならない事を願うばかりです」

しかし、龍也の思いとは裏腹に、近い将来に生徒達は実戦を経験する事になってしまうのだった。



時間は過ぎていき、遂にタッグトーナメントの日がやってきた。

龍也は対戦相手の発表を見る為、大型スクリーンの前に来ていた。一夏達も来ており、今か今かと待ちわびていた。

さあ、初戦の相手は誰になるか。

正直な所、専用機組以外と当たった場合は、ただの消化試合になりかねない。今回、龍也は新製品の宣伝もするので、手を抜くわけにはいかないのだ。

そんな事を思っていると、時刻が来たのか対戦表が映し出された。

「良しっ !!」

と彼が声を上げれば、

「ゲッ  
ッ!!」

と鈴の叫びが上がった。

「あー……初戦から龍也さんですか……。気合を入れないといけませんわね」

セシリアは特訓の成果を見せる時が来た、と気合を入れ直す。相方がやる気を出している以上、鈴も合わせるしかない。

「くっ……しようがないわね。龍也っ !! 絶対負かしてやるわよ!!」

「うんうん、その意気だっ。二人とも全力でかかってきな !!」

初戦からセシリアと鈴のペアと当たるのは好都合だった。

代表候補生二名に勝てる機体であれば、良い宣伝になると考えたからだ。しかし、これは浅はかな考えと言える。

何故なら、彼自身が強い為に見る者によっては、機体が強いのか判断が難しいのだ。

一応、タッグトーナメントは公にされているので、業界の人間は集まってくる。

目の肥えた者ならば、本質は捉えることが出来るかもしれない。ちなみに龍也がそれを思い至ったのは、第一試合を終えてからのことであった。

さて、対戦相手が分れば次は――。

『各ブロックの第一試合の選手は準備の為に控室に集まってください』

』

校内アナウンスが流れ、試合に出る選手たちが動き出した。

龍也も集団に混じりながら移動していく。

控室では真耶がおり、トーナメントにおいての注意事項等を話してくれた。その説明も五分ほどで終わり、いよいよ第一試合が始まるうとしていた。

『皆さーん、お待たせしました！ Aブロックの第一試合を始めたと思いますっ！』

解説もとい実況する生徒の熱い声が校内放送で流れてくる。

『この試合、皆さん見逃しちゃいけませんよ。なんと、世界で二番目の男性操縦者である秋野 龍也さんが登場ですよ！ 対するは、セシリア・鈴ペアだあああっ！』

『ちなみにだが、秋野は運営の都合で一人での参加になっている。一人とはいえ、油断はするなよ？ 私と模擬戦をしてドローだったかな』

生徒の隣からマイクをすくい発現する千冬。話し終え、マイクを戻すと解説の生徒——赤崎 ミチルが、

『おっとお、織斑先生から興味深い話が聞けた所で、準備が整ったようです。では、アリーナの方を見てみましょう』

アリーナではセシリアと鈴が既にISを展開し、龍也と対峙していた。

彼は未だISを展開しておらず、ただ時を待つかのように静かに佇んでいる。

『おっと、龍也さんはまだISを展開してませんね。何かあるのでしょうか』

何かあるのか、と言われてから彼は、

『その通りっ！！』

カッと目を開き、大勢の観衆に向けて声を張り上げた。

『括目せよ、これが我が新しき力だっ！！ 行くぞ、轟雷！！』

腕を振り上げ、ISを展開する。

身に纏うはカスタマイズされた轟雷だ。

左右の肩には身を覆えるほどの大盾を備え、バックパックの左右には滑空砲を。脚部にはブースターが増設されている。

右手には十字の形をしたライフルを持ち、左手にはライドカノンを構えていた。

フルフェイスの中では龍也は笑みを浮かべ、相對する二人に告げる。

「さあ、始めよう。お前達の鍛練の成果を出し尽くせつ !!」

## 四十四話

龍也のカスタムされた轟雷を目の前にして、鈴とセシリアはプライベートチャンネルでやり取りをしていた。

『火力増し増しに重装甲。外付けのブースターで機動力はありそうですね』

『あの分厚い盾を抜くにはわたくしの火力では難しいですわ』

『セシリアはVR訓練だっけ?? 見たことある武装はあるの?』

『両手の武装は見たことあります。左のライドカノンは高火力で気を付けるのは勿論ですが、右に持つてるグレイヴアームズが厄介ですの』

厄介、という事に鈴は尋ねる。

セシリアは苦い記憶を呼び起こしながら語る。

『仮想訓練の際は、アレが反転して別の武装に変わったんですの。それが炸裂型のレーザーライフルでして……。避けたつもりでも避けきれずシールドエネルギーは削られ、さらに着弾した場所はエネルギー波によるダメージゾーンになって進むだけでダメージをもらうという……』

『中々えぐいわね……』

本来の仕様のグレイヴアームズではなく、ブキヤが魔改造した物のデータでの話なのではあるが、彼の事だ。それで制式採用している可能性は高い。

『なので、最初に狙えるなら武器破壊をしたいと思います』

セシリアはBT兵器の練度を高めることを優先に訓練をしてきた。更に、龍也経由でブキヤからキラビークをテストで試用している。

これがまた彼女には相性が抜群なのであった。

何せ火力不足であったブルー・ティアーズを見事に補う性能を見せ、戦術が増える事になった。

最初からわたくしは全力で行きますわよ。

——等と、彼女らは話しているのだろう。と、龍也は二人を眺めながら戦意を高めていく。

確かにこの轟雷は火力重視でセッティングしているが、一番やりた  
い事は別にある。

お前達に教えてやるよ。コイツの戦闘方法をなっ !!

試合開始のカウントダウンが表示される中、龍也はやや中腰で足を  
広げる。

セシリアはスターライトmkⅢの安全装置を外し、ティアーズを展  
開させる。彼女の前では鈴が双天牙月を連結させて構えている。

観客達も新型のISの性能に期待を寄せながら、カウントがゼロに  
なるのを待っている。

5、4、3、2、1——0。

ゼロになった同時に四基のティアーズが龍也目掛けてレーザーを  
放つ。

鈴は接近戦を仕掛けるべく突撃する。対して彼はというと。

ティアーズの攻撃は両肩にアームで接続されている盾が自動で動  
き防ぎ、

さあ、行くぞ。

意思是伝達され行動に現れる。

エクステンドブースターとスカート部のブースターが火を噴き、轟  
雷が弾丸のように発射される。

それは瞬時加速——ではなく、よりエネルギーの消費が激しい移動  
手段の一つ。とある傭兵達にとっては、強力な攻撃にもなるテクニッ  
ク。

グライドブースト——一定の高度を保ったまま、エネルギーが続  
く限り移動するテクニク。

ここから続けて行うのがISでは絶対にやる事が無い攻撃。やれ  
ば双方のSEを削る諸刃の剣——。

「これがっ ! グライドブーストからのおブーストチャージだっ  
!!」

咆哮を上げながら、スピードを維持したまま鈴に体当たりをかま  
す。

ブーストチャージ——グライドブーストによるハイスピードで機

体を加速させ、その勢いを蹴りに乗せて叩きつけるという格闘技術で速度が速く、重量が重いほどダメージは増加する。

鈴もとっさに防御の態勢をとりはするが……。

「ぐげっ」

とても女性が発してはいけない声を発しながら、鈴は後方へと吹っ飛ばされていく。

これにはセシリア含め観客全員がドン引きしていた。

『な、なんと龍也選手、体当たりだあああつ ！！』

「うわあ……龍也の奴、酷いなあ」

「酷いというか、あんな戦い方を選択するのがありえないんだけどね」

一夏の素直な意見に、シャルルが答える。

元々、ISで殴り合いやぶつかり合いは互いのSEを削るだけで無意味に近い。以前、バーゼラルドにインパクトナックルを装備させてヴァイスハイトを殴った事はあったが、あれはバッテリーによる特殊フィールドを形成した上での近接攻撃なので、今回とは若干違う。

受け手側の鈴もまさかこんな手段を用いて来るとは思っていなかった。

なんて馬鹿げた攻撃なのよつ ！

「防御を崩しながら、ぐっつそり削るなんてとんでもないわよ ！」

「鈴さん一度下がってくださいましっ」

起き攻めをされないよう、セシリアがフォローに入る。

ティアーズによる射撃に加え、彼女はキラビークを投入していた。

「お行きなさい、キラビークツ ！！」

彼女の意思に応え、二基のキラビークが龍也に向かっていく。

このキラビーク、ウイングユニットもブレードのように扱うことができ、すれ違いざまに斬りつけるといった芸当もできる。

ティアーズ四基に加え、合計六基のBT兵装を扱う彼女の精神力に感嘆する龍也。

いけるだろう、と思い提案したのは彼なのだが実際に動かしているのを見るのは初めてだったりする。

『おつとセシリア選手、ここで新兵器投入か！? 織斑先生、アレは何でしょうか?』

『まあ、BT兵装の類だろうな……ん? ほう、どうやらブキヤから提供された新型のBT兵装みたいだな。開示されているスペックを見るにブルー・テイアーズの上位互換だな』

千冬が手元に寄越されたデータを見、そう伝えセシリアを見直す。

……合計六基のBT兵装。この短期間でそれだけ使えるようになるとは、かなり無茶な訓練をしたな。加えて、龍也からの射撃も回避する為に位置取りにも注意を払っている。

そこまでできる代表候補生はいない。だが、やはり決定打に欠ける、と結論付けた。

さて、どう火力不足を補うのか見せてもらおうか、と試合に視線を移すのだった。

龍也は軸をずらして回避しつつ、右手のグレイヴアームズはテイアーズ達を狙い、左手のライドカノンと滑空砲は鈴とセシリアへばら撒きながら距離を詰めるべく前進する。

止めなくては、と鈴が双天牙月を構えながら前に出てくる。

「さっきのお返しをしないとねっ!!」

距離はまだある。ライドカノンの弾を衝撃砲である龍砲で潰しながら、セシリアが狙われないように鈴は速度を上げていく。

『セシリアっ!』

『わかってますっ!』

急かされるが焦りは禁物。

セシリアはブルー・テイアーズを戻しキラビークの操作をしながら、上空を舞う。

初手で武器破壊をしたかったが、ブーストチャージで狙う隙を逃してしまったので次の手段を実行する。

足りない火力を補うために考えた戦術。今、お見せしますわっ! スターライトMk.Ⅲを構えるが、ただ狙うわけではない。

ブルー・テイアーズを展開し直し、スターライトMk.Ⅲの銃口部に四基を接続させる。



一本の糸が頼りなくとも、何本も縊り合せば強くなる。同じように、威力の低い武装も束ねて使用すればつ。

『鈴さん、チャージの時間を稼いでくださいー！』

鈴に時間稼ぎを打診するが、彼女はそれどころではなかった。

龍咆で龍也を牽制するつもりが、彼女は盾で防ぎ切って見せ更には、セシリアのキラービークの攻撃も巧みに防ぐのだ。また、先程のブーストチャージを使う素振りをちらつかせる事でプレッシャーもかけてくる。

彼女とて二度目を貰うわけにはいかない、と退くとグレイヴアームズとライドカノンの砲火が襲ってくる。

それらを龍咆と双天牙月で潰し、逸らすがいつまでも続けられるほど集中力は持たない。

なので、鈴はセシリアを待つのだが未だ射撃体勢でチャージ中のみ。

「あああ、もうっ！ 鬱陶しいわね！ 何であんたはそんな戦い方しかしないのよっ」

「まあ、轟雷の出来る事を宣伝しないとイケないからなっ！ 俺、本来の戦い方では無い事は伝えておこうっ！」

どちらかと言えば、彼は射撃武器よりも格闘武器を好む性格だ。

……さて、そろそろセシリアもチャージが出来たところかな？ 思い至った戦術、見せてもらおう！

彼の思いと同時に鈴にプライベートチャンネルでセシリアの声が届く。

『OKですわっ！！』

鈴は聞くと同時に龍也に龍咆を発射しながら、後ろに瞬時加速で後退する。

「行きますっ！ スターダスト・ブレイカーツ！！」

スターライトMk.Ⅲとブルー・ティアーズのチャージしていたエネルギーを一気に放つ。

放たれたレーザーは集束し、蒼い閃光となり龍也を襲う。

「ほう集束砲かつ！ リリカルでマジカルなのか、それともWのド

ライツバークバスターからヒントを得たか !？」

龍砲を盾で防ぎ、セシリアの集束砲を横に回避して避けるが、  
「逃がしませんわっ !!」

彼女は未だレーザーを出し続ける銃口を彼の方に向けて薙ぐ。

ちいつ、と舌打ちしながら逃げるが、足元に龍砲の衝撃が来る。

足止めされ、仕方なく二枚の盾を前に出し集束砲を受ける。

ズシン、と重い衝撃が体を襲う。

「くっ、ゴリゴリとSEが削られるっ。しかも !」

ハイパーセンサーは左右から来るキラabeeクを捉えていた。

前面の攻撃を盾で防ぎながら、グレイヴアームズとライドカノン  
キラabeeクに向けるが、これはタッグ戦。構えたと同時に龍也は武  
装を手放し、瞬時加速で後退する。

手放した武装には分離した双天牙月が投擲され刺さっていた。

「……龍也、アンタよく視えてるじゃない ?」

「タッグ戦だからなっ。常に二人とも視界に入れていないと闘えない  
さ」

……とは言うが、思った以上にダメージを貰ったな。

轟雷の盾はセシリアの集束砲を受けた為にほぼ使い物にならなくな  
っていた。あと数秒もすれば貫かれていたと思う。タイミング良  
く砲撃が終わって助かった。だが武装は鈴に破壊され今は無手だ。

SEも残り三割。客観的に見て、セシリアと鈴が優勢だ。それ  
も、彼にはまだ余裕が見られる。フルフェイスなので、表情は彼女達  
には見えないが。

しかし、二人には余裕が無かった。

セシリアは集束砲を撃ったおかげで、スターライトMk. IIIとブ  
ルー・ティアーズに負荷がかかり過ぎ、銃身が焼けてしまい使用不可。

鈴も思った以上に疲れており、長くは戦闘を継続できないと考えて  
いた。

『アレで仕留めれなかったのが痛いわね……。セシリアは武器ある  
?』

『キラabeeクがありますが、正直、心許ないですわ』

疲れた声で鈴に答えるセシリア。

キラビーブクはそろそろエネルギーが切れかかっているのだ。ブルー・ティアーズは本体に戻すことでエネルギー回復ができるが、外付けのユニットの為、回復機能は無いのだ。

『でも、おかげで龍也に結構ダメージを与えてるはずよ。あと少しだけ頑張りましょ』

『ええ、そうですね』

鈴は双天牙月を回収し、両手に構え直す。セシリアもインターセプトを取り出し、左右にキラビーブクを配置する。

ふ、まさかアレを使うことになるとは思ひもしなかったな。

二人ともよく善戦してくれた。感謝として、この先で見せるはずだった武装を見せるとしよう！

嫌な予感が二人を襲うが、既に遅し。

「バイオレンスラム、スパイクモードっ !!」

轟雷の手には先端に八つのスパイクがついた見た目から凶悪なソレが握られていた。

「さあ——ファイナーレだ」

さながら死の宣告か。轟雷のメインカメラが赤く光るとブースターが火を噴き、鈴に突貫する。

「させません！」

セシリアがキラビーブクを向かわせるが、それらの攻撃は極々短い瞬時加速、いわゆるクイックブーストで軸をずらし楽々避けて見せた。

鈴は速度を落とさず迫る龍也にどう対処するか、瞬時に判断する。「乗ってやろうじゃないのっ !!」

気合を入れ、龍也へ向かう。

迫る彼がバイオレンスラムを振りかぶるのに合わせて、龍咆を放つ。しかし。

「ふんっ !!」

「はあ !!」

龍也は地面にバイオレンスラムを叩きつけると、上空に跳躍し龍咆

を回避する。

そこで鈴は彼の狙いが自分では無い事に気づくが、彼は更にブースターを噴かせて速度を一気に上げ、バイオレンスラムをセシリアに叩きつけ、地上へ墜とす。

「きゃあつ !!」

短い悲鳴をあげるセシリア。龍也は追撃とばかりにもう一発、バイオレンスラムを叩き込み黙らせる。

ハッキリ言う。過剰であり、またもや全員がドン引きである。

だが、龍也は素知らぬ顔で鈴を捉えバイオレンスラムを変形させる。

今度はスパイクではなく、破城槌モードにし突撃する。

「ブキヤの武器ってどれもこれも過剰すぎない !!」

「いやいや、これくらいがちようど良いんだよ」

『どう考えても過剰だよ !』

試合を見ている誰もが叫ぶが、龍也は無視だ。ロマンのある武器なんだから、過剰とかは野暮ったい話なのだ。過剰戦力万歳 !

「さあさあ、残りSEも少ないから一撃で終わらせるぞ」

またも龍也は加速し、バイオレンスラムを突き出し突撃する。もう何も考えずただ突き進むのみだ。

鈴はもう接近戦をする気は無くなっており、龍咆を引き撃ちしながら距離を離す。

このまま距離を取り続けて、龍咆で片をつけるっ。

甘いぞ鈴。退くよりも速ければ問題ないんだよっ。

当たらなければどうという事は無い、の精神の元で龍也は龍咆を掻い潜りながら進んでいく。徐々にスピードも上げていき、距離をじりじりと詰めていく。

下がり続けるわけにはいかない。討つべきか。

彼女は覚悟を決め、迎え撃った。

龍也は体当たりと瞬時加速の多様、セシリアの砲撃でもうSEは空に近いはず。一撃入れば倒せるはずよ。落ち着いて、一撃入ればっ。

「来なさい、龍也！」

「応ともっ！」

龍也と鈴が互いの攻撃レンジに入る。その刹那、互いの獲物を振りかぶり、撃ち放った。

バイオレンスラムが鈴に届くのが早いのか。

それとも、双天牙月が龍也に届くのが早いのか。

決着はその一瞬でついた。

僅かな差、武器のリーチの差でバイオレンスラムが甲龍を貫いていた。

「……俺の勝ちだ」

「ハア……あたしたちの負け、ね」

## 四十五話

試合を終えた龍也は楯無の所に戻るのではなく、一人アリーナの裏にいた。

ブキヤ開発主任であるアキに轟雷の状態を報告する為だ。

「もしもしアキさん。轟雷の状態を報告したいんだけど、今は大丈夫？」

『ああん？』

話し始めた開幕、あからさまに機嫌が悪かった。龍也は何かあったのか、と心配したが理由が分ると居た堪れなくなってしまった。

『あのなあ、龍也。俺達は確かに轟雷の宣伝をしてこい、と言ったがアノ戦い方はなんだ？』

あつ、と彼は声をあげるもアキの愚痴を聞き続ける。

『轟雷ってさ、堅固な装甲にキヤタピラによる移動力、汎用性の高さが売りだよな？ 少なくとも俺は原典の轟雷に関してはこう思っている。それを反映させ、お前と一緒に造ったF A型I S轟雷。当然、最初は標準的な装備で戦い、基礎能力の高さを魅せてくれるのかと思えば、いきなりカスタム機を使う、戦術は某フロムのロボゲーのような戦闘技術を用いる、あんなの真似するのブキヤ所属のパイロットしかやらないよな？』

その言い方はいつもの優し気な声色ではなく、冷たく責めていた。

そう、ブキヤのF A型I Sで初の量産機なのだ。何ができるかもそうだが、素の能力も示すべきなのだ。

今回の龍也の戦い方では、より彼の技術の高さが前面に出てしまっているのだ。

これでは、機体よりも彼を欲してしまう気持ちの方が高まってしま

う。

当の本人もここまで言われると凹んでしまっていた。

「……正直、すんませんでした。調子に乗ってました」

『そうだ。お前の悪い癖だ。今はブキヤ所属のテストパイロットでもあるんだから、しっかりと宣伝してもらわなければ困る。次からは

気を付けて欲しい』

と、開発主任が営業の人間のように言うのにも訳がある。

『でない、俺が営業の人間から怒られるんだからなッ ！！』

ぶつちやけ彼の本音はこの一言に尽きる。

もうアキは営業の偉いさんからもすげー怒られたんだからなッ

！！ と今度は声を荒げる始末。

龍也も何度か、その人と会っているが彼でも苦手を感じる人なのだ。個性が強すぎると言うか何というか。機会があれば、彼のエピソードを語りたいものだ。

『はあ……で、その営業からはもう飛鳥で新しく轟雷のPVを作るから、お前はバーゼラルドで戦ってくれだッてさ』

「マジですか……。了解しました……」

『……ん、では気持ちを变えて。龍也、轟雷はどれだけ消耗しているんだ？』

言葉通りいつもの陽気なアキに戻り、轟雷の破損状態を問うてきた。

龍也は轟雷のデータを参照し、彼に転送する。

「今、送りましたよ。俺、個人が使うならもう少し装甲は厚めにしたいですね。先日、キットの方でエクスアーマーって出たじゃないですか。あれを再現したいなあ」

『うむ。確かにこの装甲の破損状態とかを見ると、エクスアーマーは欲しいな。しかし、ブーストチャージは常套手段ではないからな？』

普通のISはこんな戦い方をしないので注意してくれよ』

「ごもつともなご意見です。まあ、真似する奴はいないでしょう」

などと彼は言っているが、後にブキヤが強化外装アーマーを販売し始めた時にブーストチャージが一部の人間に流行る事になるのだった。やっぱりロマンは大事だよね ！

『だよなあ。あ、ところでバーゼラルドの事でなんだが、少し聞きたい事があるんだが』

「ええ、何ですか？」

『今、龍也が使ってるバーゼラルドさ、コアから検出できる識別数値が』

若干違うんだが、何か考えられる要因はあるかな？」

その問いに龍也は息をのんだが、一瞬思考をしていたかのような間を置いて答える。

「……いや、分らないですね。ISも成長する仕様になってるので、それが関係しているかもしれないませんが、はつきりとは断言できませんよ」

ブライアンがコアを解析し、複製に成功したとはいえ、未だに謎な所も無いわけではないのだ。

『そうかあ。まあ、そうだよな。賢石とT結晶というだけでも、その時不思議な事が起こった、が起こりかねない仕様だしな。』

うんうん、と納得するアキに一安心する龍也。

『さて、それじゃあ次の試合も頑張ってくれよな』

「ええ、お任せあれ」

アキとの通話を終え、龍也は一気に脱力するが、今度は楯無から連絡が入る。

「……どした？」

脱力したままの声で通話を始めるが、向こうから聞こえてくる彼女の声には焦りがあった。

『どしたじゃないわよっ！ 今、一夏君の試合中なんだけど、大変なのよ！ 早く戻ってきて!!』

「わ、分かったよ。すぐに戻るっ！」

あんなに彼女が焦るのだから、よっぽどの事が起きているんだろう、と全身に力を入れ直し龍也はアリーナ観客席へと走り出した。

試合をしていたアリーナの裏にはいたが、試合の声は分厚い壁などで聞こえてはいなかったのだ。

全力疾走でぐるりと周り、アリーナに入るが試合を観て衝撃が走った。

「……「アレ」は……」

彼の視線の先には、一夏にシャルル、箒がおり対峙しているのは泥の様な何かに覆われたIS。その姿は知る人ぞ知る、千冬がかつて使っていた暮桜を模していた。



しかし、彼——だけではなく、会場にいた全員が見ていたのは“上”だ。

そこにソレはいた。

紫に輝く結晶を白き装甲で覆っているIS。

大型のウイングユニットを広げ佇む様は高貴さを感じさせていた。

「どうして……アレが……」

それはフレームアームズでは月面プラント攻略戦に現れた機体。

龍也はその名を告げる。

「レイ……ファルクス……」

## 四十六話

目の前に現れたISは「白い騎士」だった。

紫の結晶体が埋め込まれたフレームに白い鎧が装甲として付けられているので、「白柴の騎士」と言う方が正しいか。

背には剣のような形をした翼があり、これにも紫の結晶体が埋め込まれている。

神々しく舞い降りるソレに多くの観衆が魅入っていた。

龍也とて、現れるはずのない機体に呆然と立ち尽くしていた。

「レイ……ファルクス……。どうして……。お前が」

それは、フレームアームズの設定では「救世主」とさえ言われた機体だ。

誰だ、アレを再現したのは。武装は……バカな、アーセナルアームズだと！? 単騎でIS学園を潰しに来たのか！? これでTCラミネートシエルまで再現されているのなら、厄介すぎるぞ!!

レイファルクス。この機体には他のフレームアームズには無い特殊能力を有していた。それは、効果範囲にいる機体全てを制御不能に陥らせる、といったものだ。

敵味方関係なく効力を発揮する「TCラミネートシエル」故に、戦闘すらせずに勝利を掴むことのできる特機。

設定ではレプリカ機も建造されるが、この能力だけはコピーできなかつたとされている。

また、武装としてあるアーセナルアームズ。複数の武器で構成されたベリルウエポンで、最も強力なのは、要塞すら一太刀で破壊できる大型バスターソード、フォートデトネイター。

こんな物を使われたら、ひとたまりもない。

そんなレイファルクスだが、この場で気になるのはTCラミネートシエルだ。再現されているとすれば、ISにどう作用するかだ。考えられるのは二点。

一つ、ISの起動不可。

二つ、ISの制御不能。

彼は確かめる為にバーゼラルドを起動させようとするが――。

ちいつ、起動できない !! 一夏達はどうか。……見る限りだと、解除はされていないが動くのは難しいか？ となると、鎮圧するのにIS以外を使わないといけなくなるぞ。奴の目的が分らない以上、俺も能力を行使する訳にはいかない。……なら、慌てず、緊急時に対応する先生方に話をしに行こう。やるなら、その後だ。

さて、と移動する前に……見つけたっ、と彼は彼女の元へ走った。彼女も彼を見つけたのか向かって来てくれていた。

「龍也っー！」

「合流できてよかった。楯無、俺は『アレ』の対応の為に織斑先生の所に行ってくる」

「……という事は、龍也は『アレ』が何か知っているのね？」

彼女はブキヤ製？と書かれた扇子を広げるが、龍也はそれを否定した。

「違う。『アレ』は確かにフレームアームズという作品に存在するが、俺は設計図すら造っていない。『アレ』は話にならないくらい強力な機体なんだ。まあ、詳しい話は置いておくが、注意したい能力は一つだ。楯無、今ISを起動できるか確かめてみる」

え？ と思うが、彼女は言われたようにISを起動させようとするが、

「起動しない !! 龍也、まさかこれは……」

楯無は視線を上空にいる機体を一度見てから、再び龍也を見る。

彼は首を縦に振り、だから、と言葉を続けた。

「だから、危険なんだ。誰が動かしているのか、目的は何なのか。織斑先生に話をした後、俺はアソコに殴り込みに行く」

そう言う彼の眼は仕事モードだった。

ああ、龍也はやる気ね。アレね、UCAT時代とかそれ以前の武装でも使う気かしら。私としてはあまり使わせたくないんだけど……。「分かったわ。私も行く。もしもの時の相談は、生徒会長としてしておかない訳にはいかないもの」

「ああ、急いそう」

龍也が応え、二人は織斑先生のいる管制室に向かっていく。

一方、一夏達はというと。突然の事に戸惑いながらも、状況を分析していた。

「……アイツは一体何なんだ」

上空に佇むレイファルクスを見上げるが、白式が動けない故に何もできないでいた。

アレが現れただけで、自分やシャル、箒にあの変貌したラウラのISが動けなくなった。AICを受けているのかと思えば違う。AICは対象に集中しなければならぬのだが、かの機体はそんな事をしていない。

ただ、そこにいるだけなのだ。

それで複数のISが、あのVTシステムを発動しているラウラのISですら動けないのだ。

『何をしたいのだ』

機械による合成音がアリーナに響く。

『SEも無く、かのシステムに勝つ能力も無い。無力な汝に何が出来る？』

一夏は自分に問われているのだと感じた。現にそのISの視線はこちらを射抜いていた。

確かに白式のSEはもう無い。VTシステムは姉の動きをトレースしており、どう考えても自分では打破する事は叶わないだろう。これを“無力”と言われれば反論の余地など無い。

だが。

だけでも。

だからと言って諦める、という選択肢は無い。

一夏の眼には闘志が宿っていた。彼を奮い立たせるのは“正しき怒り”だ。

侵され、

侵され、

犯されたのだ。

ラウラが悪意のあるシステムに犯されたのだ。同時に、自身の誇りである姉も犯されたように感じたのだ。

「何ができるじゃない、俺はあの子を助けるんだっ ！！」

レイファルクスは一夏のその魂の言葉を待っていたのか、右手を翼にまわし、一部のパーツを取り外した。それは、美しい結晶で造られたブレードのように見えた。

ゆつくりと地に降りて来て、彼に渡すと不思議な事に白式にSEの補充が成されたのだ。

「これは……？」

『その武装は特殊なエネルギーでコーティングされている。いわば常に零落白夜を使っているかのような状態と思えばいい。しかも、白式のSEは使わないという代物だ。それを使い、我に示して見せよ。汝の力を。意思の力を』

それだけ言うとレイファルクスは機体を一瞬、輝かせてからアリーナ上空に舞い上がり佇んだ。

すると、先ほどまで身動きが出来なかったのが嘘のように体が動いた。

一夏は握った剣の感触を確かめる。

『しかと我に見せよ、汝の意地を。さすれば、その身に宿る血が目覚め、更なる高みに昇華するだろう』

●  
龍也と楯無が管制室に着くと、慌ただしく動く先生達を目にした。

二人が入ってきたのに千冬が気づき、こちらに呼び寄せる。

「龍也に楯無か。何をしに来た」

「あの正体不明のISに関して話をしに来ただけです」

「ほう……。という事は、アレもFA型ISという事か？」

龍也は首を縦に振り、話を続ける。

「名をレイファルクス。特徴とすべきは効果範囲内にいるISを制御不能、又は起動不可という能力です。現に今、この場にいる全員がISを起動できないはずです」

「なに……」

千冬は視線を楯無に移したが、彼女はうなずき応えた。

「対処方法はあるのか？」

「ISでは無理ですね。それ以外の力で対応しないとダメです」

きっぱりと告げる彼に千冬は言葉を出せなかった。

ISが動かせないとなれば、通常兵器……。いや、SEを削るならばどれだけの戦力を用意しなければならぬか。私とて、武装さえあればだが、叶う武器は無い。

彼に頼らないといけないのか？

龍也を見据えるが、彼はもういつでも戦えるという眼をしている。危険な場所に飛び込めと言わなければならないのか、と苦悶する。

「聞くが、お前はできるのか？」

千冬は問うた。龍也ならばあのISに対抗できるのか、と。

「ええ、やれますよ」

確固たる自信が彼から感じられるが、それでもと躊躇してしまう。生徒に対応させるとは……。如何にIS無き自分が無力かと痛感させられてしまう。

そう感じている最中、レイファルクスに動きが見られた。

「ベリルソードを使わせるのか」

アーセナルアームズの一部であるベリルソード。確かに、雪片二型に近いサイズだから一夏も手には馴染むだろう。

「龍也、ベリルソードって？」

「レイファルクスが懸架しているアーセナルアームズの一部だ。あのベリルソードは刀身に特殊な力場を発生させることで、見た目以上の攻撃範囲と驚異的な切れ味をほこる武器だ。少なくとも、雪片二型よりは優れているだろう」

「それを一夏に渡したという事は、そのレイファルクスとやらは戦うつもりは無いのか……」

同時に、白式が動いた事で他のISも動けるのではと千冬が龍也に問うた。

「白式が動いたんだ、お前はどうか？」

龍也はバーゼラルドに意識を向ける。いつもの感覚があり、起動できる事を確認し、

「いけますね。ただ、またレイファルクスが同じ能力を使うかもしれない」

「そうだな……。山田先生、教師部隊に龍也を付けて待機させます。すぐに動いてください」

「は、はいっ！ すぐに伝えます。龍也君は良いんですか？」

突然、話を振られた真耶だが、彼女も生徒をそういう風に動かしているものか躊躇はした。

「ええ、大丈夫です。これでも数々の修羅場をくぐり抜けている猛者なので。まあ、自分で言う事ではありませんけどね」

修羅場ねえ、と楯無はジト目で見つめる。

「な、なんだよ楯無」

「えく……。だって、龍也ってさ女性関係の修羅場が多すぎるんだもん。ちよつと、思い出しちゃったじゃない」

彼女は色々あったわねえ、と思い出すが、同時にふつつつと怒りが沸いてきたが、今は置いておく。

「思い出したら怒りが沸いてきたけど、今は隅に置いておくわ。——では織斑先生、生徒会はアーリーナの各ブロックで、"もしも"に備えておきます」

「ああ、有事の際は現場優先で指示を出して動いていい。龍也は教師部隊と共同で動いてほしいが、いけるか？」

「うーん、正直言うと、邪魔なので一人でやりたい所ですがいいでしょう」

うん、と千冬がうなずき、再び一夏達を見る。彼は今、ベリルソードを握りVTシステムによって変貌したラウラと対峙していた。

龍也もその模様を一瞥してから、もしもの時に対応できるよう移動を始めた。

……一夏がアレを倒せるか。否、所詮、アレは紛い物。鍛えられたアイツなら大丈夫だろう。俺にとっての問題は、レイファルクスだよなあ……。

あまり当たってほしくない事だが、一つの憶測が彼の頭をよぎっていた。

アレは“未来の自分”ではないだろうか、と。

何せこの世界には様々な“概念”が浸透している。ぶっちゃけ、何があっても不思議ではないのだ。

仮にレイファルクスに乗っているのが自分だとすれば、何故、このタイミングなのだろうか。

何故、レイファルクスである必要があるのか。

何故、一夏に武装を貸す必要があるのか。

「……考えても仕方ない。今は一夏が勝つことを祈ろう」

頭によぎった考えを振り捨て、ひとまずは教師部隊に合流する為に彼はアリーナを走るのだった。



## 四十七話

ベリルソードを手にした一夏は己の内から湧き上がる力を感じていた。

それは全身を駆け巡り、自身の体の細胞を活性化させていく。今ならば、普段よりも動きは良いはずだ。思考も冴えている。これから、どういう太刀筋で“アイツ”を斬るべきかが頭に浮かぶのだ。

この “力” があれば龍也とだって対等に戦えるかもしれない。その歓喜からか体が震える。

一夏は武器を持つ力を強め、シユヴァルツエア・レーゲンが変貌した暮桜を見る。

向こうからは何も感じる事が出来ず、ただ武器を構えているだけだ。

どうやら、敵対さえしなければ何もして来ないようだ。

それも、あくまで憶測なので油断はしない。

相手は何と言つても過去の姉を模倣した存在だ。真剣にやらねばこちらが死ぬ。

「みんなは手出ししないでくれ。これは俺がやる」

後ろで固唾を飲んで見守る箒達に声をかけ、自身は眼前の相手を見据える。

……やるなら一撃で決める。二の太刀はいらない。

どうせ持久戦になれば技量の差で自分が負けてしまう。だから、最初の一撃に全力をかけて臨むのだ。

俺が使うべきは最も信頼する技。

一夏は左手を鞘に見立て、ベリルソードの刀身を掴み抜刀術の構えをとる。

腰を落とし前に重きを置く。

すう、と息を吸いゆっくりと吐く一夏。

「……………」

行くぞつ、と彼は白式のスラスターを全開にする。白式による瞬時加速はこの学園内でもトップクラスの性能だ。凄まじい速度で一気

に暮桜との距離を詰めていく。

対する暮桜は上段に雪片を構え、一夏を斬り倒そうと待ち構えている。

自身が出せる最高速度で瞬く間に互いの獲物の間合いに入り込む。

その瞬間、暮桜が斬撃を繰り出すが、

そんなもの斬り伏せるのみっ！

一夏は暮桜に恐れることなく更に前に一步踏み出し、渾身の一撃を放つ。

ベリルソードと雪片が高速でぶつかり合い火花が散る。

だが、拮抗したのはほんの少しだけ。一夏の意味のある剣が、単なる剣に負けるはずはないのだ。

「ぬおおおおおおおっ !!」

咆哮と共に一夏は剣を振り切り、暮桜の胴を横一線に斬る。

斬られた部分は泥のような装甲が蒸発し、中からは傷一つないラウラが放り出される。

「おっとっ」

ベリルソードを手放し、ラウラをキャッチした一夏は彼女の身を案じる。ゆっくりと落ち着いた呼吸をしていたので、ひとまず安堵する。

ラウラのISも機能停止したのか、元の姿に戻っておりその場に崩れ落ちていく。

「終わったのか……」

そう呟くと、彼の隣にレイファルクスが降り立った。ベリルソードを回収してから一夏を見る。

『しかと見せてもらったぞ、汝の力を』

合成音故に感情は分りにくいが満足はしているようだった。

「ああ、アンタのおかげだ」

レイファルクスが一夏の肩に手を置く。機械ごしだが、僅かな温かみを感じる。

『我は力を貸しただけだ。成し遂げたのはお前自身だ、誇るがいい少年』

そう言われると照れくさくなる。

『だが……まだまだ強くならねばならん』

確かにそうだ。

自分はまだまだだ。自身の思う強さを手に入れるには遠いのだ。

「ああ、まだまだ俺は自分を鍛えていくよ。俺が目指す、俺だけの強さを手に入れる為に」

『少年、君はどんな強さを手に入れたいのだ？』

「俺が欲しい強さは——大切な人たちを守る力だ」

レイファルクスはほう、とうなずきそれに返す。

『ならば、これからも鍛えねばならんな——秋野 龍也よ』

呼ばれた龍也はバーゼラルドをゼルフィカールに換装し、既に二人の近くに佇んでいた。

一夏はいつの間……と思いながら、自身は一刻も早くラウラを休ませるべく、救護室へ急いだ。

同時に見守っていた箒達も彼に着いてアリーナから出ていく。

それらを見送った後に龍也はレイファルクスに応える。

「鍛えがいのある奴だよ。だが、今はお前だレイファルクス。おとなしく話を聞かせてもらおうか」

『……それは無理な話だ。我には時間が無い。それに、追うことなどできないと分っているだろ』

まさか、と龍也は動こうとしたがゼルフィカールは機能不全を起こしていた。

「……アレを任意発動できるのか。ふざけているなっ」

『そう言うな。必要な事なのだ、汝にもその内分るさ。ああ、この能力があつて良かったと思える時が』

意味深な事を言いながらレイファルクスはこちらを見据える。

龍也は動けない体で相手の正体を探ろうと氣を辿るが、やはり思っていた通りの反応を感じたので内心、ため息をつく。

瞬間、ゼルフィカールに一つのデータが転送されてくる。送り主は目の前のレイファルクスから。自動開封されるそれには、未だ作成には及んでいないアーセナルアームズのデータが詳細に書かれていた。

何故これを？ いつかは造ろうと考えていたが……。

よくよく見れば、実際の使用時のデータまで書かれている事に気づく。ここまで出来上がったものを渡すという事は……。これが無ければいけない事態が目前に迫っている、という啓示か。

『確かに渡したぞ？ 取り返しのつかない事になる前に急げ』

語るだけ語り、レイファルクスは急上昇し学園から去っていく。あつと言う間に視認できなくなり、ゼルフィカールも機能不全から復帰する。やる意味が無いのは分っているが、ISの索敵機能を用いレイファルクスを追いかけてみる。

結果は収獲無し。だけど、奴の最後の言葉には強い意志が感じられた。

龍也はゼルフィカールを待機状態に戻すが険しい顔つきで空を眺めている。

「取り返しのつかない事……か」

ならば、俺の全てを持って乗り越えて見せよう。

そう決意する彼の頭には俺アームズとして開発していた装備をてんこ盛りにしたゼルフィカールが完成していた。

後日、それが実戦投入されるのだが阿鼻叫喚を生む結果になるのであつた……。

## 四十八話

私が目を覚ますと知らない天井が見えた。

……と言うのがこの国のテンプレートだと聞いたが、実際は救護室の天井。状況を察するに、あの暴走の後にここに運び込まれたと考えるが。

そもそも何故、暴走に至ったのか。正直、その瞬間の事はあまり覚えがない。

ただ、覚えているのは「負けたくない」という気持ちが強かった……という事だけ。

実力も経験も劣るはずの彼にどうして追い込まれたのか。

タッグマッチだったとはいえ、パートナーである篠ノ之箒は優秀だった。

気迫も十分、瞬時にこちらに合わせられ、背中を任せられた。本音を言うとそのまで期待はしていなかった。

かの篠ノ之束の妹、というだけで大したことは無いと思っていた。だが、蓋を開けてみれば十二分に訓練された戦士だった。聞けば、龍也がみっちり訓練をしていた、と。

以前に自分も訓練を受けたことがある為、それは必然の結果と言えた。

対して織斑のパートナーはシャルル・デュノア。否、シャルロット・デュノアか。高速切替を得意とし、どのレンジでも対応してくる厄介な存在。

織斑の拙い所を見事にカバーし、こちらを相手に善戦した。

だから全力を出したのだが……何が敗因に繋がった？

「単純に気持ちの問題だったんだろ」

一人しかいないはずなのに、つい口にしていた事に返答され私は困惑した。

「よっ、ラウラ。調子はどうだ？」

「た、龍也……」

「私もいるんだが、体の方は良さそうだな」

「教官……」

龍也と千冬がぬつ、と彼女の前に姿を現す。

寝てるわけにはいかないと、体を起こそうとするが二人に止められ寝たままで応対を続ける。

「少し体が痛むが、問題はありません」

それを聞き二人は良かったと告げると、今度は彼女が尋ねてきた。

「龍也、私が負けたのは気持ちの問題と言ったがどういう事だ」

「あくまで俺が思ったただけだからな？ お前の攻撃には一夏への不満——負の感情のみで戦っていた。だが、一夏は純粹にお前に勝ちたい思いで戦っていた。それが実力にブーストをかけて、お前に迫り、一瞬超えたんだ。……勝敗を決めるのはそんな一瞬で十分だ」

と、言いはするが実際は龍也が試合を見ている訳では無かったのだ、本当の所はよく分からない。だが、きつとそうであろう、と考えていた。

かつてラウラを指導した際に、織斑千冬の大会二連覇を成し遂げられなかった原因である一夏に強い負の意識を持っているのを感じていたのだ。

この時に適切な処置をしておきたかったのだが、厄介者の連中（軍の残党）の邪魔と事後処理で時間が無くなってしまったのだ。

一夏について言えば、きつちりと心身共に鍛えているので、これくらいの実力は示してもらわねば困る。

ラウラはしばし龍也の言葉に考え込むが、やがて口を開け、声を出す。

「……それもあるかもしれないな」

ああ、そうだ。簡単な事だったんだ。

要は、一夏に嫉妬していたのだ、と彼女は気づく。

偉大な姉の弟である彼に、だ。

ラウラの表情がより柔らかくなっている事に二人は気づく。

「さて、ラウラも元気そうだし俺は行くよ。織斑先生あとはお願ひしますね」

「ああ、分かった」

龍也は彼女の変化に満足し出ていく。残された千冬は暫しの間、ラウラと話をするのであった。

「……ところで教官。私のISに施されていたのはVTシステムで間違いないのですね？」

「そうだ。条約で禁止になっているソレだ。ISへの蓄積ダメージや搭乗者の精神状態、そして何よりも搭乗者の意志——願望がトリガーになって発動する。……実に巧妙に隠されていたよ」

「はあ、とため息を吐くがすぐに真剣な表情で千冬はラウラに問うた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。お前は誰だ？」

「私は……」ただの「ラウラです」

嫉妬を募らせ、『あの人になりたかった』ラウラはもういない。だから、彼女はそうはつきりと返答した。

その返答に千冬は驚きながらも、言葉を紡いだ。

「だったらちようどいい。何せ、この学園にいる三年間はある意味で自由だ。思うように生きればいいさ」

ラウラはどう応えるか迷わなかった。縛るモノがなくなったこの身は自由なのだから。

「ええ、自分で考え思うように生きます」



さて、救護室を出た龍也は一夏の元を訊ねていた。理由はレイファルクスが使わせたアーセナルアームズの影響が白式に出していないか確認する為だった。

「大丈夫だよ龍也。俺も白式も何ともないぜ？」

戦闘後しばらく時間は経っているが、まだ一夏の気分は高揚していた。故に、龍也に強気な口調で応えていた。

「そうは言うが、規格外の武装を使ったんだ。何かしら影響はあったと思う方が普通だ」

「心配性だな龍也は。でも、大丈夫だって。あの機体、レイファルク

スって言うんだっけ？ から借りた武装は白式にエネルギー供給しただけだしさ」

エネルギー供給……。元にそんなシステムはなかったはずだ。だったら、やっぱり何かの目的があつて「使わせた」と考えるが妥当だ。

「一夏、通常、ISの武装にそんな機能は無いんだ。だから……」

「大丈夫だって、言ってるだろっ !!」

龍也の言葉を遮る一夏。その眼はまるで敵を見ているかのようだった。

普段は見せる事のない態度に龍也も驚く。

そんな龍也を見てか、一夏も我に返り、

「え、あ、悪い。あの戦いの途中から気分が落ち着かなくてな」

高揚したまま……か。

「……判ったよ。でも、一夏。一度、白式はしっかりと調べた方がいい。〃何か〃があつた後じゃ遅いんだからな？」

「ああ、分かった。龍也にそれだけ言われてるんだから、そのうち倉持技研に調べてもらおうよ」

「そうしてくれ」

何だか気まずい雰囲気になつたので、龍也はその場を後にした。

「……どうしたんだろうな、俺」

一夏は自分に起きてる変化に戸惑いつつ、白式を見るばかりだった。

●  
龍也はどこへ行くとも決めていなかったで、学園内を歩きながら考えをまとめていた。

突如現れたFA型ISレイファルクス。フレームアームズとしての能力を完全再現して現れた機体は一夏にアーセナルアームズを何らかの目的があつて使わせる。

一夏自身も戦意が高揚しており、危険を感じる。



さらにレイファルクスはこれから必要になるからと、アーセナルアームズの詳細な武装データを渡してきた。

確かにこれがあれば作成は容易だ。だが、その能力を十全に扱うにはやはり機体その物のアップデータが必要だ。

少なくとも、現状ならゼルファイカール——否、ゼルファイカール／N E（ナイトエッジ）仕様にはしたいところだ。

欲を言えばレイファルクスが良い。さもなければ、技術再現で建造されたヤクトファルクスでも良いが、ぶつちやけブキヤに開発する余裕が今は無い。

現状は新規F A型ISとしての轟雷の量産、刀奈にデータ取りをしてもらった機体の作成、龍也が進めている俺アームズ用の武装作成で手が一杯なのだ。

「しようがない。兎に頼むとするか……」

あまりこちらの技術を教えたくはないのだが、今後の事を考えれば背に腹は代えられない。

龍也はそう決めると早速、送るべきデータをまとめるのであった。

## 四十九話

一夏・シャルルペアとラウラ・箒ペアの波乱の試合から数日が経過した。

その間に、シャルルはシャルロット・デュノア——女性として再入学し、ラウラに至っては自分を倒した一夏に、貴様を嫁にする！ という発言をし、本人よりも箒と二組の鈴が鬼気迫る雰囲気で暴れる始末。

千冬の一喝でその場は治まるが、一夏の周りは中々楽しい事になってきていた。

そんな日々を送る中、龍也はブキヤに来ていた。アーセナルアームズの開発に関して、アキから苦言を受け直接話をしに来たのだ。

二人は会議室で落ち合い、席に着くと早々にアキが口を開く。

「なあ、龍也。それは今、造らないといけない代物なのか？」

「ああ、今だ」

龍也がハッキリと断言する。

だが、アキはブキヤの現状を考えると首を縦に振ることは出来ない。

「分かっているとは思いますが、今はお前が提案したTCS兵装でブライヤンらも手一杯だ。他のチームもデュノアの人間らと共に轟雷の量産体制にかかりつきりだ。唯一手が空いているのは、設計担当の奴らだけだ。開発はできませんよ」

声には断固とした反対の意を籠められていた。

「それも分っていますっ！ でも、必要なんです。これが、アーセナルアームズがっ！」

「……もう一度言うが、できない。人はやれない」

「アキさん、無茶は承知ですっ！ だけでも！」

「駄々をこねるなっ！！」

叱るように怒鳴りつけるが、龍也も一向に引かず、

「だったら、自分で勝手にやらせてもらいますよ！」

「はあ？ 機材は全部ココにあるんだぞ？ どうやって……。ま

さか、お前、アレを使う気じゃないだろうな?!」

正気か！ と龍也に詰め寄るアキ。

それに対して、彼は違うと言い、話を続ける。

「アレはおいそれと使えませんよ。それに、使えるなら最初から使ってますしね。だから、『兎』に協力してもらおうと思います」

「ちよ、お前なあ……。許されると思ってるのか？」

「許されないでしょうね。でも、これは……。必要なんです。この先の戦いに不可欠なんです」

彼の眼は確固たる意思を孕んでいた。

それ故にアキは解せなかった。そこまでアーセナルアームズにこだわる理由がだ。

彼とて、FA原典となるシリーズの事は知り尽くしている故に、アーセナルアームズという武装がとんでもないポテンシャルを秘めているのは分るし、再現したいとは思っているが『今』とは考えない。

うーん、と唸りながら暫し思考する。

龍也は静かに彼を見続ける。

確かに龍也が戦うべき相手は己と同じポテンシャルを持っている。

何度も戦闘になり、その都度、互いに死にかねない程の傷を負っている事も理解している。が、どうしてそこまで拘るのか？

さて、改めて龍也が持ってきたアーセナルアームズのデータを見直す。

よく出来ている。

……。否、出来すぎているのか？ いつも龍也が造るデータにはここまで詳細な数値は入っていない。

「なあ、龍也。このアーセナルアームズのデータはお前が『造ったのか』？」

「……。ああ、ある意味で『俺』が造った」

俺、という言い方に違和感を覚える。

「『お前』が造った……か」

これを深掘りし、我々が過去に経験した事から考察すると……。突

拍子もない答えが出てくる。

「まさか、別世界のお前か？」

「さすがアキさん。長い付き合いのだけはあります。これは同じ時間軸、限りなく近い世界の自分から託された物です。どうせなら武装その物をくれたら良かったんですがね……。彼、曰く、近いうちに必要になる、と言われてました。故に、どうしても製造したいんです」「しかしなあ……」

そう言われると彼なりの緊急性は理解できるのだが、現実的な事を考えると無理としか答えようがない。

「龍也。お前の言い分も分ったが、どうやっても製造ラインを空けるには一、二カ月はかかってしまう。それに、佐山社長にも話し許可も貰わないとできない。かといって、勝手に造られるのも困る」

「いや、こればかりは俺も譲れないです。例え、社長から許可を頂けなくても造りますよ」

何を言われても必ず造る。

断言する彼にアキもどうしたもんか、と零す。

黙り込む二人の間には重い空気が流れるが、そこに救世主が現れる。

「話は聞かせてもらったっ！」

勢いよくドアを開けて入ってくるのは我らが社長である佐山その人だった。

「佐山社長っ！」

「社長、何やってるんですか？」

「ふふ、二人とも細かい事は気にするな。さて龍也君、アーセナルアームズを造らなければ未曾有の危機が訪れる、そう捉えてよいのだね？」

「え、ええ。そう聞いています」

「成程。では、一つ私から提案をしよう。かの『兎』に頼らずとも私の伝手を使うことを推奨しよう」

佐山は懐から一枚のメモを取り出し、龍也に手渡す。

それを見る龍也は思わず二度見してしまい、慌ててアキにも見せ

る。彼はあー……ここかあ、ここなら大丈夫だな、と納得してしまう。  
「良いんですか社長？」

「ああ、問題ない。既に話は通してある。龍也君の好きなようにして  
もらおうといい」

あ、コイツ最初から聞いてやがったな。

「そ、それじゃあ早速行ってこようと思います」

「そうするといい。向こうに着いたら私の名前を出したまえ」

「了解です。では、これで！」

龍也は意気揚々と二人を置いて飛び出していく。目指すべきは奥  
多摩にあるかつて佐山らが使っていた施設だ。

ここは今でも変態的な技術者が己の好きなように仕事をしている。  
そこでなら、龍也のやりたい事もやらせてもらえる。

あそこを使わせてもらえるなら、兎に任せるのは無しだな。



彼が奥多摩の某所に依頼に向かっている頃、兎こと篠ノ之束は新た  
なISを製作していた。

もうすぐ七月。妹の箒の誕生日が迫っている。

彼女に専用機をプレゼントしようとする最高のISを練っているのだ。

ふふん、たつくん達が使っているFA型ISを参考にし、箒ちゃん  
の戦闘スタイルに合わせたこのIS。これがあれば、他の娘に後れを  
取る事なんてないもんね。

束はFAを知るまでは展開装甲を用いた第四世代型を開発してい  
たが、今はFAMAGツキ（崩天含む）をコンセプトに開発し直してい  
る。

基礎をマガツキベースにし、そこに第四世代の技術を結集している  
が傍から見ればやり過ぎである。

彼女なりの歪んだ愛情なのかもしれない。

だが、やり過ぎは良くない。以前の彼女なら、そのまま渡していた  
かもしれないが……。

うくん、さすが私。これなら白に並んでも何の問題もないよね。あ  
く早く箒ちゃんに渡してびっくりしてる顔を見たいなく。あ、でも、  
たつくんがこれを見たら怒りそうだな。

「力なき者に過剰な力を与えるなんて、やり過ぎだぞっ！」

つてね。……そうだね。今の箒ちゃんには過剰だよ。だから、

「ごめんね、少しリミッターを付けさせてもらうね」

段階的に能力を解放する。現在、設定すべき能力は学園のサーバー  
からデータをのぞき見して決めている。

しかし、これはあくまで入力されたデータだ。本当の实力は見ない  
と分らない。

さてさて、それじゃあ、学園のイベントを利用させてもらおうかし  
ら。

ふふ、と悪趣味な思い付きをしたのか、彼女はさらにキーボードを  
叩くスピードを上げていくのであった。

## 五十話

七月を迎え、IS学園の一年生は臨海学校の真っ最中だ。

初日は午前が移動で、午後は自由行動。学生らしいイベントに胸を躍らせながら、龍也は目的地に着いた車から降りる。

ま、遅刻なんですけどね！

そう現在の時刻は夜七時半。もう自由行動も終わりの時間を迎え、夕食に皆が舌鼓を打っている頃だ。

「思ったより時間がかかったな。ほら龍也、お前の荷物」

運転席から降りたブライアンがトランクから彼の荷物を取り手渡す。二泊三日ともなればそれなりの荷物……になるはずなのだが、小さいキャリアケースが一つ。

「サンキュー、ブライアン」

「にしても、臨海学校とはいえ旅行みたいなものなんだろう？ 荷物が少ないけど大丈夫なのか？」

「ああ。バーゼラルドの拡張領域に他の荷物を入れてあるからね。こいつには着替えくらいだよ」

「そうかい。それじゃあ、俺も今日の宿に行くぜ。武装テストの結果はレポートにまとめて早めに送ってくれよ」

「了解。じゃあ、ブライアンも気を付けて」

彼は右手を振って応え、車を走らせていく。

テールランプが見えなくなつてから龍也はキャリアケースを引きながら、宿泊場所である花月荘に入つていった。

中に入ると着物の姿の女将さんが、こちらに気づき近づいてくる。

「ようこそいらっしやいました。秋野龍也さんですね？」

「そうです。予定より遅れて申し訳ありません。三日間お世話になります」

軽くおじぎで挨拶をする。向こうも挨拶を返してくれる。

「女将の清州景子です、こちらこそよろしくお願いします。お食事はもうお済ですか？」

「いえ、まだでして……」

「それは良かったです。今しがた、皆さんを大宴会場にご案内した所です。どうぞこちらに」

「おーそれはナイスタイミング。では、お願いしますっ！」  
食事にありつけたことに安堵しながら、女将の後ろをついていく。  
大宴会場に案内をしてもらうと、生徒たちが夕食に舌鼓を打っていた。

中には龍也が来たのに気づいたのか何人かが声をかけてくる。

「あ、たっつーだ。今、来たの？」

「おつす、のほほんさん。そうそう、たった今到着さ」

「あ、秋野君だ。遅かったねー夕食済ませたの？」

「やあ鷹月さん。これからだよ」

声をかけてくれる子達に返事をしながら、自分の食事が用意されているテーブル席に案内される。

そこでは千冬と麻耶、教師陣が座っていた。龍也としては千冬に報告すべき事があったのでちょうど良かった。席に座り、遅れた事を詫びながらスツと小さな紙を千冬に手渡す。

「いやあ、思ったよりもブキヤでの仕事長引きまして……」

「……一応、お前も学園の生徒なんだからこういう行事毎には始めからいらしてもらいたいものだ」

言いながら千冬は渡された紙を真耶達に気づかれないように素早く目を通す。

「まあまあ。事前に届けは出ていましたし、でも夕飯には間に合っただ良かったですね。ココの食事は格別ですよ」

ホントですよ、と彼が応えている間、千冬はハア……とため息をつきたい所を我慢し、

「フツ……そうだな。それと山田先生。食事が終わり次第、会議の方をしたいと思います。先生方への連絡をお願いしても？」

真耶は彼女の雰囲気が一瞬だけ変わったのに気づく。

ええ、分かりました。とだけ応え、近くの先生陣に声をかけていく。

「龍也、助かった」

「どういたしまして」



彼が彼女に手渡した紙にはこう書かれていたのだ。

『明日、0900から米国海軍のISテストがこの近くで実施。専用機組のデータ取りの際は、エリアに注意致し』

「その案件にはウチも一枚噛んでるんですよ。詳細は言えませんがね」

「構わん。聞いていなければいらぬトラブルに巻き込まれていたかも知れん」

「だと思ったので伝えさせてもらいました。自分の息のかかった者もいるので、こちらの領域に来る事は無いとは思うんですけどね」

万が一に備えて、と彼は新鮮な刺身を頬張る。美味しいなあと顔を鋒ばらせる。

千冬も食事を続けながら、遅れた理由はコレか、と尋ねてくる  
「まあ、なんと言いますか……。そうだとおっしゃいます」

苦笑する龍也に千冬もそうか、と言うだけで二人は黙々と食事に集中する。

しかし、二人の来訪者によつて彼が落ち着いて食べ続ける事なんてできなかった。

遅いっ！と如何にも怒っていますよ、という出で立ちで彼女らは龍也の左右に立つ。

「ん、セシリアにシャルか。食事はもう終わったのか？」

「ええ、終わりましたとも。誰かさんがいないおかげで、集中して食べれましたので」

「うんうん。僕も同じくね。誰かさんが遅れるなんて聞いてなかったし」

こっちは一緒に自由行動の時間遊び、食事もできると楽しみにしていたのに、と二人はブツブツと文句をぶつけてくる。

こう言ってくる二人に龍也は自然と笑みをこぼす。

随分と好意をぶつけてくるようになったな、と感じているのだ。セシリアとは付き合いが長いが、彼女が刀奈を知ってからは、自分に対して好意を見せる事は少なくなっていた。

シャルに関してはデュノア家の事で動いた事が、彼女の琴線に触れ

たように懐かれ始めた。

とはいえ、彼女も表立っては好意を出さず内に秘めているようだったのだが。

きつとキツカケはアレか、と彼は黙って文句を聞きながら当たりをつける。



このイベントの前に龍也は刀奈とレゾナンスに買い物に行ったのだ。久しぶりに二人つきりだ、と喜んでいたのだが、現地に着けばセシリアとシャルの二人が待ってましたと現れたのだ。

『私が呼んでおいたの♪ だって、この二人も貴方を好きみたいだし。譲る気はないけど、どれくらいの気持ちか見極めたくって』

とは刀奈の弁。

愛する彼女にそう言われてしまうと、ソウデスカとしか口から出なかつた。

そうして四人での買い物が始まるのだが、女の子の場合は総じて時間にかかるもの。自分は荷物持ちになり、時には好みを言い彼女達のセンスを褒めることに徹底。

最初はぎこちなかつた二人も、半日も共に過ごせば食事の際に、龍也のどこが良いのか語り合うくらいには打ち解けていた。

だが、圧倒的に長い時間を過ごしている刀奈からは出るわ出るわ、彼も懐かしいなあと時折感想をこぼす程、色々な思い出が語られる。

「くっ、僕ももつと早く龍也に出会えていれば」

時間にすれば、シャルが一番短いわけだが彼女とも中々濃い関係ではあるわけだ。

たった一人（飛鳥もいたわけだが）で、デュノアに乗り込み（両親を助けたのは飛鳥とリロイなんだけどね）元凶の犯人を退け、ブキヤ社長に話をつけ自分はテストパイロット。やりたい事をやれるようになるまでは、力添えをすると約束してくれているのだ。

少々、人への依存癖がある彼女にとっては龍也への想いが高まるに

は充分な事だった。

セシリアも同じ事を思っていた。彼女にとっても、男性への見識を  
変革させてくれた存在であるが故に特別な存在なのだ。

「そうねえ……でも、そう言っただけで諦めるの？」

挑発する刀奈。

対する二人は声を揃えて返す。

「諦めない（ませんわ）っ！！」

即答する二人に満足したのか、

「よく言っただわ、二人とも！」

“お見事”と書かれた扇子を口元で広げながら、刀奈は二人にあ  
る物を配った。

それは、一枚のカード型端末。手に取ると端末が起動し、画面が表  
示される。

刀奈も同じものを取り出し、龍也にも見えるように置く。

「っ、これは……」

映し出された画面には“龍也 愛の会”というセンスの欠片も無  
い文字と共に、会員名簿と称して名前の書かれたリストが出ている。

「これはね、龍也を好きで好きで堪らない人達のリストよ。入会条件  
は妻（否定しようのない確定した結果）である私が面接し、合格する  
こと」

リストのトップには終身荣誉No.1と刀奈（表記は楯無）に始まり、No.  
2には飛鳥の名前が書かれている。

現状、名簿にはこの二名しか書かれていないのだが、今、この瞬間  
に追加される。

「No.3、セシリア・オルコット」

「No.4、シャルロット・デュノア」

「……正直言うとな、私は龍也を独り占めしたいの。でも、飛鳥と昔  
にこの事で、血で血を洗う大惨事を引き起こしちゃってね……。その  
時に学んだの。自分の夫がモテるのは鼻が高い。そして、龍也も私を  
一番大事に想ってくれている。だったら、私が認めた人くらいには手  
を出させてもいいかな、ってね」

私、凄く良い事言ってる！という雰囲気は刀奈から溢れ出ているが、龍也から見れば俺の彼女の頭が壊れた、とあたふたしていた。「あの、楯無さんや？　正直俺には言っている意味が分かりません」

「もう龍也つたら鈍いわね。あのね、私が許可した人だったら貴方の女にして良いって言ってるのよ？」

勿論、私が一番よ？　と可愛げに言うが、何言ってるんだコイツとしか感想が出てこない。かといえ、件の二人は違ったりアクションを見せる。

「良いんですか!?!」

「ええ、ただし、私に一言言ってからやるのよ？」

「応とも!!」



……というとても頭の悪そうなイベントの後から、露骨に好意を現すようになった。

手を出していないのかと言われれば、ノーな所が自分の悪い所である。

「済まないな二人とも。今回は他言無用だったからさ。埋め合わせは夏休みが始まればするから許してくれ」

すまん、と目の前で手を合わせる。

むう、と頬をハムスターのように膨らませる二人だが、埋め合わせしてくれるという発言に言質は取ると、

「約束ですわよー!」

「約束したからねっ!」

とはしやぎだす始末。さすがに千冬も黙っていられなくなったのか、じろりと視線を二人に向ける。

殺気の籠った視線にようやく千冬がいた事に気づいたのか、

「お、織斑先生はこの席でしたか……」

「オルコット、デユノア。食事の時間位は静かにできんのか。まあ、そ

れくらい元気が有り余っているのなら、そうだ。この周辺を走ってくるか？ ん？」

「ごめんなさーいっ !!」

ささつと席を離れていく二人を尻目に、今度は龍也へと矛先を向ける。

「お前は猿か？ 少しは自重しろ」

「何言うんだこの教師は。俺が最も愛し命を懸けるのは楯無ですよ」

「とか言いながら、既にあの二人に手を付けている癖にか」

「……まあ、妻（確定している事実）からの許可も下りていますからねえ。だから、あの二人も守りますよ。俺ができる『全て』を使っています」

女性三人を養い、あらゆる害から彼女らを守る術を自分は持っている。

代々受け継がれてきた『秋野家』の力は日々の鍛練で強さを増し、

『仕事』で築いてきた各国との繋がりや、個人的な繋がり。頼れる仲間達もいる。

余談だが、飛鳥とは既に男女の仲ではない。あくまでも仲の良い友人であり、頼るべき相棒なのである。

自信のある言葉に千冬は呆れるが、それだけの根拠を持っているし、正しく能力を用いる事も出来ている。甲斐性のある男と見ている。

十七の子供とは思えんな……。その眼はもはや歴戦の戦士が見せるものだぞ？ 本当にコイツはイレギュラーだな。正直、これくらい言えるだけの胆力が一夏にも欲しい所だ。

「全く十七の子供が言うセリフではないぞ。……さて、私はそろそろ席を外すが、お前は自分の部屋がどこか聞いているか？」

「ええ、織斑先生と同じ部屋ですよ。姉弟の甘い部屋にお邪魔させてもらいますね」

瞬間、千冬の拳が飛ぶが左手で難なくガードをする。

「何を言うかたわけが。教師をなめるなよ？」

「ハハ……すいません」

悪ノリする彼に釘を刺してから千冬は宴会場を出ていく。  
龍也は受け止めた左手に感じる鈍い痛み苦笑しながら、食事を続  
ける。

さてさて、明日はどうなるのか……。

## 五十一話

食事を終えた龍也は荷物を部屋に置き、一夏と風呂に来ていた。まあ、千冬から男二人は風呂にでも行ってこいとお達しがあつたからではあるが。

さて、花月荘の浴場は広くゆつたりと入ることが出来る。少々、男二人だけには広すぎるのだが、ここは贅沢に満喫させてもらおうとしよう。

「はあくくく気持ちいいなあ……」

「そうだなあ……」

湯を堪能する龍也に対して、一夏はぎこちない様子で返事をする。理由は幾つかあるが、彼の視線を見れば大きな理由は分つた。

「おいおい一夏君よ。そんなに俺の体を見つめないでくれないか？

なんだ、君はソツチの気があるのか？」

「なっ ！！ バカ野郎、そんなわけあるかよ ！！」

慌てながら必死に否定するが一夏を笑いながら龍也は天を仰ぐかのように、岩肌を背を預ける。

ま、気になつてるのは俺の全身にある傷跡だろうな。

幼少時から剣術や戦闘技術を学び、荒事にも携わつてきた自分には大なり小なりの傷跡がある。小さい傷は忘れてしまつているが、大きな傷を負つた時はよく覚えていいる。特に、左腕と腹部の傷跡は忘れるわけにはいかない。この傷を負つた時こそ、愛しき人である刀奈と結ばれるに至つた思い出があるのだ。

一夏はそれらの傷を見て絶句していたのだ。

彼はコレを見るまで勘違いしていた。龍也が強いのは理解できていたが、苦勞はしたことが無いんだろうと。周りの人間に恵まれ、さぞかし不自由のない環境だつたんだろう、と思つていたのだが……。傷だらけの体じゃないか……。

一夏は知らない。龍也が時に命を落としかけたことがある事を。

一夏は知らない。龍也の強さには裏付けされた根拠がある事を。

一夏は知らない。龍也とて、時には挫折しかけた事がある事を。

「……何不自由なく俺が『力』を得たと思っていたか、少年よ」

一夏はビクツと体を震わせる。龍也から発せられた声が、あまりにも大人びており威厳があったからだ。

「『力』を得るには、対価が必要だ。ISに関して言えば、VR訓練で強くなつたかもしれないが、それ以外は幼い時から必死に修行をし、実戦を経験してきた。時には『死』が目の前をよぎった事も一度ではない。それで、何度も挫折をしては立ち上がってきた」

「……龍也でも、か？」

「その通りだ。俺が苦勞していないとでも思っていたのなら、甚だしい間違いだ。だから、言おう」

龍也は一夏に向き合い言い放つ。

「強くなりたければ、愚直だと言われようと鍛え続けろ。そして、お前の価値観で物事を判断せず、視野を広げ続けろ。強くなる為の最短ルートは存在しないのだから」

それから、と一拍置き、いつもの龍也の声色で放つ。

「お前は確実に強くなってるよ。俺は一夏の基礎を伸ばそうと、多くの訓練を基礎向上に努めてきた。時には必殺技を伝授したけどね。だから、そろそろ次の段階へ行こうと思う」

「——『次』？」

「ああ。基礎がすっかりできたんだ。これからは応用の訓練だ。俺もそろそろ加減するのに飽きてきたしね」

せっかく良い話で終わりそうだったのに、最後のセリフで台無しになりそうな事を言っているが、一夏は満足していた。

「そっか。強くなっているのか、俺は」

そう、単に彼は認められたかったのだ。

だから、龍也はもう一度言った。

「応とも。強くなっているさ。しかし、言葉だけでは不安だろう？」

明日の訓練の時にでも目に見える形で証明させてやるよ」

「え？ 明日はそんな時間があるのか？！」

「……いやいや、しおり位は見えておけよ？ 二日目は専用機持ちとそれ以外に分かれての訓練時間があるんだよ。専用機持ちは主に武



装テストとかのデータ取りがメインだけでも、多少は実戦形式の訓練時間もある」

「面目ない……。浮かれてて、ちゃんと見てなかった」

あはは、と笑う一夏に、今日一番のため息を龍也は吐いた。

「……こういう所が無ければなあ」



時は同じくここは千冬の部屋。

部屋には呼び出しを受けた一夏・龍也ラヴァーズの面々が、千冬が酒を煽っている事の口止めとして飲み物を飲まされていた。

「いやあく仕事終わりのビールは最高だ。ん〜？ 何だお前達。飲むのがゆつくりすぎないか？」

あ、酔ってるわこの人。

と面々が理解し、彼女が酒を飲んでいる場面には今後遭遇したくないと考える。

そして、最初の被害者になるのは……彼女らだ。

「さて……篠ノ之に鳳、ラウラ。お前達は一夏のどこが良いんだ？  
ん？ ほれほれ言ってみろ」

ええ……と三人は答ええないといけないの？ と眼で訴えるが彼女は早く話せ、という態度である。

となると、誰から話す？ となるのだが、意を決し箒が先陣を切る。

「鈍っていた腕が上達してきた所ですかね……」

「ア、アタシは、腐れ縁ってだけだし」

「つ、強い所でしょうか……」

箒に続いて鈴、ラウラが答えた。

「ほう、まあ今はそんな答えでよしとしてやろうか」

さて、ともう一口酒を呑んでからもう二人に目を向ける。

「で、オルコットにデュノア。龍也のどこに惚れたんだ？ やることはやったんだろ？ さあ吐け吐けっ」

うわあ、本当に最悪だ、と織斑千冬の印象が底辺に達した瞬間である。

えー……この空気で喋れって言うんですか？ とセシリアとシャルは顔を見合わせながら悩ませる。

しかし、こちらも千冬の凄い目力を向けられ、しようがないかと話し始める。

「そうですね……わたくしは、やはり一年前にとある件で助けもらった時でしょうか」

一年前といえば代表候補生襲撃事件か。日本ではイギリス政府の用意周到な警護によって無血で終息したと報道されていたが、秋野が絡んでいたか。……そろそろ奴の正体も聞く必要があるな。

千冬がそう考えている間、セシリアは恥ずかしさから指で髪をくるくると巻きながら話を続ける。

「詳しくはお話しできませんが、その時に男性の逞しさを知り、ひとめ惚れしてしまいました。ああ、あの時の龍也さんと言ったらもう、すごくカッコよくて……」

と一人夢心地になる彼女に続きシャルロットが話す。

「僕も個人的な事情を解決してもらって、龍也の強さや人柄に……かな？」

アハハ、と照れ笑いをする。

「そうだな、龍也は確かに強い。人柄も良い方だ」

「それに、『持久力』も凄いもんね」

更に顔を赤くしながらサラツと発言するシャルロット。

「何戦しても萎えませんがサラツと発言するシャルロット。……」

セシリアも真っ赤にしながらモジモジと身をよじる。

え、この二人いきなり何言ってるの？ と狼狽するのは箒に鈴。ラウラは何だ訓練の話か？ と知識が無いゆえに話にはついていけなかった。

千冬も自分で言った手前ではあるが、経験があるわけではないので酒で赤くなつたのが増していく。

羨ましい、と思つてしまうのは良くないか。だが、世の中の男は見る眼が無さすぎるぞ。誰もいい寄つてこないではないか。周りにいる男といえど一夏に龍也くらいか……。全く男運が無さすぎるぞ。

IS学園という特殊な環境で教鞭を振るっている為に出会いもなく、この女尊男卑の世の中で特別ともいえる立場にある彼女に近づいてくる男なんていないのであつた……。ああ無常。

やつてられんな、とセシリアとシャルロットの龍也との夜の話をBGMに新しい缶を手に取り呑んでいく。男二人が部屋に戻つてくるまでこの宴は続くのであつた。

## 五十二話

臨海学校、二日目の朝。

時刻は九時をまわろうとしていた。今日行われるのは、専用機組は国から送られてきたテスト装備のデータ取り、他は学園から持ち出された訓練機での訓練となっている。

既に生徒達はそれぞれの先生達と分かれて始めていた。

専用機組は織斑千冬、山田真耶が受け持ち、彼女らの前にはISスーツに着替えた龍也らがいた。その中には専用機を持っていない箒も交じっていた。

「さて、諸君らはまず国から送られてきている装備のテストからだ。だが、その前にだ」

篠ノ之、と声をかけ前へ呼ぶ。

はい、と答える彼女の声はいつもの凛々しさが薄れていた。おや

? と思う一夏らだがそもそも専用機を持っていない彼女がこちらのグループにいるのかと考えていた所だ。

ただ、龍也は知っているようでやれやれ、といった表情をしている。

「篠ノ之、お前に客だ」

「……龍也から聞いていましたが、本当に来たんですね」

彼女が拒もうが既に来てしまっている。自分からは強く求める事のしなかった “力” を与えに訪れるのだ。

その人はすう、とまるで最初からいたかのように “真紅のIS”

と共に箒の前に現れた。

「あれれ? 来ちゃいけなかったかな? でも、私は箒ちゃんに会いたかったんだけどなく」

頭にウサミミをつけ、不思議の国のアリスのような服装をした女性の出現に驚く面々。

「ああ……東さんか……」

一夏はなるほど、と箒の態度に納得する。彼女が姉に抱く気持ちを知っているからだ。しかし、他の面々は彼女がかの “天災” と知り驚きを隠せなかった。

そりゃあ、絶賛、行方不明中の人物が——ISの生みの親が現れれば、そう反応してもおかしくはない。

「えっと、龍也さんはご存知で？」

「ん。彼女とは何度か会っているよ」

ふーん、と眼を細めるセシリア。シャルロットも彼女の雰囲気からほほう、と龍也に熱い視線を送る。

『コイツ、何か隠してる』

あとで絶対に関係を吐かせる、と硬く心に決める彼女らであった。

「束、この後も予定が詰まっている。さっさと用事を済ませろ」

「もー！　ちーちゃんはせっかちだなあ。箒ちゃんにたつくんも何か言つてよー！」

「えー……私もなるはやでお願いします」

「束博士。俺も早く箒に受領させて訓練を始めたいんで」

箒と龍也からもホラ早くしろよ、という態度にガンツと自分で効果音をつけながら項垂れる束。だが、彼女の立ち直りの速さも天才的だ。

「チツ、最近たつくんも私に対して冷たいし。……ま、それよりも。

さあ、これが箒ちゃんへの誕生日プレゼント！」

隣に立つ真紅のISを指差し、高らかに彼女は名を叫ぶ。

「これがっ！　第四世代型ISにして　“天災”　束さんが初めて

開発したFA型IS、　“マガツキ・紅天”　！」

姿はフレームアームズ・マガツキがベースになっており、そこへ巫女装束の様な形状をした増加装甲が全身に散りばめられている。

また各部に存在するTCSオシレーターII型は蒼く輝き、武装は二本の大太刀だけ。

雄々しく立つ鎧武者の姿に皆は釘付けになる。

ちなみに第四世代型ISと言ったことにどよめきが生じるが、束はここぞとばかりに説明を始める。

「そうっ、このマガツキは第四世代型　!!　なんとなんと、全身の装甲は展開装甲仕様　!　攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能ときたもんよ。これこそ第四世代の醍醐味である即時万能対応

機っ !! さすがは私だね !!」

まあ、これがどれくらい凄い事なのかと言うと、現在各国の I S 開発者はようやく第三世代型 I S の一号機が出来始めたころなのだ。なのに、なのになのだ。

それを軽く一代超えたのだ。

「東、やりすぎじゃないのか?」

「テヘツ。ちよつと熱中しすぎちゃった」

可愛いく言っているつもりだろうが、やり過ぎもいい所なのである。

これを、あの人は私にプレゼントだと……?」

妹の誕生日プレゼントに I S を渡すなんて常識外れにも程があるが、姉の事を考えるならしやうがないのかと諦めてしまおう。

今の私は受け取っても良いのだろうか。マガツキを目にし自問する。

確かに力を求めた事はある。一夏の隣に立ちたいと願った自分がいた事は紛れもない事実。だが、一夏が龍也と出会い、変わっていったのを見て思い直したのだ。

『大きな力を持つ者は、正しく行使しなければならぬ』

大丈夫。私は彼の言葉を聞いて思い直したんだ。かつての私のように力に溺れはしない。大丈夫だ。

箒はマガツキに手を伸ばし触れる。

赤い光が周囲を包み集束した後には、マガツキを纏った箒が佇んでいた。

体を軽く動かしてみる。腕を振り、足を動かす。

自分が思う感覚に機体の動きはついてくる。

馴染む。打鉄や轟雷を使った時とは感覚が違う。これが……  
私の専用機”。

「馴染むでしょ !! 今の箒ちゃんにバツチリに合わせてあるからねっ !!」

姉の言う通りこの I S は彼女に完璧に馴染んでいた。最初からこれほどの完成度に迫れるのは恐らく篠ノ之 東以外に存在しないだ

ろう。

「ええ、私の思うとおりに動きます」

「そうでしょ、そうでしょ !! さあ、細かい調整やっちゃおうか  
!?」

よっしゃあつ !! とハイテンションの東がマガツキの調整を始めていく。

「よし、篠ノ之はそのまま束とI.Sの調整をしておけ」

千冬はそう言うのと龍也に視線を合わせる。

彼はこくん、と首を縦に振ると皆の前に出て振り返り声を上げる。

「では、ここからは俺が。えー、みんなは国から送られてきた装備のデータ取りが主な作業になると思うけど、ある程度作業が進めば模擬戦をしたいと考えている。これは、織斑先生と山田先生に相談して許可を貰ってあります」

ふむ、と一同が納得する中で問題なのは模擬戦の内容だ。普段の訓練では龍也一人に対して、二名以上でやることもある。

さて今回は ?

「やり方はいつもやってる訓練と同じで戦闘不能状態になるまでだが……」

龍也はフフツと笑みを浮かべ、自身の背後にバーゼラルドを展開する。

だが、彼の機体は皆が見慣れている機体ではなかった。

全身に追加装甲を纏ったシャルロットとラウラ以外は見た事のあるゼルファイカールの状態。しかし、変化はこれだけではない。

両肩、脚部のスラストシールドと両腕部に刃状の武装が追加され、右手には剣のような武装を、左手には花卉のような形をした盾を持っていた。

またカラーリングも紅白だったのに対し、黒と紫という色に塗り替えられていた。

「この新生した『ナイトエッジ』のテストも兼ねて、全力でやらせてもらおうぞ !!」

## 五十三話

龍也は一人、ゼルフィカール／NEのチェックをしていた。

ただの／NE仕様ではなく、彼好みの俺アームズ仕様だ。追加された肩、腕部、脚部に装備されている刃状の武装は、龍也の好きなメカの再現武器になる。

“凶鳥の眷属” と言えば分る者もいるかもしれない。この機体に装備されているのが刃状の展開武装である。 “T—LINKスライダー” だ。

この武装は刃による近接攻撃や射撃もでき、龍也の心をグツと射止めていた。そしてBT兵装として再現し、今回装備させるに至った。もちろん、彼の機体が装備していた物は再現し、拡張領域に搭載済み。

とはいえ模擬戦で使うとすれば、T—LINKスライダーにセイバーといった所か。いくら全力でやると言ったが “アレ” を使う事は無い。

ふふん、と鼻歌を鳴らしながら細かいデータを見ていく。

各ステータス良好、追加した兵装と機体のバランスも問題無し。更に以前使った俺アームズの兵装との相性も問題無し、と出ている。

グヘヘ、とにやけが止まらない。

これにアーセナルアームズを持たせたら……いやあ、凄い特機になっちゃうな !! ン ? フレームアームズオンリーのカスタマイズじゃないのかつて ?

いやいや、自分好みにカスタマイズするのが俺アームズなわけで、自由にやろうぜ。

それに、凶鳥の眷属だつてキットを出しているのは……ね ?

とはいえ、模擬戦やった後にみんなのISに悪影響が出てはいけないのでやり過ぎには注意である。

さて、龍也が調整を終えたころには全員、新装備のテストも終わり準備が完了していた。

やる気十分な表情をしているのだが、注意したい者もいる。特に二



人…… 一夏と箒だ。

一夏はベリルソードを使ってから動きが格段に良くなっている。そのせいか、模擬戦でも龍也を除いた面々とは勝率を上げてきていた。ただ、高揚しすぎると暴走気味になってしまうのが気になる点だ。

箒はといえば、専用機を得た事で今まで訓練で鍛えていた「心構え」が崩れる可能性がある。力に溺れ、我を見失うかもしれない。そうならないように専用機持ち組にいつも言い聞かせている事を彼女にも伝えてはいるが……果たしてどんな結果になるか。

まあ、やるだけやってみて暴走するようであれば叩きのめすだけだ。

うん、そうしようと結論付けた龍也は全員に声をかけた。

「みんなそろそろ模擬戦してもいいか？」

尋ねる彼の言葉に皆がうなずく。

「うむ。それじゃあ、やっちゃおうか」

龍也がゼルファイカールを展開し、空へ上がる。すると、千冬から声がかかる。

「お前達、模擬戦をするのはいいが決められたフィールド内でやるように。それと、私達が危険と判断した場合は即終了させるからな」

そう言う隣にいた真耶が手に持っていた端末を操作し、専用機組にデータを送る。

送られてきたのは海面に設置された簡易シールド発生器の効果範囲を描いたMAPデータだった。機体にこれをインストールする事で、今回の模擬戦で動ける範囲を認識し、シールドが耐えられる程の攻撃設定にデチューンされる。

なので、幾ら龍也が全力で戦うと言っても、IS自体の攻撃力はそこそこ抑えられた状態になる。

まあ、デチューンされるのは龍也だけなのだが。

こうしないと教師陣は安心できなかったんや……。

そんな二人の教師の想いを知らぬ面々はデータをインストールしていく。終われば、模擬戦を始めるのはいいが、誰から最初にやるか、

という話になった。

ここは最初に俺が、と一夏が声を上げれば。

では、私も、と箒が次に挙手し。

いやいや、ここはまずわたたくしが、とセシリアが前に一步出てアピールする。

待て待て、と鈴も声をあげ、

順番でいいんじゃないのかな？　　と言うシャルロット。

それもそうだが、こちらはペアでやるのも悪くないのではないか

？　とも言うラウラ。

話し込めば長くなるであろうと考え、龍也が告げる。

「全員一斉にやってもいいぞ」

彼の一言にその場にいた者達が驚く。1対6、という数では圧倒的に不利になる状況でやるとは大層な自信があるということだ。

「あ、でもそうすると簡易シールドが耐えられないかもしれないから、こつちから指名させてもらうぞ」

では、と龍也は最初の相手を告げる。

「ようし、まずは一夏と箒の二人だ。その後にセシリア・鈴ペア。最後にシャルロット、ラウラペアの順番でやるぞ　！」

これにいち早く反応するのは、一夏と箒だ。

「よおし、やってやるっ　！」

「ああ、やるぞ一夏っ　！」

二人は元気のいい声を出してはいるが、龍也の心配は増すばかりである。

こうして順番が決まったところで千冬が声をかける。

「話はまとまったな？　　秋野に織斑、篠ノ之は準備をしろ」

「分かった。行こうぜ、箒」

一夏と箒がISを展開し、フィールドに移動していく。

「よしっ、行くぞゼルフィカール　！」

龍也も愛機を展開しフィールドへ入っていく。

フィールド内で対峙する三人。

「二人とも全力を出すんだぞ」

「言われなくても最初から全力だ！ 今日こそは龍也から一本取るぜ」

「私もだ！ 一夏と共に勝利を勝ち取る！」

一夏は雪片二型を構え、箒はマガツキの武装であるテンカイとサツガを抜刀する。

龍也はNEの武装である試作型光波射出機と攻性防盾システムを持ち、模擬戦開始の合図を待つ。

だが、北方から強烈な殺気を感じ、龍也はそちらに視線を移す。ISのリーダーでの索敵範囲を広げると反応が一つ。それは自分の知る機体だ。

龍也の思考は瞬時に模擬戦用から完全戦闘モードに移行する。さきほどインストールした模擬戦用のデータは即アンインストール。並行してゼルファイカールのリミッターを解除し、相対していた二人に告げる。

「一夏、箒。模擬戦は中止だ」

「え？」

一夏と箒がどうかしたのか、と聞いてくるが答えている暇はない。織斑先生、急用ができたのでココを離れます。もし俺が戻らなかつたら、楯無に連絡を入れて下さい。よろしくお願いします！

『な、待て秋野っ！ どこへ行く気だ!!』

千冬の制止を無視し、ゼルファイカールの最大速度で目標へ向かう。彼女はすぐに一夏と箒に戻ってくるように声をかけ、真耶に指示を出す。

「山田先生、秋野がどこに向かったか探してください。それと、お前達。すぐに部屋に戻り、こちらから連絡するまで待機だ！」

「どうなってるんだ千冬姉っ！」

模擬戦用のフィールドから戻ってきた一夏が千冬に問うが、織斑先生だ、と物理的指導を受けつつ、彼女の説明を受ける。

「どうもこうも、こちらも分っていないのが現状だ。今から秋野の行方を追うが——」

そう言っている最中に海の方、龍也が向かっていた先に眼をやる。

千冬は言葉が続かなかった。不思議に思った一夏らも同じように見ると、映る光景に我が目を疑うのだった。

「なに……アレ……」

誰が言ったのか、はたまた全員が言ったのか。

彼らが見たのは遥か遠くでぶつかり合う赤い龍と黒い龍、二匹の龍だった。



こんなに早く再戦する事になるとは思いもしなかった、と龍也は内心呟く。

しかし、この時の為に万全を期したのだ。

バーゼラルドも改修し、俺アームズも二つ目が完成。アーセナルアームズも何とか完成させ、拡張領域には格納済みだ。その為、バーゼラルドで搭載してあった武装は拡張領域の都合上、除外されている。

「ついでだ、俺アームズ01も同時展開っ！」

掛け声一つでゼルファイカールの両脚部前面に、FAダオ系列が持つスラッシュシールドが装着される。

また背部には浮遊ユニットしてFAバルチャーの脚部ユニットが現れた。

見た目はそうだが、俺アームズ01は「魔を断つ剣」をFAで再現する装備の為、機能はそれに準ずる物となっている。

以前、篠ノ之博士の基地で使用したのは脚部ユニットだけだったが、飛鳥にバルチャーを建造した際に脚部だけ余剰に造り、これ用にくすねていたのだ。

「ベリルユニットでの推進力も中々だな……」

などと感嘆するが、ここまでの武装をして戦う相手に対しては気が抜けない。

「これだけの武装をしたんだ。ここで倒させてもらうぞ、竜也っ！！」

## 五十四話

龍也は視界では敵機を捉えきつてはいないが、試作型光波射出機を射撃モードにして数発放つ。

強烈な光波は真つすぐ敵機を貫こうとするが、何の手応えも無く消えてしまう。

代わりに、四発の光波がこちらを射抜こうと放たれていた。

これを危なげなく回避し、互いを視界に捉える距離で相対し様子を伺う。

敵は以前にも使っていたF A型I Sフレズヴェルク・レイジの姿であったが、異なる点もあった。背面に懸架していたベリルショットライフルは無くなっており、小型化したであろうACS―14GPを四門が銃口をのぞかせていた。両腕部にはヘキサギアで扱われるエクシードプラズマキャノンを搭載していた。

近接武装もベリルスマツシャーではなく、試製三式破碎槌を手にしていた。

ほう、どのレンジでも戦える機体に仕上げてきたのか。しかも、ヘキサギアの兵装ときた。好きな奴がいるのか？

などと思っている余裕は無い。どの武装も強力な物に変わりはないので、攻撃を喰らうわけにはいかない。

ACS―14GPは原作ではフレズヴェルクシリーズのTCSを突破できる武装だ。仮に直撃すれば装甲を抜かれる可能性はある。パワーアップしているこのゼルファイカールであれば、数発は耐えられるが、油断はできない。

「以前とは比べられない程の機体にしてきたようだな！」

「ハハッ！ 汝を倒すためだつ！ その為にはどんな手段でも使わせてもらう！」

相対する二人の闘気が高まっていく。

コイツに勝つ為に手段は選ばない。最初から使えるものは使っていく。

互いに考える事は同じだった。

ゼルファイカールから炎が噴き上がり、フレズヴェルクからは黒い炎が噴きあがる。その炎は龍の形を取っていく。

二体の背に龍が頭在し、睨み合い咆える。

「行くぞっ !!」

二人が同時に武装に龍を纏わせ放つ。ぶつかり合った龍は大爆発を起こし、熱風を巻き起こす。

その振動は大気を震わせ、海を荒れさせる。

それほどほどの攻撃をまともに喰らえば、タダでは済まない。が、二人はそんな事を意に介さず次の攻撃に移っていた。

龍也は試作型光波射出機を剣モードにし、炎を纏わせた斬撃を飛ばす。

対して竜也は攻撃を避けつつ、急加速。一気に距離を詰めて両手で持った試製三式破碎槌で斬り……否、殴りかかる。

圧倒的質量を持った武装であるソレは、斬るよりも重さで叩くというのが正しい表現かもしれない。

チイツ ! アレも喰らったら即死だ ! 受けるのも無し、避けるべきだ。

舌打ちをしつつ、後ろに跳び攻撃を回避。同時に、牽制の為にT-LINKスライダーを向かわせる。

「T-LINKコンタクトっ、行けっ !」

龍也の思念を受け、肩部と腕部から三基ずつスライダーが動き、竜也に向かっていく。

「BT兵装かっ !」

自身に向かって飛んでくるソレに彼は腕部のエクシードプラズマキャノンで近づかせないようにするが、斬撃だけではなく、射撃も出るT-LINKスライダーの攻撃に四方から攻められる。

ブレード状の武装かと思えば、射撃もできるか !! 厄介な武装をっ。

ならば、と竜也はACS-14GPによる大火力でT-LINKスライダーごと、龍也を薙ぎ払う事を選択した。

「要は汝を倒せば済むことっ ! 砕け散れっ !」

背部アームがACS-14GPの四門を動かし、瞬時に狙いを付ける。数秒でチャージが終了し、大火力の砲撃が放たれる。

四つの光波は真つすぐ龍也を狙うが、その余波でT-LINKスライダーを弾いていく。ただ、すぐに方向を変えてフレズヴェルク・レイジに立ち向かうが、機体の周囲に強力なフィールドが形成されているのか、斬撃も射撃も弾かれる。

フィールドを張りつつ、攻撃をできるのか……。アレを抜いて当たらないといけないとすると、試作型光波射出機では心もとないか？

当たらぬよう、スラスタを吹かし上下左右に逃げるが、連続照射でこちらに攻撃の隙を与えない。

鬱陶しいと思うが、ティマイオスとクリティアスで一気に距離を詰めアトランティス・ストライクで防御フィールドを抜きつつ攻撃でダメージを与えたいと動く。

「段鎖術式ティマイオス、クリティアス解放っ ！！」

ゼルファイカールの周囲の空間が歪み、元に戻る反動により跳躍を繰り返し一気に肉薄する。

だが、フルフェイスの下で龍也はニヤリと笑みを浮かべる。

「かかったなっ ！！」

龍也の声と共にレイジ改の後ろから、銀色のISが現れ攻撃を放ってきたのだ。

「なにっ ！！」

既にアトランティス・ストライクを放つ体制でいたのだが、背部ユニット・シヤンタクも用いて真上に跳び上がり、銀色のISの攻撃をかわす。

「『銀の福音』 だと ！！」

『銀の福音』——シルバリオ・ゴスペルは、アメリカとイスラエルが共同開発している軍用ISだ。彼はブライアンが開発の補助として参加しているので、内密情報として聞いていたのだ。

「はっ、知れたこと。ここに来る前に強奪させてもらったのだよ」

強奪と聞き、機体を凝視する。よく見れば全体に異様な紋様が浮かんでいる。

あの紋様……。禍々しさを感じる。とても嫌な感じだ。

「その紋様で操っているのかっ !!」

「ご名答。我を倒さぬ限り、それは破れんぞ ! さあ、行けっ !」  
竜也が左手を掲げると銀の福音が攻撃態勢に入る。ゼルファイカー  
ルはロックオンされたことを知らせるが、龍也は銀の福音にパイロッ  
トがいるのか生体反応を調べる。

生体反応、有り、か。加減はしないといけませんが、正直……難しいっ  
。

竜也には死ぬような攻撃を、銀の福音には機能停止を狙う程度の攻  
撃、と加減するのは龍也といえど至難の業であった。

さらに、ダメ押しと言わんばかりに竜也は次の一手を打つ。

「そして、今こそこのフレズヴェルク・レイジの真なる姿を見せてやろ  
うぞ !! ギガンティックコンビネーション !!」

渾身の叫びと共に頭上の雲を切り裂きハーピー型にユニコーン型  
のユニットが現れる。

ギガンティックコンビネーション !? それにあのユニットは

!

龍也はその二体に見覚えがあった。M・S・G.の中でもギガン  
ティックアームズと呼ばれる巨大支援ユニットにそれらがあるのだ。

二体のユニットがフレズヴェルク・レイジと重なると同時に、三体  
が赤い光に吞まれる。その間、彼らを守るようにシルバリオ・ゴスペ  
ルが龍也に砲撃を行ってくる。

くそ、と自分の判断に悪態をついてしまう。見覚えがある、と思っ  
た瞬間に体を動かすべきだったのだ。

赤い光が消えると、そこにはフレズヴェルク・レイジを核とした翼  
の生えた巨人が佇んでいた。

「ギガンティックアームズ、ルシファーズウイング……」

「そうともっ !! これぞ貴様を屠るにふさわしい機体といえようっ

!!」

原典ではクリアブルーに輝くフェザーユニットは紅色に輝き、大剣  
ギガスラッシュエッジを構えながら竜也の咆哮が響いた。



## 五十五話

旅館の一室を作戰本部にし、千冬らは緊急事態への対応に追われていた。

龍也が単独行動を取った事もそうだが、IS委員会が学園を通じてこちらに無茶な通達をしてきたのだ。

内容は近海で軍用ISのテストがされていたのだが、テロリストに強奪。その機体の奪取を近くにおり、代表候補生もいるという理由で行うよう命令が下ったのだ。

学園側も代表候補生がいるとはいえ、学生にそのような事をさせるつもりはなく、拒否をしたのだがIS委員会からは拒否する事を許さず、作戰を成功させるよう告げ連絡を絶たれる。

旅館には教師陣もいるのだが、あるのは訓練用の打鉄のみ。申し訳ないが、これでは軍用ISと渡り合うのは厳しいと言える。

例え織斑千冬とはいえ、一人でどうにかなるものではない。

そのことは本人が十分に承知している。だから、生徒を実戦に行かせなければならぬ事に苦悩していた。

「……さて、お前達に問う。この作戰、正直に言えばやらせる気はない。参加したく無い者は出ていってこれていい」

問う先には一夏、箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラがいる。みんなの眼はやる気に満ちており、部屋から退室する者はいなかった。

その表情を見て、千冬は目を伏せる。このような若者に託せねばならない自分自身の情けなさが胸を満たす。だが、事は待つてはくれない。

ほんの数秒だが自分自身に折り合いをつけ、口を開く。

「分った。では、これから具体的な作戰を説明する。ただし、これから開示する情報は二か国の最重要軍事機密だ。漏洩した場合は相応の罰が下る事を覚えておいて欲しい」

そうして明かされていく銀の福音のスペックだが、軍用ともあり基礎スペックが高いのは目に見えていた。だが、一夏達の実力も入学当

初と比べて上がってきているので、対等に渡り合えるかもしれない。あくまで希望的観測ではある。

ただ問題なのはテロリストが銀の福音を使ってくるのか。それとも……別の機体があるのか、という事だ。

だから、一ついいですかとセシリアが拳手をし、千冬は話すよう促す。

「相手方の戦力は確認できないのでしょうか。強奪した、という事はそのテロリストはかなりの戦力を持っているのではないのでしょうか？」

その問いに千冬は隣にいる山田先生に目配せをする。彼女はうなずき、映像を変える。

「今から流す映像が答えだ」

映されたのは一機のIS。彼らは知らないがFA型ISのフレズヴェルク・レイジだ。周囲には米国・イスラエルの戦力であるラファールら十数機が展開され囲んでいるのだが、フレズヴェルク・レイジは余裕を見せるのか静かに周りを確認する。

一応の警告がされるが、フレズヴェルク・レイジは答えることなく背部からACS-14GPの砲口を一体に向け発射する。

無慈悲に放たれた光波はラファールを丸々飲み込んでいく。パイロットもコアすら跡形もなく消滅させてしまう。

これがきつかけとなり、軍側の攻撃が始まるのだが強固なTCSを突破することが出来ない。彼女達は知る由もないだろう。自分達が扱う武装では絶対にTCSを突破しダメージを与えることなどできない、という事に。

また、彼女らから見ればとんでもないスピードと機動でフレズヴェルク・レイジは試製三式破砕槌で敵を薙ぎ払っていく。

一閃する毎にラファールの装甲が砕け散り、パイロットが肉の塊に変わっていく様を見て一夏達は凍りつく。

この様は最後の一機を再起不能にするまで映像が続き、消える。

「これが敵の戦力だ」

正直、聞かなければ良かったと思ってしまった。どこの世界にこん

などんでもない機体を携えた者がいようか。

使う武装を見ても自分達の装備で防ぐ事はできない、と確信できてしまう。

そんな絶望が支配する空間を破る者がいた。

「安心しろ。そのテロリストの相手は龍也がしている」

入口から聞き覚えの無い男の声がし、皆がそちらを向く。

襖に背を預けているのは体格の良いアメリカ人男性だった。面識のない者の登場に千冬は警戒度を上げる。

私に気配を感じさせず、か。何者だ？

警戒する彼女の視線を受けてか、男の方が話し始める。

「おっと、挨拶が先だったな。俺はブライアン・フィンチ。ブキヤ米国支部で開発主任をしている。篠ノ之博士から依頼を受けてやってきたんだが……。話が通ってないのか？」

おかしいなあ、とぼやき束を探すがどうやらいないようだ。

「束が？ 全くアイツは勝手に話をややこしくしていく」

面倒事ばかり起こしてくれる、と思いつつ先程の彼の言葉について尋ねる事にした。

「まあいい。ブライアンと言ったな。秋野がテロリストと相對しているとはどういう事だ？」

「そのままの意味だよ織斑教諭。テロリストの名は『秋野 竜也』。龍也と同等の力を持っている厄介な奴さ。彼がこの近くに現れたのを察知して、龍也が向かっていったんだ」

なるほど、これでアイツが飛び出していった理由が分った。

「それで、現在は竜也が動かすISであるフレズヴェルク・レイジに銀の福音の二機を相手に奮戦中ってわけさ。あ、これは龍也のゼルフィカールからの情報ね？ いやあ、IS自身から情報を教えてくれるなんて不思議な事もあるもんだねえ」

ん？ と思う事をサラっと言っているがそれよりも。

「銀の福音も投入されている……か」

さらに面倒だ。出来れば龍也と通信をして向こう側の状況を聞きたいのだが。いや、これ以上はこちらの問題だ。束がいない以上、ブ

ライアンをどうするべきか。

千冬は頭を悩ませるが、ガタツと天井の板が外れ件の人物が降りてきた。スツと危なげなく着地し口を開く。

「よつと。あ、ブライアンくん！ 到着が早かったんだねえ。うん？ この様子だとたつくくんが戦闘中って事は伝わってる感じ？」  
「おお、篠ノ之博士。ナイスタイミングツ！ これで俺も作戦に関われるぜ」

「イエーイツ！ っていだだだあああああつ」

ハイタッチをする二人に千冬はすう、と音もなく近づき束にアイアंकローをかます。相当な力が入っているのか、痛い音が聞こえてくる。

ブライアンはひきつった顔でそれを眺め、一夏らは耳と目を塞ぐのであつた。

割れる、割れると連呼する束を見据えながら千冬は話す。

「お前は勝手に事態に介入し、ややこしくしていくな」

「いだだだ、だ、だってちーちゃんさ、このまま、いつくん達を行かせたらただのお荷物だからねっ」

そう言い放ち、デイスプレイに龍也が二機のISと戦っている姿を映した。

ゼルファイカールは自身に迫る福音を、BT兵装のような武装で牽制しつつ、先ほど映像で視たフレズヴェルク・レイジをコアにしたルシファーズウイングと近接戦闘を行っている。

どちらも身の丈はあるだろう巨大な大剣を片手で振り回しながら、斬り合う姿は鬼気迫るものであつた。

ゼルファイカールが斬りかかれば、ルシファーズウイングは巨体に似つかわしくない俊敏さで片手に持つ剣で弾き、ウイングパーツに付属するクリスタルから光線を放ち逃げ場を限定させ、斬撃を放つ。

対して、脚部パーツであるティマイオスとクリティアスによる時空間歪曲による反発力で逃げおおせるゼルファイカール。更には剣を振り、エネルギー波を生み出し攻撃も繰り返す。

「……ほう龍也も割と本気でやっているなあ。あれじゃあ、織斑君達

が無策で行けばお荷物確定だねえ」

ブライアンはハツキリ告げる。が、束はとびっきりの笑顔で一夏に話すのであった。

「でもね、いっくん達にもできる事はあるからねっ !!」

## 五十六話

「でもね、いっくん達にもできる事はあるからねっ !!」

ニコニコと一夏達を見ながら、彼らに問うた。

「さて、このたつくんの戦闘を見て気づくことはないかな〜?」

問われた者達含め、その場にいた全員がディスプレイに注目する。ルシファーズウイングとつかず離れずでの戦闘を続ける龍也だが、どこか全力で戦っているようには見えなかった。

どうしてか?」

それは銀の福音だった。BT兵装は銀の福音に対して使っていたが、機体に直接ダメージを与えるようなことはしていなかった。自分に近づけない様に邪魔に徹底させていた。

「どうしてその武器で銀の福音を倒さない?」

龍也ならそんな事は簡単だろう、と一夏は考える。

「倒したくても、倒せないん」ですわね……」

セシリアが察した事を口にする。

どうしてだ? と一夏が問いかけた。

「今、龍也さんが手持ちで使っている武装は高火力、高出力のTCS兵装と言われているものだと思いますわ。きつとあのBT兵装も高火力なのでしょう。それも、ISの装甲なんて簡単に貫いてしまうような。そうなんですよね、ブライアンさん?」

「その通り。アイツのゼルファイカール/D BXは高出力兵装をふんだんに持たせ単騎での拠点制圧を目的とした専用機だ。銀の福音」程度のISなら秒殺できる。パイロットもろとも、ね」

もつとも彼らも知らない装備を龍也が内蔵させているので、公表しているスペックは嘘だらけなのである。

「バカげてるわね……。でも、あの敵を倒すにはそれくらい必要かも」最初に見たフレズヴェルク・レイジを思えば、そうなるのはやむを得ないと鈴は納得する。

「おっと、龍也から通信が入ったな。映すぞ」

いつの間にか自身の端末を繋げていたのか、ブライアン・フィンチは画面を映した。

龍也の顔が映し出されるが、彼にはコチラが見えていないようだった。

『フィンチッ！ 今どこにいるか知らないが、ヘルプに来てくれないかっ ！?』

眉間にしわを寄せ、声には緊張と焦りが感じ取れた。

彼でもそんな表情をするのか、とブライアン以外の面々は驚いていた。

「ずいぶんと苦戦してるみたいじゃないか。ヘルプに行きたいのは山々なんだが、生憎と移動用で持ってきたコンバートキャリアーしかないんだ」

『キャリアーの中身は ！?』

「お前がまだテストしなかったセブンブレードユニット、ハイブリッドキャノン、スタンブレード」

『CASモドキ装備か。ダメだ、使えない』

武装だけか、と必要なのはそれじゃない。

『ともかくヘルプだ。銀の福音を俺から引き離してほしい。こちらの兵装が高威力のモノばかりで相手ができないんだ』

「なるほどね。確かに今のお前の武装を見ると、一撃二撃で機体もろともパイロットがおじゃんだな」

『ああ、だからどうにかヘルプ来てくれないか ？』

「難しいな」

難しいと彼は言う。

できない、とは言わないのがブライアンの良い所だな。

『だったら、任せたぞブライアン』

信頼しているからこそ龍也も腹をくくることにした。

銀の福音を牽制する為に使っていたT—LINKスライダーの動きを変更させる。

一定のフォーメーションを組ませ、銀の福音ではなく自機を中心に一定距離をまるで囲うかのように配置させたのだ。

『今から、T—LINKスライダーと俺の力で結界を張る。だいたい一時間だ。……頼んだぞ？』

「しようがないなあ、任されてやるよ」

ブライアンの返事を聞き、龍也は技を放った。

『サターン・フォーメーションを軸に、我が力と我が意志によりつ、炎縛結界っ !!』

T—LINKスライダーを用いたサターン・フォーメーションはエネルギーフィールドを形成し、拘束する技。

そして炎縛結界。龍也が得意とする異能の力を用いた、火の縄を使った拘束用戦闘術。

二つを組み合わせた拘束術は銀の福音とルシファーズ・ウイングの動きを止めた。必死にもがいてはいるが、動けば動くほど拘束がきつくなり二機を締めあげていく。

ゼルファイカールは、二機の間で指一つ動かず静止している。

「さて、龍也が時間を稼いでる間にこっちも準備するか」

ブライアンはニヤニヤと一夏らに提案する。

「俺と東博士の二人で君たちのISをチューンするからさ、龍也を助けに行ってくれよ」

「さあさあいつくん、どうする?」